埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書　第１集

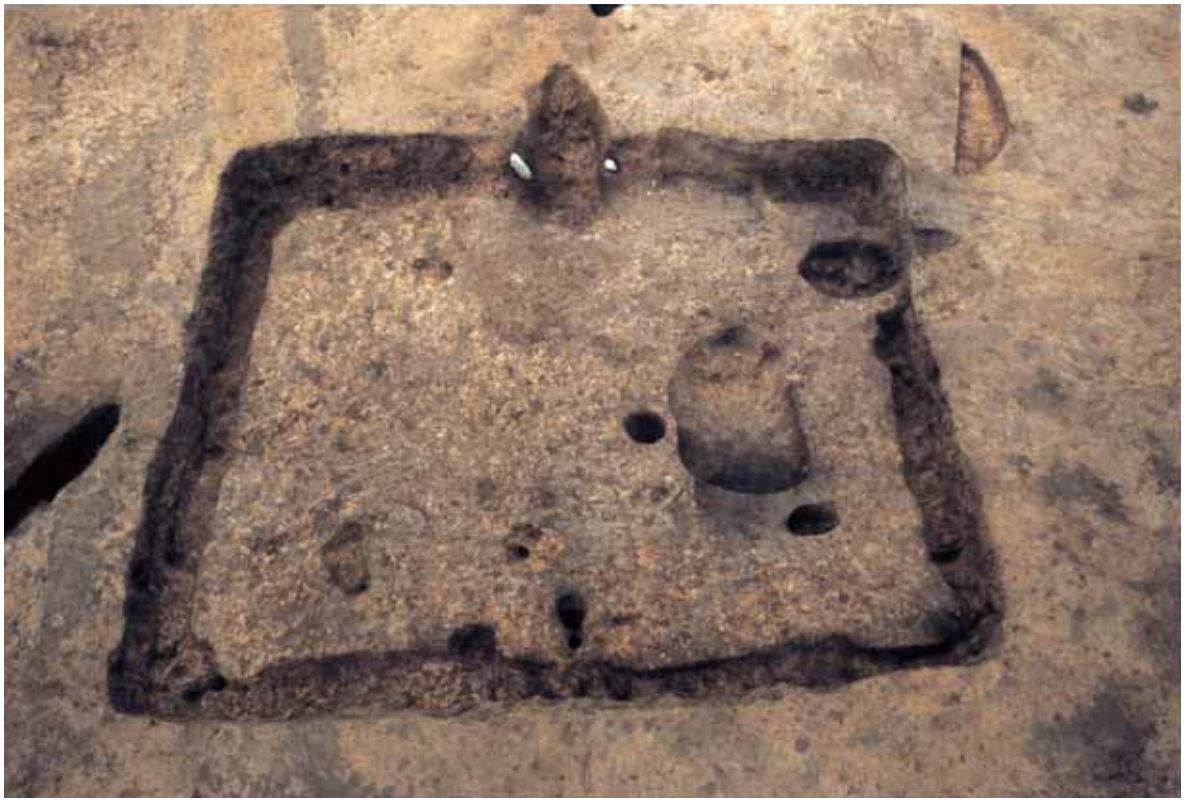
宮下遺跡（みやしたいせき）　II

２０１０

埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会

宮下遺跡遠景（南から）

宮下遺跡調査区全景



第９号住居跡完掘状況（南から）

第９号住居跡出土土器

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の２大河川が流れ、それがもたらす肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には、先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

さて、宮下遺跡は、熊谷市南西部千代地区に所在する縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡であります。宮下遺跡においては、昭和59年農業振興事業の一環として実施された農村総合整備モデル事業・連絡農道推進事業に伴う発掘調査が実施され、その際に溝跡や土坑、縄文時代早期から江戸時代までの土器などが検出されました。特にふいごの羽口や鉄滓が多量に出土するといった江南台地周辺では数少ない平安時代の製鉄遺跡が発見されたという成果があがっています。

このたび、この遺跡の範囲内に、自動車部品を生産する工場建設の計画がもちあがりました。そこで、熊谷市関係各課及び熊谷市教育委員会は、企業誘致にかかる度重なる協議を事業者側ともち、その中で、遺跡の保護と保存についても慎重な協議を重ねてまいりましたが、どうしても破壊を受ける部分に関しては記録保存の措置もやむを得ないとの結論に達し、急遽熊谷市宮下遺跡調査会を設立し発掘調査を実施いたしたところでございます。

今回報告いたします発掘調査では、縄文時代早期から後期、奈良･平安時代、江戸時代の遺構･遺物が発見されておりますが、縄文時代後期の集落跡や奈良･平安時代の集落跡の状況は、台地における集落のあり方を考える上で意義のある成果を得ることができました。

本書は、平成20年９月から平成21年１月に実施された、調整池及び駐車場造成工事部分の発掘調査の成果をまとめたものでございます。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及･啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され御理解、御協力を賜りました株式会社エフテック、並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成22年３月

熊谷市宮下遺跡調査会
会　長　野　原　　晃

例　　言

1　本書は、埼玉県熊谷市千代字宮下123番地1他に所在する宮下遺跡（埼玉県遺跡番号65―013）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、工場建設に伴う調整池造成及び駐車場造成にかかる発掘調査であり、事業者株式会社エフテックの委託費等をもって、熊谷市宮下遺跡調査会が実施した。

3　本事業の組織は、Ⅰ章のとおりである。

4　発掘調査期間は、平成20年９月８日～平成21年１月30日である。

整理・報告書作成期間は、平成21年２月１日～平成22年３月31日である。

5　発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会新井　端、吉野　健、蔵持俊輔、長谷川一郎、原野真祐が、整理・報告書作成事業は、長谷川、原野が主に担当し、吉野が一部補助した。

6　本書の執筆は、Ⅰ章を吉野が、Ⅴ章を吉野、原野が、他を長谷川、原野が担当した。

7　写真撮影は、発掘調査を吉野、蔵持、長谷川、原野が、遺物を吉野が行った。

空中写真は、株式会社東京航業研究所に委託した。

8　基準点測量は、中央航業株式会社に委託した。

また、出土遺物のうち石鏃等の石器実測図の一部は有限会社毛野考古学研究所に、土器胎土分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

9　出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

10　発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します（敬称略、五十音順）。

菅谷浩之　森田安彦　埼玉県教育局生涯学習文化財課

11　発掘調査・整理作業にあたっては、下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表します（敬称略、五十音順）。

（発掘調査）

浅川妙子　浅見慶子　新井なみ子　飯島文雄　市川文子　稲原貞夫　今田真理　上杉　清
内田靖彦　江守千秋　大澤昇治　岡部章次　岡部幸夫　笠原博明　風間安子　加瀬広子
加藤和利　加藤政江　神谷　榮　神田孝治　岸本まさみ　木曽冨美子　小林健二　坂田恵美子
島田　豊　島村良輝　清水　靖　志村九一　関根吉蔵　髙井武一　高橋進一　滝田千加子
田村亘男　塚越智惠子　利光政二　利光美智子　鳥塚恒男　中島直久　長尾照征　並木貞彦
沼尻好一　根岸義明　濃野とし子　野呂正弦　長谷川進男　原口幸次郎　馬場やよい　平田新哉
深井昭子　福岡敏宣　藤　敏則　星野次夫　堀越　守　牧野　薫　牧野常子　松﨑萬千子
松本弘美　水野正和　宮本和子　村越幸子　村本敏子　村山　近　山内妙子　山口とし子
山崎孝子　横田剛志　吉田活夫　渡辺　清

なお、土器胎土分析にあたり、焼成粘土資料作成については岸本まさみの手を煩わした。

（発掘調査・整理作業）

飯田広子　小林孝夫　佐藤陽子　佐藤　薫　高橋京子　田島みどり　十亀祥子　原　由子
福嶋早苗　福島英人　依田雅美

凡　　例

1　挿図中、遺構の略記号は、次のとおりである。

SB…掘立柱建物跡　SD…溝跡　SE…井戸跡　SI…竪穴住居跡　SK…土坑　SX…性格不明遺構

P…ピット

2　土層断面図及び平面図中の表記記号は、次のとおりである。

S…石　P…土器

3　遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

埋甕…1／30　竪穴住居跡・溝跡・土坑・ピット・井戸・性格不明遺構…1／60

円形柱穴列跡・掘立柱建物跡・溝跡…1／80　畠跡…1／100

4　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。また、原則として、同一図版の標高は統一し、Aポイントに表記した。

5　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土師器・須恵器・陶磁器・土錘・鉄製品…1／4　縄文土器・石器・石製品…1／3

石器1／2　石器・古銭…1／1

6　遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、表現方法は、以下のとおりである。

須恵器のうち還元焔焼成の断面：黒塗り　　酸化焔焼成の断面：白抜き

上記以外の縄文土器、土師器、陶器等の遺物断面：白抜き　釉薬：▒　墨書：黒塗り

底部調整　回転ヘラ削り　／　＼

7　遺物拓影のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

また、底部調整のうち回転糸切については、拓影を掲載した。

8　遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cm、gである。また、推定値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子　B…黒色粒子　C…赤色粒子　D…褐色粒子　E…赤褐色粒子　F…白色針状物質

G…長石　H…石英　I…白雲母　J…黒雲母　K…角閃石　L…片岩　M…砂粒　N…礫

焼成は、次のように区分した。　A…良好　B…普通　C…不良

9　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

10　土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務所監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行　2008年版）に照らし最も近似した色相を示した。

11　本報告書掲載の竪穴住居跡の遺構番号は、整理作業の段階で現地において呼称した遺構名を、以下のとおり振り替えた。

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
1	13	7	1	13	7	19	18
2	14	8	2	14	8	20	19-B
3	15	9	3	15	9	21	19-A
4	16	10	4	16	10	22	21
5	17	11	5	17	11		
6	20	12	6	18	12		

目　　次

口　　絵
　序
例　　言
凡　　例
目　　次
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査、整理・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
Ⅲ　遺跡の概要……9
　1　調査の方法……9
　2　検出された遺構と遺物……9
　3　基本土層……11
Ⅳ　遺構と遺物……14
　1　竪穴住居跡……14
　2　埋　甕……65
　3　円形柱穴列跡……69
　4　掘立柱建物跡……71
　5　溝　跡……73
　6　土坑・ピット……82
　7　井戸跡……114
　8　畠　跡……119
　9　性格不明遺構……119
　10　谷状地形……124
　11　遺構外遺物……127
Ⅴ　調査のまとめ……138
　1　遺構・遺物について……138
　2　墨書土器について……141
　3　第22号住居跡出土の須恵器坏について……143
Ⅵ　宮下遺跡出土縄文土器および土師器の胎土分析……145

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図…… 4
第２図　周辺遺跡分布図…… 6
第３図　宮下遺跡調査位置図……10
第４図　基本土層……11
第５図　宮下遺跡全測図……12
第６図　第１号住居跡・炉跡……14
第７図　第１号住居跡出土遺物……15
第８図　第２号住居跡……16
第９図　第３号住居跡・出土遺物……17
第10図　第４号住居跡……19
第11図　第５号住居跡……20
第12図　第６号住居跡……20
第13図　第７号住居跡・出土遺物……22
第14図　第８号住居跡・掘り方……24
第15図　第８号住居跡出土遺物……25
第16図　第９号住居跡・カマド……26
第17図　第９号住居跡出土遺物……27
第18図　第10号住居跡・出土遺物……29
第19図　第11号住居跡・出土遺物……30
第20図　第12号住居跡……33
第21図　第12号住居跡掘り方……34
第22図　第12号住居跡出土遺物(1)……35
第23図　第12号住居跡出土遺物(2)……36
第24図　第13号住居跡・掘り方……40
第25図　第13号住居跡出土遺物……41
第26図　第14号住居跡・掘り方……43
第27図　第14号住居跡出土遺物……44
第28図　第15号住居跡……45
第29図　第15号住居跡出土遺物……46
第30図　第16号住居跡・掘り方……48
第31図　第16号住居跡出土遺物……49
第32図　第17号住居跡・カマド……51
第33図　第17号住居跡出土遺物……52
第34図　第18号住居跡・掘り方……54
第35図　第18号住居跡出土遺物……55
第36図　第19号住居跡……57
第37図　第20号住居跡・カマド・掘り方……59
第38図　第20号住居跡出土遺物……60
第39図　第21号住居跡・カマド……61
第40図　第21号住居跡出土遺物……62
第41図　第22号住居跡・掘り方・出土遺物……64
第42図　第１～５号埋甕・第80号土坑……66
第43図　第１・２・３号埋甕、第80号土坑出土遺物 …67
第44図　第４・５号埋甕出土遺物……68
第45図　第１号円形柱穴列跡・出土遺物……70
第46図　第１号掘立柱建物跡・出土遺物……72
第47図　第１・２号溝跡……74
第48図　第６・７・９号溝跡……76
第49図　第８・10・11・12・13号溝跡……78
第50図　第14号溝跡……80
第51図　第５・６・17号溝跡・溝跡出土遺物……81
第52図　土坑・ピット配置図(1)……83
第53図　土坑・ピット配置図(2)……84
第54図　土坑・ピット配置図(3)……85
第55図　土坑・ピット配置図(4)……86
第56図　土坑(1)……87
第57図　土坑(2)……88
第58図　土坑(3)……89
第59図　土坑(4)……90
第60図　土坑(5)……91
第61図　土坑(6)……92
第62図　土坑(7)……93
第63図　土坑(8)……94
第64図　土坑(9)……95
第65図　土坑出土遺物(1)……99
第66図　土坑出土遺物(2) ……100
第67図　土坑出土遺物(3) ……101
第68図　土坑出土遺物(4) ……102

第69図　土坑出土遺物(5) ……103
第70図　ピット(1) ……107
第71図　ピット(2) ……108
第72図　ピット(3) ……109
第73図　ピット(4)・ピット出土遺物 ……110
第74図　第１・２号井戸跡 ……115
第75図　第１号井戸跡出土遺物(1) ……116
第76図　第１号井戸跡出土遺物(2) ……117
第77図　第２号井戸跡出土遺物 ……117
第78図　第１号畠跡 ……120
第79図　第１・２号性格不明遺構・出土遺物 ……121
第80図　第３・４号性格不明遺構 ……122
第81図　谷状地形土層断面 ……125
第82図　谷状地形出土遺物 ……126
第83図　遺構外遺物(1) ……128
第84図　遺構外遺物(2) ……129
第85図　遺構外遺物(3) ……130
第86図　遺構外遺物(4) ……131
第87図　遺構外遺物(5) ……132
第88図　遺構外遺物(6) ……133
第89図　遺構外遺物(7) ……134
第90図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）
　　および砂の粒径組成(1) ……149
第91図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）
　　および砂の粒径組成(2) ……150
第92図　砕屑物・基質・孔隙の割合 ……150

表 目 次

第１表　第１号住居跡出土遺物観察表……15
第２表　第３号住居跡出土遺物観察表……17
第３表　第７号住居跡出土遺物観察表……22
第４表　第８号住居跡出土遺物観察表……25
第５表　第９号住居跡出土遺物観察表……28
第６表　第10号住居跡出土遺物観察表……29
第７表　第11号住居跡出土遺物観察表……31
第８表　第12号住居跡出土遺物観察表……37
第９表　第13号住居跡出土遺物観察表……41
第10表　第14号住居跡出土遺物観察表……44
第11表　第15号住居跡出土遺物観察表……46
第12表　第16号住居跡出土遺物観察表……50
第13表　第17号住居跡出土遺物観察表……53
第14表　第18号住居跡出土遺物観察表……56
第15表　第20号住居跡出土遺物観察表……60
第16表　第21号住居跡出土遺物観察表……62
第17表　第22号住居跡出土遺物観察表……63
第18表　第１・２・３号埋甕、第80号土坑出土遺物…68
第19表　第１号円形柱穴列跡出土遺物観察表……71
第20表　第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表……72
第21表　溝跡出土遺物観察表……81
第22表　土坑一覧表……96
第23表　土坑出土遺物観察表 ……104
第24表　ピット出土遺物観察表 ……110
第25表　ピット一覧表 ……111
第26表　第１号井戸跡出土遺物観察表 ……118
第27表　第２号井戸跡出土遺物観察表 ……118
第28表　性格不明遺構出土遺物観察表 ……121
第29表　谷状地形出土遺物観察表 ……126
第30表　遺構外遺物観察表 ……135
第31表　分析試料一覧および胎土分類結果 ……145
第32表　薄片観察結果 ……147

図版目次

図版１　宮下遺跡調査区全景（左が北）
図版２　宮下遺跡全景（東から）
基本土層断面（北から）
第１号住居跡炉土層断面（南東から）
第１号住居跡炉（南東から）
第１号住居跡（南東から）
図版３　第１号住居跡炉掘り方（南西から）
第２号住居跡（南から）
第３号住居跡（北から）
第４号住居跡（南から）
第５号住居跡（南西から）
第６号住居跡（西から）
第７号住居跡（北から）
第７号住居跡カマド内遺物出土状況(南から)
図版４　第７号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（北から）
第７号住居跡掘り方（北から）
第８号住居跡遺物出土状況（南から）
第８号住居跡カマド遺物出土状況（南から）
第８号住居跡（南から）
第８号住居跡掘り方（南から）
第９号住居跡遺物出土状況（南から）
第９号住居跡カマド遺物出土状況(南東から)
図版５　第９号住居跡（南から）
第10号住居跡遺物出土状況（北から）
第11号住居跡（南から）
第11号住居跡遺物出土状況（北から）
第11号住居跡掘り方（南から）
第12号住居跡遺物出土状況（南から）
第12号住居跡床第１面（南から）
第12号住居跡カマド（南から）
図版６　第12号住居跡貯蔵穴１遺物出土状況(南から)
第12号住居跡貯蔵穴２遺物出土状況(南から)
第12号住居跡掘り方（南から）
第12号住居跡床第２面（南から）
第13号住居跡遺物出土状況（南から）
第13号住居跡カマド遺物出土状況（南から）
第13号住居跡（南から）
第13号住居跡掘り方（南から）
図版７　第14号住居跡遺物出土状況（西から）
第14号住居跡カマド（西から）
第14号住居跡（西から）
第14号住居跡内土坑遺物出土状況（西から）
第14号住居跡掘り方（西から）
第15号住居跡遺物出土状況（西から）
第15号住居跡（西から）
第16号住居跡遺物出土状況（南から）
図版８　第16号住居跡（南から）
第16号住居跡カマド（南から）
第16号住居跡掘り方（南から）
第17号住居跡遺物出土状況（南から）
第17号住居跡カマド遺物出土状況（南から）
第17号住居跡（北から）
第17号住居跡カマド（南から）
第18号住居跡遺物出土状況（南から）
図版９　第18号住居跡掘り方（西から）
第19号住居跡（南西から）
第20号住居跡遺物出土状況（南から）
第20号住居跡カマド遺物出土状況（南から）
第20号住居跡（南から）
第21号住居跡遺物出土状況（南西から）
第21号住居跡カマド遺物出土状況(南西から)
第21号住居跡（南西から）
図版10　第22号住居跡遺物出土状況（西から）
第22号住居跡カマド（西から）
第22号住居跡遺物出土状況（西から）
第22号住居跡遺物出土状況（西から）
第22号住居跡カマド（西から）
第１号埋甕出土状況（南西から）

第１号埋甕掘り方（南西から）
第２号埋甕出土状況（南東から）
図版11　第２号埋甕掘り方（南東から）
第３号埋甕出土状況（北西から）
第４号埋甕土層断面（南東から）
第４号埋甕出土状況（南東から）
第４号埋甕掘り方（南東から）
第５号埋甕出土状況（南から）
第５号埋甕掘り方（南から）
第１号円形柱穴列跡（南東から）
図版12　第１号円形柱穴列跡Ｐ15遺物出土状況(南から)
第１号掘立柱建物跡（南から）
第１・９号溝跡（西から）
第２号溝跡（東から）
第５号溝跡（北東から）
第６・７号溝跡（北西から）
第12号溝跡（北から）
図版13　第８・10号溝跡（東から）
第11号溝跡（東から）
第13号溝跡（北から）
第14号溝跡（東から）
第２号土坑（南から）
第４号土坑（北東から）
第12号土坑（東から）
図版14　第15号土坑（南東から）
第17号土坑（南東から）
第19号土坑（南東から）
第21号土坑（南から）
第25号土坑（南から）
第30・34号土坑（南西から）
第57号土坑（東から）
第58号土坑石出土状況（東から）
図版15　第61・62号土坑遺物出土状況（南から）
第61・62号土坑（南から）
第64号土坑遺物出土状況（南東から）
第70号土坑（北から）
第71号土坑遺物出土状況（南から）
第80号土坑（南東から）
第81号土坑石出土状況（南から）
第82号土坑石出土状況（東から）
図版16　第83号土坑遺物出土状況（西から）
第84号土坑石出土状況（東から）
第86号土坑遺物出土状況（南から）
第87号土坑（北から）
第90号土坑石出土状況（南から）
第91号土坑石出土状況（南から）
第91号土坑（南東から）
第98・103号土坑（東から）
図版17　第99・100号土坑（北から）
第108号土坑、第99号ピット（北から）
第103号土坑（東から）
第104号土坑（東から）
第106号土坑（北から）
第111号土坑（北から）
第114・118号土坑（西から）
第124号土坑石出土状況（東から）
図版18　第117号土坑（西から）
第119号土坑（北から）
第130号土坑（北西から）
第135号土坑（北から）
第136号土坑（東から）
第14号ピット遺物出土状況（南から）
図版19　第１号井戸跡（南から）
第２号井戸跡（南から）
第１号畠跡（東から）
谷状地形（北から）
第１号性格不明遺構（南から）
第２号性格不明遺構（西から）
第３・４号性格不明遺構（北から）
図版20　第５号埋甕　第44図５－１
第３号埋甕　第43図３－１
第４号埋甕　第44図４－１
第１号住居跡　第７図２
第１号埋甕　第43図１－１

第２号埋甕　第43図２―１

図版21　第１号住居跡　第７図１

第47号土坑　第65図47―６

第７・８・15・18号住居跡　第13図６、第15図12、第29図13、第35図９～12

第１・21・57・70・80・83・88・99・103・108・111・118・119・135号土坑

第43図、第65図、第66図、第67図、第68図、第69図

図版22　第２・３・４・25・30・42・47・58・82号土坑　第65図、第66図、第67図

谷状地形、遺構外遺物　第82図１～９

第83図１～18

遺構外遺物　第83図19～47

図版23　第12号住居跡　第22図１

第12号住居跡　第22図２

第17号住居跡　第33図１

第20号住居跡　第38図３

第22号住居跡　第41図１

第18号住居跡　第35図４

遺構外遺物　第89図113

第９号住居跡　第17図６

図版24　第９号住居跡　第17図11

第９号住居跡　第17図14

第９号住居跡　第17図15

第12号住居跡　第22図29

第12号住居跡　第22図30

第17号住居跡　第33図14

図版25　第17号住居跡　第33図15

第17号住居跡　第33図16

第17号住居跡　第33図17

第17号住居跡　第33図22

第18号住居跡　第35図７

第20号住居跡　第38図11

第20号住居跡　第38図７

図版26　第21号住居跡　第40図１

第21号住居跡　第40図２

第21号住居跡　第40図３

第21号住居跡　第40図４

第９号住居跡　第17図16

第12号住居跡　第23図44

第20号住居跡　第38図10

図版27　第12号住居跡　第22図26

第15号住居跡　第29図５

第18号住居跡　第35図５

第18号住居跡　第35図６

第７号住居跡　第13図１

第９号住居跡　第17図２

第９号住居跡　第17図４

第12号住居跡　第22図13

第12号住居跡　第22図14

図版28　第12号住居跡　第22図15

第13号住居跡　第25図８

第13号住居跡　第25図５

第13号住居跡　第25図６

第13号住居跡　第25図９

第14号住居跡　第27図５

第16号住居跡　第31図６

第18号住居跡　第35図３

図版29　第20号住居跡　第38図１

第22号住居跡　第41図３

第22号住居跡　第41図４

遺構外遺物　第89図114

第71号土坑　第67図71―１

第14号住居跡　第27図６

第15号住居跡　第29図４

第17号住居跡　第33図５

図版30　第18号住居跡　第35図２

第14号住居跡　第27図15

第９・12号住居跡　第17図17、第22図35・40・42

第17・46・81・82・83号土坑、第１号井戸跡

第65図17―１、第65図46―１、第67図81―３・４、第67図82―４、第67図83―３、第75図19

図版31　第58号土坑　第66図58－４
第58号土坑　第66図58－５
第58号土坑　第66図58－６
第81号土坑　第67図81－２
第83号土坑　第67図83－４
第２号井戸跡　第77図７
第２号井戸跡　第77図10
第１号井戸跡　第75図１
第１号井戸跡　第75図３
図版32　第61-２号土坑　第66図61-２－２
第１号井戸跡　第75図20
第58・61・82・124号土坑、第２号井戸跡
第66図58－２・３・７、第66図61－１・２、第67図82－１・２、第69図124－４、第77図５・６・８・９・11・12・13
第１号井戸跡　第75図４～11・13～17
図版33　第９・11・16号住居跡、第86・111・119号土坑、第２号井戸跡、遺構外遺物
第17図18・19、第19図４、第31図22、第68図86－１・111－３・４、第69図111－５・118－２・119－３、第77図16、第88図92・102～111、第89図112
遺構外遺物　第85図65・66・68～71、第86図72～81、第87図82～85、第88図90～93
図版34　第18号住居跡、第58・111・118・119・135号土坑、遺構外遺物　第35図15、第66図58－９、第69図111－６・118－３・119－４・135－２、第84図58、第85図67、第87図86～89、第88図94～96
第17・18号住居跡、第30・70・84・135号土坑、第１号性格不明遺構、遺構外遺物　第33図27、第35図13、第65図30－３、第67図70－２、第68図84－１、第69図135－３、第79図１－２、第84図48～51・54～57、第85図63
図版35　第104号土坑、第１号井戸跡、遺構外遺物
第68図104－１、第75図23・24・26、第84図59・60、第85図61・64
第１号円形柱穴列跡、第15・121号土坑、第１号井戸跡、遺構外遺物　第45図１、第65図15－１、第69図121－１、第75図25、第85図62
第12号住居跡、第61-２・84・103号土坑、遺構外遺物　第23図50・51、第66図61-２－３、第68図84－２・103－２、第88図97・98・100
図版36　第18号住居跡、第124号土坑　第35図14、第69図124－５
第12号住居跡、第108号土坑、谷状地形
第23図47、第68図108－２、第82図10
第84・117・130号土坑、遺構外遺物
第68図84－３、第69図117－１、第69図130－１、第88図99、第89図123・124
第12・18号住居跡、第91号土坑、第１号井戸跡、遺構外遺物　第23図52、第35図16、第68図91－２、第75図21・22、第89図122・125・126
図版37　第14号住居跡、遺構外遺物　第27図16、第88図101
第12号住居跡　第23図48・49
第１号井戸跡　第76図27
第７・17号住居跡　第13図５、第33図26
第11・12号住居跡、遺構外遺物　第19図３、第23図45・46、第89図119
図版38　胎土薄片(1)
１．№２（４号埋甕　縄文深鉢　胴部　堀之内（縄文後期））
２．№５（SI12床直　土師器坏　体部片　８世紀後半）
３．№６（SI12貯蔵穴　土師器甕　胴部片　８世紀後半）
図版39　胎土薄片(2)
４．№10（SI10　土師器甕　胴部片　10世紀前半）
５．焼成粘土（岸本２）（試Ｆトレンチ第８層）

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成19年10月９日、熊谷市千代地区への企業誘致について宮下遺跡が所在する当地が埋蔵文化財包蔵地に該当することから、発掘調査及び遺跡の内容等の詳細を把握するための試掘調査についての必要性及び方向性について市関係部署と協議をもった。その後、度重なる事業者との協議、市内部における関係部署との調整会議を経て、平成21年７月10日、株式会社エフテックより開発行為に関する協議書が提出された。これに対し熊谷市教育委員会は、当地が埋蔵文化財包蔵地に該当し、文化財保護法第93条第１項の規定により、埋蔵文化財発掘の届出を提出し、埋蔵文化財の詳細な状況を確認するための試掘調査等の実施が必要である旨の意見書を付した。なお、これに先立ち、平成21年６月27日付けで株式会社エフテック代表取締役から調整池及び駐車場造成工事部分の埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これに基づき、熊谷市教育委員会では、平成20年８月18日から９月２日にかけて、遺跡の詳細確認調査を実施した結果、縄文時代から江戸時代までの遺構・遺物が確認された。この結果を踏まえて、埼玉県教育委員会教育長あてに次のように意見を付して届出を送付した。

この工事による掘削は調整池部分のみで、調整池部分全域を発掘調査いたします。

なお、駐車場造成部分は、確認面までは保護層が設けられることとなり、工事立会の措置が適当であると思われます。

これにより、株式会社エフテック代表取締役あてに、平成20年９月16日付け教生文第４―536号で埼玉県教育委員会教育長から発掘調査実施の指示通知があった。

一方、熊谷市教育委員会は、発掘調査を早急に実施するべく体制づくりを行った。平成20年７月２日付けで、当該事業地内における埋蔵文化財の取り扱いにかかり、その処置及び発掘調査方法等についての埋蔵文化財に関する協定書を熊谷市・株式会社エフテック間で締結し、これに基づき熊谷市宮下遺跡調査会を平成20年８月１日に設立した。

発掘調査に先立ち、熊谷市宮下遺跡調査会会長から文化財保護法第92条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を提出され、発掘調査が実施された。

発掘調査に関わる発掘調査の届出及び届出に対する埼玉県教育委員会からの指示通知は、以下のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査の届出　平成20年９月３日付け熊宮遺発第２号

埋蔵文化財の発掘調査についての通知　平成20年９月16日付け教生文第２―46号

2　発掘調査、整理・報告書作成の経過

⑴　発掘調査

宮下遺跡の発掘調査は、平成20年９月８日から平成21年１月30日にかけて行われた。調査面積は、遺跡面積約165,000㎡のうち、工場建設に伴う調整池及び駐車場造成工事によって破壊をうける7,980㎡であった。

調査は、重機により遺構確認面まで表土除去を行い、作業員による遺構確認作業・遺構掘削作業を行った。なお、表土除去については、作業に都合上２回に分けて行った。その後、遺構及び全体についての

平面図及び遺構の土層断面図を作成し、遺物出土状況については適宜微細図を作成し遺物の取り上げを行った。さらに、遺構・遺物出土状況等の写真撮影を実施し記録保存を行った。また、調査区全体については、空中写真撮影を委託して行った。

⑵　整理・報告書作成作業

本書の整理作業は、平成21年２月から平成22年３月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。

最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主 体 者　　熊谷市宮下遺跡調査会

⑴　発掘調査、整理・報告書作成

平成20年度

会長	野原　　晃	（熊谷市教育委員会教育長）
副会長	大山　整治	（熊谷市教育委員会教育次長）
理事	菅谷　浩之	（熊谷市文化財保護審議会会長）
	小柴　　清	（熊谷市文化財保護審議会委員）
	田所　隆雄	（熊谷市産業振興部産業振興課長）
	福田　祐一	（株式会社エフテック）
監事	小林　常男	（熊谷市教育委員会教育総務課長）
	生澤　靖之	（株式会社エフテック）
事務局長	関口　和佳	（熊谷市教育委員会社会教育課長）
事務局次長	吉田　高一	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事）
事務局員	新井　　端	（熊谷市教育委員会社会教育課副課長）
	金子　正之	（熊谷市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長）
	吉野　　健	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査）
	蔵持　俊輔	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任）
	長谷川一郎	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係調査員）
	原野　真祐	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係調査員）
	竹澤　四郎	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係事務嘱託）

⑵　整理・報告書作成

平成21年度

会長	野原　　晃	（熊谷市教育委員会教育長）
副会長	柴崎　　久	（熊谷市教育委員会教育次長）
理事	菅谷　浩之	（熊谷市文化財保護審議会会長）
	小柴　　清	（熊谷市文化財保護審議会委員）
	木村　和行	（熊谷市産業振興部産業振興課長）
	福田　祐一	（株式会社エフテック）
監事	小林　常男	（熊谷市教育委員会教育総務課長）
	中野　智晴	（株式会社エフテック）
事務局長	斉木　千春	（熊谷市教育委員会社会教育課長）
事務局次長	小林　英夫	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事）
事務局員	新井　　端	（熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長）
	吉野　　健	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査）
	蔵持　俊輔	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任）
	長谷川一郎	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係調査員）（～H22．2 .16）
	原野　真祐	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係調査員）（～H22．2 .16）

II　遺跡の立地と環境

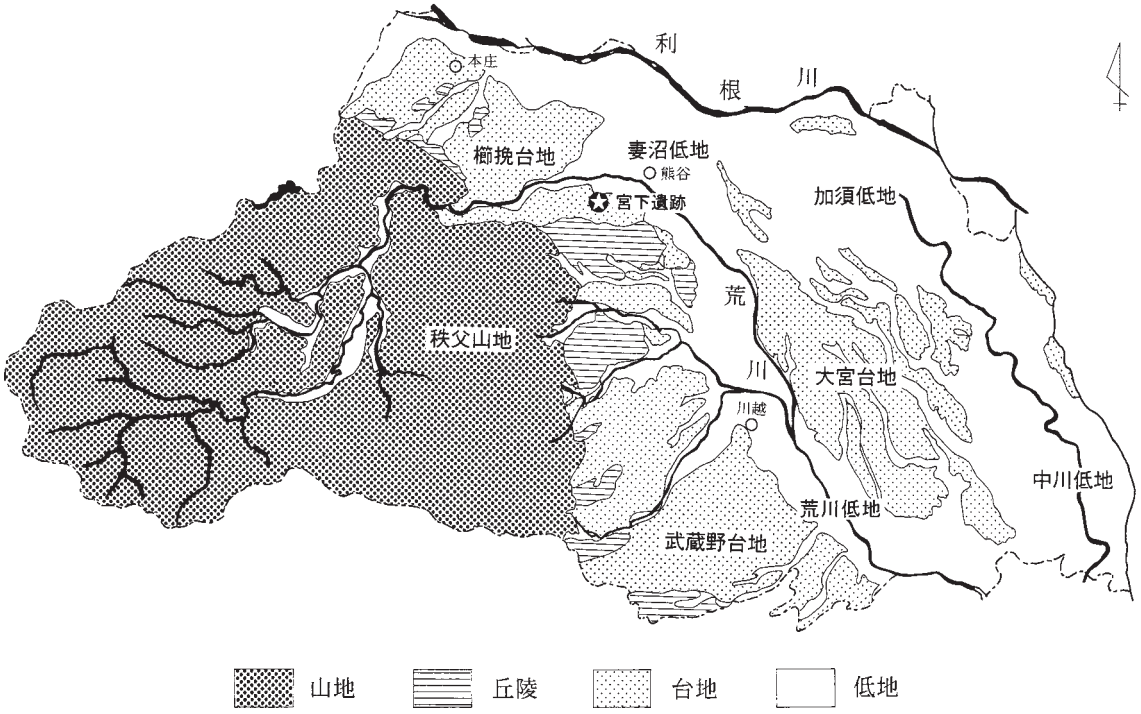
熊谷市は、埼玉県の北部、東京都心から50～70㎞圏に位置し、その区域は南北に約20㎞、東西に約14㎞の規模を有する。

市の南には荒川が、北には利根川がそれぞれ西から南東方向に流れ、両河川が最も近接する地域にある。地形的には、市の西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地及び比企丘陵、北側及び東側には妻沼低地が広がり、市の大半はこの妻沼低地上にある（第１図）。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町末野付近を扇頂として東は市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは西別府付近まで延びている。標高は約36～54ｍを測り、妻沼低地に向かって緩やかに下る。また、扇状地扇端である三ヶ尻や西別府地区の台地裾部においては、扇央部で伏流水となっていた水が湧水となって現れ、かつては多数確認されていた。

櫛挽台地の東側には、洪積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。この新荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市（旧川本町）菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

本報告の宮下遺跡は、江南台地北東端縁辺部の台地上に所在し、標高55～59ｍを測る。また、遺跡はＪＲ高崎線熊谷駅の南西約4.7㎞、荒川から南へ約1.0㎞の距離にある。現地表から遺構確認面までの深さは、おおよそ20～70㎝であった。



第１図　埼玉県の地形図

次に、本報告遺跡を中心に周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。

まず、旧石器時代は、本遺跡の西側一帯に展開する千代遺跡群の寺内遺跡（12）・山神遺跡（８）から尖頭器、西原遺跡（７）から尖頭器・石錐・彫刻刀形石器が出土している。また、鹿嶋遺跡（40）では、３点のナイフ形石器を含む21点の石器がハードローム層中から検出されている。萩山（25）・上前原（27）・向原（30）・天神（50）の各遺跡では尖頭器・ナイフ形石器などが出土している。周辺地域では、寄居町牛無具利遺跡（地図未掲載）からナイフ形石器・掻器が、深谷市白草遺跡（35）では、細石刃・荒屋型彫刻刀形石器が出土している。

縄文時代になると草創期では、萩山遺跡・諸ヶ谷遺跡（20）で有舌尖頭器が、上前原・船川遺跡（22）からは、多縄文系土器の小片が出土している。深谷市四反歩遺跡（37）からは、尖頭器・矢柄研磨器が、同市白草遺跡から尖頭器が出土している。四反歩遺跡からは、東京都前田耕地遺跡例に類似する柳葉形尖頭器が出土しており注目される。

早期では、撚糸文期になり、江南台地東部において遺跡数の増加が認められる。萩山・南方（10）・野原宮脇（33）・鹿嶋・船川の各遺跡において住居跡が確認され、遺物の散布は、姥ヶ沢（６）・宮下（１）・寺内・上前原・原谷（24）・山神・熊野（45）・野原宮脇・本田東台（31）・狸塚（18）・塩新田（19）の各遺跡で確認されている。特に萩山遺跡では、撚糸文期前半の住居跡が20軒が検出されており、当該期における大規模集落跡として注目されている。周辺地域の遺跡では、深谷市四反歩遺跡で、撚糸文期後半の住居跡が検出されている。条痕文期になると、江南台地西部にも遺跡が認められるようになる。北方遺跡（４）では竪穴状遺構・炉穴が、富士山遺跡（５）・丸山遺跡（44）で炉穴が検出されている。遺物の散布は、姥ヶ沢・寺内・向原・山神・野原丸山・熊野・本田東台・岩比田（15）・塩西（17）の各遺跡で検出されている。周辺地域の遺跡では、深谷市白草・四反歩遺跡で、住居跡・炉穴・土坑が検出されている。深谷市船山（34）・北篠場（36）の各遺跡では、遺物の散布が少量確認されている。

前期になると江南台地西部において遺跡が増加し、近接して集落が存在する傾向が認められる。本遺跡の近隣では富士山遺跡で諸磯式期の住居跡３軒が確認されている。花積下層式土器は、僅かながらも、姥ヶ沢・富士山・権現坂埴輪窯跡（３）・北方と連続する遺跡に散布が認められる。周辺の遺跡では深谷市船山遺跡からは、遺構は検出されないものの同期の遺物が纏まって出土し、関山式期の住居跡が検出されている。また、黒浜式期の集落跡として東原遺跡（26）が挙げられる。周辺地域の遺跡では寄居町南大塚遺跡（地図未掲載）で関山～黒浜式期にかけての大規模な集落跡があり、黒浜式期の集落跡としては甘粕原・むじな塚（いずれも地図未掲載）の各遺跡が挙げられる。

中期は加曽利Ｅ式期に最も遺跡数が増加し、大規模な環状集落も確認されている。本遺跡の近隣では、勝坂式期最終末の住居跡が南方遺跡で１軒確認されているのみで、遺物の散布も、西原・狸塚・向原・塩西の各遺跡で僅かに確認されているにすぎない。加曽利Ｅ式期になると、代遺跡（28）・神田遺跡（48）で採集資料として加曽利Ｅ式土器、姥ヶ沢・富士山・権現坂・西原・寺内・上前原で住居跡・埋甕・集石土坑・土坑等が検出されている。特に、西原遺跡では、加曽利Ｅ式期後半の住居跡が59軒検出されており、大規模短期間集落として注目されている。

後期になると台地上での遺跡数は、堀之内式期を境にして著しく減少する。これとは対称的に、荒川両岸の底位段丘・妻沼低地において遺跡が集中する傾向が見られる。

近隣では、萩山遺跡で称名寺式期の住居跡７軒、姥ヶ沢遺跡で堀之内式期の住居跡２軒、富士山・宮

1．宮下遺跡　2．権現坂遺跡　3．権現坂埴輪窯跡群　4．北方遺跡　5．富士山遺跡　6．姥ヶ沢遺跡　7．西原遺跡　8．山神遺跡　9．天神谷遺跡　10．南方遺跡　11．西遺跡　12．寺内遺跡　13．桜山遺跡　14．立野遺跡　15．岩比田遺跡　16．向比遺跡　17．塩西遺跡　18．狸塚遺跡　19．塩新田遺跡　20．諸ヶ谷遺跡　21．塩丸山遺跡　22．船川遺跡　23．山ノ神遺跡　24．原谷遺跡　25．荻山遺跡　26．東原遺跡　27．上前原遺跡　28．代遺跡　29．合羽山遺跡　30．向原遺跡　31．本田東台遺跡　32．野原遺跡　33．宮脇遺跡　34．船山遺跡　35．白草遺跡　36．北篠場遺跡　37．四反歩遺跡　38．百済木遺跡　39．北田遺跡　40．鹿嶋遺跡　41．下新田遺跡　42．荒神脇遺跡　43．丸山浦遺跡　44．丸山遺跡　45．熊野遺跡　46．天神山遺跡　47．松原遺跡　48．神田遺跡　49．山神東遺跡　50．天神遺跡　51．新田裏遺跡　52．須賀広宮脇遺跡　53．釜場遺跡　54．権現坂塚群　55．行人塚群　56．新屋敷遺跡　57．田村陣屋跡　58．長命寺跡　59．新山塚群　60．高根社跡　61．観音岩祀場跡　62．前谷石切場跡　63．片尻山石切場跡　64．聖観音寺跡　65．宮土塚群

第２図　周辺遺跡分布図

下遺跡で埋甕が検出されている。遺物の散布は、寺内・天神山（46）・山神・北方・西原の各遺跡で僅かに確認されている。加曽利Ｂ式土器は、西原遺跡でのみ確認されている。周辺の遺跡では、寄居町露梨子遺跡・東遺跡（いずれも地図未掲載）・深谷市四反歩遺跡からは住居跡が検出されている。また、露梨子遺跡の荒川を挟んだ対岸に位置する樋ノ下遺跡（地図未掲載）では、後期初頭から前葉にかけての住居跡13軒が検出されており、本地域周辺において、最も大規模な集落跡が考えられている。

晩期になると江南台地上においては、当該期遺構は確認されていない。近隣では、野原遺跡（32）で浮線網状文系土器の破片、和田川上流の嵐山町北田遺跡（39）で当該期破片が検出されており、今後少量ではあるが発見される可能性がある。時期不明の縄文土器が採集されている山ノ神遺跡（23）がある。

弥生時代の遺跡は、本遺跡の近隣において、姥ヶ沢・富士山遺跡の２か所のみで確認されている。また、江南台地の北縁部の深谷市域では、白草遺跡の他、四反歩遺跡・万願寺遺跡・円阿弥遺跡・焼谷遺跡（いずれも地図未掲載）などにおいて、いずれも弥生時代後期の遺構・遺物が検出・採集されている。

古墳時代の遺跡については、前期では五領式期の集落跡が確認されており、姥ヶ沢遺跡で住居跡９軒、富士山遺跡で住居跡３軒が検出されている。また、天神谷遺跡（９）では、遺構等は確認されていないが台付甕等が出土している。近隣では、滑川左岸の釜場遺跡（53）・諸ヶ谷遺跡が調査され、釜場遺跡では検出された住居跡11軒のすべてが焼失住居であった。和田川右岸では塩丸山（21）・塩西遺跡において前期（五領式期）の遺構が検出している。塩西遺跡では祭祀土坑から40個体以上の遺物が検出されている。周辺地域の遺跡では、深谷市白草・円阿弥遺跡、また、比企丘陵上、滑川町域の大谷・屋田遺跡、嵐山町域の花見堂（いずれも地図未掲載）・北田遺跡においてこの時期の住居跡が検出されている。

中期では唯一、塩新田遺跡において、６世紀代の古墳に一部破壊された住居跡が１軒検出され、初現的な要素をもつカマドを備えていた。周辺地域の遺跡では、白草遺跡で同期の住居跡８軒が検出されている。

後期になると江南台地及び周辺地域においても集落、古墳が増加する。近隣では、本田・東台遺跡・岩比田・権現坂・宮下の各遺跡より住居跡が確認されている。なかでも本田東台遺跡は６世紀後半を中心に８世紀代まで営まれた大規模な集落があり、近接して所在する野原古墳群（地図未掲載）と関わりがあると考えられている。また、和田川を挟んで対岸には鬼高式期の集落跡と考えられる滑川町円正寺遺跡や円正寺・山中古墳群、天神山横穴墓群（いずれも地図未掲載）などが近接して所在する。周辺地域の遺跡として、深谷市の川端・権現堂、滑川町域の栗谷・寺谷・寺ノ台（いずれも地図未掲載）の各遺跡があげられる。後期の古墳は群集墳として形成されており、和田吉野川流域右岸に立地する天神山古墳群（地図未掲載）、和田川流域左岸の立野（14）・下原・野原古墳群の他、滑川流域左岸の塩古墳群内荒井支群・西原支群（いずれも地図未掲載）が分布する。周辺地域では江南台地上の深谷市大塚・清水山古墳群（いずれも地図未掲載）がある。比企丘陵の滑川流域では最奥部の嵐山町古里・陣屋古墳群（いずれも地図未掲載）を頂点に左岸域では滑川町松原遺跡（47）の他、峯・山崎・両表（いずれも地図未掲載）古墳群が丘陵上に点在する。また、これに対峙して右岸の丘陵上でも、嵐山町天神山、滑川町巌山・麓（いずれも地図未掲載）古墳群などが連続して分布している。荒川流域に目を転じると、右岸の河岸段丘上に立地する古墳群として深谷市箱崎・塚原・鹿島古墳群（いずれも地図未掲載）などがある。これらの古墳群には近接して集落跡が検出され、荒川左岸の自然堤防上には熊谷市広瀬・玉井古墳群（いずれも地図未掲載）が展開する。この他、これら地域に点在する群集墳関連の生産遺跡として、姥ヶ沢・権現坂埴輪窯跡群が存在し、両遺跡とも多数の窯跡、工房跡、粘土採掘土坑が検出されている。

奈良時代に入り、7世紀後半から8世紀前葉頃に形成された集落遺跡として桜山(13)・鹿嶋・荒神脇・野原宮脇・岩比田・塩西などの各遺跡があり、これらのうち、桜山・荒神脇は遺跡内及びその周囲に古墳が存在している。8世紀中葉から後半頃には新田裏遺跡・富士山遺跡が集落として形成されていく。

平安時代の9世紀代に入ると、遺跡が増加傾向になる。その要因として挙げられるのが、寺内廃寺(12)の存在である。寺内廃寺は8世紀前半には創建されたと推定され、9世紀中葉から後半頃には最盛期を迎える。寺地内からは基壇建物跡、掘立柱建物跡、多数の住居跡が検出されている。出土遺物には、瓦や塑像など寺に直接関係する遺物、「花寺」・「石井寺」・「東院」・「上院」など寺の名称や施設に関連する墨書土器などが出土している。寺内廃寺の東に隣接する天神谷遺跡では、長頸瓶を専門に焼成していた須恵器窯跡が検出され、隣接する深谷市百済木遺跡（38）から平安時代中頃とされる銅像天部像が出土している。その周辺には、新田裏遺跡・熊野遺跡・岩比田遺跡・野原宮脇遺跡・丸山遺跡・立野遺跡・西遺跡（11）などで9世紀代の集落跡が確認されている。岩比田遺跡からは須恵器の円面硯や棹秤の錘などが出土している。10世紀後半以降になると、遺跡の数は極端に減少する。塩西遺跡では土師器羽釜・坏が住居跡から出土し、宮下遺跡からも羽釜が出土している。その他、採集遺物などから奈良・平安時代の集落跡が存在しているものと推定される遺跡は、下新田遺跡（41）・丸山浦遺跡（43）・山神東遺跡（49）・須賀広宮脇遺跡（52）などがある。また、本遺跡周辺では製鉄遺跡は検出されていないが、熊野遺跡、向比遺跡（16）、宮下遺跡などからは鍛冶炉や鉄滓、鞴の羽口が検出されている。

中世になると、武蔵七党や在地武士団の館跡が散在するようになるが、実態については不明なものが多い。本遺跡の周辺には、土塁や堀などが遺存している館跡が存在する。上杉館跡・成沢館跡・谷縁館跡・堀ノ内館跡・三本館跡・平山館跡・増田館跡・常安寺館跡・塩館跡（いずれも地図未掲載）などがある。また、寺院跡として元八幡遺跡・金胎寺跡・能満寺跡・神力寺跡などがある。板碑をともなう中世墳墓跡として新田裏遺跡・合羽山遺跡（29）がある。中世遺構が検出されている遺跡は、溝跡や室町時代前期の板碑が検出されている荻山遺跡、土坑墓から永楽通宝や銅環が出土した鹿嶋遺跡、貞和五年（1345）や延徳二年（1493）紀年銘の板碑が採集された天神遺跡、集石土坑・火葬墓跡が検出された宿遺跡、建築物遺構・溝跡・井戸跡などが検出された熊野遺跡、土坑、溝跡などが検出された本田東台遺跡、柱穴群、井戸跡、溝跡などが検出された岩比田遺跡、溝跡が検出された富士山遺跡などがある。

近世になると、陣屋跡として寛永年間稲垣若狭守の陣屋と知られる田村陣屋跡(57)、寺院跡では、県内の有力な修験寺院で明治に廃寺となった長命寺跡(58)、観音菩薩を本尊とし明治初年に廃寺となった聖観寺跡(64)などがある。また、塚群として和田吉野川右岸に位置する権現坂塚群(54)・行人塚群(55)、和田川右岸に位置する新山塚群（59)、滑川左岸に位置する富士塚群（65）がある。新山塚群では5号塚下層から河原石などを敷きつめた集石遺構が検出され、その集石に混在して銭貨「祥符通宝」、「寛永通宝」が検出されている。祭祀遺跡としては、比企丘陵北縁の高根山から派生する西尾根上に近年まで角塔婆が建てられ、祭祀的な場所として認識されていた観音岩祭祀場跡（61）などがある。

近世遺構が検出されている遺跡は、溝跡2条、井戸跡1基、家屋跡2軒が検出された山神遺跡（8）、露出した地山の凝灰質砂岩層に柱穴と推定される小穴があり、柱穴の配置が小規模な社の遺構と推定される高根社跡(60)、滑川流域左岸では、石切場跡の遺跡として前谷石切場跡(62)・片尻山石切場跡(63)が確認されており、この地域では近世以降に付随する井戸の石材として使用されていた。また、近世遺物が採集されている遺跡は、近世陶磁器小片が採集された新屋敷遺跡（56）などがある。

Ⅲ　遺跡の概要

1　調査の方法

発掘調査の方法は、一辺５ｍのグリッド方式を用いて行い、宮下遺跡全体を網羅できる様に、北東隅を１－１として南へ１・２・３……、西へ１・２・３……とし、東西ラインは東から西へ１－１・１－２・１－３……と呼称した。南北ライン以南も東西ラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剝ぎを行った後、上記グリッド設定を行った。なお、座標は、現地においては世界測地系に基づく基準点測量によったが、報告書においても同地系の座標を使用した。グリッド設定後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘り後、平面図・断面図の実測作業を行った。平面図の実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で１m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後に取り上げを行い、遺構も遺物と同様に必要に応じて全体の写真撮影を行った。最後にすべての作業終了後、調査区全体の空中写真の撮影を行った。

2　検出された遺構と遺物

今回の調査地点は、遺跡範囲の東側にあたり、千代遺跡群の東側の台地上である。

検出された主な遺構は、縄文時代の竪穴住居跡６軒、埋甕５基、円形柱穴列跡１基、奈良・平安時代の竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡１棟、近世の溝跡14条、井戸跡２基、畠跡１か所、縄文～近世の土坑・ピット、時期不明の性格不明遺構４基などが検出された。また、調査区東側には南北に走る谷状地形が確認された。

また、出土遺物は、縄文時代の深鉢・浅鉢・石器・石製品、奈良・平安時代の土師器・須恵器・石製品、中世～近世の陶器・磁器・石製品などが出土した。

縄文時代の竪穴住居跡は、調査区北東部西寄りに５軒と北西部に１軒検出された。出土遺物は撹乱による削平が著しくほとんど検出されなかったが、北西部の１軒から縄文時代後期称名寺式期の土器が出土している。埋甕は、調査区北西部に１基、南西部に１基、中央部に１基、北東隅に２基、それぞれ検出された。各埋甕の時期については、北西部から検出された埋甕は縄文時代後期称名寺式期の土器、南西部の埋甕は縄文時代早期の土器、中央部の埋甕は縄文時代早期の土器、北東隅の埋甕は縄文時代前期諸磯式期の土器と後期堀ノ内式期の土器がそれぞれ埋設されていた。円形柱穴列跡は、調査区南西部において隅丸方形や楕円形の柱穴15基が円形にめぐる形で１基検出された。

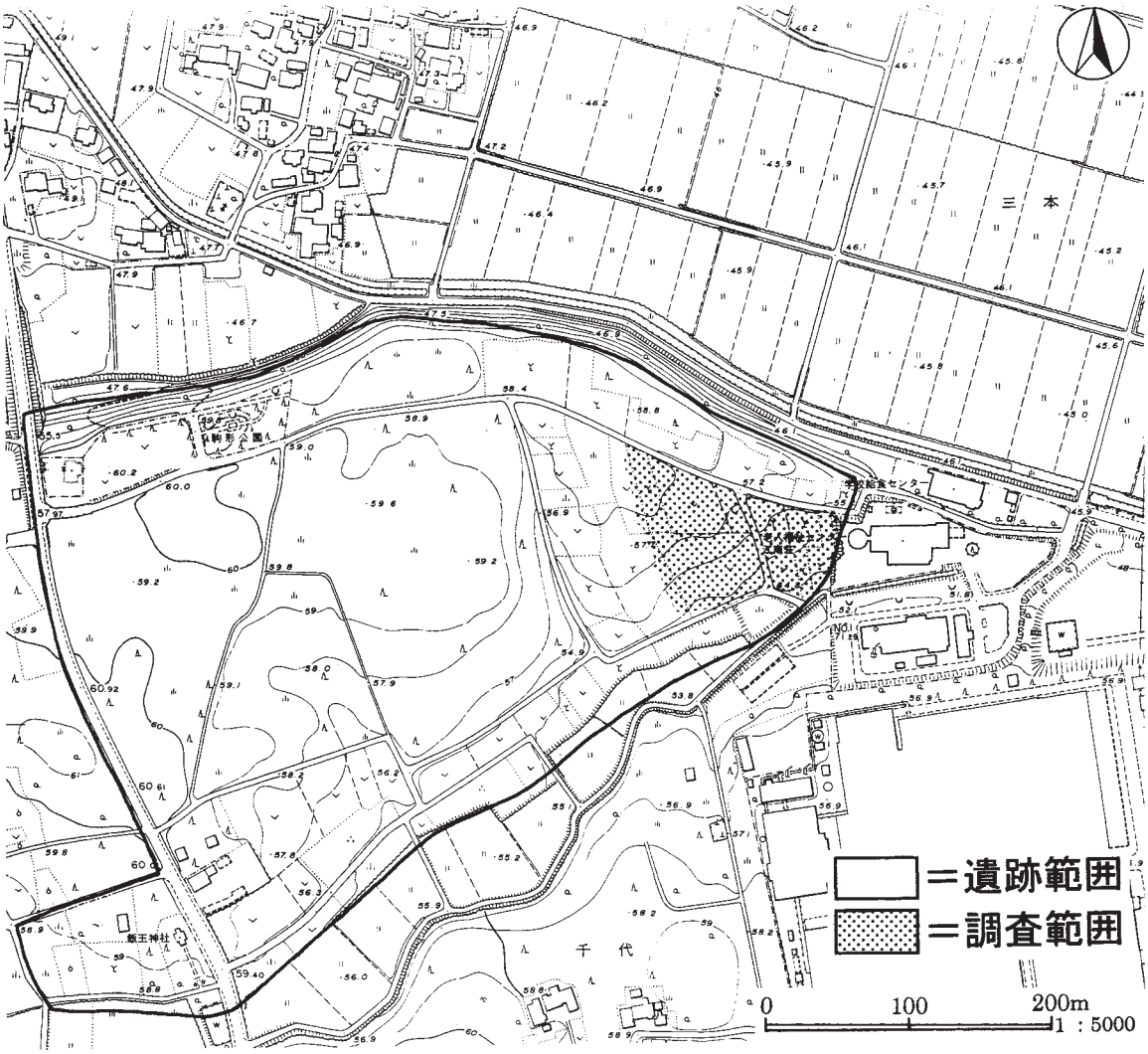
奈良・平安時代の竪穴住居跡は、調査区西端付近に東カマドの住居跡４軒、北カマドの住居跡１軒、調査区等高線55.50～56.00m上に並行して北カマドの住居跡７軒、同等高線上東側にカマド無の住居跡１軒、調査区東端部に東カマドの住居跡２軒が検出された。調査区南西端の第12号住居跡からは鉄製品（鉄鏃・刀子）や石製品（台石・石皿・砥石・磨石）などが出土し、工房的要素（小鍛冶など）が考えられる。また、調査区西端の第12・13・14・15・17・18号住居跡からは墨書土器「蔵」「足刀」他が出土している。掘立柱建物跡は、調査区西側南西端に１棟検出された。桁行３間、梁行２間の側柱式南北棟建物である。建物の構造は、北及び南妻側の中央柱が妻側面から外方向へ0.4mほど外れていて、近接棟持柱建物と考えられる。

近世の溝跡は、調査区東部に２条、西部に12条検出された。調査区西部中央に位置する東西軸走向と南北軸走向を合わせた逆Ｌ字状の第５号溝跡と調査区西部南に位置する南北軸走向のクランク状の第14号溝跡については、本来同一の溝だった考えられる。また、第５号溝跡の東西軸走向の西端は撹乱による消滅のため途絶えてしまっているが、本来は、西に向けさらに延びていったと考えられ、この付近を区画した溝だった可能性がある。井戸跡は、調査区西部の南に１基、中央部西寄りに１基検出された。畠跡は、調査区西部南端に北東―南西走向で１か所検出された。

縄文～近世にかけての土坑は、調査区全体に129基散在して検出された。平面形状は、正方形･長方形･円形・不整円形・楕円形・不整楕円形・不整形などさまざまな形状があった。縄文～近世のピットは、調査区全体に98基検出され、調査区西部に比較的多く散在している。平面形状は、円形・不整円形・楕円形・不整楕円形・不整形が見られた。

時期不明の性格不明遺構は、調査区東部の北に２基、南に２基検出された。

谷状地形は、調査区東部に検出された。北北西から南南東に傾斜する地形に対し、直行して走行し、覆土中からは、縄文早期から後期にかけての土器片が出土している。上面ではこの黒褐色土を掘り込んで平安時代の竪穴住居跡が造られていて、少なくとも、同時期以前には埋没していたものと考えられる。



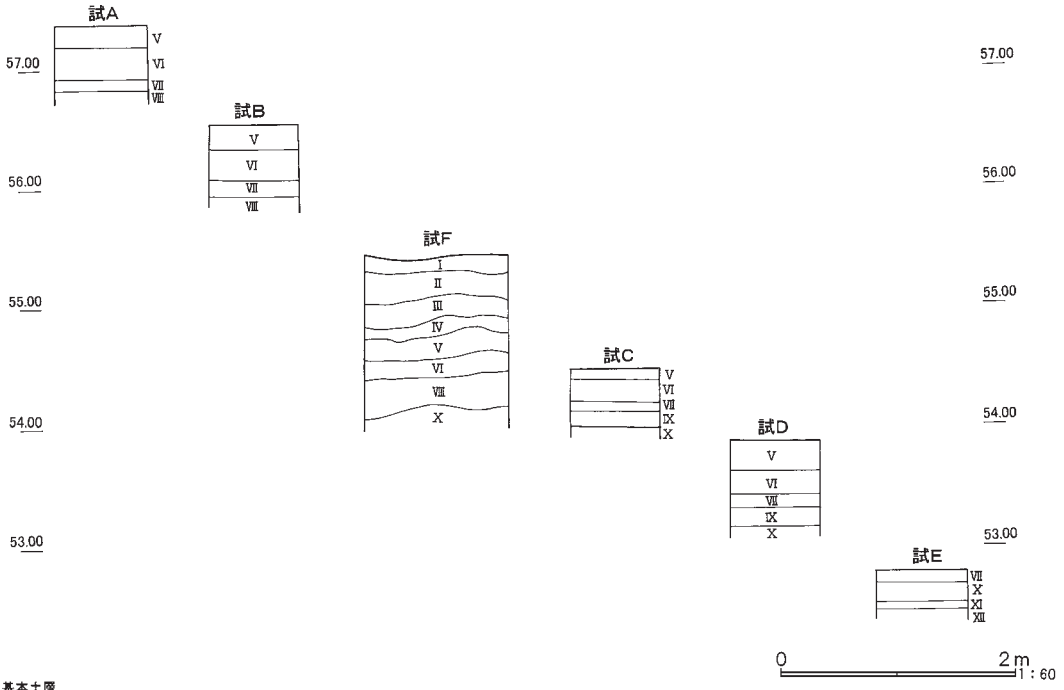
第３図　宮下遺跡調査位置図

3　基本土層

本遺跡は、江南台地北東端縁辺部に立地し、東に向かって尾根状に張り出した台地の先端部に位置する。調査区は尾根の頂部から南東の谷に向かって緩やかに下がる傾斜地となっていて、尾根の頂部に位置する調査区北寄りと、谷部に向かって下がる南東寄りで４ｍほどの高低差がある。地形の高い北寄りの部分では、耕作土直下でハードローム層やソフトローム層となっていて、ソフトローム層から上位の土層が確認できたのは南東の地区であった。本遺跡における基本土層を以下に示した。

Ⅰ・Ⅱ層は表土及び耕作土、Ⅲ層は調査区内の地形が下がった南から南東部で確認された黒褐色土層、Ⅳ層はⅢ層・Ⅴ層間の漸移層的なもので、ロームブロックを含む褐色土層、Ⅴ層はソフトローム層、Ⅵ層はハードローム層、Ⅶ層はソフトローム層、Ⅷ層はマンガン粒を多く含む暗灰黄色土層、Ⅸ層はマンガン粒を含む黄褐色のシルト層、Ⅹ層は灰白色の粘土層、Ⅺ層は調査区の南東端のみで確認された砂層、Ⅻ層は同じく南東端のみで確認された礫層である。谷状地形の堆積土はⅢ層に相当する土層と考えられる。

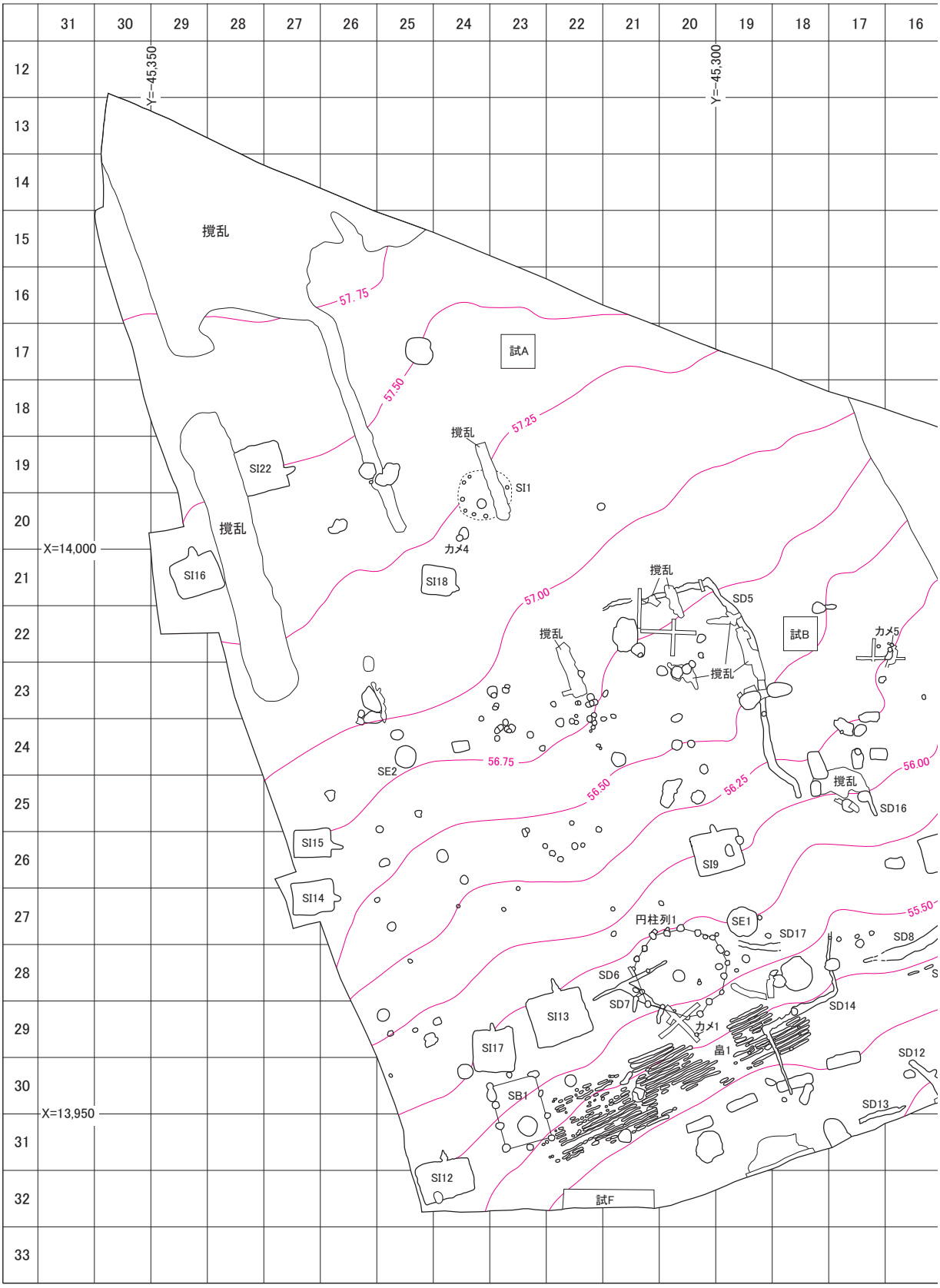
縄文時代の遺構確認はソフトローム層上面で行った。古代以降の遺構は、調査区のほとんどの地区においてソフトローム層上面で確認されているが、谷状地形に埋没するⅢ層相当と考えられる黒褐色土が遺存している地区では、この層の上面で確認されている。



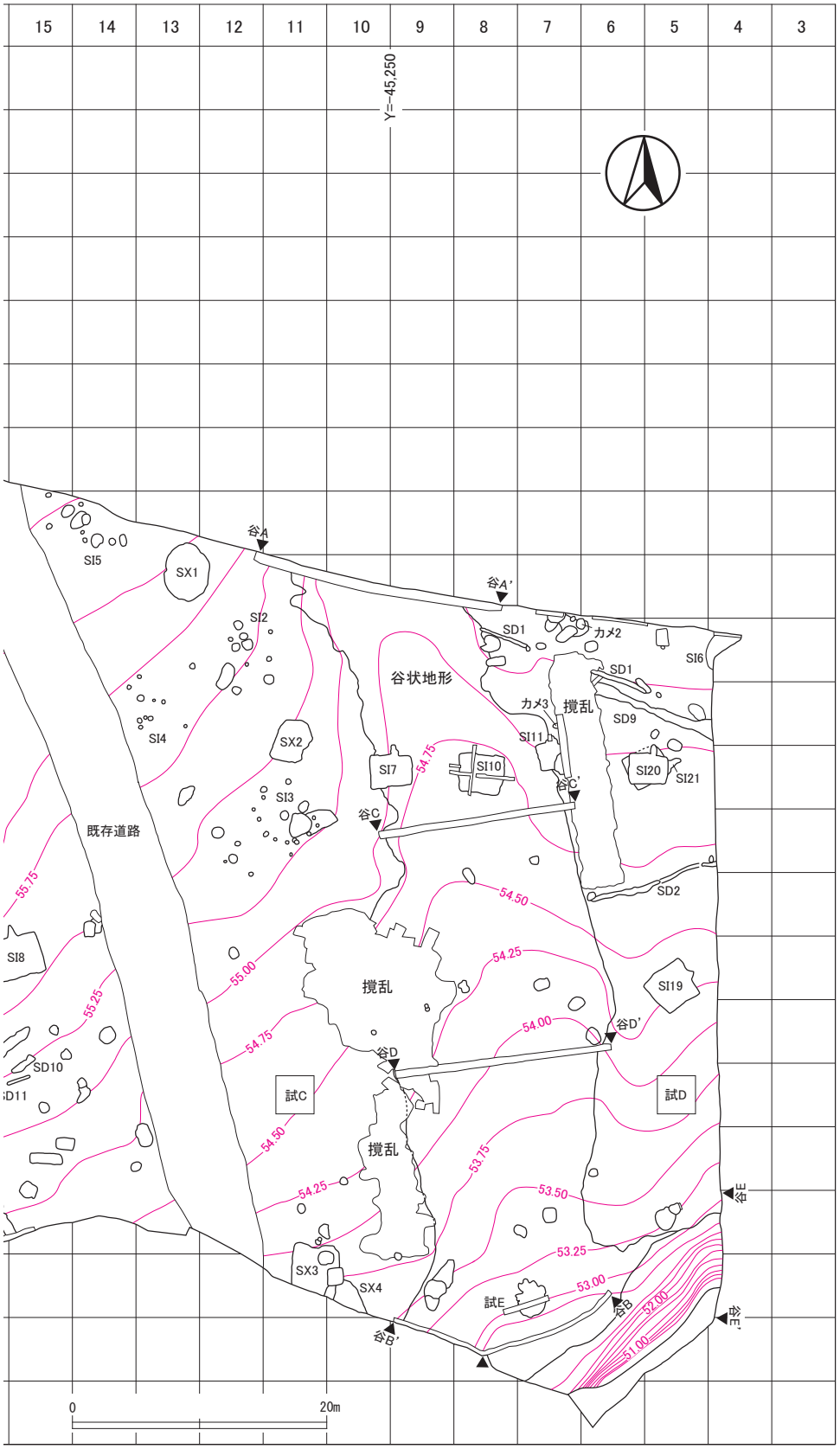
基本土層

Ⅰ　暗褐色土　粘性なし。しまり強。ロームブロック及び粒含む。軽石少量含む。
Ⅱ　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒微量含む。軽石微量含む。
Ⅲ　黒褐色土　粘性なし。しまり普通。にぶい黄褐色土がまだらに混入する。ハードロームブロック少量含む。
Ⅳ　褐色土　粘性なし。しまり弱。にぶい黄褐色土及び黒褐色土が混入。ハードロームブロック多量に含む。ソフトローム粒含む。
Ⅴ　黄褐色土　粘性有り。しまり普通。ソフトローム層。
Ⅵ　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードローム層。
Ⅶ　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり普通。マンガン粒少量。
Ⅷ　暗灰黄色土　粘性有り。しまり強。マンガン粒含む。層下部に多く含む傾向有り。
Ⅸ　にぶい黄褐色土　マンガン粒を多く含む。場所によっては酸化により明黄色を呈する。
Ⅹ　灰白色土　粘性強。しまり強。明橙色土が混じる。粘土層。
Ⅺ　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり普通。微砂を多量に含む。
Ⅻ　にぶい黄褐色土　粘性弱。しまり普通。小礫層。シルト粒を含む。

第４図　基本土層


31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
Y=−45,350
Y=−45,300
X=14,000
X=13,950
57.75
57.50
57.25
57.00
56.75
56.50
56.25
56.00
55.50
撹乱
試A
試B
試F
SI1
SI12
SI13
SI14
SI15
SI16
SI17
SI18
SI22
SB1
SE1
SE2
SD5
SD6
SD7
SD8
SD12
SD13
SD14
SD16
SD17
カメ1
カメ4
カメ5
円柱列1
畠1

第５図　宮下遺跡全測図


15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
Y=−45,250
谷A
谷A'
SI5
SX1
SI2
SI4
SX2
SI3
既存道路
SI8
SD10
SD11
谷状地形
SD1
カメ2
SI6
SD1
カメ3
撹乱
SD9
SI11
SI7
SI10
SI20
SI21
谷C'
谷C
SD2
撹乱
SI19
谷D'
谷D
試C
試D
撹乱
SX3
SX4
試E
谷B
谷B'
谷E
谷E'
55.75
55.25
55.00
54.75
54.50
54.25
54.00
53.75
53.50
53.25
53.00
52.00
51.00
0
20m

Ⅳ　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

第１号住居跡（第６・７図、第１表）

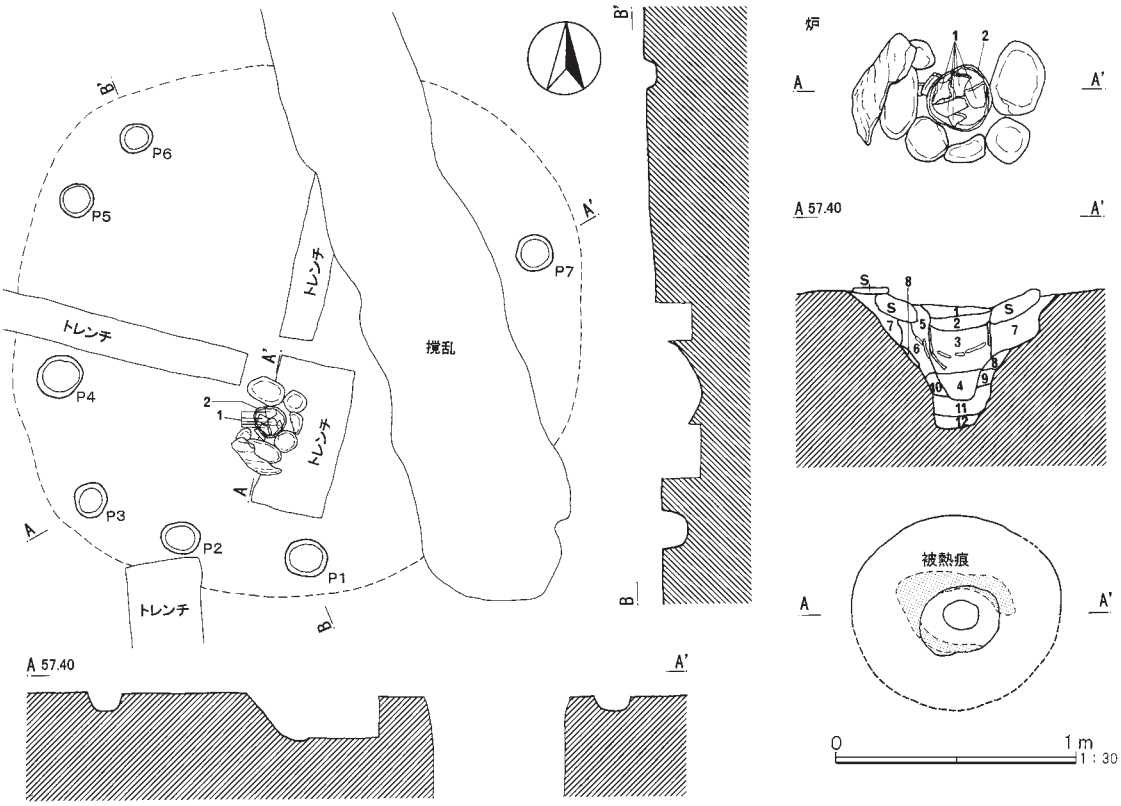
［位　　置］　23・24―19・20グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　炉の検出をもって住居跡と確認されたため、平面プランは確認できなかった。

［　床　］　炉が検出されたレベルから床面を想定したが、特に硬化した状況はなく、明瞭には確認できなかった。

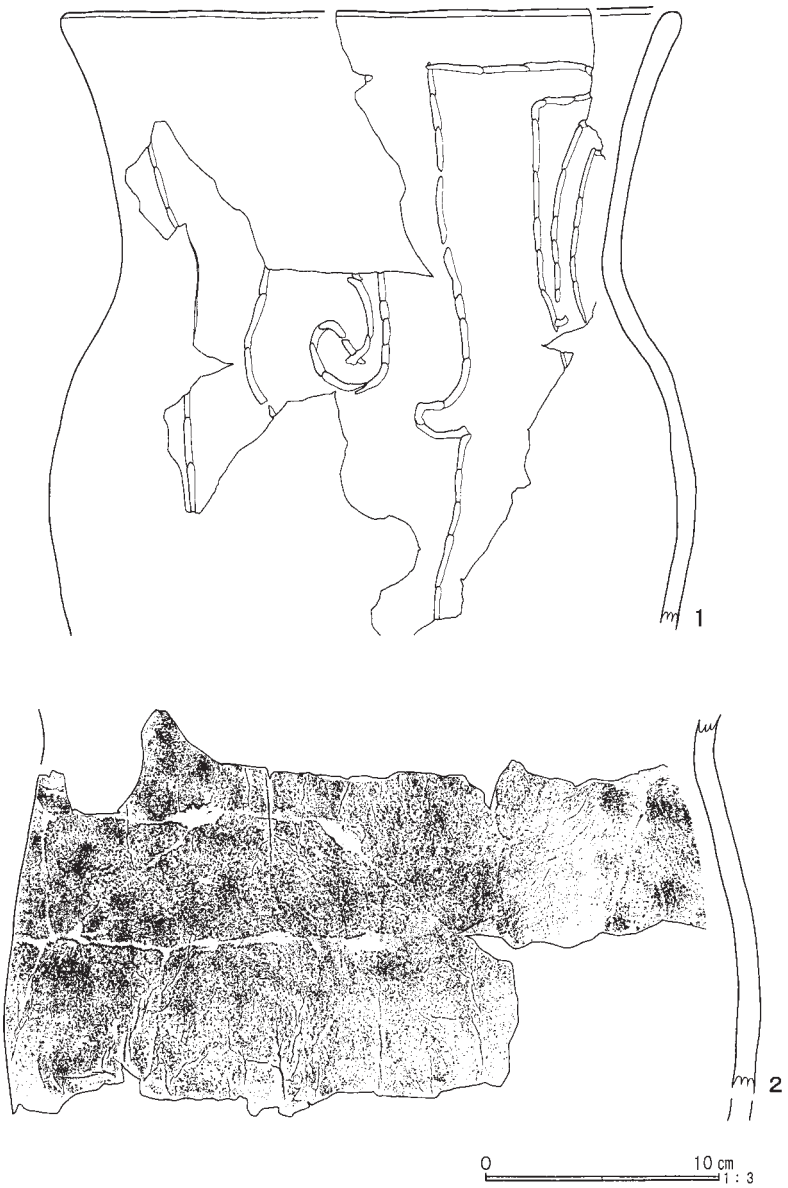
［　炉　］　６個の河原石や片岩を用いた石囲炉である。石は３辺に巡らされ、西辺の一部では検出されていない。中央には口縁部及び底部を欠いた土器が埋設されている。土器下方の覆土には焼土粒や炭化物粒が多量に含まれている。掘り方は、平面形が直径0.88ｍ、深さ0.58mの楕円形、断面形は円錐形で、埋設土器や上面に配置された河原石より一回り大きく掘られている。埋設土器の周辺部および下位部分は、にぶい暗灰黄褐土や灰黄褐色土によって埋められている。掘り方の中位周辺で、被熱による焼土化が顕著にみられる。



SI1（A―A'）

1	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒多量に含む。
2	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒多く含む。
3	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒多く含み、焼土粒を微量含む。
4	黒褐色土	焼土粒及び炭化物粒多量。ソフトローム粒少量含む。
5	褐色土	粘性有り。しまり強。ローム主体。暗褐色土をやや多く含む。
6	黒褐色土	しまり弱。ソフトローム粒ごくわずか。焼土粒わずかに含む。
7	暗灰黄色土	ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。炭化物粒、焼土粒わずかに含む。
8	明赤褐色土	被熱層。
9		焼土ブロック
10	黄灰色土	しまり強。ソフトローム粒わずか。
11	黒色土	炭化物を非常に多く含む。灰黄褐色土粒わずかに含む。
12	灰黄褐色土	ソフトローム粒及びブロック少量含む。

第６図　第１号住居跡・炉跡



第７図　第１号住居跡出土遺物

第１表　第１号住居跡出土遺物観察表（第７図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	縄文土器深鉢	(26.0)	(26.0)	—	ABGMN	にぶい橙色	A	口～胴部片	称名寺式（後期）
2	縄文土器深鉢	—	(15.3)	—	ABGHN	橙色	A	胴部片	称名寺式（後期）

［壁　周　溝］　検出されていない。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　７基検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は直径0.26mの円形で深さ0.10m、Ｐ２は0.32×0.28mの楕円形で深さ0.11m、Ｐ３は0.36×0.30mの楕円形で深さ0.18m、Ｐ４は0.32×0.24mの楕円形で深さ0.19m、Ｐ５は0.29×0.26mの楕円形で深さ0.12m、Ｐ６は直径0.35mの円形で深さ0.14m、Ｐ７は直径0.28mの円形で深さ0.11mである。

［出 土 遺 物］　炉の埋設土器及びその内部から出土している。それ以外からの出土はなかった。２は炉帯土器、１はその内部から出土している。

［時　　期］　出土遺物から縄文時代後期称名寺式期と考えられる。

第２号住居跡（第８図）

［位　　置］　11・12―21グリッドに位置する。

［重　　複］　炉の可能性がある掘り込みが２基検出されていて、２軒が重複している可能もあるが、削平を受けていることもあり、詳細は捉えきれなかった。

［平面形・規模］　炉の検出をもって住居跡と確認されたため、平面プランは確認できなかった。

［　　床　　］　検出されていない。削平により消失したと考えられる。

［　　炉　　］　Ｐ５・Ｐ６は側壁で被熱による焼土化が認められ、炉の可能性が高い。Ｐ６は0.37ｍ、短軸0.29ｍの楕円形で、確認面からの深さは0.09ｍである。明黄褐色土が堆積し、焼土粒が大量に含まれる。側壁前面に被熱による焼土化が認められる。底面は凹凸があり、側壁は開いて立ち上がっている。Ｐ５は、0.64×0.53ｍの楕円形で深さ0.20ｍで黄褐色土や明黄褐色土が堆積する。

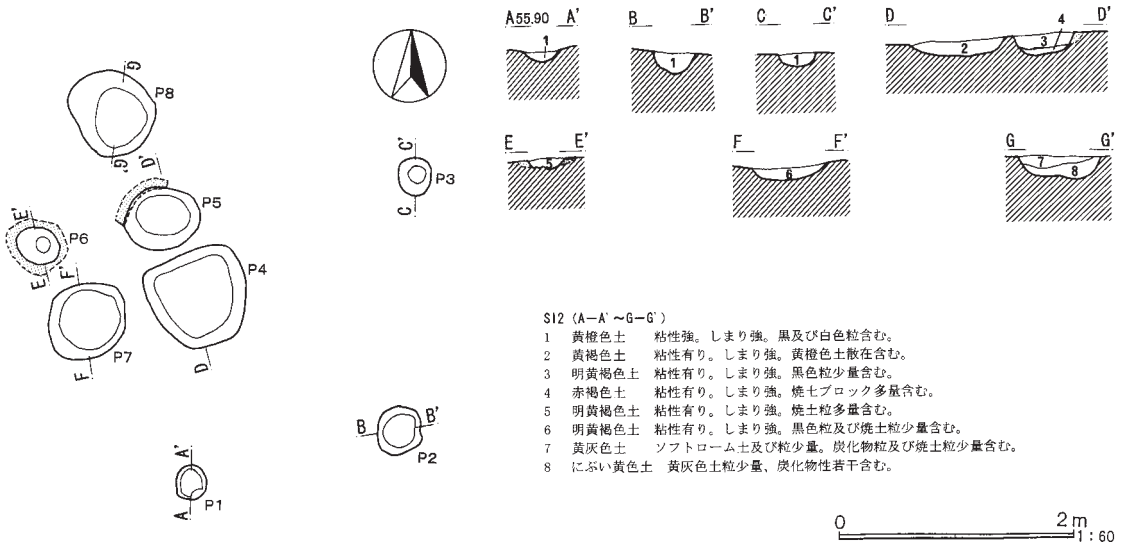
［壁　周　溝］　検出されていない。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　炉の可能性があるＰ５・６を除いて６基が検出されている。断面形はいずれも浅いＵ字状で、Ｐ７・８は覆土中に焼土粒が含まれる。それぞれの規模は、Ｐ１は0.28×0.26ｍの楕円形で深さ0.11ｍ、Ｐ２は0.42×0.39ｍの不整円形で深さ0.21ｍ、Ｐ３は0.32×0.27ｍの楕円形で深さ0.11ｍ、Ｐ４は南北軸0.80ｍ、東西軸は北辺0.70ｍ、南辺0.35ｍの台形で深さ0.21ｍ、Ｐ７は0.73×0.63ｍの不整楕円形で深さ0.15ｍ、Ｐ８は0.74×0.66ｍの不整楕円形で深さ0.19ｍである。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、覆土の様子から縄文時代に属すると考えられる。



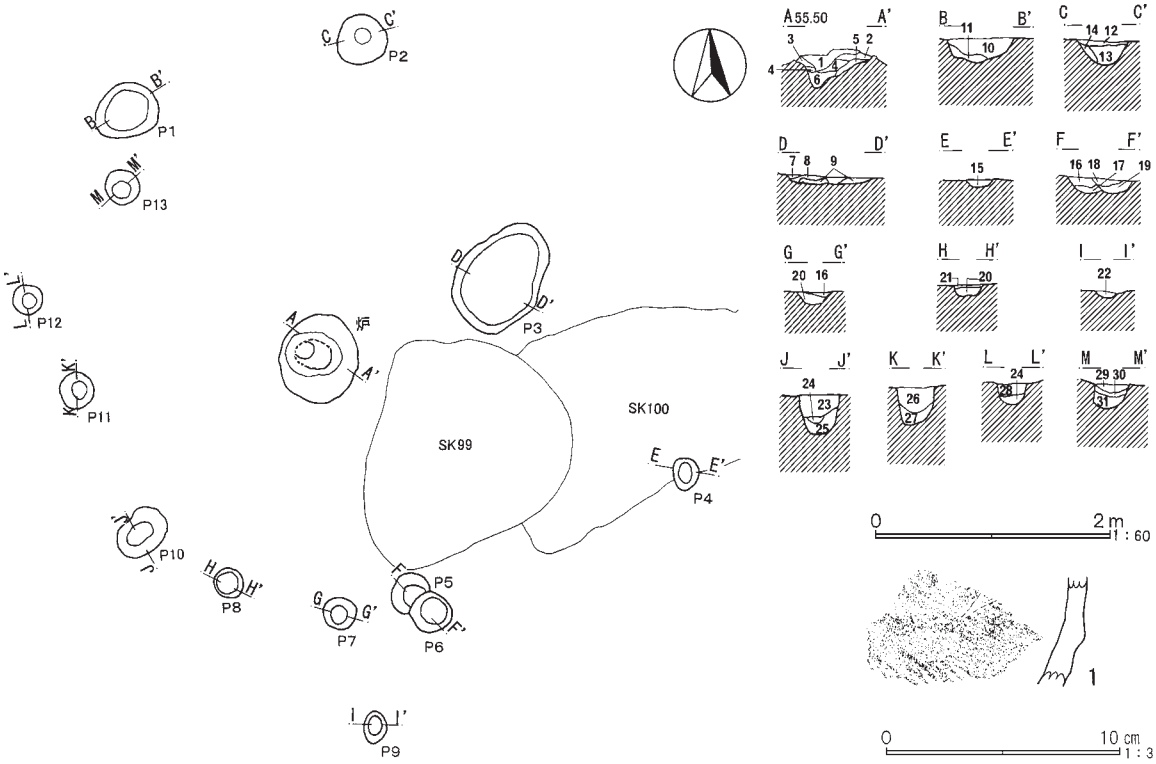
第８図　第２号住居跡

第３号住居跡（第９図、第２表）

［位　　置］　11・12―23・24グリッドに位置する。

［重　　複］　第100号土坑と重複し、本遺構が新しい。断定はできないが、Ｐ３としたものが炉の可能性もあり、また、ピットの切り合いがあることから、２軒が重複している可能もある。各ピットの覆土の様子や配置状況から、「炉」としたものに伴うものとしてＰ４、Ｐ６～Ｐ12が考えられ、「Ｐ３」を炉と考えた場合、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ５、Ｐ13がこれに伴うものと考えられる。

［平面形・規模］　炉の検出をもって住居跡と確認されたため、平面プランは確認できなかった。



SI3（A―A′～M―M′）
1　オリーブ褐色土　ソフトローム粒わずか。炭化物粒及び焼土粒若干。火山灰若干含む。
2　褐灰色土　炭化物塊、焼土粒少量含む。火山灰若干含む。
3　にぶい黄褐色土　焼土塊、炭化物塊が多く占める。
4　灰黄褐色土　ソフトロームブロック、焼土塊含む。
5　暗灰褐色土　粘性弱。炭化物粒ごくわずかに含む。
6　灰オリーブ色土　ソフトロームブロックわずか。炭化物粒わずかに含む。
7　にぶい黄色土　火山灰若干。明灰黄色土粒わずかに含む。
8　暗灰黄色土　ソフトローム粒わずかに含む。
9　明黄褐色土　ブロック層。
10　黄褐色土　黒褐色土粒少量。ソフトローム粒若干。火山灰多量に含む。
11　灰オリーブ色土　黒褐色土ブロック多量。ソフトロームブロック少量。マンガン粒わずかに含む。
12　にぶい黄色土　ソフトローム粒含む。
13　黄褐色土　黒褐色土ブロック少量。マンガン粒若干。火山灰若干含む。
14　にぶい黄色土　マンガン粒わずかに含む。
15　灰オリーブ色土　ソフトロームブロック含む。
16　にぶい黄色土　火山灰若干。ソフトローム粒若干。黒褐色土粒若干含む。
17　黄褐色土　ソフトローム粒若干。黒褐色土粒若干含む。
18　灰オリーブ色土　ソフトローム微粒子若干含む。
19　暗灰黄色土　ソフトローム粒少量。黒褐色土粒若干含む。
20　黄褐色土　ソフトローム粒若干。黒褐色土粒若干含む。
21　にぶい黄色土　火山灰若干。ソフトローム粒若干。黒褐色土粒若干含む。
22　黄褐色土　ハードロームブロック及びソフトローム粒少量含む。
23　灰オリーブ色土　ソフトローム粒及び微粒子少量。火山灰若干。炭化物粒わずかに含む。
24　灰オリーブ色土　黒色土ブロック。ソフトローム粒若干含む。
25　暗灰黄色土　ソフトローム粒及びハードロームブロック少量。黒色土粒若干含む。
26　灰オリーブ色土　ソフトローム粒及び微粒子少量。火山灰若干。炭化物粒わずかに含む。
27　暗灰黄色土　ソフトローム粒及びハードロームブロック少量。黒色土粒若干含む。
28　灰オリーブ色土　ソフトローム粒及び微粒子少量。火山灰若干。炭化物粒わずかに含む。
29　黄褐色土　火山灰多量。焼土粒わずかに含む。
30　にぶい黄色土　火山灰多量に含む。
31　灰オリーブ色土　黒褐色土粒若干。ソフトロームブロックわずかに含む。

第９図　第３号住居跡・出土遺物

第２表　第３号住居跡出土遺物観察表（第９図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	縄文土器深鉢	―	―	―	ABIM	明褐色土	A	胴部片	条痕文系。

［　　床　　］　検出されていない。削平により消失したと考えられる。

［　　炉　　］　覆土中に焼土や炭化物を含む掘り込みが検出されている。断面形は擂鉢状で、掘り込みの北西寄りが深くなっている。長軸0.76m、短軸0.66mの楕円形で、確認面からの深さは0.27mである。Ｐ３としたものは最下層でわずかながら被熱した様子がみられ、地床炉の可能性もある。長軸0.94m、短軸0.72mの楕円形で、確認面からの深さは0.09mである。

［壁　周　溝］　検出されていない。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　炉の可能性があるＰ３を除いて12基が検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.54×0.45mの楕円形で深さ0.21m、Ｐ２は直径0.28mの円形で深さ0.22m、Ｐ４は0.27×0.20mの楕円形で深さ0.06m、Ｐ５はＰ６に切られ全容は不明だが、確認できた北東―南西軸の長さで0.35m、深さ0.07mである。Ｐ６は一辺0.33mの隅丸方形で深さ0.17m、Ｐ７は直径0.26mの円形で深さ0.11m、Ｐ８は直径0.24mの円形で深さ0.10m、Ｐ９は0.27×0.19mの楕円形で深さ0.06m、Ｐ10は0.45×0.37mの楕円形で深さ0.33m、Ｐ11は0.32×0.28mの楕円形で深さ0.30m、Ｐ12は直径0.26mの円形で深さ0.18m、Ｐ13は直径0.28mの楕円形で深さ0.20mである。

［出 土 遺 物］　Ｐ２から縄文土器（条痕文系）が１点（１）出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ縄文時代早期と考えられる。

第４号住居跡（第10図）

［位　　置］　13・14―21・22グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　炉の検出をもって住居跡と確認されたため、平面プランは確認できなかった。

［　　床　　］　検出されていない。削平により消失したと考えられる。

［　　炉　　］　長軸0.55m、短軸0.50mの楕円形で深さは0.10mの地床炉である。覆土中には焼土や炭化物が含まれている。

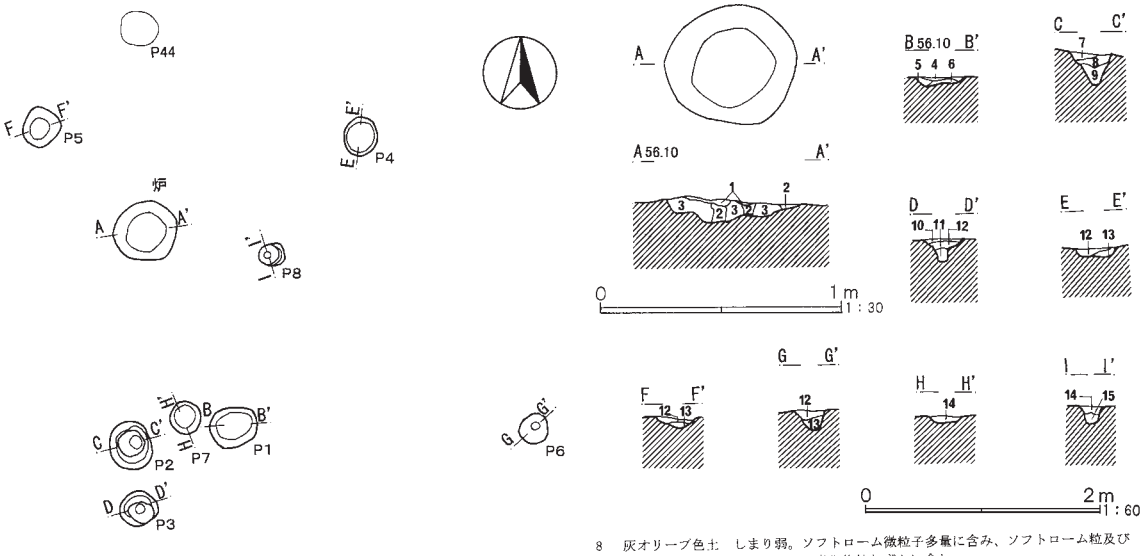
［壁　周　溝］　検出されていない。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　８基検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.40×0.32mの楕円形で深さ0.08m、Ｐ２は0.41×0.32mの楕円形で深さ0.28m、Ｐ３は0.29×0.2mの隅丸方形で断面形はロート状で、深さ最深部では0.18mである。Ｐ４は0.33×0.26mの楕円形で深さ0.09m、Ｐ５は北東―南西軸0.32m、北西―南東軸は北東辺0.29m、南西辺0.19mの台形で深さ0.10m、Ｐ６は直径0.25mの円形で深さ0.16m、Ｐ７は直径0.26mの円形で深さ0.06m、Ｐ８は0.22×0.18mの隅丸方形で深さ0.15mである。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。。

［時　　期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、覆土の様子から縄文時代に属すると考えられる。



SI4（A—A'～I—I'）
1　明褐色土　焼土ブロック含む層。
2　にぶい黄色土　火山灰ごくわずか、焼土粒わずかに含む。
3　灰オリーブ色土　火山灰ごくわずか、焼土粒わずかに含む。
4　黄灰色土　火山灰わずか、炭化物粒多量、ソフトローム粒若干含む。
5　灰オリーブ色土　黄灰色土粒少量含む。
6　にぶい黄色土　炭化物粒わずかに含む。
7　灰オリーブ色土　ハードローム化したソフトローム粒多量、軽石粒多量に含む。
8　灰オリーブ色土　しまり弱。ソフトローム微粒子多量に含み、ソフトローム粒及び黄灰色土粒、炭化物粒わずかに含む。
9　暗灰黄色土　ソフトローム微粒子多量に含む、木質腐蝕片含む。
10　黄灰色土　ソフトロームブロック及び粒多量に含む。
11　灰オリーブ色土　ソフトロームブロック少量、ソフトローム粒若干含む。
12　黄灰色土
13　暗灰黄色土　黄灰色土粒極わずか含む。
14　暗灰黄色土　ソフトローム粒及び微粒子多量に含む。炭化物粒若干。
15　暗灰黄色土　ソフトローム混じり。

第10図　第４号住居跡

第５号住居跡（第11図）

［位　　置］　14・15—19グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　炉の検出をもって住居跡と確認されたため、平面プランは確認できなかった。

［　　床　　］　検出されていない。削平により消失したと考えられる。

［　　炉　　］　長軸0.44m、短軸0.38mの隅丸方形で、深さは0.14mの地床炉である。覆土上面で被熱による焼土化が認められ、最下層には炭化物が含まれている。

［壁　周　溝］　検出されていない。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　４基検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は直径0.30mの円形で深さ0.15m、Ｐ２は0.41×0.34mの楕円形で深さ0.13m、Ｐ３は0.28mの円形で深さ0.19m、Ｐ４は0.37×0.32mの楕円形で深さ0.16mである。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、覆土の様子から縄文時代に属すると考えられる。

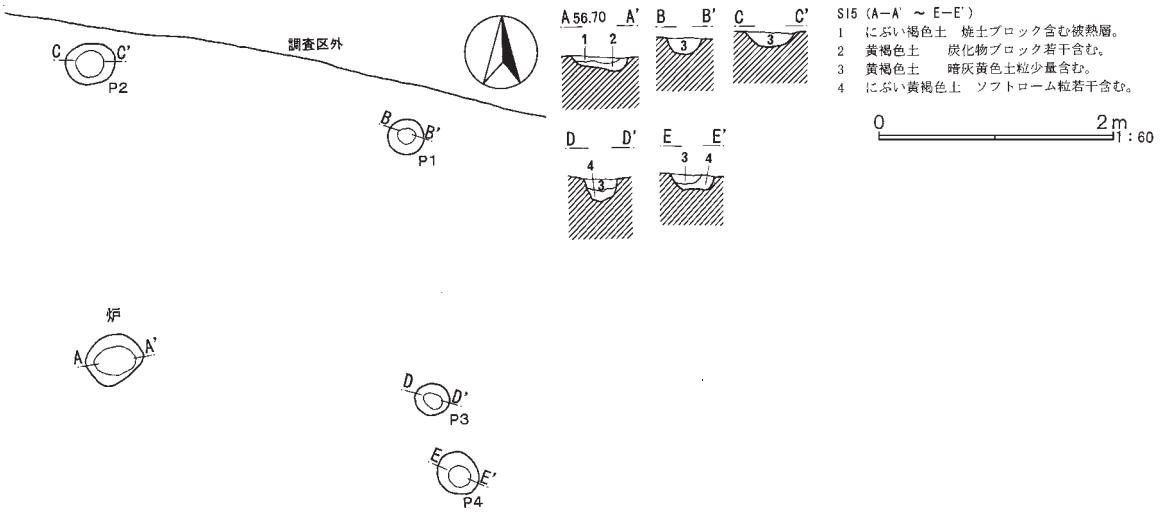
第６号住居跡（第12図）

［位　　置］　４—21グリッドに位置する。

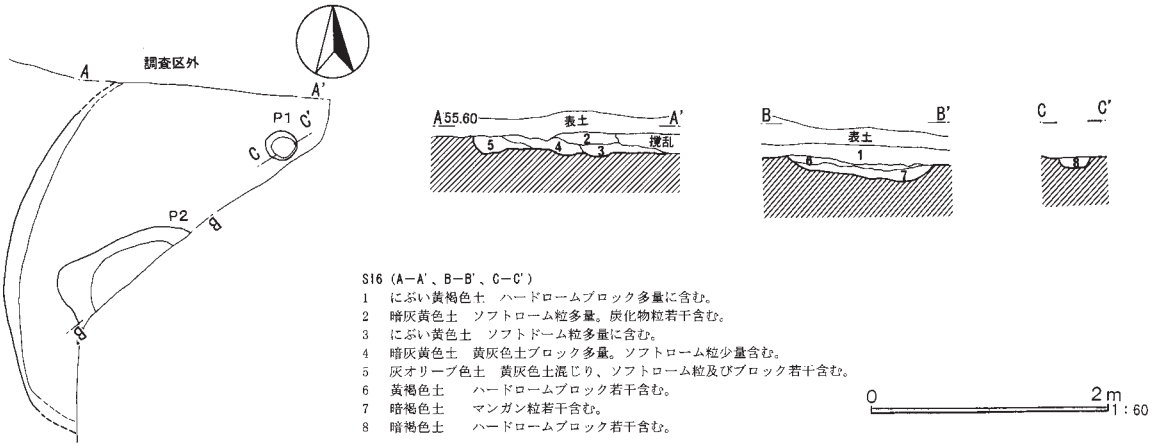
［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　北側と南東側が調査区域外となり、調査できた範囲はわずかである。平面形は円形と推測される。

［　　床　　］　床面は地山を直接床とし、ほぼ平坦であるが、北西から南東へ向かってわずかに下



第11図 第５号住居跡



第12図 第６号住居跡

がっている。

［覆　　土］ にぶい黄褐色土や暗褐色土灰黄色を主体とし、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［壁　周　溝］ 検出されていない。

［貯　蔵　穴］ 検出されていない。

［ピ　ッ　ト］ ２基検出されているが、Ｐ２としたものはやや規模の大きい不整形な土坑状の掘り込みである。Ｐ１は北東寄り、Ｐ２はやや南寄りに検出されている。Ｐ２は南東側が調査区域外となり全容は不明である。それぞれの規模は、Ｐ１は直径0.27mの円形で深さは0.08m、Ｐ２は確認できた範囲で北東―南東軸1.21m、深さは0.22mである。

［出 土 遺 物］ 本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。。

［時　　期］ 出土遺物がなく詳細は不明であるが、覆土の様子から縄文時代に属すると考えられる。

第７号住居跡（第13図、第３表）

［位　　置］　９・10―23グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　西辺が東辺より長い台形を呈し、主軸方向が短軸となる。主軸方向はＮ－３°―Ｗを示す。調査区東部の南北状に延びる谷状地形の北西際に造られている。規模は北辺で3.20m、南辺で3.00m、西辺で2.55m、東辺で2.20mである。残存壁高は最も深いところで0.27mである。

［　床　］　床面は起伏があるもののほぼ平坦である。カマド前面の周辺では、焚き口向かって次第に下がっている。

［覆　　土］　ローム粒やロームブロックを含む暗褐色土を主体とし、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　北壁中央東寄りに造られている。主軸方向はＮ－９°―Ｗである。奥行きは0.85mで内0.65mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.65mである。袖部はわずかに地山が取り残されている。奥壁部は一部撹乱により欠損している。燃焼部は次第に下がって深くなり、床面から0.10mほどの高低差がある。底面は平坦で、奥壁に向かって緩い上がり傾斜となっている。奥壁は約30°の角度で立ち上がっている。火床面は確認されなかったが、底面南寄りのところで焼土ブロック・焼土粒・炭化物を多量に含む暗褐色・黒褐色土が堆積している。

［壁　周　溝］　西壁の一部に検出されている。幅0.15m～0.20mである。

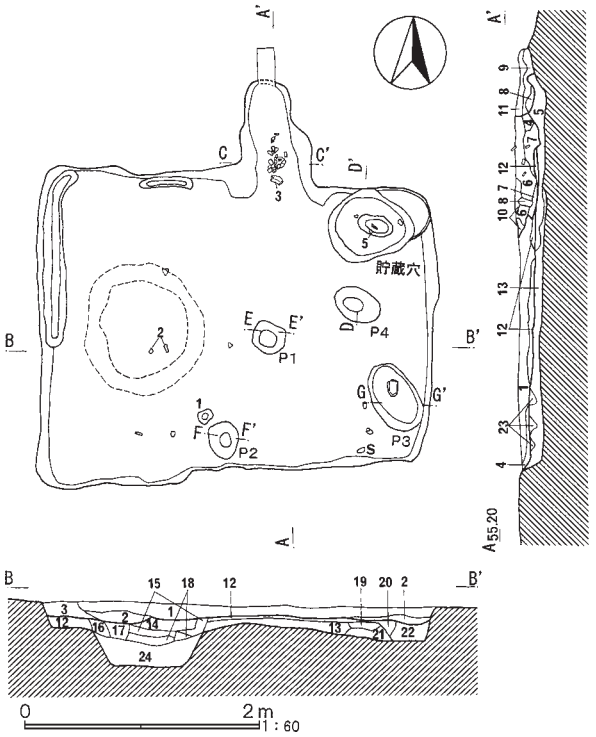
［貯　蔵　穴］　貯蔵穴と想定される掘り込みがカマド東側から検出されている。長軸0.65×短軸0.6mの楕円形で、床面からの深さは0.20mである。

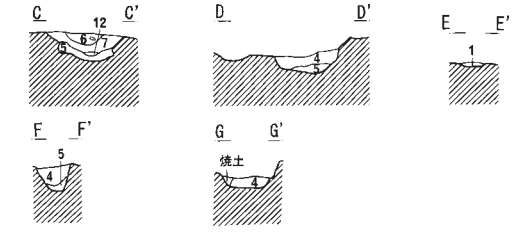
［ピ　ッ　ト］　４基検出されている。Ｐ１は中央、Ｐ２は南壁際の中央やや西寄り、Ｐ３は東壁際南寄り、Ｐ４は東寄り中央部に検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.28×0.25mの楕円形で深さ0.03m、Ｐ２は0.30×0.23mの楕円形で深さ0.20m、Ｐ３は0.61×0.38mの楕円形で深さ0.10m、Ｐ４は0.40×0.27mの楕円形で深さ0.10mである。Ｐ３の覆土中からは一部焼土が検出されている。柱穴と想定されるピットは検出できなかった。

［掘　り　方］　中央部ではローム粒と黒褐色土を、0.03～0.05mの厚さで版築状に突き固められた貼床が構築されていて、部分的に検出している。貼床を除去した後の底面は、カマド前面から南壁寄りにかけては平坦で、周辺部に対して高くなっている。この部分を除いた西及び東側では、深いところで床面から0.15mほど下がっている。西側には土坑状の掘り込みが検出されている。規模は長軸1.10m、短軸1.00mの楕円形で、掘り方周辺部からの深さは0.25mである。

［出 土 遺 物］　全体的に少量ではあるが、散在して出土している。須恵器坏１点（１）、須恵器長頸瓶１点（２）、土師器台付甕２点（３・４）、土錘１点（５）、流れ込みと考えられる縄文土器深鉢１点（６）を図示した。１は南壁際中央寄り、２は床面西寄り、３はカマド前面、５は貯蔵穴、４・６は覆土中から出土している。

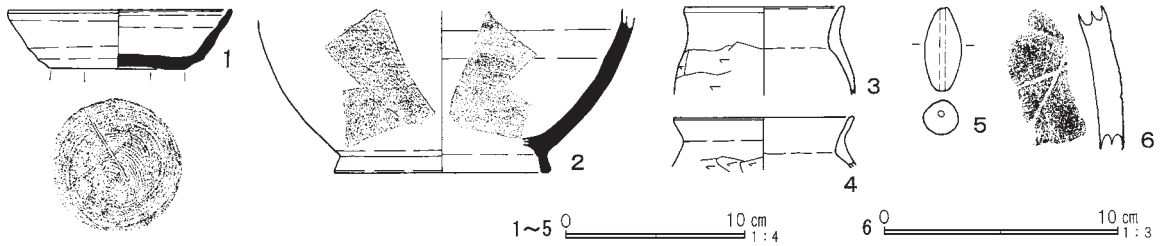
［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀後半～９世紀前半と考えられる。





SI7（A－A'～G－G'）

1	暗褐色土	粘性有り。しまり強。にぶい黄褐色土ブロック多量含む。
2	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。
3	暗褐色土	粘性有り。しまり普通。ハードロームブロック多量含む。
4	黒褐色土	しまり強。ハードロームブロック多量含む。
5	黄橙色土	粘性有り。黒褐色土ブロック多量含む。
6	暗褐色土	しまり強。焼土ブロック及び粒多量含む。炭化粒多量含む。
7	黒褐色土	しまり強。焼土ブロック及び粒、炭化粒を多量含む。
8	残黄橙色土	砂質状。ハードロームブロック含む。（カクラン）
9	暗褐色土	粘性有り。（カクラン）
10	灰黄褐色土	粘性有り。白色粒少量含む。
11	暗褐色土	粘性弱。焼土粒及び白色粒少量含む。（カクラン）
12	黄橙色土	しまり強。黒褐色土散在。白色粒少量含む。部分的砂質土含む。
13	明黄褐色土	しまり強。黒褐色土散在。黒色粒少量含む。
14	地山層	黒色マンガン散在。
15	黒色土	粘性弱。しまり強。明黄褐色土散在。白色粒少量含む。
16	明黄褐色土	粘性強。しまり強。黒褐色土少量含む。黒色粒少量含む。
17	黒褐色土	粘性強。しまり強。明黄褐色土散在含む。白色粒少量含む。
18	明黄褐色土	粘性強。しまり強。黒褐色土散在含む。
19	黄橙色土	粘性なし。しまり弱。明赤褐色土散在含む。黒及び白色粒少量含む。焼土粒少量含む。
20	黄褐色土	黒色マンガン少量含む。
21	明黄褐色土	黒色マンガン少量含む。
22	暗褐色土	粘性有り。
23	黄色土	しまり強。白色粒少量含む。
24	黄橙色土	しまり強。焼土ブロック及び粒、炭化粒を多量含む。



第13図　第７号住居跡・出土遺物

第３表　第７号住居跡出土遺物観察表（第13図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器坏	12.3	3.3	7.5	AFN	褐灰色	A	90%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面に「×」ヘラ記号、南比企産。
2	須恵器長頸瓶	—	(9.0)	高台径(12.0)	ABIMN	外：黄灰 内：にぶい黄褐	A	胴～底30%	南比企産。
3	土師器台付甕	(8.8)	(4.9)	—	ABDEHIM	にぶい橙色	A	口～頸25%	胴部上端横位ヘラケズリ。
4	土師器台付甕	(10.0)	(2.8)	—	ABIM	にぶい褐色	A	口～頸部片	頸部下端横位ヘラケズリ。
5	土錘	長4.7	幅2.0	孔0.4	ABEJM	橙色	A	100%	
6	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJM	にぶい橙色	A	胴部片	沈線文。

第８号住居跡（第14・15図、第４表）

［位　　置］　15・16―25・26グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　主軸方向が短軸となる長方形である。主軸方向はＮ―15°―Ｗを示す。北西から南東へ緩い傾斜で下がる地形に造られている。規模は長軸4.35m、短軸3.30mで、最も遺存の良い北東での残存壁高は0.21mである。

［　床　］　床面はやや起伏があるもののほぼ平坦である。カマド前面の周辺では、焚口に向かって次第に下がっている。中央から南壁寄りにかけての部分が、かなり硬く締まっている。

［覆　　土］　ローム粒や焼土粒を含む灰黄褐色土を主体とし、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　北壁中央やや東寄りに造られている。奥行きは1.51mで内0.94mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.72mである。袖部はわずかに地山が掘り残されている。燃焼部は次第に下がって深くなり、床面から0.19mほどの高低差がある。底面は丸みを持ち、奥壁に向かって緩い上がり傾斜となっている。奥壁は約39°の角度で立ち上がっている。先端部にはわずかながら平坦に延びる面が確認されていて、この部分が煙道部の痕跡と考えられる。火床面は確認されなかったが、底面南寄りのところで焼土粒・炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積している。

［壁　周　溝］　北壁のカマドから西の一部と東側除いて検出されているが、東壁の北半では断続している。南壁と東壁の南寄りでは、壁面からやや離れた位置を巡っている。規模は幅0.09～0.27m、深さ0.08～0.10mである。

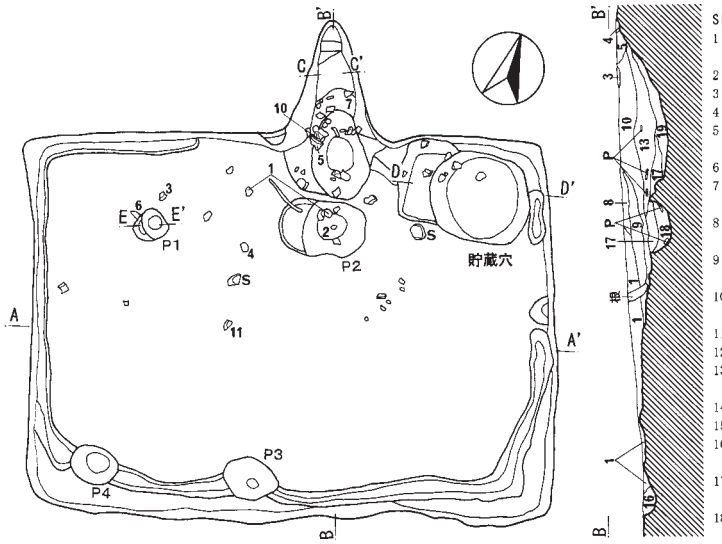
［貯　蔵　穴］　貯蔵穴と想定される掘り込みがカマド東側から検出されている。直径0.85mの円形で、床面からの深さは0.38mである。また、カマド側には幅0.70mの張り出しがあり、カマド側から次第に傾斜して下り、貯蔵穴に接続している。

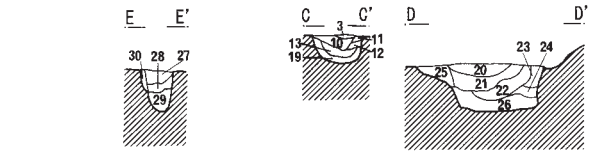
［ピ　ッ　ト］　４基検出されている。Ｐ１は北西角寄り、Ｐ２はカマド前面、Ｐ３は南壁際の中央やや西寄り、Ｐ４は南西角際から壁周溝を切るように検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.30×0.26mの楕円形で、南東側に中段があり最も深いところで深さは0.35mである。Ｐ２は西側にテラス状に中段があり、これを含めた規模は0.70×0.47mの楕円形で深さ0.20mである。Ｐ３は0.48×0.34mの楕円形で深さ0.26m、Ｐ４は0.40×0.31mの楕円形で深さ0.11mである。Ｐ１は、柱穴の可能性がある。

［掘　り　方］　中央部ではローム粒と黒褐色土を、0.03～0.05mの厚さで版築状に突き固めて貼床を構築している。貼床を除去した後の底面は、カマド前面から南壁寄りにかけては平坦で、周辺部に対して高くなっている。この部分を除いた西及び東側では、深いところで床面から0.21mほど下がっていて底面は起伏がり、黒褐色土粒を含んだにぶい黄褐色土が充填されている。北西寄りには土坑状の掘り込みが検出されている。規模は1.20m、短軸1.16mの楕円形で、掘り方周辺部からの深さは0.52mである。

［出 土 遺 物］　カマド内やその前面から比較的多く出土している。土師器坏２点（１・２）、須恵器

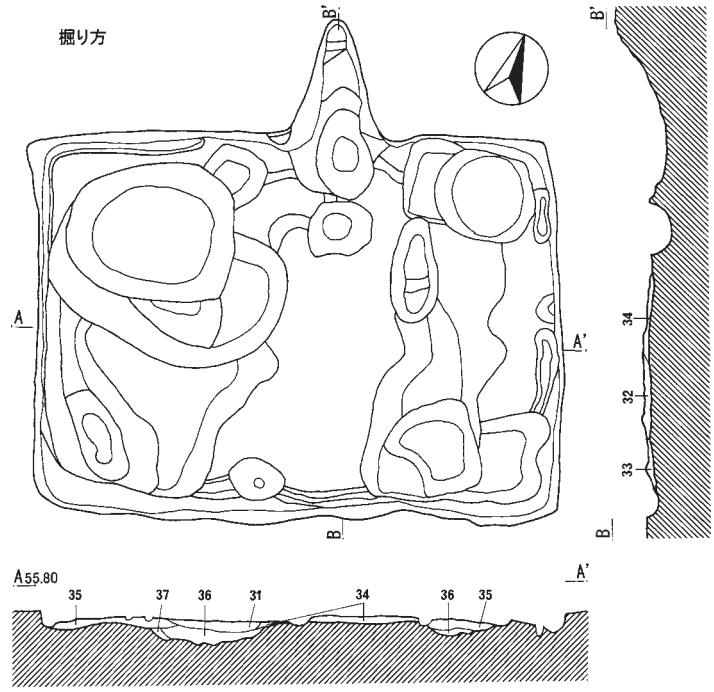
坏１点（３）、土師器甕７点（４～10）、流れ込みと考えられる縄文土器片２点（11・12）を図示した。１・２はカマド前面、６はカマド前面、７・８・10はカマド内、他





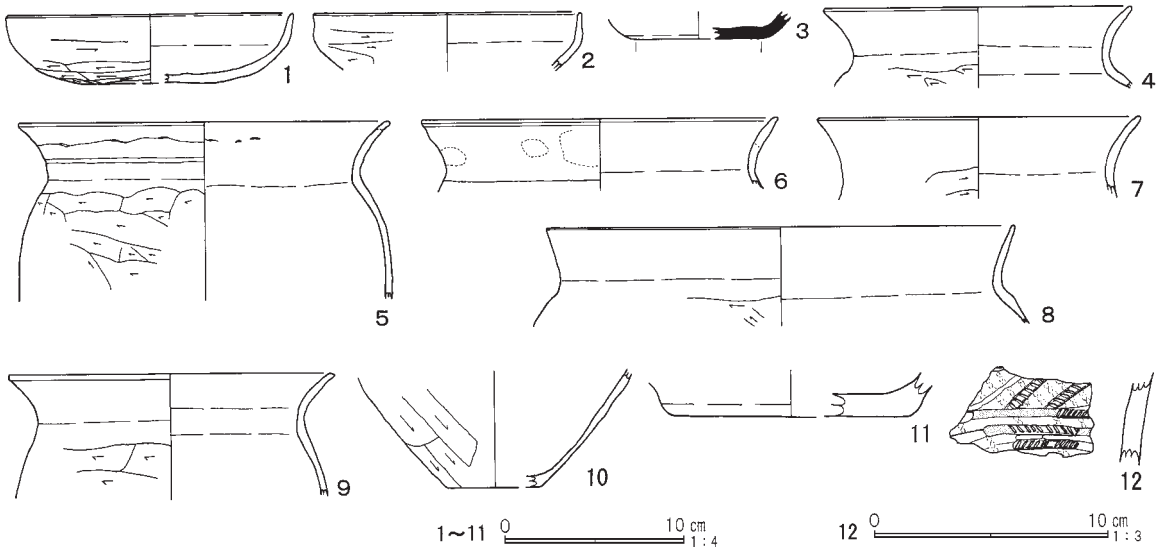
S18（A－A'、E－E'）

1　灰黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒及び微粒子若干。焼土粒及び炭化物粒わずかに含む。
2　黄褐色土　ソフトローム粒含む。
3　灰黄褐色土　炭化物粒若干含む。
4　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒わずか。焼土粒わずかに含む。
5　暗灰黄色土　ソフトローム粒わずか。焼土粒及び焼土粒わずかに含む。
6　黒褐色土　しまり弱。ソフトローム粒若干含む。
7　暗灰黄色土　ソフトローム粒及び微粒子若干。黒褐色土粒多量に含む。
8　黄灰色土　ソフトローム微粒子ごくわずか。焼土粒及び炭化物粒若干含む。
9　灰黄褐色土　粘性弱。ソフトローム粒わずか。焼土粒及び炭化物粒少量含む。
10　暗灰黄色土　ソフトローム粒若干。焼土粒多量。炭化物粒わずか。土器包含。
11　灰黄褐色土　ソフトローム粒若干含む。
12　褐灰色土　焼土粒少量。炭化物粒わずかに含む。
13　黒褐色土　若干赤味がかる。焼土粒と炭化物粒多量に含む。土器包含。
14　灰黄褐色土　しまり強。ソフトローム粒及び微粒子多量に含む。
15　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒少量。炭化物粒わずかに含む。
16　暗灰黄色土　ソフトロームブロック少量。黒褐色土ブロックわずか。焼土粒及び炭化物粒若干含む。
17　黒褐色土　ソフトローム粒と黒褐色土粒若干。焼土粒および炭化物粒多量に含む。
18　灰褐色土　ソフトロームブロック多量。焼土粒少量。炭化物粒若干含む。
19　黒褐色土　ソフトローム粒わずか。黒色土粒少量含む。
20　にぶい黄褐色土　ハードロームブロック及び粒少量。褐灰色土粒若干。焼土粒多量、炭化物粒わずかに含む。
21　暗灰黄色土　ハードロームブロック及び粒多量。褐灰色土ブロック粒若干。焼土粒わずかに含む。
22　黄褐色土　ハードロームブロック及び粒若干。褐灰色土粒若干含む。
23　暗灰黄色土　ハードロームブロック及び粒多量。褐灰色土ブロック粒若干。焼土粒　わずかに含む。
24　暗灰黄色土　ハードロームブロック及び粒少量含む。
25　オリーブ褐色土　ハードローム粒下層付近に若干。黒色土ブロック及び粒少量。炭化物粒わずかに含む。
26　黒褐色土　しまり弱。焼土粒及び炭化物粒若干含む。遺物包含。
27　灰黄褐色土　ハードローム粒若干含む。
28　黒褐色土　ハードローム粒若干含む。
29　黒褐色土　しまり弱。
30　暗灰黄色土　ハードロームブロック多量に含む。
31　黒褐色土　しまり強。ソフトロームブロック若干。焼土粒わずかに含む。
32　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒と黒褐色土粒が多量に混入。
33　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒若干。ソフトローム微粒子少量。
32　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒と黒褐色土粒が多量に混入。
33　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒若干。ソフトローム微粒子少量。黒褐色土粒少量含む。炭化物粒わずかに含む。
34　褐灰色土　しまり強。ソフトローム粒と黒褐色土粒を版築状につきかためた層。
35　暗灰黄色土　しまり強。ソフトロームブロック及び粒多量に含む。
36　黄褐色土　ソフトロームブロック及び粒を黒褐色土ブロック及び粒。混合土をかたくつきかためた層。
37　暗灰黄色土　しまり強。ソフトローム粒わずかに含む。



0　2m　1:60

第14図　第８号住居跡・掘り方



第15図　第８号住居跡出土遺物

第４表　第８号住居跡出土遺物観察表（第15図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	(15.8)	(3.8)	(7.2)	ABIJMN	橙色	A	体～底20%	体部～底部外面手持ヘラケズリ、弱丸底。
2	土師器坏	(14.8)	(3.2)	(11.5)	ABIJN	にぶい褐色	A	口～底部片	口縁部外面有段、体部外面手持ヘラケズリ。
3	須恵器坏	—	(1.5)	(7.0)	ABFMN	褐灰色	A	底部25%	底部全面回転ヘラケズリ、南比企産。
4	土師器甕	(17.0)	(4.5)	—	ABFMN	にぶい橙色	B	口胴上20%	頸部外面横位ヘラケズリ。
5	土師器甕	(20.5)	(10.0)	—	ABHIJMN	橙色	A	口～胴上片	胴部外面上端横位・中央斜位ヘラケズリ。
6	土師器甕	(19.8)	(4.0)	—	ABJMN	橙色	B	口縁部20%	頸部外面指頭圧痕。
7	土師器甕	(18.0)	(4.5)	—	ABIJN	橙色	A	口～頸部片	頸部外面横位ヘラケズリ。
8	土師器甕	(26.0)	(5.5)	—	ABJKN	橙色	A	口～胴上片	頸部外面横位・斜位ヘラケズリ。
9	土師器甕	(18.0)	(6.8)	—	ABIJN	橙色	A	口胴上20%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
10	土師器甕	—	(6.5)	(5.2)	ABIJN	橙色	B	胴下底20%	胴部外面下端斜位ヘラケズリ。
11	縄文土器深鉢	—	(1.9)	(10.0)	ABIJN	外：橙色 内：にぶい橙	B	底部25%	
12	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJN	にぶい橙色	B	胴部片	諸磯Ｂ式（前期）、浮線文。

は覆土中から出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀後半～９世紀前半と考えられる。

第９号住居跡（第16・17図、第５表）

［位　　置］　19・20―25・26グリッドに位置する。

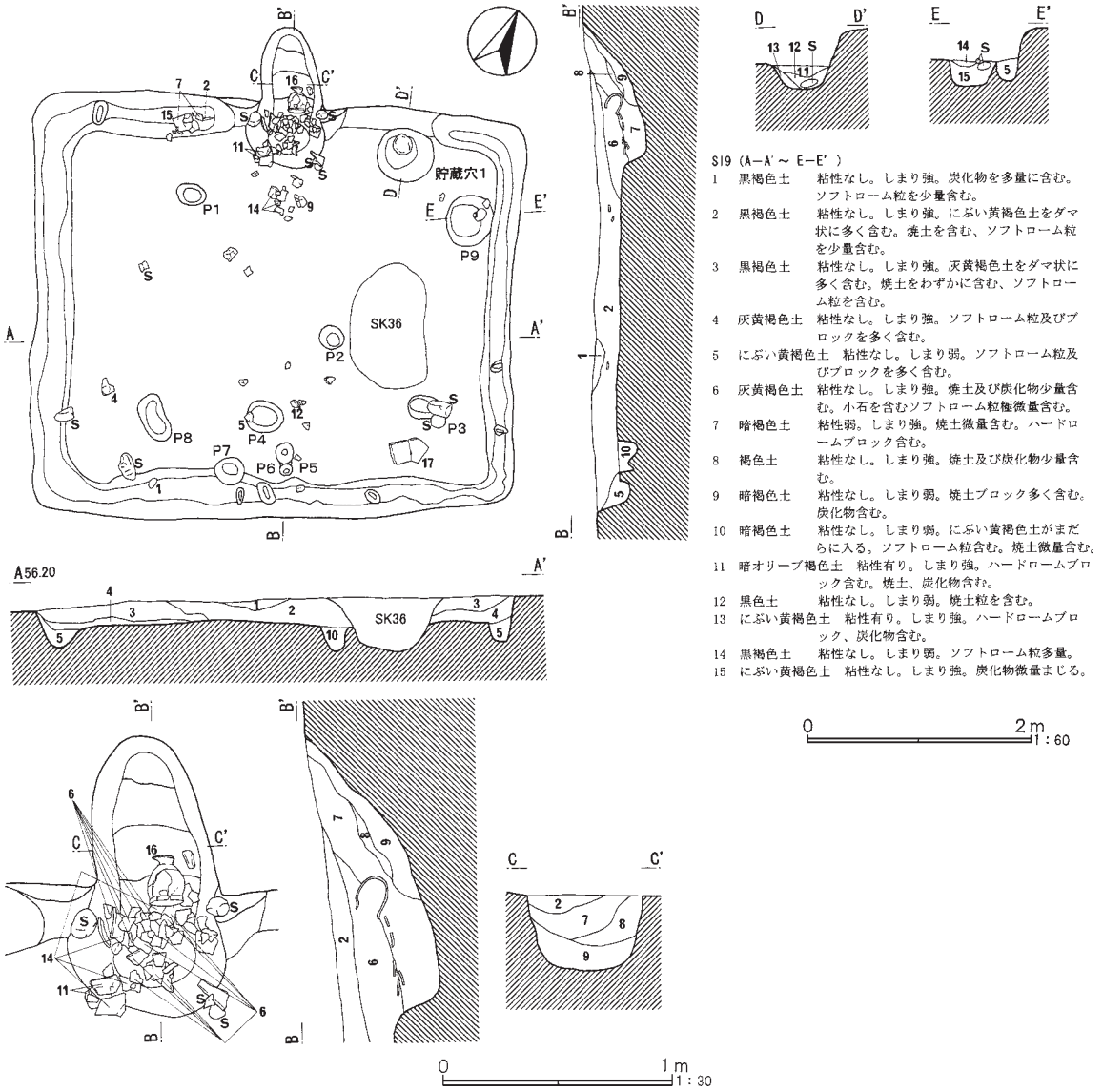
［重　　複］　東寄りで第36号土坑、東壁やや北寄りで第19号ピットと重複する。第36号土坑は覆土上方から床面にかけて掘り込まれていて、本遺構より新しい。第19号ピットは一部が東壁際の覆土上方を切り、本遺構より新しい。

［平面形・規模］　主軸方向が短軸となる長方形である。主軸方向はＮ―15°―Ｗを示す。規模は長軸4.16m、短軸3.86mで、残存壁高は最も深いところで0.21mである。

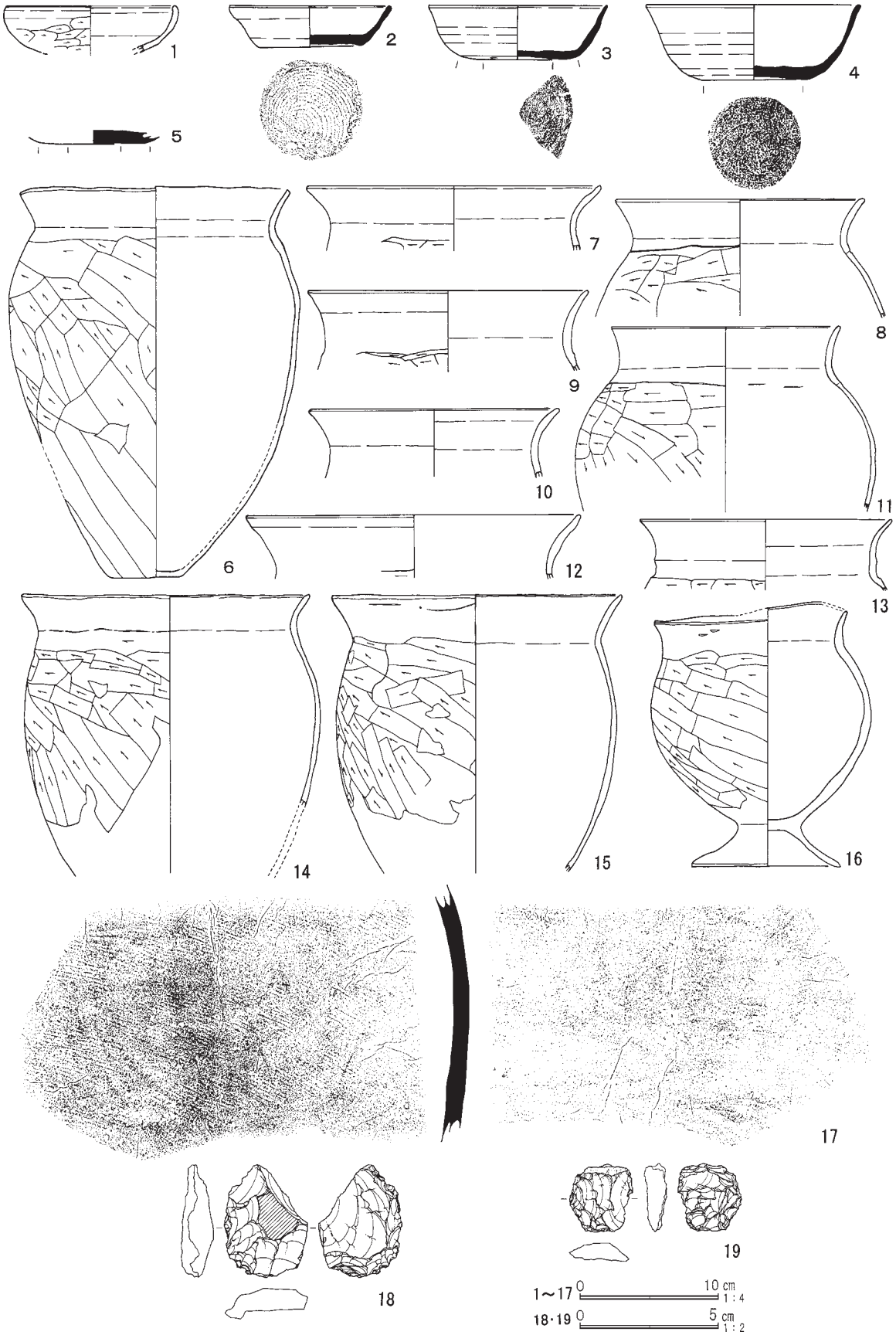
［　　床　　］　床面は凹凸があるもののほぼ平坦で、壁際を除いて硬化している。特に、カマド周辺部では焼土粒や炭化物が広がり著しく硬化している。このカマド周辺部では、硬化面下からさらにもう一面の硬化面が確認されている。上方の硬化面と下方の硬化面との高低差は0.06m前後であるが、下面の床はカマドの前面周辺から焚口に向かって次第に下がっている。

［覆　　土］　ローム粒や焼土粒を含む黒褐色土を主体とし、壁際には灰褐色土やにぶい黄褐色土が堆積している。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　北壁のほぼ中央に造られている。奥行きは1.23mで内0.67mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.54mである。袖部はわずかに地山が掘り残され、礫が用いられている。燃焼部では火床面は確認されず、急激に下がって深くなり、床面から0.23mほどの高低差がある。底面は奥壁に向かって緩い上がり傾斜となっていて、奥壁は約45°の角度で立ち上がっている。側壁は被熱による焼土化が顕著である。



第16図　第９号住居跡・カマド



第17図　第９号住居跡出土遺物

［壁　周　溝］　北壁の一部を除いて検出されている。幅0.17～0.44m、深さ0.06～0.18mである。

［貯　蔵　穴］　貯蔵穴と想定される掘り込みが１基検出されている。その貯蔵穴１はカマド東側の北壁際に位置し、直径0.48mの円形で、床面からの深さは0.21mである。

［ピ　ッ　ト］　９基検出されている。Ｐ１はカマドの南東寄り、Ｐ２は中央南寄り、Ｐ４～Ｐ８は南壁際の中央から西寄りにかけて、Ｐ９は東壁際北寄りに検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.27×0.18mの楕円形で深さ0.05m、Ｐ２は直径0.21mの円形で深さ0.23m、Ｐ３は0.28×0.21mの楕円形で深さ0.15m、Ｐ４は0.32×0.27mの楕円形で深さ0.06m、Ｐ５は0.17×0.15mの楕円形で深さ0.18m、Ｐ６は直径0.11mの円形で深さ0.15m、Ｐ７は直径0.24mの円形で深さ0.14m、Ｐ８は0.42×0.22mの歪んだ楕円形で深さ0.12m、Ｐ９は直径0.40mの円形で深さ0.22mである。

Ｐ１、Ｐ３、Ｐ８、Ｐ９は柱穴の可能性がある。

［出 土 遺 物］　床面南寄りやカマド周辺で多く出土しているが、特にカマド内から多量に出土している。土師器坏１点（１）、須恵器坏３点（２・３・５）、須恵器埦１点（４）、土師器甕10点（６～15）、土師器台付甕１点（16）、須恵器甕１点（17）、流れ込みと考えられる石鏃未製品２点（18・19）を図示した。１は南壁際、２・７・15はカマド西側の北壁際、４は床面南西寄り、５・12は中央南寄り、６・９・11・14はカマド内やその前面、16はカマド内、17は床面南東隅、他は覆土中から出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀後半～９世紀前半と考えられる。

第５表　第９号住居跡出土遺物観察表（第17図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	(12.9)	(2.9)	(9.5)	ABJN	にぶい橙色	A	口～底20%	弱丸底、体部～底部外面手持ヘラケズリ。
2	須恵器坏	11.5	3.0	7.4	ABFIN	褐灰色	A	90%	底部回転糸切り離し、南比企産。
3	須恵器坏	(12.8)	(3.9)	(6.0)	ABN	褐灰色	B	口～底30%	底部周辺回転ヘラケズリ、末野産。
4	須恵器埦	15.4	5.4	7.2	ABEFN	外：黒色 内：黒褐色	A	口～底70%	底部全面回転ヘラケズリ、南比企産。
5	須恵器坏	—	(1.0)	(8.0)	ABFHN	褐灰色	A	底部60%	底部周辺回転ヘラケズリ、南比企産。
6	土師器甕	19.1	28.1	5.2	ABIJN	橙色	A	80%	胴部外面上端横位・中場斜位ヘラケズリ。
7	土師器甕	(21.0)	(5.2)	—	ABGIJN	橙色	A	口胴上片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
8	土師器甕	(17.8)	(8.0)	—	ABGIJN	橙色	B	口胴上25%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
9	土師器甕	(20.0)	(5.8)	—	ABGHN	橙色	A	口胴上20%	胴部外面上端横・斜位ヘラケズリ。
10	土師器甕	(17.8)	(4.9)	—	ABGN	橙色	A	口～頸部片	
11	土師器甕	(16.2)	(13.3)	—	ABGIJN	橙色	A	口～胴部片	胴部外面上端横位ヘラケズリ、中場斜位ヘラケズリ。
12	土師器甕	(24.0)	(4.6)	—	ABGIN	にぶい褐色	A	口～頸部片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
13	土師器甕	(18.0)	(5.2)	—	ABEJN	橙色	A	口～頸25%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
14	土師器甕	20.6	(20.1)	—	ABGHIN	橙色	B	口～胴60%	頸部～胴部外面上端横位・中場斜位ヘラケズリ。
15	土師器甕	(20.9)	(20.0)	—	ABGHIN	橙色	B	口～胴50%	胴部外面上端横位・中場斜位ヘラケズリ。
16	土師器台付甕	14.0	18.6	10.5	ABGHIJN	橙色	B	70%	胴部外面上端横位・中場斜位ヘラケズリ・中場～下端斜位ヘラケズリ。
17	須恵器甕	—	—	—	ABFN	褐灰色	A	胴部片	胴部外面平行タタキ、内面無文当て目、南比企産。
18	石鏃未製品	長：4.09　幅：3.0　厚：1.18　重：12.50ｇ　石材：チャート							小型剥片の縁辺部に２次加工を施す。
19	石鏃未製品？	長：2.45　幅：2.3　厚：0.8　重：4.18ｇ　石材：チャート							小型制片の表裏面に調整剥離痕。

第10号住居跡（第18図、第６表）

［位　　置］　８―23グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　歪んだ長方形を呈し、主軸方向が短軸となる。調査区東部の南北に延びる谷状地形の北西際に造られている。規模は北辺で3.60m、南辺で3.00m、西辺で2.80m、東辺で3.00mである。残存壁高は最も深いところで0.10mである。主軸方向が短軸となる長方形である。主軸方向は真北を示す。

［　床　］　検出されていない。削平により消失したと考えられる。

［覆　　土］　炭化粒・焼土粒を含む橙色土・褐色土を主体とし、壁際には黒褐色土や暗褐色土が堆積している。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　なし。

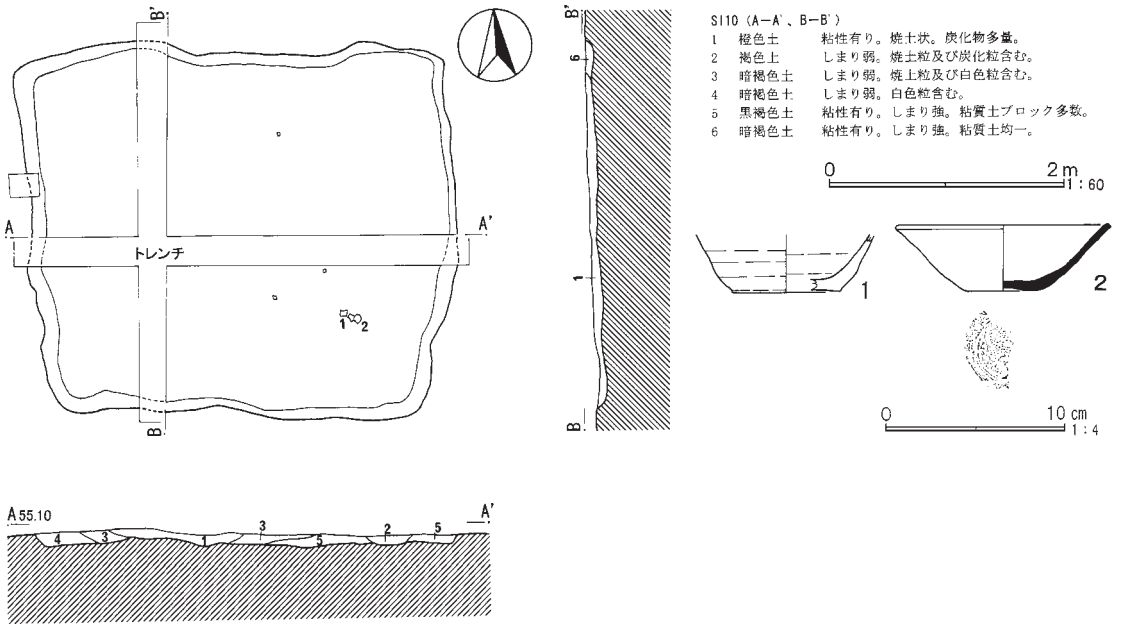
［壁　周　溝］　なし。

［貯　蔵　穴］　なし。

［ピ　ッ　ト］　なし。

［出 土 遺 物］　少量ではあるが、東側から点在して出土している。土師器坏１点（１）、須恵器坏（２）を図示した。１・２ともに東側南寄りから出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ10世紀前半と考えられる。



第18図　第10号住居跡・出土遺物

第６表　第10号住居跡出土遺物観察表（第18図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器坏	―	(3.3)	(5.6)	ABGHIN	灰黄色	C	体～底25%	酸化焔焼成。
2	須恵器坏	(11.5)	(3.7)	(4.0)	ABGHIN	褐灰色	C	口～底25%	底部回転糸切り離し、末野産。

第11号住居跡（第19図、第７表）

［位　　置］　７―22・23グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　住居跡東側は撹乱により遺存状況が悪い。平面形は長方形である。主軸方向はN―15°―Wを示す。規模は撹乱により全容は不明であるが、東西軸1.80m、残存南北軸2.15mで、残存壁高は最も深いところで0.15mである。

［　床　］　地山を直接床としている。

［覆　　土］　黄褐色土を主体として、ほぼレンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。

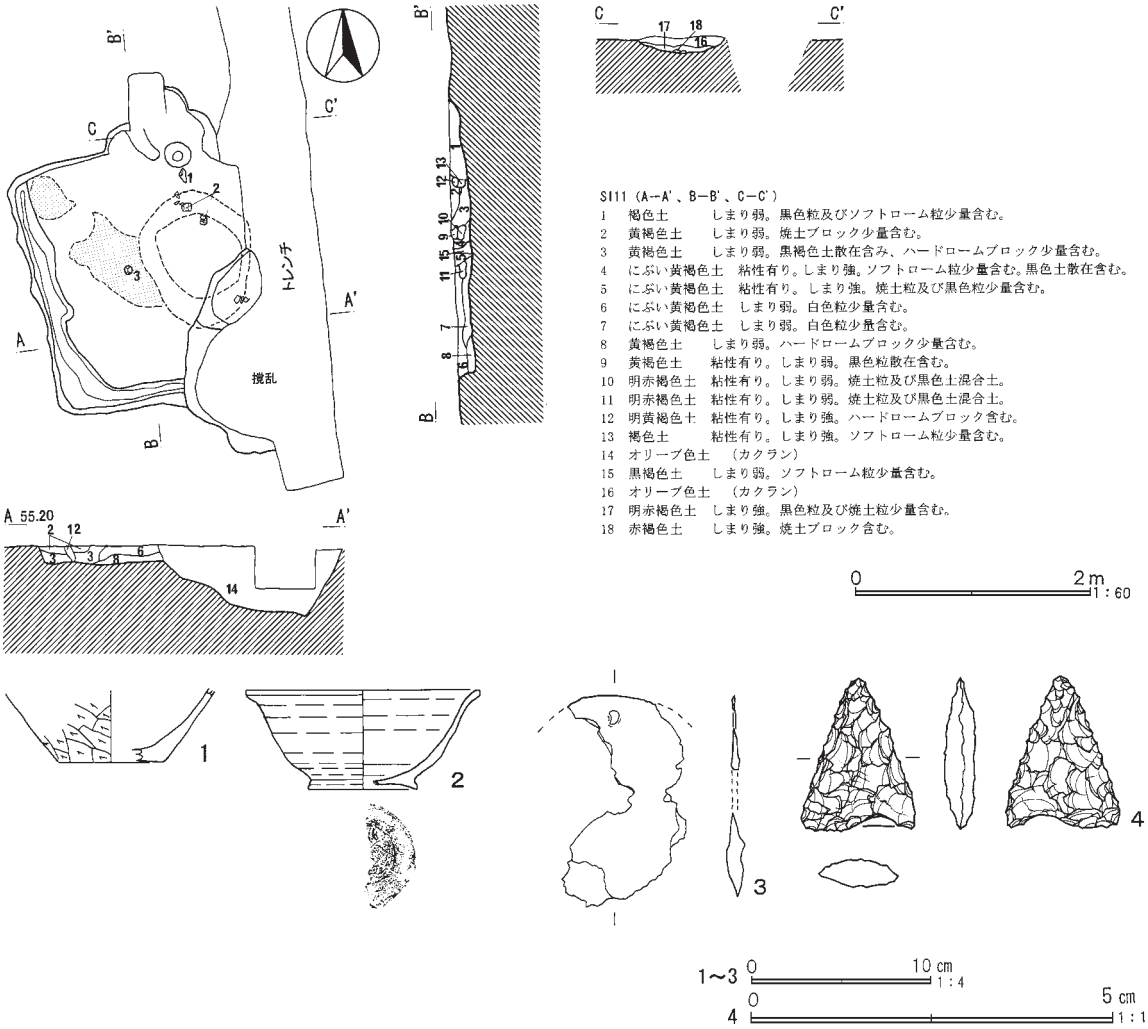
［カ　マ　ド］　撹乱による消失が著しく全容は不明である。

［壁　周　溝］　西壁と南壁の一部で検出されている。幅0.10～0.35m、深さ0.03である。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　検出されていない。

［掘　り　方］　凹凸面が少なくほぼ平坦である。



第19図　第11号住居跡・出土遺物

第７表　第11号住居跡出土遺物観察表（第19図）

№.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器甕	―	(4.0)	(6.0)	ABGHIJN	外：にぶい橙色、内：橙色	B	底部25%	胴部外面斜位ヘラケズリ
2	須恵器高台坏	(13.0)	(5.5)	高台径(6.0)	BEN	橙色	C	口～底25%	底部回転糸切り離し、酸化焔焼成。
3	紡錘車	長：(8.8)　幅：―　厚：0.1～0.8							鉄製。
4	石鏃	長：2.1　幅：1.6　厚：0.4　重：1.11ｇ　石材：チャート							平基無茎、基端部欠損。

［出土遺物］　少量ではあるが、中央から点在して出土している。本遺構に伴うと考えられる土師器甕１点（１）、須恵器高台坏（２）、鉄製紡錘車（３）、流れ込みと考えられる石鏃（４）を図示した。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ10世紀前半と考えられる。

第12号住居跡（第20～23図、第８表）

［位　　置］　24・25―31・32グリッドに位置する。

［重　　複］　第52号土坑が本遺構の覆土中に掘り込まれ、本遺構が古い。

［平面形・規模］　西辺が東辺より長い台形を呈し、主軸方向が短軸となる。主軸方向は住居プランでN―14°―W、カマドが付設される北壁に直行する軸ではN―10°―Wである。規模は北辺で4.80m、南辺で4.63m、西辺で3.56m、東辺で2.97mである。残存壁高は最も深いところで0.39mである。

［　床　］　貼床が施された第１面と、その下の地山を床とした第２面が検出されている。第１面はハードロームブロックを含む黒褐色土が0.05～0.10mの厚さで貼られ床が構築されている。やや起伏があり、カマド前面から南壁手前までの中央部で硬化が認められる。カマド前面では一度床を貼り直した形跡が認められ、上層の貼床を除去した下面でも硬化が認められる。

第２面は凹凸があり、カマド前面から南に向かって帯状に硬化が認められる。床第２面で検出されたものとして、貯蔵穴２の北東に、焼土粒を含んだ炭化物層が堆積する浅い掘り込みが検出されている。規模は、長軸0.59m、短軸0.34mの菱形で、床第２面からの深さ0.06mである。

［覆　　土］　ロームブロックや焼土粒を含む暗褐色土を主体とし、中央やや北東寄りの床面直上に炭化物を多く含む層が堆積している。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　北壁の中央やや東寄りに造られている。奥行きは1.32mで内0.96mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.45mである。燃焼部の側壁西面で被熱による焼土化が認められる。内壁の南過半では褐色土の構築材が貼られていて、これを除去した後の幅は0.88mである。袖部は検出されていない。底面は床面から燃焼部奥壁に向かって緩やかに下がっている。張り直し以前の底面は次第に下がって深くなり、床面から0.10mほどの高低差がある。

床第２面では、床面からほぼ水平に燃焼部に至る。奥壁は約55°の角度で立ち上がっ

ている。煙道部は燃焼部から0.38m高くなり、先端部は湾曲して立ち上がっている。長さは0.03m、幅は燃焼部際で0.27mである。

［壁　周　溝］　床第１面では北東角からカマドの西側にかけてを除き、連続して巡っている。規模は幅0.17～0.30m、深さ0.03～0.13mである。

床第２面では検出されていない。

［貯　蔵　穴］　床第１面では貯蔵穴と想定される掘り込みが北東隅から１基（貯蔵穴１）、床面中央やや北西寄りから１基（貯蔵穴２）検出されている。床２面では中央やや東寄り貯蔵穴３が検出されている。

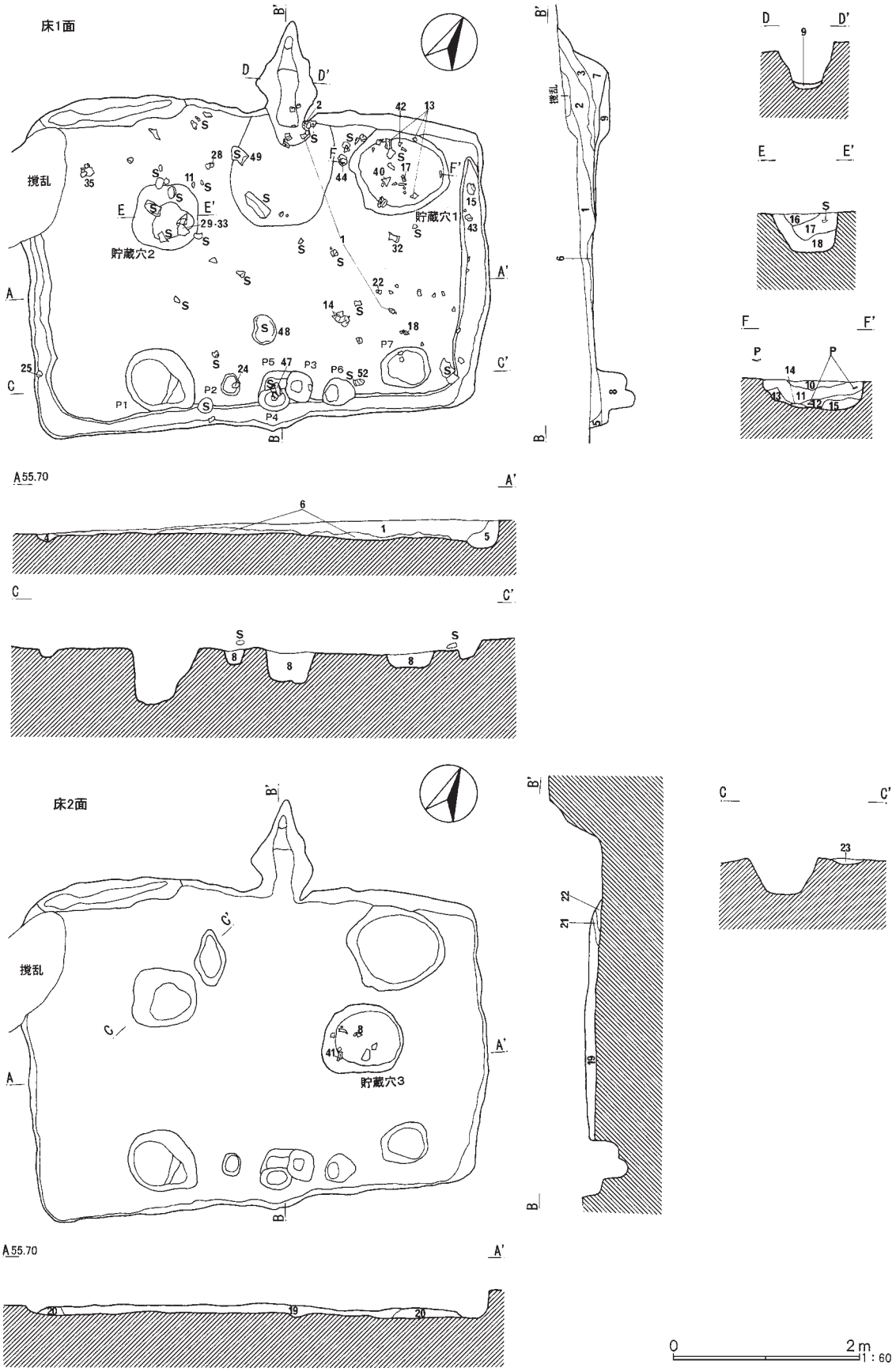
それぞれの規模は貯蔵穴１が長軸0.96m、短軸0.89mの楕円形で、床面からの深さは0.33mである。貯蔵穴２は一辺0.69mの隅丸方形で、床面からの深さは0.34m、覆土は最上層ではロームブロックや粒子を主体とした土層で、硬化が認められる。下層は焼土や炭化物を含む暗褐色土や黒褐色土が堆積し、遺物も比較的多く出土している。

貯蔵穴１、貯蔵穴２ともに、覆土上面では硬化が認められ、最終段階では機能していなかった可能性もある。土層観察では貼床土（第21・22層）を切って掘り込まれている様子がみられることから、床第１面が機能している時期に掘り込まれ、また、埋め戻された可能性がある。貯蔵穴３は、床第１面を構築している貼床土の下面から検出されている。床第２面が使用されていた時期に機能していた可能性が高いが、前述の貯蔵穴１・２と同様、覆土上面で硬化が認められ、床第２面が使用されていた時期の間に埋め戻されていたとも考えられる。

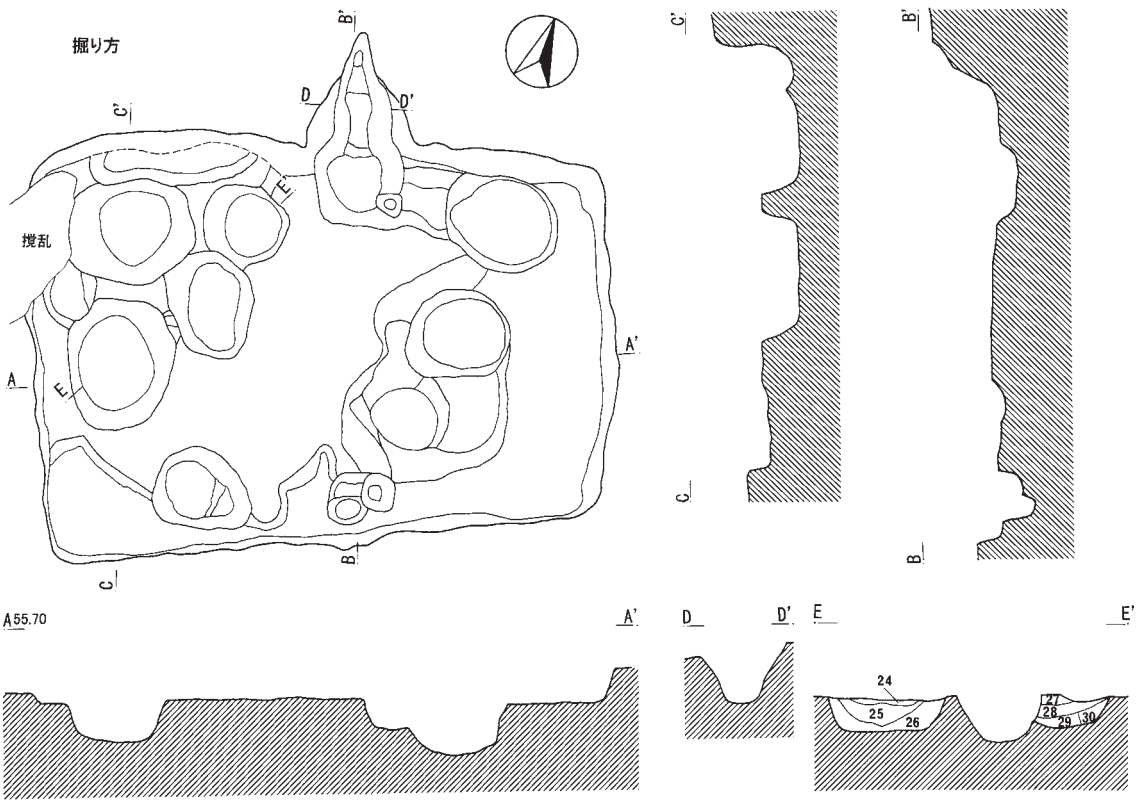
［ピ　ッ　ト］　７基検出されている。Ｐ１・２は南西壁の西寄り、Ｐ３～５は南壁際の中央に切り合って検出されていて、造り替えの可能性がある。Ｐ６は南壁際の中央やや東寄り、Ｐ７は南東隅から検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.80×0.66mの楕円形で深さ0.60m、Ｐ２は0.24×0.19mの楕円形で深さ0.16m、Ｐ３は0.31×0.27mの隅丸方形で深さ0.36m、Ｐ４は0.33×0.24mの楕円形で深さ0.41m、Ｐ５はＰ３・４との切り合いから全容は不明であるが、遺存している範囲で東西軸0.26m、南北軸0.19m、深さ0.36mである。Ｐ６は0.34×0.28mの楕円形で深さ0.29m、Ｐ７は0.51×0.42mの楕円形で深さ0.17mである。

Ｐ１、Ｐ７、貯蔵穴２は柱穴の可能性がある。また、Ｐ３～５は、カマド正面の南壁際にあることから出入口施設のピットの可能性が考えられる。

［掘　り　方］　床第２面では地山を床としているが、北東寄りと中央から東寄りには、土坑状の掘り込みが切り合うように検出されている。覆土はロームブロックを含んだにぶい黄褐色土や暗褐色土が主体で、部分的ではあるが、焼土を含む箇所もある。床第２面を精査した地点では、上面はロームブロックを含む褐色土が貼られている状況であった。住居築造時の掘り方と考えるよりも、住居として使用されていた時点で掘り込まれ、また、埋め戻された可能性が高い。貯蔵穴１・２としたものは、これらのうち、比較的新しい段階のものとも考えられる。



第20図　第12号住居跡



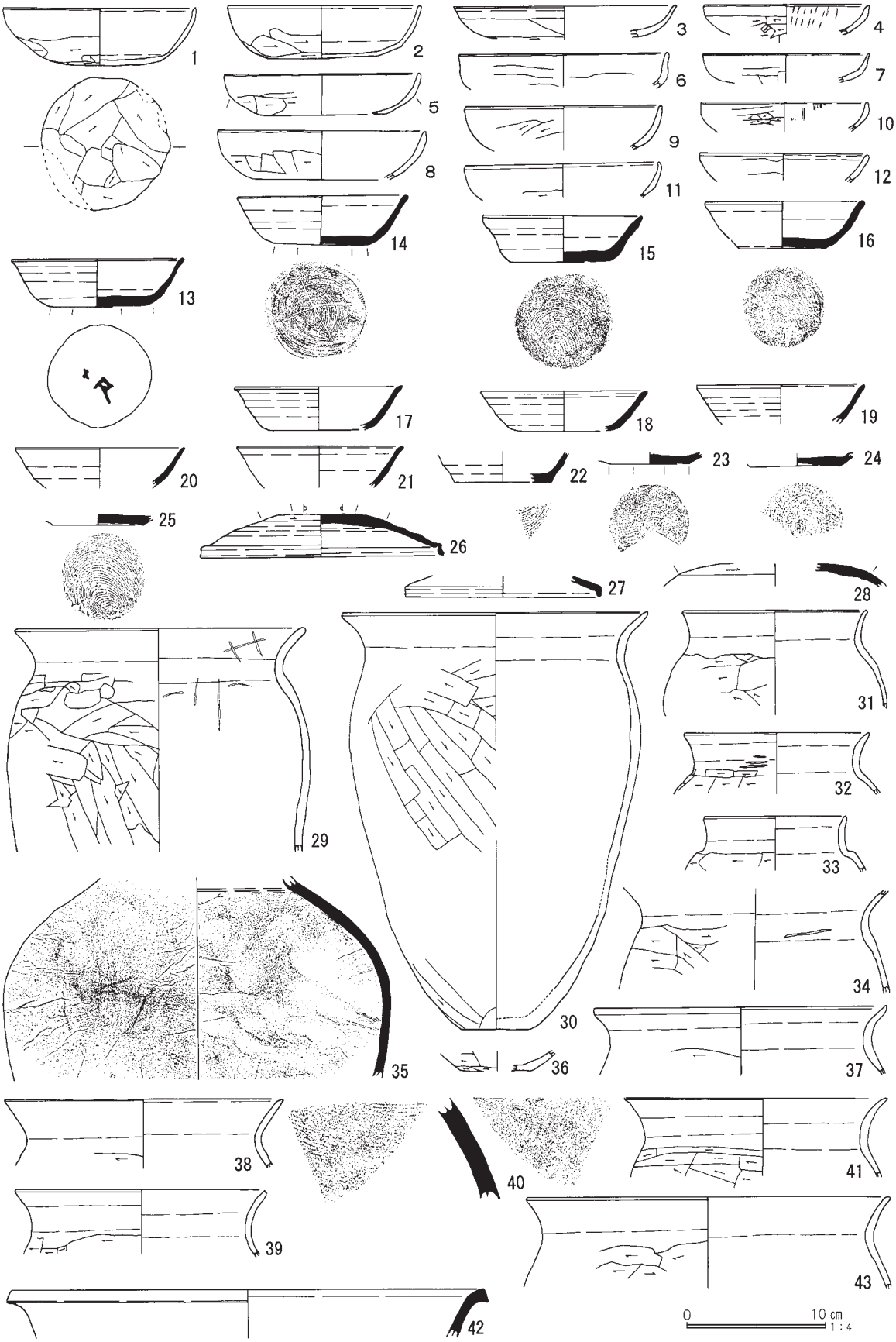
SI12（A−A'〜F−F'）

1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土多く含む。ソフトローム粒多量。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、焼土粒を少量含む。
3　暗赤褐色土　粘性有り。しまり強。焼土粒を多量に含み、焼土ブロックをやや多く含む。
4　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、焼土粒を微量含む。
5　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
6　黒褐色土　粘性有り。しまり強。木炭及び炭化物を多く含む。
7　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロックをやや多く含み、焼土粒を微量含む。
8　褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒含む。
9　暗褐色土　粘性弱。しまり普通。焼土及び炭化物を多く含む。
10　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多量に含む。
11　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロック及び焼土粒を多く含む。炭化物をやや多く含む。
12　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
13　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒を少量含む。
14　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土粒を少量含む。
15　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。
16　褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含む。
17　褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含む。
18　黒褐色土　粘性弱。しまり弱。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含み、焼土粒を少量含む。
19　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり普通。ソフトローム粒及びハードロームブロックを多く含む。
20　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。にぶい黄褐色土がまだらに入る。
21　暗褐色土　粘性弱。しまり弱。焼土及び炭化物含む。灰白色粘土含む。
22　黒色土　粘性なし。しまり弱。焼土及び炭化物多く含む。
23　黒色土　粘性なし。しまり弱。焼土含む。炭化層。
24　黄褐色土　粘性有り。しまり普通。ハードロームブロック多く含む。ソフトローム粒含む。
25　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり普通。ハードロームブロック含む。焼土多く含む。炭化物含む。
26　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり普通。焼土多く含む。炭化物含む。
27　黄褐色土　ロームブロック層。
28　黒褐色土　粘性有り。しまり普通。炭化物及び焼土含む。
29　褐色土　粘性有り。しまり普通。焼土及び炭化物微量含む。ソフトローム粒含む。
30　褐色土　粘性有り。しまりなし。焼土含む。炭化層。

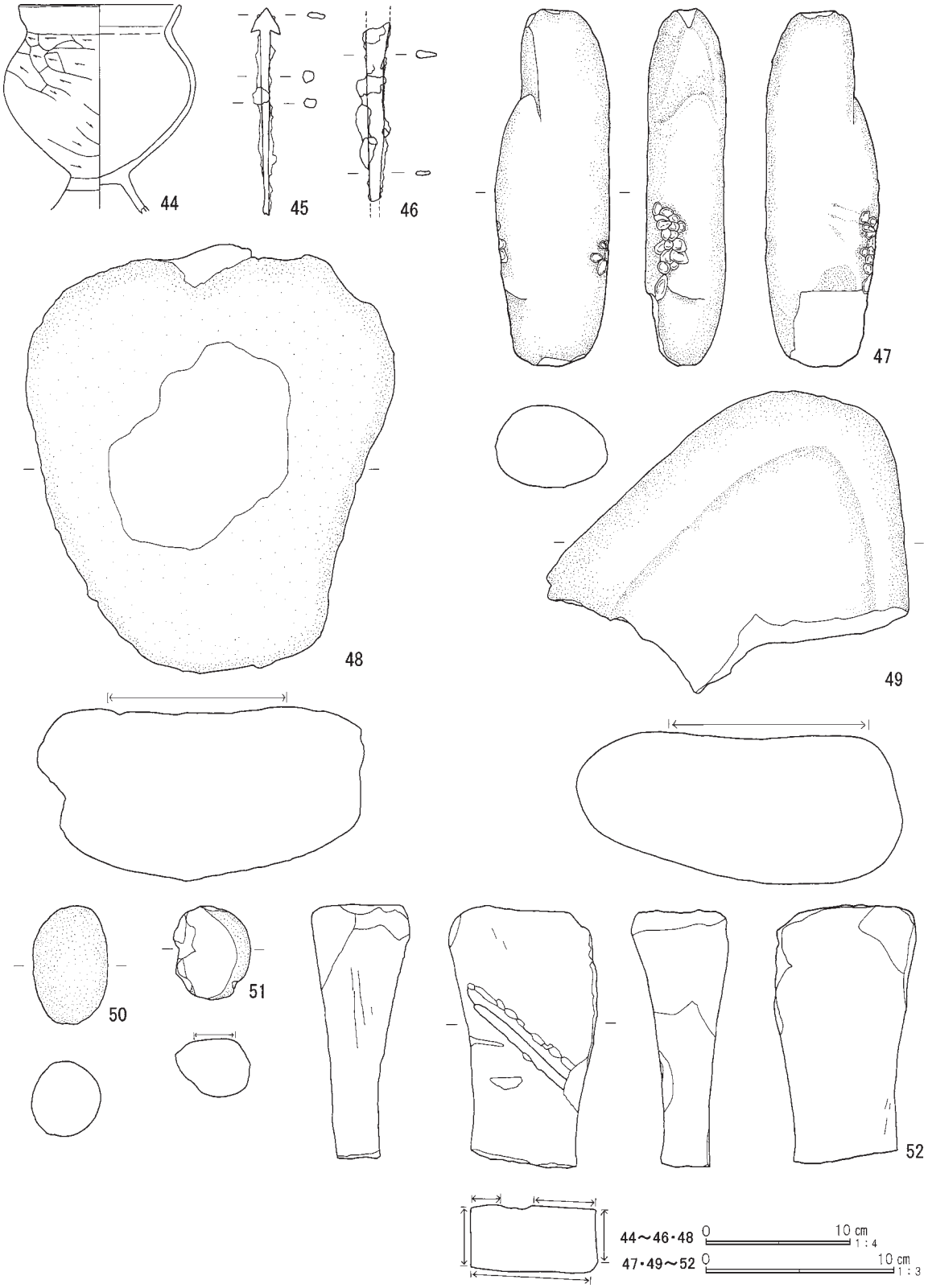
0　2m　1:60

第21図　第12号住居跡掘り方

［出 土 遺 物］　覆土中のほぼ全域から多くの遺物が出土している。また、貯蔵穴１〜３ともに比較的多く出土している。土師器坏12点（１〜12）、須恵器坏13点（13〜25）、須恵器蓋３点（26〜28）、土師器甕９点（29・30・34・36〜39・41・43）、土師器台付甕４点（31〜33・44）、須恵器長頸瓶１点(35)、須恵器甕１点(40)、須恵器鉢１点(42)、鉄鏃１点(45)、刀子１点（46)、敲痕のある礫１点（47)、台石１点（48)、石皿１点（49)、磨石２点（50・51)、砥石１点（52）を図示した。１・２はカマド東寄り、11・28・35は北西寄り、14・18・22・32は東寄り、15・43は東壁際の北寄り、17・40は貯蔵穴１内、24・47・52は南壁際、29・33は貯蔵穴２内、41は貯蔵穴３内から出土している。48は床面中央の南寄りからの出土で、取り上げ後の床面は僅かに凹み、礫は意図的に設置され



第22図　第12号住居跡出土遺物(1)



第23図　第12号住居跡出土遺物(2)

ていたと考えられる。他は覆土中から出土している。また、敲石(47)、石皿(49)は、台石と考えられる48などとの関連も考えられる。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀後半～９世紀前半と考えられる。

第８表　第12号住居跡出土遺物観察表（第22・23図）

№.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	13.8	4.1	9.2	ABGHIKN	橙色	B	90%	体部外面下端～底部外面手持ヘラケズ。
2	土師器坏	13.8	3.9	(7.7)	ABGHIKN	橙色	B	50%	体部外面下端～底部外面ヘラケズリ。
3	土師器坏	(16.0)	(2.3)	—	ABIKN	橙色	B	口～体20%	体部外面下端横位ヘラケズリ。
4	土師器坏	(11.8)	(2.1)	(8.0)	ABIKN	橙色	A	口～体部片	体部外面横・斜位ヘラケズリ、内面暗文。
5	土師器坏	(14.0)	(2.9)	(9.4)	ABIN	にぶい橙色	B	口～体部片	体部外面下端横位ヘラケズリ。
6	土師器坏	(15.0)	(2.5)	(13.3)	ABIKN	橙色	B	口～体部片	体部外面横位ヘラケズリ。
7	土師器坏	(12.0)	(2.1)	—	ABIKN	橙色	B	口～体部片	体部外面横位ヘラケズリ。
8	土師器坏	(14.8)	(3.5)	(10.0)	ABGHIKN	橙色	B	口～体20%	体部外面下端横位ヘラケズリ。
9	土師器坏	(14.0)	(3.2)	—	ABIN	橙色	A	口～体部片	体部外面横位ヘラケズリ。
10	土師器坏	(12.0)	(2.1)	—	ABH	橙色	A	口～体部片	体部外面横位ヘラケズリ、内面暗文。
11	土師器坏	(14.0)	(2.6)	—	ABIN	橙色	B	口縁部20%	体部外面下端横位ヘラケズリ。
12	土師器坏	(12.0)	(2.0)	—	ABIN	にぶい橙色	A	口縁部片	
13	須恵器坏	12.2	3.5	6.8	ABFN	灰色	A	70%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面に墨書「足？刀」、南比企産。
14	須恵器坏	12.6	3.6	5.9	ABEFN	褐灰色	A	100%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面に「×」ヘラ記号、南比企産。
15	須恵器坏	11.4	3.4	7.0	ABEN	灰色	A	90%	底部回転糸切り離し、末野産。
16	須恵器坏	(11.4)	(3.4)	6.2	ABN	灰色	A	口～底60%	底部回転糸切り離し、末野産。
17	須恵器坏	(12.0)	(3.1)	(6.5)	AFN	にぶい黄褐色	A	口縁部20%	南比企産。
18	須恵器坏	(12.0)	(2.9)	(6.0)	ABFN	灰白色	A	口縁部片	南比企産。
19	須恵器坏	(12.0)	(2.8)	—	ABF	にぶい黄褐色	A	口縁部20%	南比企産。
20	須恵器坏	(12.0)	(2.9)	—	ABF	灰色	A	口縁部20%	南比企産。
21	須恵器坏	(12.0)	(3.0)	—	ABFN	褐灰色	A	口縁部20%	南比企産。
22	須恵器坏	—	(2.2)	(7.0)	ABN	暗灰黄色	A	底部20%	底部回転糸切り離し。
23	須恵器坏	—	(0.8)	(5.8)	ABFI	褐灰色	A	底部60%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面に「＃」ヘラ記号、南比企産。
24	須恵器坏	—	(0.9)	(6.0)	ABEIN	褐灰色	A	底部60%	底部回転糸切り離し。
25	須恵器坏	—	(0.7)	6.6	ABFIN	灰色	A	底部100%	底部回転糸切り離し、南比企産。
26	須恵器蓋	17.4	3.1	—	ABIN	にぶい黄橙色	B	80%	天井部外面回転ヘラケズリ、末野産。
27	須恵器蓋	(14.0)	(1.5)	—	AEFN	褐灰色	A	口縁部20%	南比企産。
28	須恵器蓋	(16.0)	(1.6)	—	ABIJN	褐灰色	A	天井部20%	天井部外面回転ヘラケズリ。
29	土師器甕	(20.8)	(16.0)	—	ABIKN	橙色	A	口～胴30%	胴部外面上端横位ヘラケズリ・中場斜位ヘラケズリ、口縁部内面に「廿」ヘラ記号。

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
30	土師器甕	(22.0)	(30.0)	(5.0)	ABIN	橙色	B	20%	胴部外面上端横位・中場斜位ヘラケズリ。
31	土師器台付甕	(13.0)	(7.6)	—	ABIJKN	橙色	B	口胴上25%	胴部外面上端横・斜位ヘラケズリ。
32	土師器台付甕	(13.2)	(4.5)	—	ABIJKN	橙色	A	口胴上40%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
33	土師器台付甕	(10.0)	(4.0)	—	ABGIJKN	赤橙色	B	口～頸20%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
34	土師器甕	—	—	—	ABHIK	橙色	B	胴部上20%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
35	須恵器長頸瓶	—	—	—	ABIK	灰色	A	胴部25%	外面平行タタキ、内面無文当て目。
36	土師器甕	—	(1,5)	(4.8)	ABEIN	橙色	B	胴～底部	胴部外面下端横位ヘラケズリ。
37	土師器甕	(18.8)	(5.6)	—	ABIKN	橙色	B	口胴上30%	胴部外面上端横位ヘラケズリ、SI9との接合有。
38	土師器甕	(18.0)	(4.7)	—	ABIJN	橙色	B	口頸部20%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
39	土師器甕	(20.0)	(5.0)	—	ABIK	橙色	B	口胴上片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
40	須恵器甕	—	—	—	ADFN	灰色	A	胴部片	外面平行タタキ、内面無文当て目、南比企産。
41	土師器甕	(21.0)	(5.0)	—	ABIE	橙色	A	口～頸25%	頸部外面横位ヘラケズリ。
42	須恵器鉢	—	(3.4)	—	ABIN	灰色	A	口縁部片	
43	土師器甕	(26.0)	(6.4)	—	ABIJKN	橙色	A	口～胴10%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
44	土師器台付甕	(11.0)	(14.5)	(6.8)	ABHKN	橙色	B	40%	胴部外面上端横位ヘラケズリ、中場斜位ヘラケズリ。
45	鉄鏃	長：10.8　幅：0.2～1.5　厚：0.3～0.6							
46	刀子	長：9.3　幅：0.5～1.2　厚：0.3～0.4							
47	叩石	長：18.4　幅：5.8　厚：4.2　重：714.8g							側面敲打痕。
48	台石	長：29.2　幅：22.1　厚：11.7							上面磨り痕。
49	石皿	長：15.7　幅：18.8　厚：7.9　重：2746.3g							上面磨り痕。
50	磨石	長：6.1　幅：3.9　厚：3.9　重：46.1g							表面磨り痕。
51	磨石	長：4.9　幅：4.0　厚：3.0　重：67.4g							表面磨り痕。
52	砥石	長：13.5　幅：7.7　厚：5.1　重：575.3g							各面磨り痕、正面斜位刃研磨痕。

第13号住居跡（第24・25図、第9表）

［位　　置］　22・23―28・29グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は正方形に近いが、主軸方向が多少短くなる。主軸方向はN―17°―Wを示す。北西から南東へ緩い傾斜で下がる地形に造られているため、南東での遺存状況は良くない。規模は長軸4.97m、短軸4.46mで、最も遺存の良い北東での残存壁高は0.22mである。

［　　床　　］　凹凸があり、壁際を除いて硬化が認められる。カマド前面の周辺では、焚口に向って次第に下がっている。

［覆　　土］　ロームブロックや焼土粒を含む暗褐色土を主体とし、床面直上には炭化粒を多量に含む層が堆積している。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられ

る。

［カ　マ　ド］　北壁中央やや東寄りに造られている。奥行きは1.55mで内1.22mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.73mである。袖部は検出されていない。燃焼部側壁は被熱による焼土化が顕著で、かなり硬く焼け締まっている。側壁には灰黄褐色シルト質土が貼られていて、層の厚さは最大で0.06mである。これを除去した後の地山でも硬く焼け締まった面が検出されていて、新旧２面の側壁が確認されている。燃焼部は次第に下がって深くなり、床面から0.16mほどの高低差がある。底面は丸みを持ち、奥壁に向かって緩い上がり傾斜となっている。奥壁は約50°の角度で立ち上がっている。煙道部は燃焼部から約0.32m高くなり、わずかな上がり傾斜で延びている。長さは0.64m、幅は燃焼部際で0.32mである。

［壁　周　溝］　北壁のカマド両脇を除いて検出されている。規模は幅0.09～0.34m、深さ0.07～0.12mである。

［貯　蔵　穴］　貯蔵穴と想定される掘り込みが南東隅から検出されている。長軸0.79m、短軸0.67mの楕円形で、床面からの深さは0.22mである。

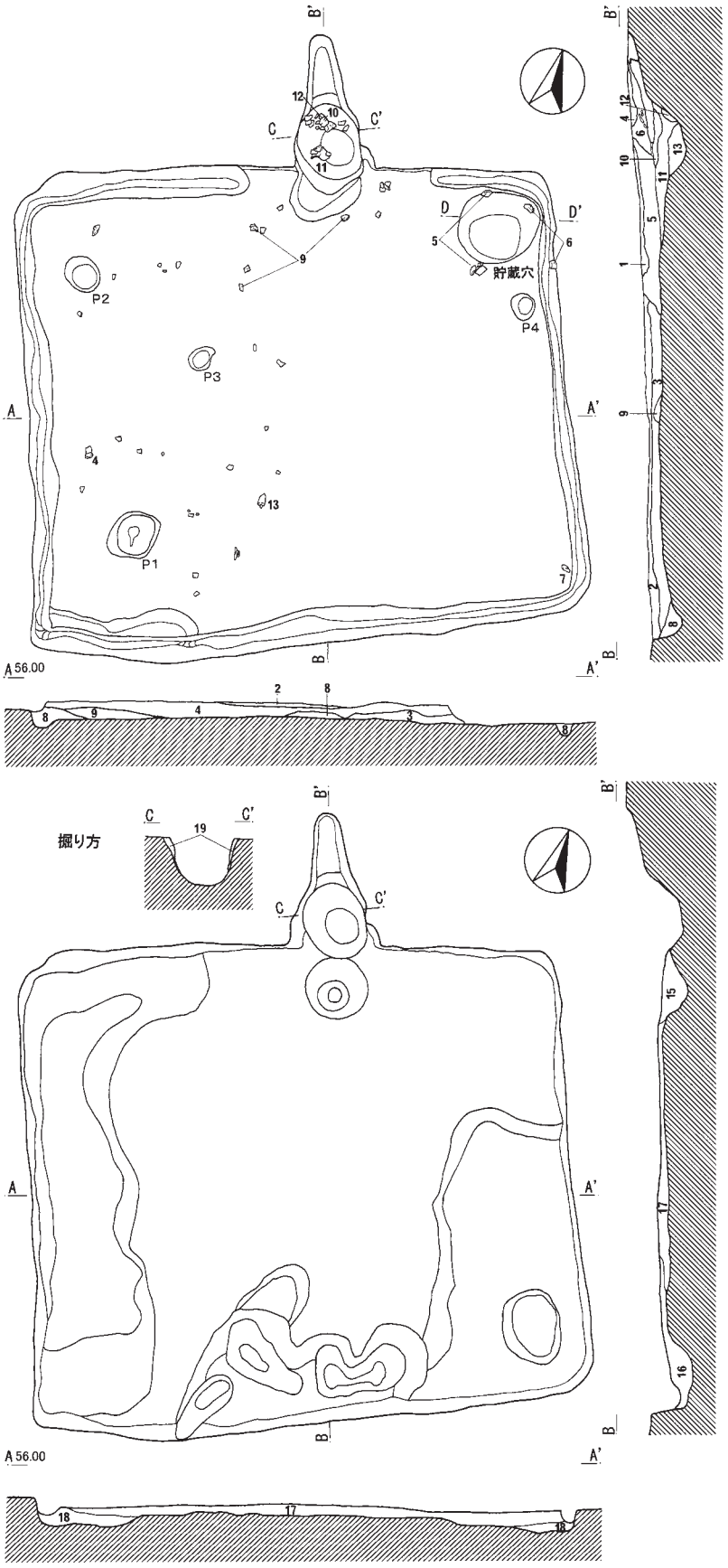
［ピ　ッ　ト］　４基検出されている。Ｐ１は南西角寄り、Ｐ２は北西角寄り、Ｐ３は中央やや西寄り、Ｐ４は東壁際の北寄りから検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.42×0.33mの隅丸長方形で深さ0.10m、Ｐ２は0.37×0.29mの楕円形で深さ0.14m、Ｐ３は0.27×0.20mの不整楕円形で深さ0.04m、Ｐ４は0.25×0.22mの楕円形で深さ0.09mである。

Ｐ１、Ｐ２は位置的に柱穴の可能性が考えられる。

［掘　り　方］　黒褐色土や焼土粒を含む黄褐色土を貼って床を構築している。中央部では0.04～0.11mの厚さで貼られ、良く締まっている。西壁際と東壁南過半では、掘り方はやや深くなり、床面から深さで0.11～0.23mほどある。南壁際では不整形に掘り込まれ、最も深いところで、床面から0.30mである。カマド前面には直径0.30m、床面からの深さは0.28mの円形の掘り込みが検出されている。覆土は、焼土、炭化物を含む暗褐色土で、上面は床として硬く締まっている。貼床を除去した後の掘り方底面は、起伏があり凹凸が著しい。

［出 土 遺 物］　主に東側に出土している。土師器坏４点（１～４）、須恵器坏６点（５～10）、土師器甕５点（11～15）を図示した。４は床直上の西壁際、６・７は北東寄り、８は床直上の南東隅、10はカマド前面、11・14はカマド内、15は中央やや南寄り、他は覆土中から出土している。

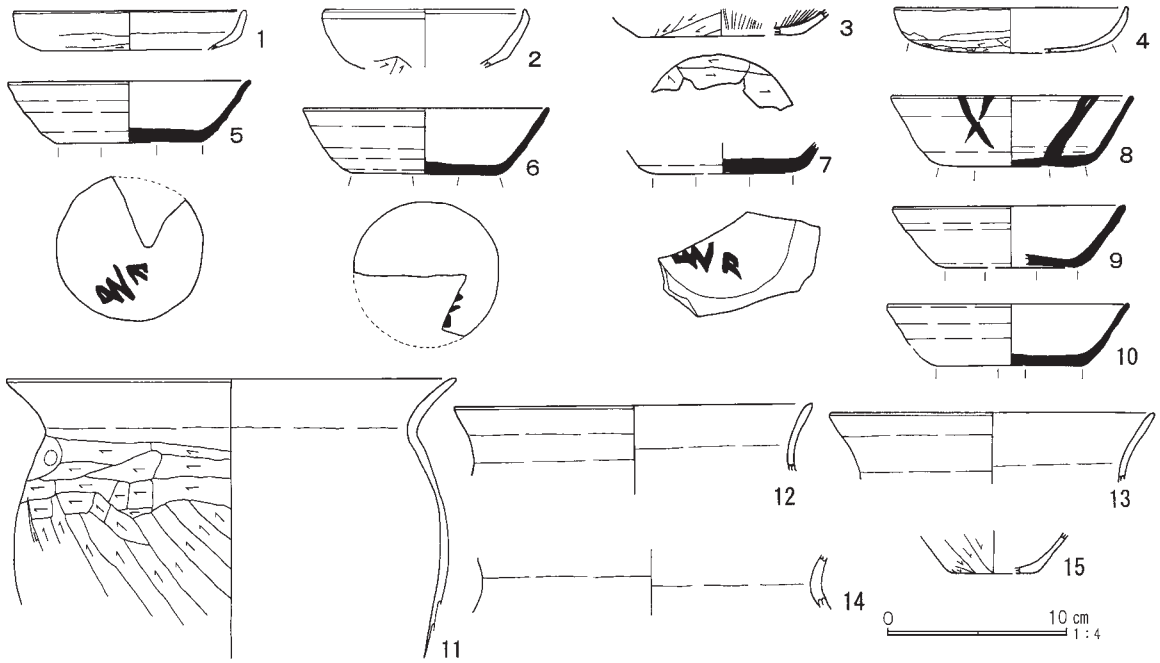
［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀後半～９世紀前半と考えられる。



SI13（A－A'～D－D'）

1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロック及び粒子。ハードロームブロックをやや多く含む。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を少量含む。
3　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。
4　明赤褐色土　焼土層。
5　暗褐色土　粘性有り。しまり強。シルト粒多く含む。焼土ブロックを少量含む。
6　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロックを少量含む。シルト質。
7　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロック及び粒を多く含む。
8　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及び粒を多く含む。
9　暗褐色土　粘性有り。しまり強。炭化粒を多量に含み、炭化物及び焼土粒を少量含む。
10　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロック及び粒を多量に含む。
11　暗褐色土　粘性有り。しまり強。シルトブロックを多量に含み、焼土粒を少量含む。
12　にぶい黄褐色土　粘性強。しまり強。シルト質。
13　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロックを少量含み、ソフトローム粒を多く含む。
14　褐色土　粘性なし。しまり普通。焼土、炭化物を含む。ソフトローム粒を含む。火山灰をかすかに含む。
15　暗褐色土　粘性有り。しまり弱、床面は強。焼土、炭化物含むハードロームブロック粒含む。
16　褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック粒多く含む。
17　黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームと黒褐色土の複合層。
18　褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック粒多く含む。
19　灰黄褐色土　粘性有り。しまり強。シルト質。中位から上方では焼土化して赤褐色を呈する。

第24図　第13号住居跡・掘り方



第25図　第13号住居跡出土遺物

第９表　第13号住居跡出土遺物観察表（第25図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	(13.0)	(2.2)	(9.8)	EI	橙色	A	口～底部片	体部外面手持ヘラケズリ。
2	土師器坏	(11.0)	(3.3)	—	ABDI	橙色	A	口～底部片	体部外面下端縦位・斜位ヘラケズリ。
3	土師器坏	—	(1.4)	(9.0)	ABIK	橙色	B	体～底20%	体部下端～底部外面ヘラケズリ、内面暗文。
4	土師器坏	(12.8)	(2.5)	(4.0)	ABIKN	橙色	A	口～底25%	体部下端～底部手持ヘラケズリ。
5	須恵器坏	13.5	3.4	8.0	ABFN	灰白色	A	80%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面墨書「足刀」、南比企産。
6	須恵器坏	(13.6)	(3.7)	(8.2)	ABFN	灰白色	A	50%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面墨書「足刀？」、南比企産。
7	須恵器坏	—	(1.7)	(7.8)	ABFHN	明褐灰色	A	底部50%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面墨書「足刀」、南比企産。
8	須恵器坏	(13.3)	3.9	(8.2)	ABF	灰白色	B	50%	底部周辺回転ヘラケズリ、火ダスキ痕、南比企産。
9	須恵器坏	(13.0)	(3.5)	(7.4)	ABFIN	灰白色	A	60%	底部周辺回転ヘラケズリ、南比企産。
10	須恵器坏	(13.4)	(3.5)	(8.2)	ABFHIN	灰色	A	60%	底部周辺回転ヘラケズリ、南比企産。
11	土師器甕	(25.0)	(14.0)	—	ABIK	橙色	A	口～胴25%	胴部外面上端横位ヘラケズリ・中場斜位ヘラケズリ。
12	土師器甕	(20.0)	(3.8)	—	ABIKN	橙色	B	口縁部片	
13	土師器甕	(18.0)	(3.9)	—	ABIKN	橙色	A	口縁部10%	
14	土師器甕	—	—	—	ABI	橙色	A	頸部片	
15	土師器甕	—	(2.2)	(4.0)	ABI	橙色	A	底部片	胴部外面下端斜位ヘラケズリ。

第14号住居跡（第26・27図、第10表）

［位　　置］　26・27―26・27グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　主軸方向が長軸となる長方形である。主軸方向はN―85°―Eを示す。規模は長軸3.62m、短軸2.87mで、残存壁高は最も深いところで0.42mである。

［　床　］　やや凹凸がある。中央から北東にかけてはハードローム層を直接床としている。

［覆　　土］　炭化物を含む褐色土、暗褐色土が堆積する。最上層では黒褐色土がレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。また、第９号住居跡と類似している。

［カ　マ　ド］　東壁中央やや南寄りに位置する。奥行きは0.90mで内0.59mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.69mである。袖部は検出されていない。燃焼部は急激に下がって深くなり、床面から0.13mほどの高低差がある。底面は丸みを持ち、奥壁に向かって上がり傾斜となっている。奥壁は約55°の角度で立ち上がっている。

［壁　周　溝］　北壁西過半から東壁北過半にかけて検出されている。規模は幅0.09～0.16m、深さ0.05m前後である。

［貯　蔵　穴］　貯蔵穴と想定される掘り込みが２基検出されている。貯蔵穴１は南東隅に検出されている。規模は長軸1.06m、短軸0.64mの不整楕円形で、底面の東端と西端ではピット状にさらに深くなり、それぞれオーバーハングしている。床面からの深さは東で0.53m、西で0.48mである。貯蔵穴２は中央やや北寄りに検出されている。規模は長軸0.83m、短軸0.74mの楕円形で、床面からの深さは0.29mである。

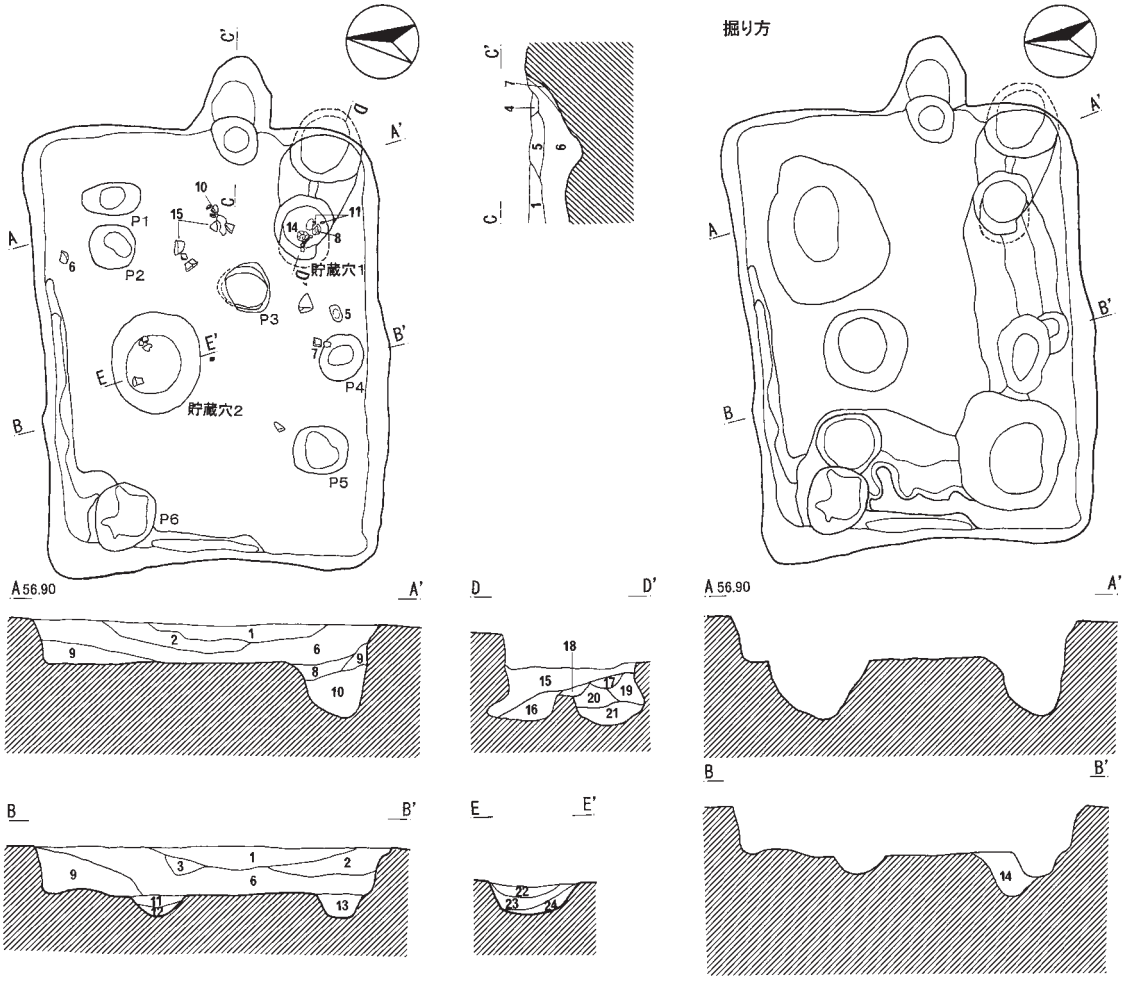
［ピ　ッ　ト］　６基検出されている。Ｐ１・２は北東寄り、Ｐ３は中央やや南東寄り、Ｐ４は南壁際の中央、Ｐ５は南西寄り、Ｐ６は北西寄りから検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.50×0.26mの楕円形で深さ0.28mである。Ｐ２は直径0.39mの円形で深さ0.39m、Ｐ３は0.43×0.35mの楕円形で、北側面はわずかにオーバーハングし、深さ0.24mである。Ｐ４は0.42×0.35mの楕円形で深さ0.20m、Ｐ５は0.46×0.39mの楕円形で深さ0.18m、Ｐ６は0.59×0.50mの楕円形で深さ0.34mである。

Ｐ２、Ｐ５及び貯蔵穴の西端のピット状の掘り込みは柱穴の可能性が考えられる。また、Ｐ６は少しずれるが柱穴の可能性も考えられる。

［掘　り　方］　中央から南と西寄りでは溝状に掘り込まれているが、中央部は平坦で、地山を直接床としている。北東角寄りと南西角寄りには土坑状の掘り込みが検出されている。規模は北東のものが長軸1.24m、短軸0.97mの不整楕円形で、床面からの深さは0.52m、南西のものが長軸0.94m、短軸0.91mの隅丸方形で、床面からの深さは0.40mである。

［出 土 遺 物］　全体に点在し覆土中から出土していて、出土量は比較的少ない。墨書（「蔵」？）された須恵器坏（６）が出土している。土師器坏３点（１～３）、須恵器坏６点（４～７・10・11）、須恵器埦１点（９）、土師器甕３点（12～14）、須恵器鉢１点（15）、流れ込みと考えられる石錘１点（16）を図示した。５・７は南壁際中央、６は北壁際やや東寄り、８・11・14は南東寄り、10・15は中央東寄り、他は覆土中から出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀後半～９世紀前半と考えられる。

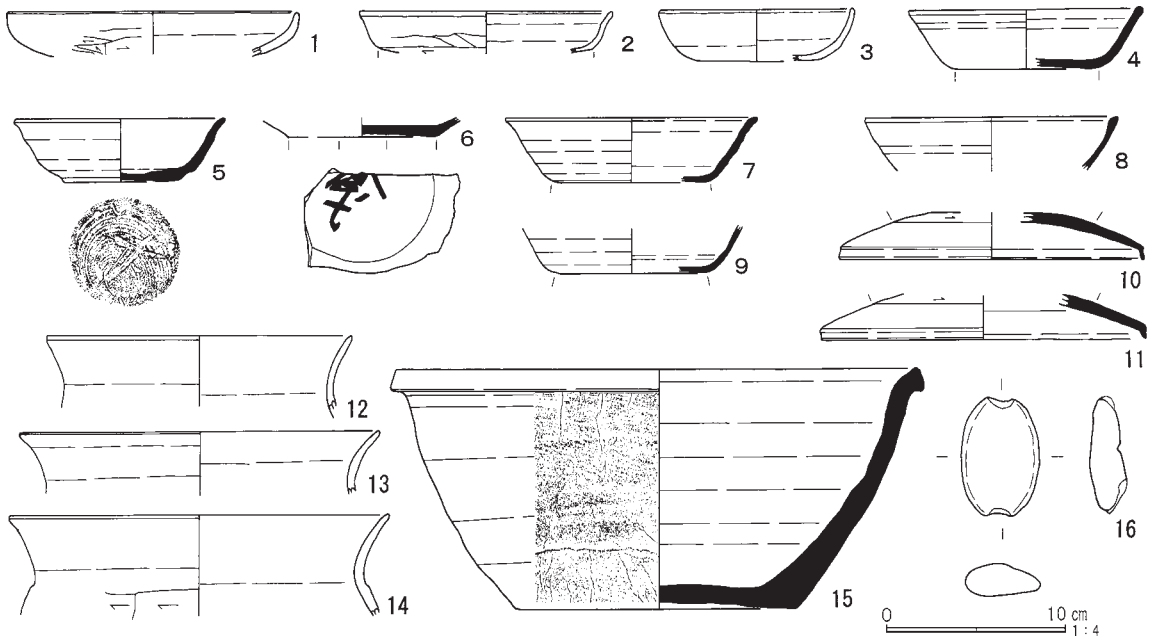


SI14（A−A'～E−E'）

1　黒褐色土　粘性なし。しまり普通。炭化物、焼土微量含む。ソフトローム粒ややまじる。
2　褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック及びソフトローム粒ややまじる。
3　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。炭化物、焼土微量含む。ハードロームブロック少量含む。
4　明赤褐色土　焼土層
5　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。焼土含む。ソフトローム粒含む。
6　黒褐色土　粘性なし。しまり普通。炭化物を微量含む。
7　褐色土　粘性弱。しまり普通。ソフトローム粒を多く含む。
8　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。焼土含む。炭化物微量含む。
9　暗褐色土　粘性弱。しまり弱。焼土、炭化物微量含む。
10　黒褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒わずかに含む。
11　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。焼土含む。ソフトローム粒含む。
12　明赤褐色土　焼土層。
13　褐色土　粘性弱。しまり普通。ソフトローム粒を多く含む。
14　褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック含む。ソフトローム粒多く含む。
15　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。焼土ブロックを少量含む。
16　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
17　暗褐色土　粘性強。しまり強。ソフトローム粒を少量含み、焼土粒及び炭化物を少量含む。
18　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。
19　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含む。
20　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
21　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、焼土粒、炭化粒を少量含む。
22　暗褐色土　粘性なし。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。焼土ブロック及び焼土粒微量。
23　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多量に含む。
24　にぶい赤褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロックをやや多く含み、焼土粒を多く含む。焼化物を微量含む。

0　2m　1：60

第26図　第14号住居跡・掘り方



第27図　第14号住居跡出土遺物

第10表　第14号住居跡出土遺物観察表（第27図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	(16.2)	(2.4)	(11.0)	ABIK	橙色	A	口～底部片	体部外面手持ヘラケズリ。
2	土師器坏	(14.0)	(2.3)	—	BI	橙色	A	口～底20%	底部外面手持ヘラケズリ。
3	土師器坏	(10.6)	(2.9)	(7.1)	AB	にぶい橙色	B	口～底部片	
4	須恵器坏	(13.0)	(3.4)	(8.0)	ABE	褐灰色	A	口～底50%	底部全面回転ヘラケズリ、末野産。
5	須恵器坏	11.7	3.5	6.5	ABFIJN	黄灰色	A	90%	底部回転糸切り離し、底部外面「×」記号、南比企産。
6	須恵器坏	—	(1.1)	(8.3)	ADF	灰オリーブ色	A	底部60%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面墨書「蔵」、南比企産。
7	須恵器坏	(14.0)	(3.6)	(9.0)	ABEIJN	黄灰色	A	口～底10%	底部回転ヘラケズリ、末野産。
8	須恵器埦	(14.1)	(3.0)	—	ABF	灰黄褐色	A	口縁部10%	南比企産。
9	須恵器坏	—	(2.5)	(8.4)	ABIN	褐灰色	A	体～底20%	底部回転ヘラケズリ、末野産。
10	須恵器蓋	(17.0)	(2.6)	—	ABEF	灰色	A	天口縁10%	天井部外面回転ヘラケズリ、南比企産。
11	須恵器蓋	(18.0)	(2.5)	—	ABEF	灰色	A	天口縁10%	天井部外面回転ヘラケズリ、南比企産。
12	土師器甕	(17.0)	(4.5)	—	ABEIJ	明赤褐色	A	口～頸部片	
13	土師器甕	(20.0)	(3.5)	—	ABEIJK	橙色	B	口縁部片	
14	土師器甕	(21.0)	(5.7)	—	ABK	橙色	A	口～頸25%	頸部外面横位ヘラケズリ。
15	須恵器鉢	28.8	13.3	15.7	ABCDEF	淡橙色	A	90%	胴部外面平行タタキ、南比企産、SI15との接合有。
16	石錘	長：5.0　幅：3.3　厚：1.3　重：32.7g							

第15号住居跡（第28・29図、第11表）

［位　　置］　26・27―26グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

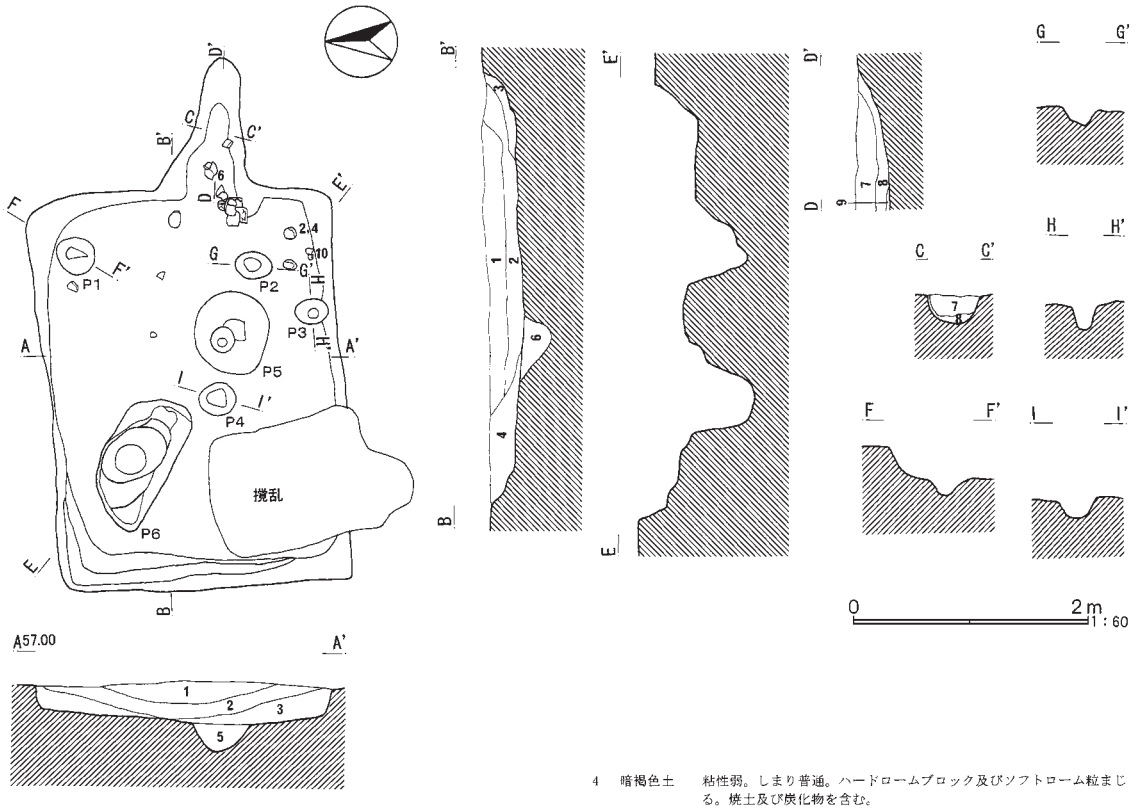
［平面形・規模］　主軸方向が長軸となる長方形である。主軸方向はN―90°―Eを示す。規模は長軸3.32m、短軸2.50mで、残存壁高は最も深いところで0.34mである。なお、南側の一部が撹乱を受けている。

［　床　］　地山を直接床としている。やや凹凸がある。北寄りが高く、南に向かってわずかに下り傾斜になっていて、最も高い北壁寄りと最も低い南壁寄りでは0.11mほどの高低差がある。

［掘　り　方］　なし。

［覆　　土］　炭化物を含む褐色土、暗褐色土が堆積する。最上層では黒褐色土がレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。また、第８号住居跡と類似している。

［カ　マ　ド］　東壁中央やや南寄りに造られている。奥行きは1.30mで内1.09mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.79mである。袖部は検出されていないが、南部でわずかに地山の高まりが遺存している。燃焼部は床面と同じ高さで続いている。底面はほぼ平坦である。煙道部は燃焼部奥壁から0.04mほど高くなり、68°の角度で湾曲して立ち上がっている。



SI15（A～A'～D―D'）

1　黒褐色土　粘性なし。しまり普通。炭化物、焼土微量含む。ソフトローム粒ややまじる。

2　褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック及びソフトローム粒若干まじる。

3　暗褐色土　粘性弱。しまり普通。ハードロームブロック及びソフトローム粒まじる。

4　暗褐色土　粘性弱。しまり普通。ハードロームブロック及びソフトローム粒まじる。焼土及び炭化物を含む。

5　褐色土　粘性なし。しまり弱。ハードロームブロック及びソフトローム粒まじる。炭化物含む。

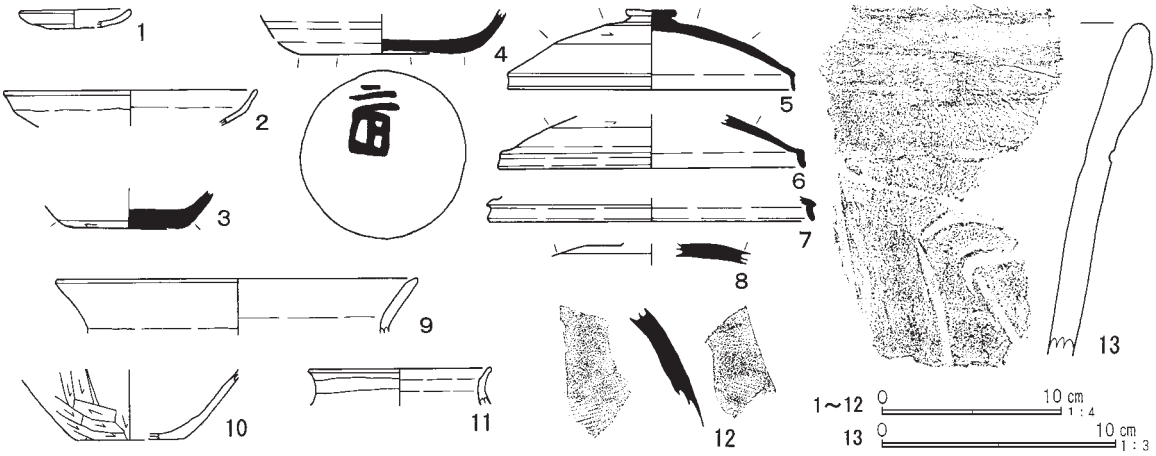
6　褐色土　粘性弱。しまり普通。ソフトローム粒多くまじる。

7　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。焼土ブロック及び粒多量に含む。

8　褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック及びソフトローム粒多く含む。焼土含む。

9　褐色土　ローム主体。

第28図　第15号住居跡



第29図　第15号住居跡出土遺物

第1表　第15号住居跡出土遺物観察表（第29図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	(6.0)	(1.0)	(3.0)	BI	橙色	B	口～底20%	
2	土師器坏	(14.0)	(2.0)	—	ABIK	橙色	A	口～体部片	
3	須恵器坏	—	(2.1)	6.2	ABIN	灰色	A	底部100%	底部全面回転ヘラケズリ。
4	須恵器坏	—	(2.2)	9.2	ABFN	灰色	A	底部100%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面墨書「二□」?、南比企産。
5	須恵器蓋	(16.0)	(4.4)	鈕径(2.8)	ABDEF	灰色	A	50%	天井部外面回転ヘラケズリ、ボタン状鈕、南比企産。
6	須恵器蓋	(17.0)	(2.9)	(8.4)	ABIK	黒褐色	A	口縁部10%	天井部外面回転ヘラケズリ。
7	須恵器蓋	(18.0)	(1.3)	—	ABF	灰色	A	口縁部10%	南比企産。
8	須恵器蓋	—	—	—	ABF	灰色	A	天井部片	天井部外面回転ヘラケズリ、南比企産。
9	土師器甕	(20.0)	(3.1)	—	ABIJK	明褐色	A	口縁部片	
10	土師器甕	—	(3.8)	(6.0)	ABIJK	橙色	A	胴～底20%	胴部外面下端斜位・横位ヘラケズリ。
11	土師器台付甕	(10.0)	(2.0)	—	ABI	橙色	A	口縁部片	
12	須恵器甕	—	—	—	ABF	にぶい黄色	A	胴部片	胴部外面平行タタキ、南比企産。
13	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDEHKN	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	沈線文、称名寺式。

［壁　周　溝］　検出されていない。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　６基検出されている。このうち、Ｐ５・６は他のものと比べて、規模が大きい。Ｐ１は北東寄り、Ｐ２南東寄りのカマド付近、Ｐ３は南壁際のやや東寄り、Ｐ４はほぼ中央、Ｐ５は中央南東寄り、Ｐ６は北西寄りから検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.33×0.30mの楕円形で深さ0.12m、Ｐ２は0.31×0.23mの楕円形で深さ0.20m、Ｐ３は0.27×0.21mの楕円形で深さ0.21m、Ｐ４は29×0.27mの円形で深さ0.15m、Ｐ５は0.68×0.62mの楕円形で深さ0.48m、Ｐ６は1.12×0.58mの不整楕円形で中央は0.60×0.39mでピット状に深くなり、深さ最大で0.62mである。

Ｐ１、Ｐ２、Ｐ６の最深部は、柱穴の可能性が考えられる。また、柱穴の存在が想定される南西部は大きく撹乱を受けていて不明である。

［出 土 遺 物］　主に南東隅やカマド内から出土しているが、出土量は比較的少ない。その中には墨書された須恵器坏が見られた。土師器坏２点（１・２）、須恵器坏２点（３・４）、須恵器蓋４点（５～８）、土師器甕２点（９・10）土師器台付甕１点（11）、須恵器甕１点（12）、流れ込みと考えられる縄文土器深鉢（13）を図示した。１・３は床直上南東隅、５はカマド内、９は南壁東寄り、他は覆土中から出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀後半～９世紀前半と考えられる。

第16号住居跡（第30・31図、第12表）

［位　　置］　29―20・21グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は主軸方向が短軸となる長方形である。主軸方向はN―21°―Wを示す。規模は長軸4.19m、短軸3.44mで、残存壁高は0.39mである。なお、遺構上面が広く撹乱を受けている。

［　床　］　床面は起伏がある。ほぼ全体が、ロームブロックを含む褐色土を用いて貼床されている。層上面は硬く締まっている。

［覆　　土］　ローム粒や焼土粒を含む褐色土やにぶい黄褐色土を主体とし、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　北壁中央やや東寄りに造られている。主軸方向はやや東に向きN―18°―Wである。奥行きは1.23mで内0.83mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.80mである。袖部は検出されていない。内壁や火床面の被熱痕は明瞭ではない。カマド内覆土の中層には焼土ブロックの層が確認さている。燃焼部にあたる箇所はピット状に深くなり、床面から0.21mほどの高低差がある。奥壁にかけては緩い上がり傾斜で延び、先端部では約73°の角度で立ち上がっている。

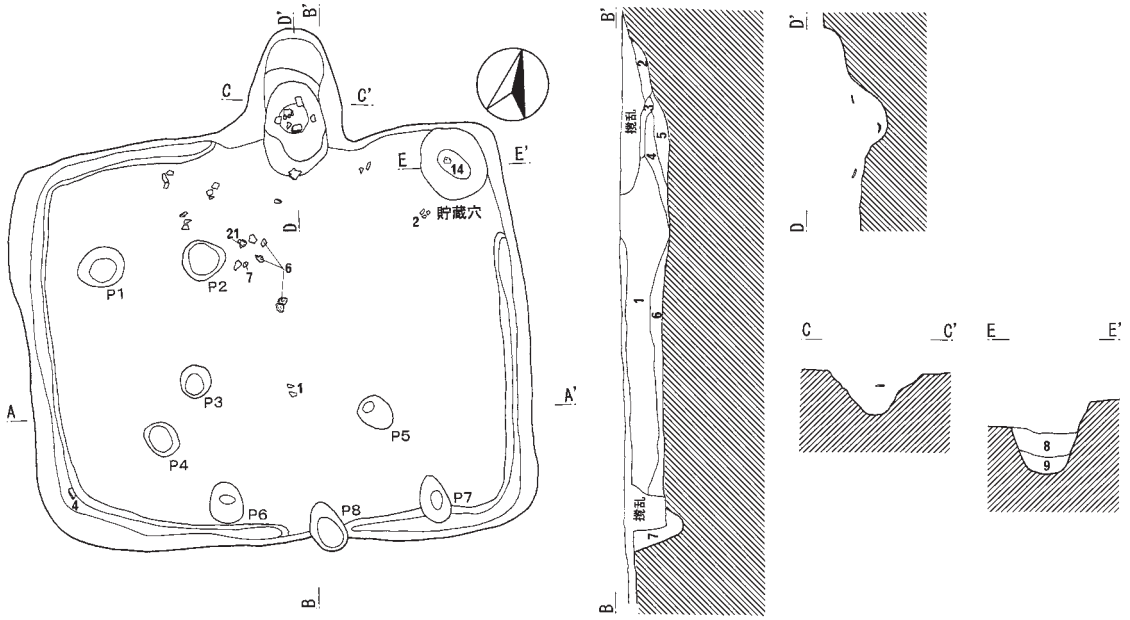
［壁　周　溝］　カマドから西の一部と東側、東壁の北寄り、南壁のＰ８を挟んだ両脇を除いて検出されている。規模は幅0.08～0.17m、深さ0.04～0.13mである。

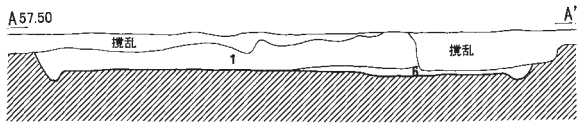
［貯　蔵　穴］　貯蔵穴と想定される掘り込みが、東隅から検出されている。長軸0.63m、短軸0.53mの楕円形で、床面からの深さは0.41mである

［ピ　ッ　ト］　８基検出されている。Ｐ１・２北西寄り、Ｐ３・４は南西寄り、Ｐ５は南東寄り、Ｐ６は南壁際やや西寄り、Ｐ７は南壁東寄り、Ｐ８は南壁面に検出されている。この中でＰ８は、カマドと同軸線上にあり、壁周溝も本ピット周辺で切れていることから、出入り口に係わるピットの可能性が高い。それぞれの規模は、Ｐ１は0.41×0.33mの楕円形で深さ0.22m、Ｐ２は0.36×0.34mの不整円形で深さ0.10m、Ｐ３は直径0.25mの円形で深さ0.11m、Ｐ４は0.30×0.25mの楕円形で深さ0.14m、Ｐ５は0.30×0.25mの楕円形で深さ0.34m、Ｐ６は0.35×0.27mの楕円形で深さ0.14m、Ｐ７は0.42×0.17mの楕円形で深さ0.17m、Ｐ８は0.47×0.27mの楕円形で深さ0.15m、Ｐ７は0.42×0.17mの楕円形で深さ0.17m、Ｐ８は0.47×0.27mの楕円形で深さ0.15mである。

Ｐ１、Ｐ４、Ｐ５は柱穴の可能性が考えられている。

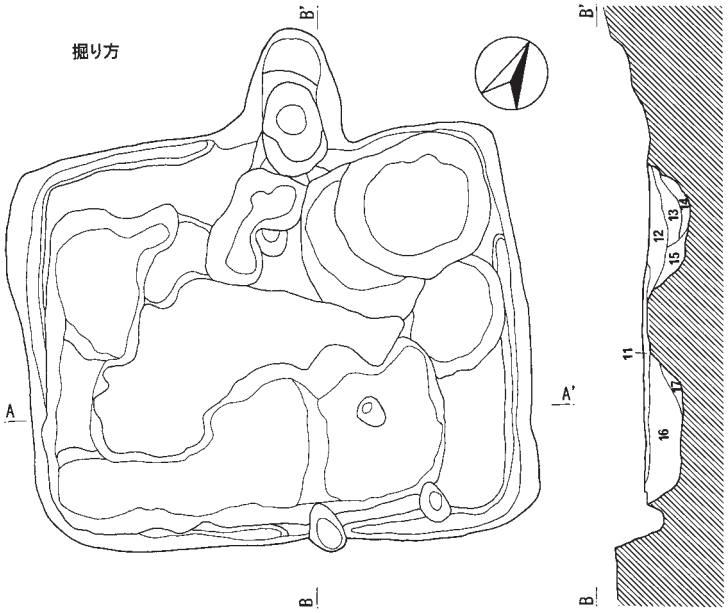
［掘　り　方］　中央部と南東部では貼床土の厚さは0.03mほどで、凹凸があるものの、ほぼ水平に

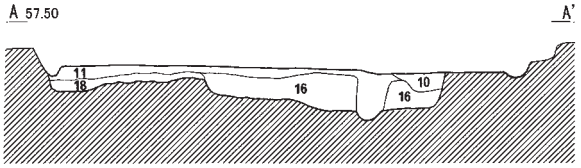




SI16（A−A'、B−B'、E−E'）

1　暗褐色土　粘性なし。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。
2　褐色土　粘性なし。焼土微量含む。ソフトローム及びハードロームブロック少量含む。
3　にぶい黄褐色土　粘性なし。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。
4　褐色土　粘性なし。焼土多く含む。
5　赤褐色土　粘性なし。しまり強。焼土層。
6　褐色土　粘性弱。焼土微量含む。ソフトローム粒及びハードロームブロック含む。
7　暗褐色土　粘性弱。焼土含む。炭化物微量含む。
8　褐色土　粘性なし。ハードロームブロック多量に含む。
9　褐色土　粘性なし。ハードロームブロック少量含む。
10　褐色土　粘性なし。ハードロームブロック多量に含む。
11　褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック含む。ソフトローム粒含む。
12　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒を多量に含む。焼土微量に含む。
13　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり弱。ハードロームブロック多量に含む。焼土及び炭化物含む。
14　褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック粒を多く含む。焼土及び炭化物微量含む。
15　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック多量に含む。ソフトローム粒含む。
16　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり弱。ハードロームブロック多量に含む。焼土及び炭化物含む。
17　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック含む。
18　黄褐色土　粘性有り。しまり普通。ハードロームブロック含む。ソフトローム粒多く含む。



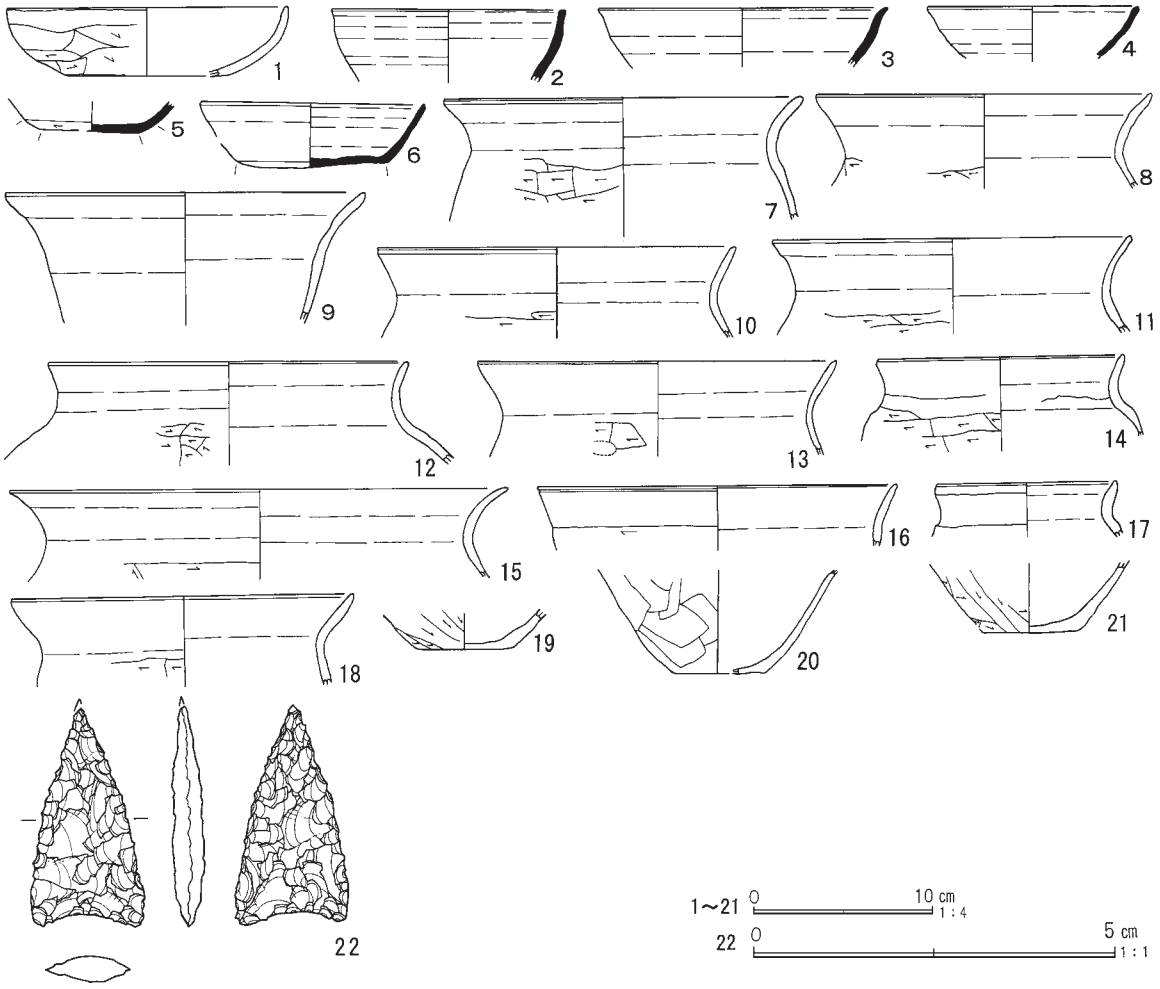


第30図　第16号住居跡・掘り方

地山が高く掘り残されている。この部分を除いて西半では不整形に掘り込まれ、床面からの深さは0.20〜0.28mである。東半では土坑状の掘り込みが切り合うように検出されていて、最も深い北東部では、床面からは0.46mである。いずれも、ロームブロックを多く含む黄褐色土やにぶい黄褐色土が充塡されている。

［出 土 遺 物］ 主に中央北寄りやカマド内から出土している。土師器坏１点（１）、須恵器坏４点（３〜６）、須恵器埦１点（２）、土師器甕13点（７〜13・15・16・18〜21）、土師器台付甕２点（14・17）、流れ込みと考えられる石鏃１点（22）を図示した。１は床直上の中央やや南寄り、２は床直上の北東寄り、６は床直上の中央やや北寄り、７・21は中央やや北寄り、14は貯蔵穴内、他は覆土中から出土している。

［時　　期］ 出土遺物からおおよそ８世紀後半〜９世紀前半と考えられる。



第31図　第16号住居跡出土遺物

第12表　第16号住居跡出土遺物観察表（第31図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	(15.4)	(3.8)	(8.8)	ABIK	橙色	A	口～底25%	体部外面手持ヘラケズリ。
2	須恵器埦	(13.0)	(4.1)	—	ABDEF	褐灰色	A	口縁部20%	南比企産。
3	須恵器坏	(16.0)	(3.3)	—	ABFN	灰黄色	B	口縁部片	南比企産。
4	須恵器坏	(11.6)	(2.9)	(7.4)	ABFN	灰色	A	口縁25%	南比企産。
5	須恵器坏	—	(1.8)	(5.4)	AB	灰色	A	体～底部片	底部全面回転ヘラケズリ。
6	須恵器坏	(12.4)	3.6	8.3	ABDEFN	灰色	A	70%	底部全面ヘラケズリ、南比企産。
7	土師器甕	(20.0)	(6.8)	—	ABDIJK	にぶい橙色	B	口～胴上片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
8	土師器甕	(18.6)	(5.2)	—	ABIJK	橙色	A	口～頸25%	頸部外面下端横位ヘラケズリ。
9	土師器甕	(20.0)	(7.3)	—	ABIJK	橙色	B	口～胴上片	
10	土師器甕	(20.0)	(5.0)	—	ABHI	橙色	B	口～胴上片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
11	土師器甕	(20.0)	(5.3)	—	ABIJKN	橙色	A	口～胴上片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
12	土師器甕	(20.0)	(5.8)	—	ABIJK	赤橙色	A	口～胴上片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
13	土師器甕	(20.0)	(5.3)	—	ABIJKN	明赤褐色	B	口～胴上片	胴部外面上端横位ヘラケズリ、指頭痕。
14	土師器台付甕	(13.6)	(4.6)	—	ABIK	にぶい赤橙色	B	口～胴上20%	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
15	土師器甕	(28.0)	(5.0)	—	ABIJK	橙色	B	口～頸片	胴部外面上端横・斜位ヘラケズリ。
16	土師器甕	(20.0)	(3.6)	—	ABIK	赤橙色	B	口縁部片	頸部外面横位ヘラケズリ。
17	土師器台付甕	(10.0)	(3.1)	—	ABI	赤橙色	B	口～頸20%	小型台付甕。
18	土師器甕	(19.0)	(5.1)	—	ABI	にぶい橙色	A	口～頸部片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
19	土師器甕	—	(2.2)	5.6	ABIJK	にぶい橙色	B	底部20%	胴部外面下端斜位ヘラケズリ。
20	土師器甕	—	(5.8)	(5.0)	ABIJ	にぶい橙色	B	胴～底20%	胴部外面下端斜位ヘラケズリ。
21	土師器甕	—	(3.9)	(5.0)	ABIJK	にぶい橙色	B	胴～底60%	胴部外面下端斜位・横位ヘラケズリ。
22	石鏃	長：(3.05)　幅：1.6　厚：0.42　重：1.78g　石材：チャート							凹基無茎、先端部欠損。

第17号住居跡（第32・33図、第13表）

［位　　置］　23・24―29・30グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　ほぼ正方形である。主軸方向は真北を示す。規模は長軸3.86m、短軸3.78mで、残存壁高は0.26mである。

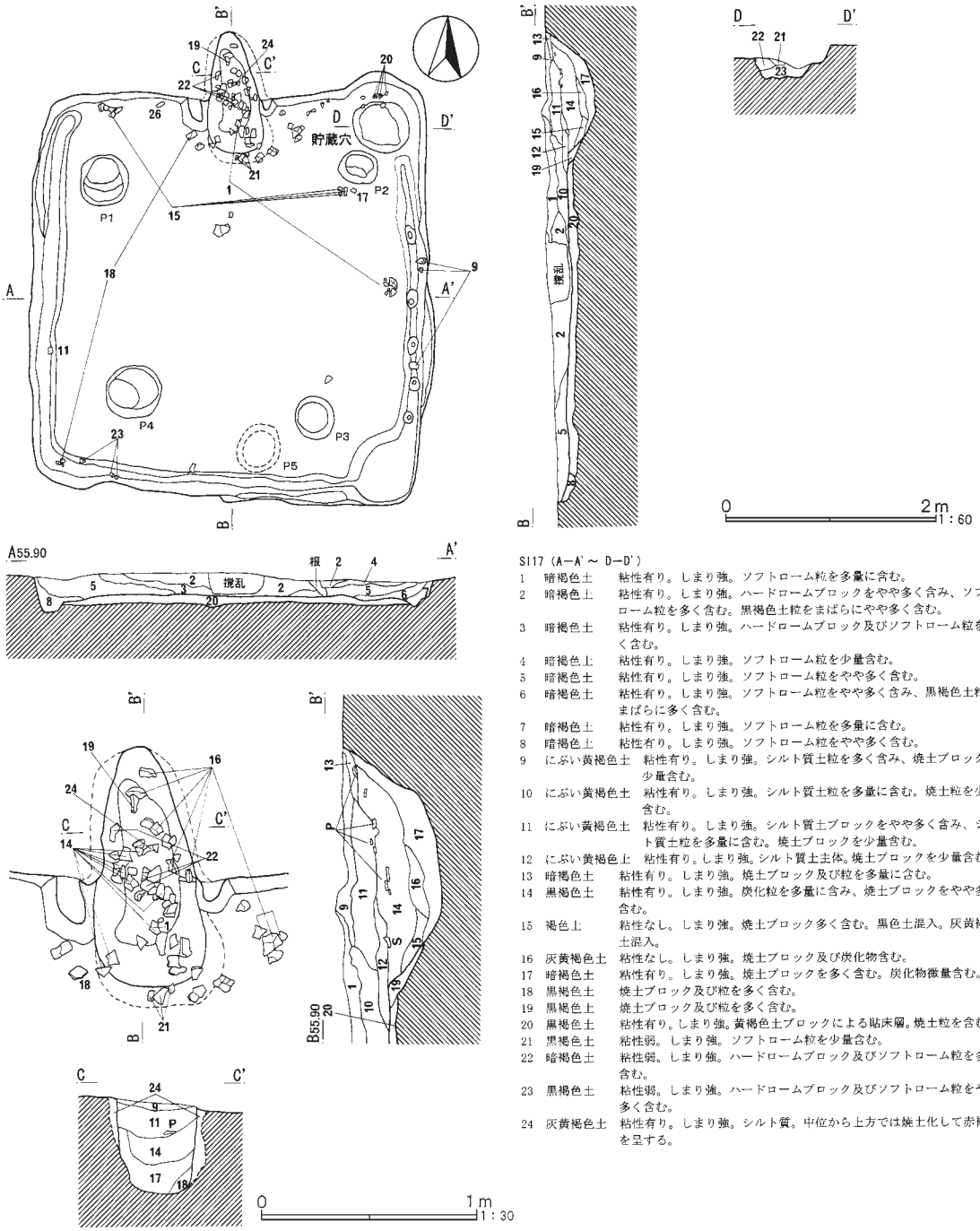
［　床　］　貼床が施された第１面と、その下の地山を床とした第２面が検出されている。第１面はハードロームブロックを含む黒褐色土が0.05～0.10mの厚さで貼られ、床を構築している。やや起伏があり、カマド前面から南壁手前までの中央部で硬化が認められる。第２面は起伏があり、カマド前面から床中央部にかけて硬化している。

［覆　　土］　ローム粒を含む暗褐色土を主体とし、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　北壁の中央に造られている。奥行きは1.15mで内0.66mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.44mである。袖は西袖で0.25m、東袖で0.12mほど遺存している。燃焼部は急激に下がって深くなり、床面から0.25mほどの高低差がある。底面は丸みを持ち、

奥壁は約60°の角度で立ち上がっている。底面の火床面は明瞭ではないが、燃焼部内壁では被熱による焼土化が顕著で、かなり硬く焼け締まっている。

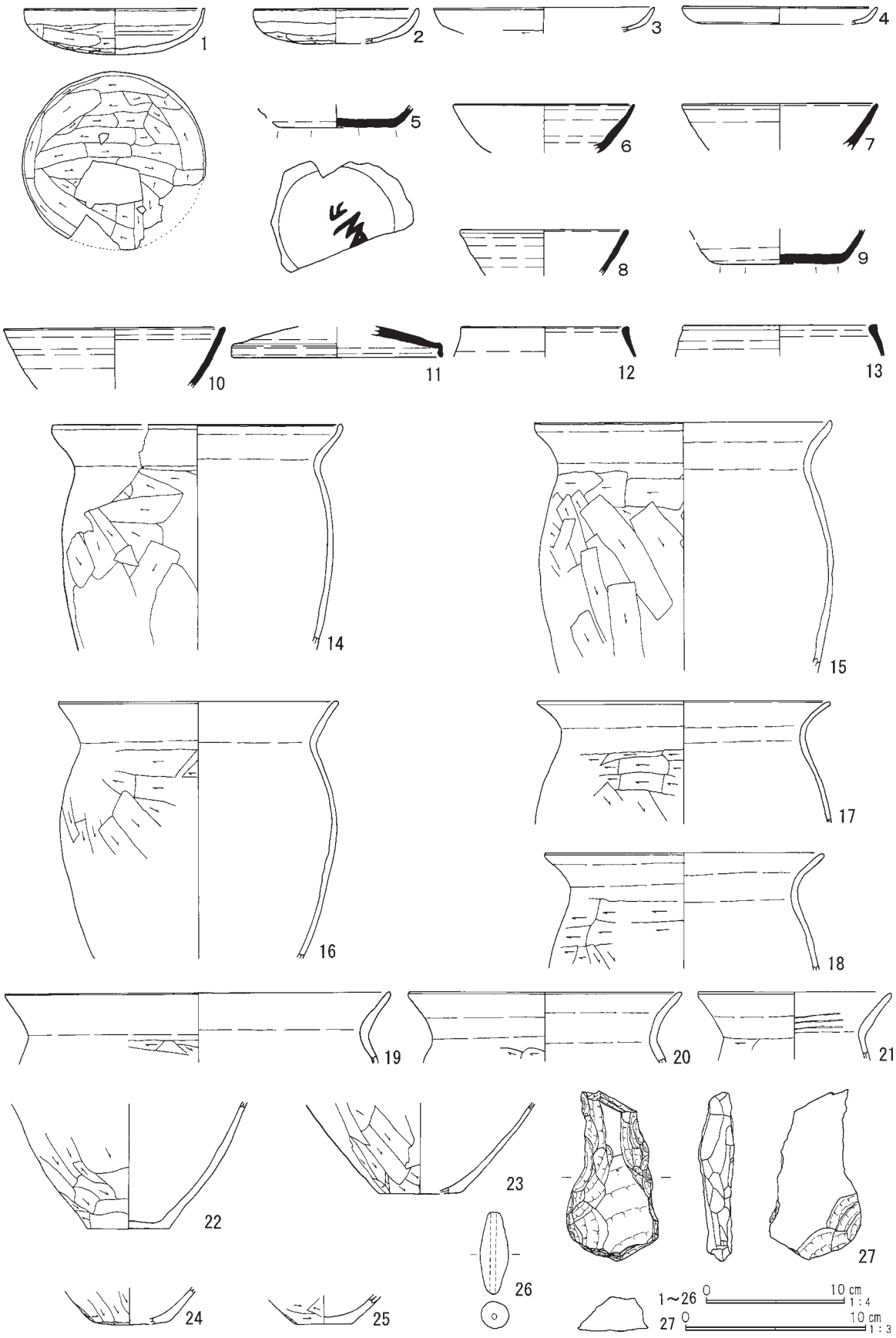
［壁　周　溝］　北壁を除いて検出されているが、東壁北寄りでは貯蔵穴手前で終結している。規模は幅0.16～0.30m、深さは0.04～0.08mである。南東隅では楕円形に広がる箇所がある。規模は長軸0.62m、短軸0.52mである。東壁際では、溝底面に長軸0.10～0.18m、短軸0.09m前後の楕円形で、溝底面からの深さは0.10m前後の小穴が５基検出されている。



SI17（A－A'～ D－D'）

1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒を多く含む。黒褐色土粒をまばらにやや多く含む。
3　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。
4　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
5　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
6　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含み、黒褐色土粒をまばらに多く含む。
7　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
8　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
9　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。シルト質土粒を多く含み、焼土ブロックを少量含む。
10　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。シルト質土粒を多量に含む。焼土粒を少量含む。
11　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。シルト質土ブロックをやや多く含み、シルト質土粒を多量に含む。焼土ブロックを少量含む。
12　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。シルト質土主体。焼土ブロックを少量含む。
13　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロック及び粒を多量に含む。
14　黒褐色土　粘性有り。しまり強。炭化粒を多量に含み、焼土ブロックをやや多く含む。
15　褐色土　粘性なし。しまり強。焼土ブロック多く含む。黒色土混入。灰黄褐色土混入。
16　灰黄褐色土　粘性なし。しまり強。焼土ブロック及び炭化物含む。
17　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロックを多く含む。炭化物微量含む。
18　黒褐色土　焼土ブロック及び粒を多く含む。
19　黒褐色土　焼土ブロック及び粒を多く含む。
20　黒褐色土　粘性有り。しまり強。黄褐色土ブロックによる貼床層。焼土粒を含む。
21　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
22　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。
23　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。
24　灰黄褐色土　粘性有り。しまり強。シルト質。中位から上方では焼土化して赤褐色を呈する。

第32図　第17号住居跡・カマド



第33図　第17号住居跡出土遺物

第13表　第17号住居跡出土遺物観察表（第33図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	12.8	3.3	1.5	BIJ	橙色	A	80%	体部～底部外面手持ヘラケズリ。
2	土師器坏	(11.8)	(2.5)	(4.2)	BIJ	にぶい橙色	A	口～底30%	体部外面横位ヘラケズリ。
3	土師器坏	(16.0)	(1.8)	—	BIJ	橙色	B	口縁部片	体部外面下端ヘラケズリ。
4	土師器坏	(14.0)	(1.2)	—	ABIJK	橙色	B	口縁部片	体部外面下端ヘラケズリ。
5	須恵器坏	—	(1.6)	(8.4)	ABFIN	灰黄色	B	底部70%	底部周辺回転ヘラケズリ、底部外面墨書「足刀」、南比企産。
6	須恵器坏	(13.0)	(3.5)	—	ABFIJ	黄灰色	B	口～体25%	南比企産。
7	須恵器坏	(14.1)	(3.3)	—	ABFG	灰白色	B	口縁部20%	南比企産。
8	須恵器坏	(12.0)	(3.3)	—	ABFJ	灰色	A	口縁部片	南比企産。
9	須恵器坏	—	(2.5)	8.4	ABFN	灰白色	A	底部70%	底部周辺回転ヘラケズリ、南比企産。
10	須恵器埦	(16.0)	(4.4)	—	AFGN	黒褐色	A	口～体20%	南比企産。
11	須恵器蓋	(15.0)	(2.2)	—	ABFN	灰色	A	口縁部片	天井部外面回転ヘラケズリ、南比企産。
12	須恵器短頸壺	(12.0)	(2.2)	—	ABFN	灰色	A	口縁部20%	南比企産。
13	須恵器短頸壺	(14.0)	(2.2)	—	ABFN	黄灰色	A	口縁部片	南比企産。
14	土師器甕	(20.7)	(16.2)	—	ABDIJK	橙色	A	口～胴25%	胴部外面上端横位ヘラケズリ・中場斜位ヘラケズリ。
15	土師器甕	(21.4)	(18.1)	—	ABDIJK	橙色	A	口～胴50%	胴部外面上端横位ヘラケズリ・中場斜位ヘラケズリ。
16	土師器甕	(20.0)	(18.5)	—	ABIJK	にぶい橙色	A	口～胴20%	胴部外面上端横位ヘラケズリ・中場斜位ヘラケズリ。
17	土師器甕	(21.0)	(8.8)	—	ABIJK	にぶい褐色	B	口胴上40%	胴部外面上端横・斜位ヘラケズリ。
18	土師器甕	(20.0)	(8.4)	—	ABIJK	にぶい赤褐色	B	口～胴上片	胴部外面上端横・斜位ヘラケズリ。
19	土師器甕	(28.0)	(14.0)	—	ABGK	橙色	A	口～胴上片	頸部外面横位ヘラケズリ。
20	土師器甕	(19.6)	(5.0)	—	ABIJ	にぶい赤褐色	B	口～頸部片	頸部外面上端横位ヘラケズリ。
21	土師器甕	(14.0)	(4.9)	—	ABIJK	橙色	A	口～頸部片	胴部外面上端横位ヘラケズリ。
22	土師器甕	—	(9.0)	(6.0)	ABIJ	にぶい橙色	A	胴～底50%	胴部外面上端斜位ヘラケズリ。
23	土師器甕	—	(6.5)	(6.0)	ABIJK	にぶい赤褐色	B	胴～底40%	胴部外面下端斜位ヘラケズリ。
24	土師器甕	—	(2.7)	(5.4)	ABGI	橙色	B	胴～底片	胴部外面下端縦位ヘラケズリ。
25	土師器甕	—	(1.8)	(4.0)	BIJ	橙色	B	胴～底片	胴部外面下端横・斜位ヘラケズリ。
26	土錘	長：5.9　幅：2.1　孔径：0.3			ABDF	にぶい黄橙色	A	100%	孔部外面指頭痕。
27	打製石斧	長：9.2　幅：5.0　厚：1.9　重：85.5g							

［貯　蔵　穴］　貯蔵穴と想定される掘り込みが北東隅から検出されている。長軸0.54m、短軸0.46の楕円形で、床面からの深さは0.19mである。

［ピ　ッ　ト］　ピットは床第１面で４基（Ｐ１～４）、床第２面で１基（Ｐ５）の計５基が検出されている。Ｐ１は北西寄り、Ｐ２は北東寄り、Ｐ３は南東寄り、Ｐ４は南西寄り、Ｐ５は床２面の南壁際中央やや東寄りから検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.50×0.48mの楕円形で、南側に中段があり最深部の深さは0.14mである。Ｐ２は0.36×0.31mの楕円形で深さ0.19m、Ｐ３は0.41×0.37mの楕円形で深さ0.09m、Ｐ４は直径0.43mの円形で深さ0.17m、Ｐ５は0.46×0.40mの楕円形で、床第２面からの深さ0.08mである。

Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４は柱穴の可能性が考えられる。

［出 土 遺 物］　散在して覆土中から出土しているが、特にカマド前面やカマド内から多く出土している。土師器坏４点（１～４）、須恵器坏５点（５～９）、須恵器椀１点（10）、須恵器蓋１点（11）、須恵器短頸壺２点（12･13）、土師器甕12点（14～25）、土錘１点（26）、流れ込みと考えられる打製石斧１点（27）を図示した。１は東壁際中央からで、カマド内出土の破片と接合している。９は東壁際、14・19・24はカマド内から出土している。15は北東寄り出土のものと北壁際西寄りのものが接合している。16はカマド内とカマド焚口の東側に散在して出土している。21はカマド前面、23は南西隅、他は覆土中から出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀後半～９世紀前半と考えられる。

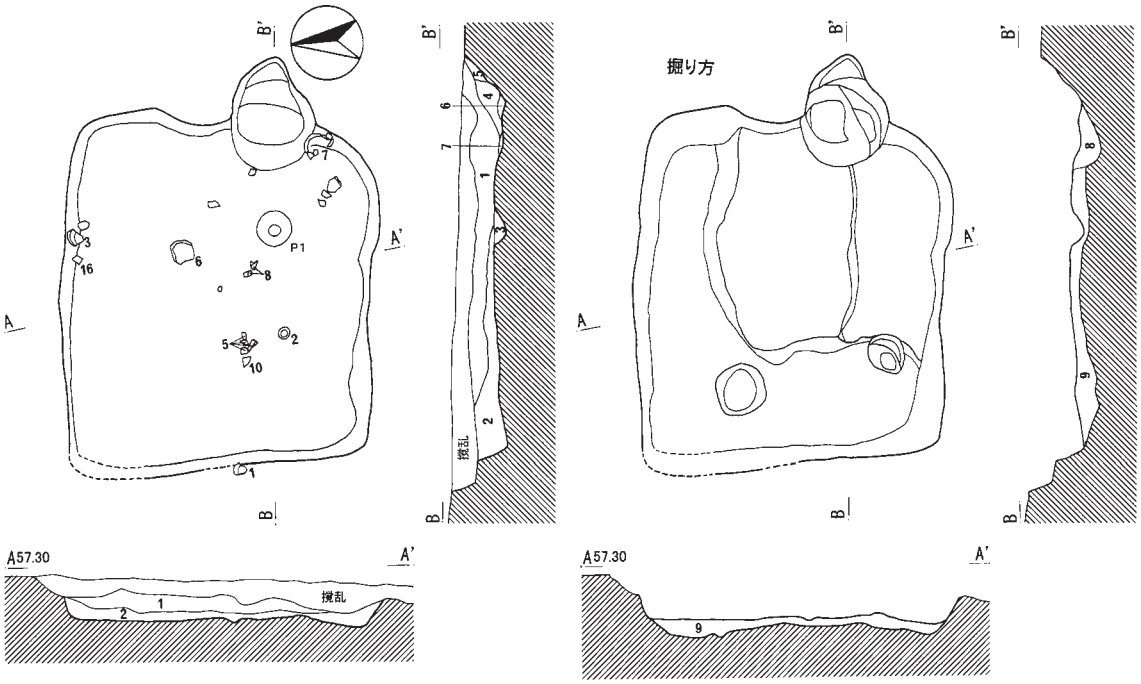
第18号住居跡（第34・35図、第14表）

［位　　置］　24・25―21・22グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　主軸方向が長軸となる長方形である。主軸方向はＮ―100°―Ｅを示す。規模は長軸3.04m、短軸2.06mで、残存壁高は最も深いところで0.49mである。なお、遺構上面が広く撹乱を受けている。

［　　床　　］　やや凹凸や起伏があり、中央部が周辺に対してわずかに高い。壁際を除いて硬化し



SI18（A―A'、B―B'）

1　褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック及びソフトローム粒わずかに含む。黒褐色土をまだらに含む。
2　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック含む。黒褐色土をまだらに含む。
3　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック含む。黒褐色土をまだらに含む。
4　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多量に含む。
5　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム主体。暗褐色土粒をやや多く含む。
6　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。焼土ブロックやや多く含む。
7　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、焼土ブロックを少量含む。
8　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、ハードロームブロックをやや多く含む。
9　暗褐色土　粘性弱。しまり普通。

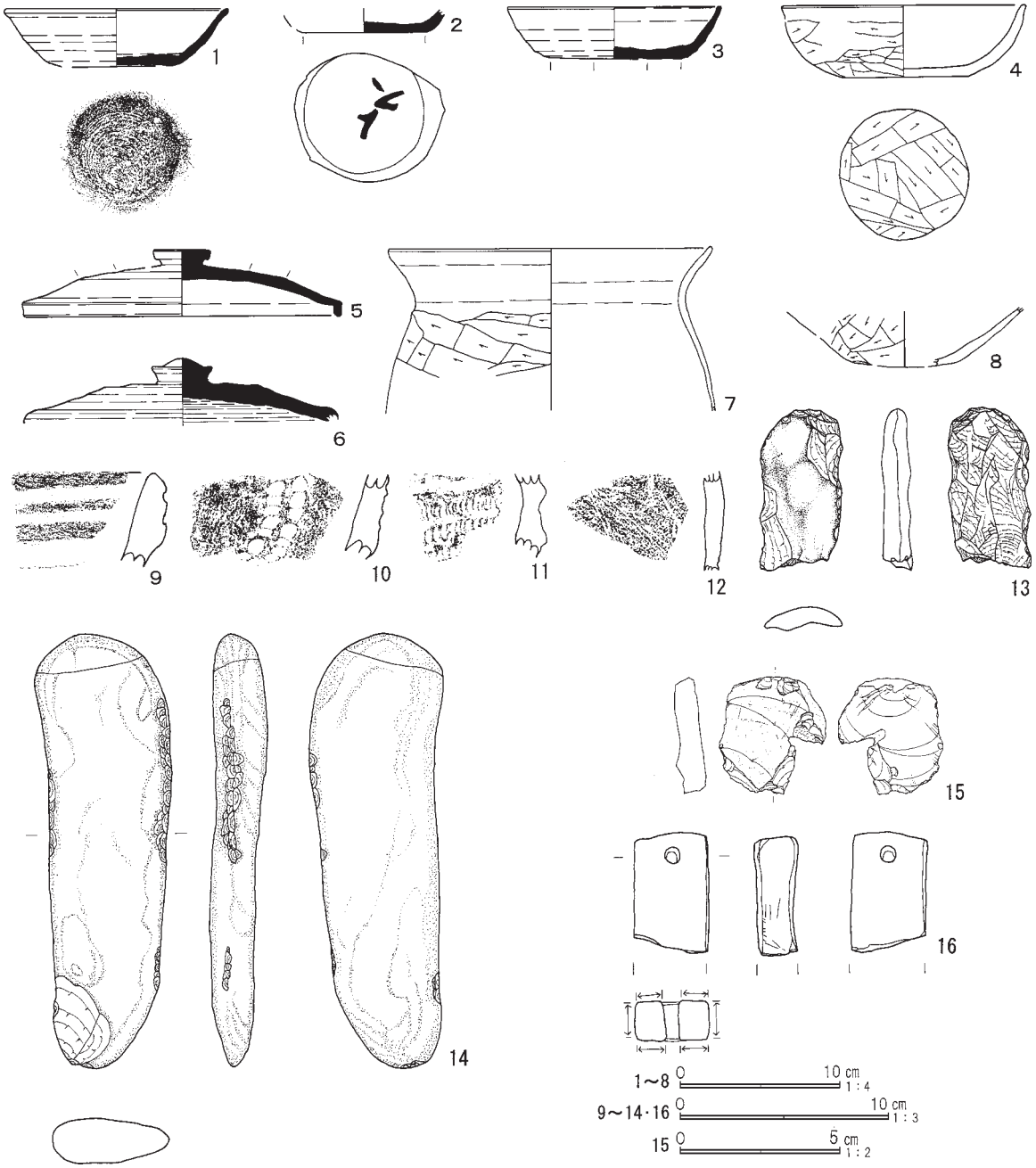
0　2m　1:60

第34図　第18号住居跡・掘り方

ている。

［覆　　土］　ロームブロックを含む褐色土や黄褐色土が堆積する。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　東壁の中央やや南寄りに壁面が掘り込まれている箇所があり、これがカマドの可能性が高い。奥行きは0.93mで内0.54mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.60mである。覆土中に焼土ブロックがわずかに含まれるものの、明瞭な被熱痕はない。底面は床面からほぼ水平に続き、奥壁は約41°の角度で立ち上がっている。南側には土師器甕が逆位の状態で出土していて、袖の補強材として用いられていた可能性もある。



第35図　第18号住居跡出土遺物

第14表　第18号住居跡出土遺物観察表（第35図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器坏	(13.8)	3.6	(6.8)	ABIN	灰色	A	60%	底部回転糸切り離し、末野産。
2	須恵器坏	—	(1.5)	7.6	ABFN	にぶい黄褐色	A	底部100%	底部全面回転ヘラケズリ、底部外面墨書？、南比企産。
3	須恵器坏	(13.2)	(3.3)	(8.1)	ABIN	灰白色	A	70%	底部周辺回転ヘラケズリ。
4	土師器埦	15.0	4.5	7.6	ABI	外：浅黄橙色、内：黒	A	70%	体部～底部外面手持ヘラケズリ、内面黒色処理ヘラミガキ。
5	須恵器蓋	19.8	4.1	鈕径3.4	ABFIN	灰色	A	60%	天井部外面回転ヘラケズリ、南比企産。
6	須恵器蓋	(14.0)	(2.8)	鈕径3.9	ABIN	黄灰色	A	80%	天井部外面回転ヘラケズリ、末野産。
7	土師器甕	(20.0)	(10.2)	—	ABIJKN	橙色	A	口胴上30%	胴部外面上端横・斜位ヘラケズ。
8	土師器甕	—	(3.5)	(6.7)	ABIJKN	にぶい橙色	B	底部80%	胴部外面下端斜位ヘラケズリ。
9	縄文土器深鉢	—	(4.3)	—	ABDIJK	にぶい橙色	B	口縁部片	沈線文。
10	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIJK	明赤褐色	A	胴部片	刺突文。
11	縄文土器深鉢	—	(3.8)	—	ABIN	明赤褐色	A	胴部片	横帯区画内爪形文、勝坂Ⅰ式。
12	縄文土器深鉢	—	(4.7)	—	ABIJK	淡橙色	B	胴部片	沈線文。
13	打製石斧	長：7.5　幅：4.2　厚：1.4　重：46.4g							
14	敲石	長：20.4　幅：6.4　厚：2.8　重：428.8g							側面敲打痕。
15	剥片石器	長：3.68　幅：3.3　厚：1.0　重：11.19g　石材：黒曜石							やや薄型の小型制片の縁辺部に微細制離痕が認められる、表面には古い制離面（風化）が認められる。
16	砥石	長：5.7　幅：3.5　厚：1.9　重：63.2g							各面磨り痕。

［壁　周　溝］　検出されていない。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　カマド手前に１基（Ｐ１）検出されている。直径0.27mの円形で深さ0.09mである。

［出 土 遺 物］　散在して出土している。須恵器坏３点（１～３）、土師器埦１点（４）、須恵器蓋２点（５・６）、土師器甕２点（７・８）、砥石１点（16）、所属時期は不明だが敲石１点（14）、流れ込みと考えられる縄文土器深鉢４点（９～12）、打製石斧１点（13）、剥片石器１点（15）を図示した。１は西壁中央の上方、２は床直上の中央やや南西寄り、３・16は北壁際中央やや東寄り、５・６・８・10はほぼ中央、７はカマドの南側から逆位の状態で、他は覆土中から出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ９世紀前半と考えられる。

第19号住居跡（第36図）

［位　　置］　５―26・27グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　掘り込みは浅く、さらに激しく撹乱を受けているため、遺存状況は極めて悪い。平面形は北西辺が南東辺より長い台形を呈し、主軸方向が短軸となる。主軸方向はＮ―52°―Ｅを示す。規模は北西辺で3.58m、南東辺で2.92m、南西辺で3.00m、北東辺で3.28mである。残存壁高は最も深いところで0.18mである。

［　　床　　］　地山を直接床とし、やや凹凸がある。北から南に向かって下がっていて、最も高い北隅と最も低い南隅では0.13mほどの高低差がある。

［覆　　土］　ローム粒や焼土粒を含む暗褐色土を主体とし、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　北東壁のほぼ中央に造られている。奥行きは0.73mで内0.37mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.71mである。袖部は検出されていない。燃焼部は土坑状に深くなり、床面から0.04mほどの高低差がある。底面は丸みを持ち、奥壁は丸みをもって立ち上がり、0.09mほど高くなったところで段差となって壁外へと延びている。

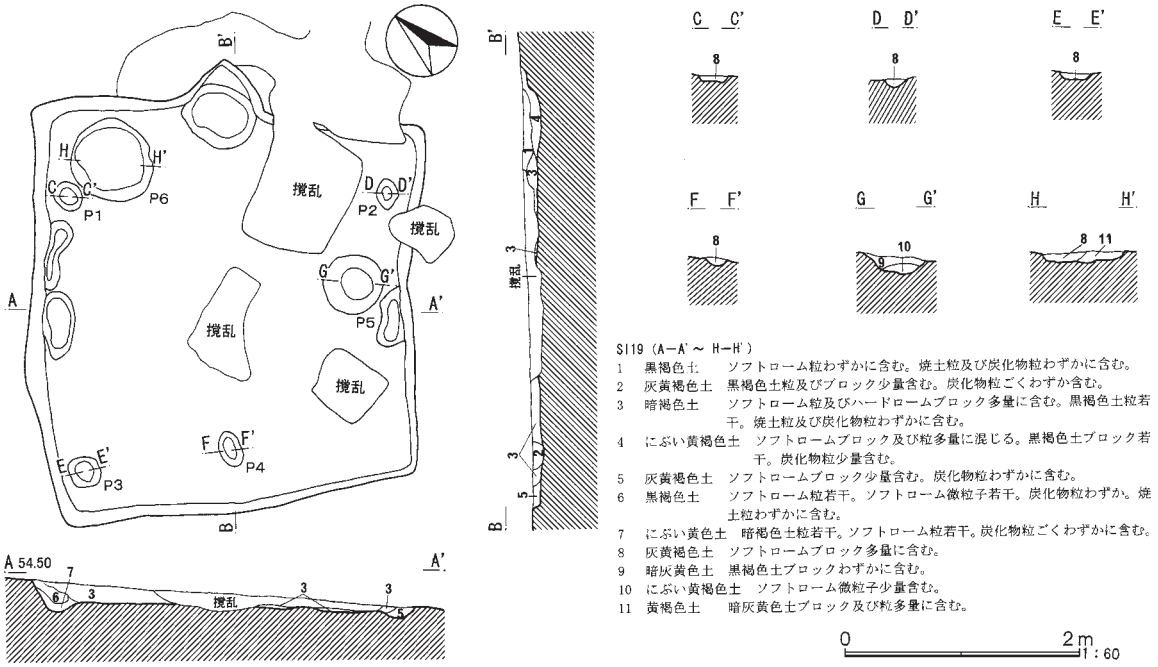
［壁　周　溝］　明瞭なものは確認されなかったが、北西壁に２条、南東壁に１条の溝状の落ち込みが検出されている。規模は北西壁際のものが幅0.11～0.26m、深さ0.03～0.08m、南東壁際のものが幅0.16～0.24m、深さ0.03mである。

［貯　蔵　穴］　北壁隅にＰ６があり、これが貯蔵穴の可能性があるが、掘り込みは比較的浅い。規模は長軸0.72m、短軸0.66mの楕円形で、床面からの深さは0.09mである。

［ピ　ッ　ト］　前述のＰ６を除き、５基検出されている。Ｐ１は北東隅、Ｐ２は南東隅、Ｐ３は北西隅、Ｐ４は南西壁寄りのほぼ中央、Ｐ５は南東壁際中央やや東寄りに検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.26×0.22mの楕円形で深さ0.06m、Ｐ２は0.26×0.18mの楕円形で深さ0.08m、Ｐ３は直径0.28mの円形で深さ0.07m、Ｐ４は0.30×0.18mの楕円形で深さ0.08m、Ｐ５は直径0.50mの円形で深さ0.18mである。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。。

［時　　期］　不明ではあるが、第21・22号住居跡と軸方向が類似することからおおよそ８世紀代と考えたい。



第36図　第19号住居跡

第20号住居跡（第37・38図、第15表）

［位　　置］　５・６―23グリッドに位置する。

［重　　複］　第21号住居跡と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］　主軸方向が短軸となる長方形であるが、カマドを挟んで東側はやや短くなる。主軸方向は真北を示す。規模は長軸3.16m、短軸2.43mで、カマド以東の東辺では2.10mである。残存壁高は最も遺存の良いところで0.56mである。

［　床　］　やや凹凸がある。基本的に地山を床としているが、北東と中央西寄りには部分的に貼床が施されている。

［覆　　土］　炭化物粒を含む黒褐色土を主体とし、床面直上には炭化粒を多量に含む層が堆積している。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　北壁中央やや東寄りに造られている。奥行きは1.18mで内0.74mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.48mである。袖部は西側のみ検出されていて、長さ0.50m、幅0.30mである。燃焼部内には支脚と判断される礫が出土している。燃焼部はほぼ床面水平に延び、中央部からやや緩い傾斜で上がっている。奥壁は約90°の角度で急激に立ち上がっている。

［壁　周　溝］　検出されていない。

［貯　蔵　穴］　検出されていない。

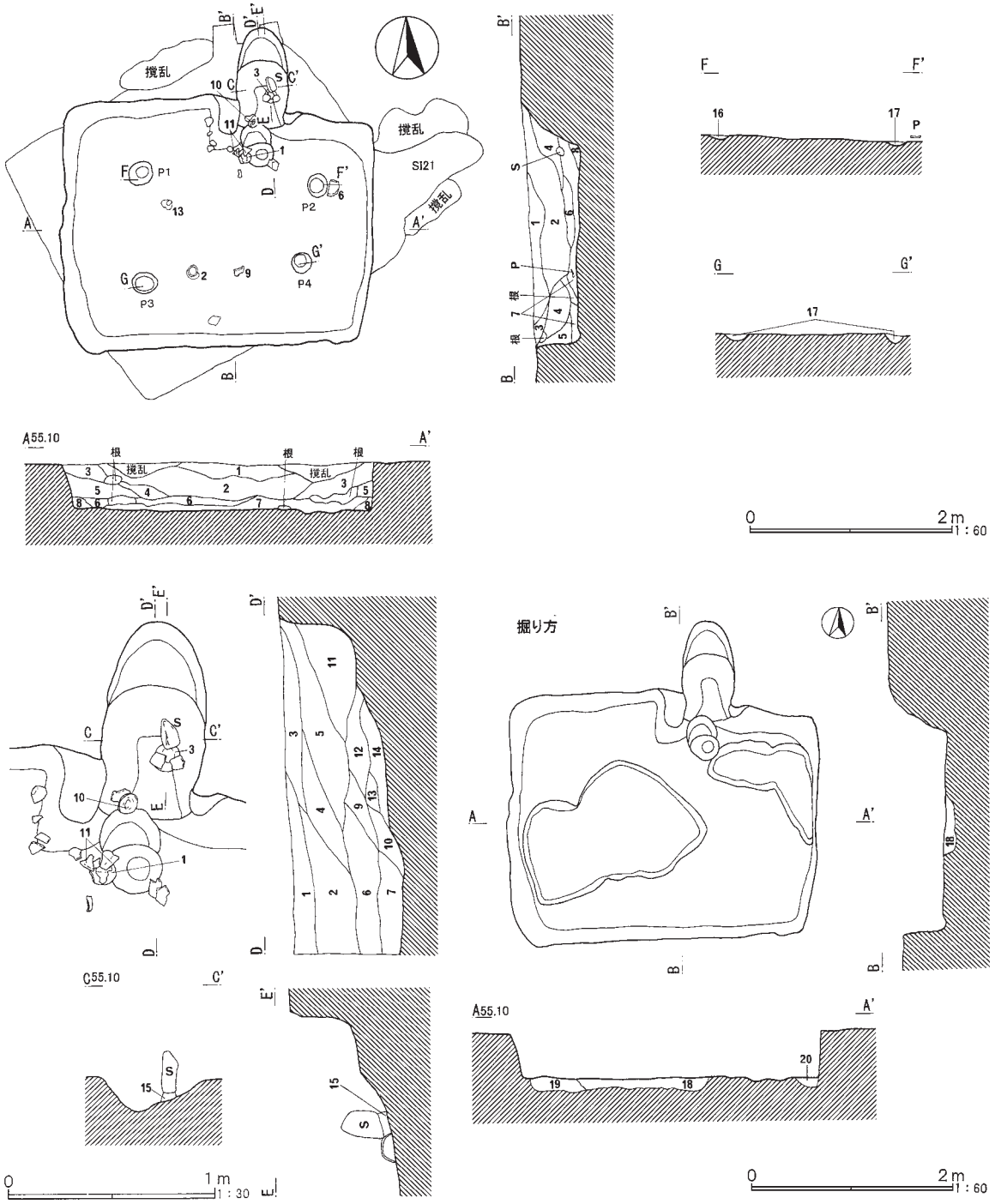
［ピ　ッ　ト］　４基検出されている。Ｐ１は北西角寄り、Ｐ２は北東角寄り、Ｐ３は南西寄り、Ｐ４は南東寄りから検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１は0.26×0.23mの楕円形で深さ0.04m、Ｐ２は0.22×0.19mの楕円形で深さ0.05m、Ｐ３は0.24×0.21mの楕円形で深さ0.06m、Ｐ４は直径0.19mの円形で深さ0.10mである。

４基とも柱穴の可能性がある。

［掘　り　方］　基本的に地山を床としているが、北東角寄りと、西半の中央に不整形な掘り込みが検出されている。黄灰色粘質土や灰色粘質土で埋められ、非常に硬く締まっている。床面からの深さは、北東寄りで0.10m前後、西半の中央で0.13m前後である。

［出 土 遺 物］　カマド内やその周辺から多く出土している。土師器坏２点（３・４）、須恵器坏１点（１）、須恵器高台埦２点（２・５）、土師器甕４点（７・８・11・12）、土師器台付甕３点（９・10・13）、須恵器甕１点（６）を図示した。１はカマド前面、２中央南西寄り、３はカマド内からで、支脚に接して伏せられた状態で出土している。６は床直上の北東寄り、10はカマド内、11はカマド前面、他は覆土中から出土している。

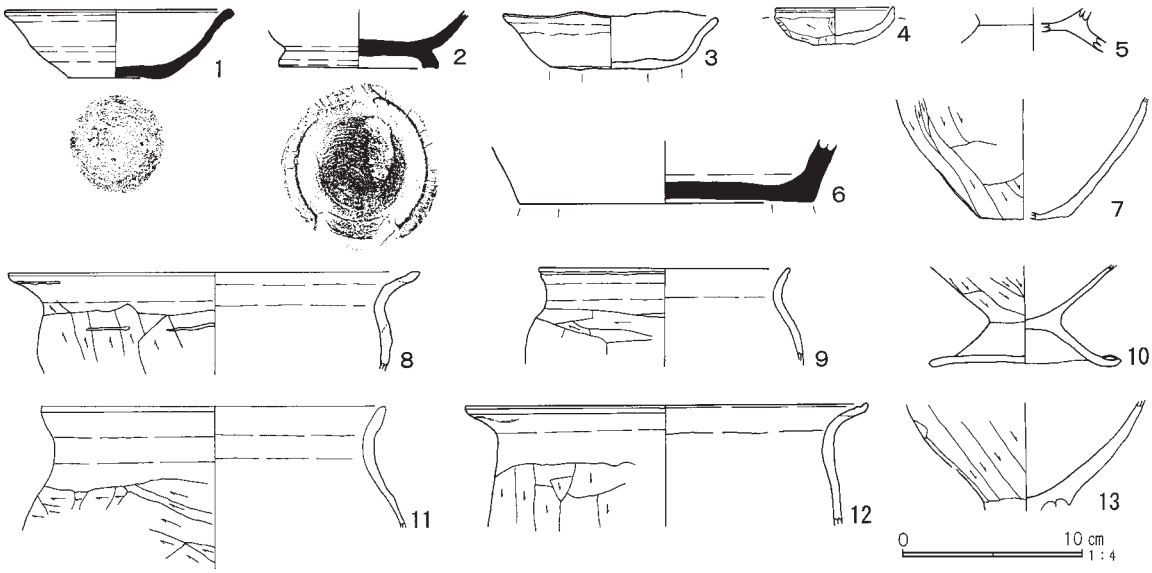
［時　　期］　出土遺物からおおよそ９世紀後半と考えられる。



SI20（A—A'～G—G'）

1　灰黄褐色土　しまり弱。黒色土ブロック多量。ソフトローム粒若干。炭化物粒わずかに含む。
2　黒色土　灰黄褐色土ブロック及び粒少量。ソフトローム微粒子若干。炭化物粒及び焼土粒ごくわずか含む。
3　黄褐色土　黒色土ブロック及び粒少量。炭化物粒若干。ソフトローム粒及び微粒子若干含む。
4　黒褐色土　黒色土ブロック少量。ソフトロームブロック若干。炭化物粒わずかに含む。
5　黒褐色土　黒色土ブロック多量。炭化物粒若干含む。
6　黒褐色土　黒色土ブロック多量。ソフトローム微粒子若干含む。
7　オリーブ黒色土　粘性有り。灰黄褐色土混じり、ソフトローム粒及び微粒子わずか。炭化物粒わずかに含む。
8　灰黄褐色土　黒褐色土ブロック及び粒少量。ソフトローム微粒子若干。炭化物粒わずかに含む。
9　黄灰色土　ソフトローム混入。炭化物粒少量含む。
10　褐灰色土　黄褐色呈す。ソフトロームブロックわずかに含む。
11　黒褐色土　焼土粒及び炭化物粒、灰混じり。
12　褐灰色土　焼土層
13　黒褐色土　焼土及び灰混じり。ソフトロームブロックわずかに含む。
14　暗灰黄色土　しまり弱。ソフトロームブロック及び粒少量。炭化物粒わずかに含む。
15　黒褐色土　被熱して暗赤褐色化している。灰、炭化物粒、焼土塊含む。
16　残黄色土　残黄色土ブロック層。酸化鉄多量。炭化物粒わずかに含む。
17　灰色土　残黄色土ブロックわずか。マンガン粒わずかに含む。
18　黄灰色土　しまり強。残黄色粘土質土ブロック及び粒若干。マンガン粒多量。酸化鉄粒若干含む。
19　灰色土　粘性強。しまり強。酸化した明黄褐色呈す。灰白色粘土粒混じり、酸化鉄多量，マンガン粒少量含む。
20　黒褐色土　暗灰黄色土ブロック状に混じる。

第37図　第20号住居跡・カマド・掘り方



第38図　第20号住居跡出土遺物

第15表　第20号住居跡出土遺物観察表（第38図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器坏	12.3	3.5	5.7	ABIN	明黄褐色、橙色	B	90%	底部外面回転糸切り離し、末野産。
2	須恵器高台埦	—	(3.2)	8.8	ABIJN	灰白色	A	高台部100%	底部回転糸切り離し、末野産。
3	土師器坏	11.8	2.9	7.3	ABGIJKN	橙色	B	100%	底部外面手持ヘラケズリ。
4	土師器坏	6.4	2.1	2.2	ABDEI	にぶい赤褐色	B	60%	体～底部外面ヘラケズリ。
5	須恵器高台埦	—	—	—	ABIJ	外：橙色 内：黒色	B	高台部片	内面黒色処理、末野産。
6	須恵器甕	—	(3.5)	16.3	ABIN	灰色	A	底部60%	底部周辺回転ヘラケズリ、末野産。
7	土師器甕	—	(6.7)	(5.0)	AB	赤褐色	B	胴～底50%	胴部外面斜位ヘラケズリ。
8	土師器甕	(22.4)	(4.5)	—	ABIN	淡赤橙色	B	口～胴上片	胴部外面上端縦位ヘラケズリ。
9	土師器台付甕	(14.0)	(5.3)	—	ABIJK	赤橙色	A	口胴上30%	胴部外面上端横位ヘラケズリ、口唇部外面沈線１条。
10	土師器台付甕	—	(5.7)	(10.6)	ABDIJK	橙色	A	胴高台100%	胴部外面下端斜位ヘラケズリ。
11	土師器甕	(19.0)	(6.8)	—	ABIJKN	橙色	B	口胴上30%	胴部外面上端横・斜位ヘラケズリ。
12	土師器甕	(22.4)	(6.7)	—	ABIN	橙色	B	口胴上25%	胴部外面上端縦位ヘラケズリ。
13	土師器台付甕	—	(6.0)	—	ABIJ	橙色	A	胴～台70%	胴部外面下端斜位ヘラケズリ。

第21号住居跡（第39・40図、第16表）

［位　　置］　5・6―23グリッドに位置する。

［重　　複］　第20号住居跡と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］　主軸方向が長軸となる長方形である。主軸方向はN―60°―Eを示す。規模は長軸3.22m、短軸2.77mで、残存壁高は最も遺存の良いところで0.42mである。なお、一部撹乱を受けている。

［　　床　　］　大半を第20号住居跡に切られるため、詳細は不明である。遺存していた部分では地山を直接床としている。

［覆　　土］　黒褐色土や灰黄褐色土を主体とし、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　東壁の南隅に造られている。奥行きは1.22mで内0.97mは壁外へ張り出す。幅は竪穴壁際で0.40mである。燃焼部は壁面を掘り込んで構築され、壁面際には袖石が遺存している。焚口には、土師器甕が両袖石間に４個体出土していて、本来は構築材として懸架されていたと考えられる。燃焼部は次第に下がって深くなり、床面から0.15mほどの高低差がある。奥壁は約60°の角度で立ち上がっている。煙道部は燃焼部から約0.29m高くなり、約24°の角度で立ち上がっている。長さは0.45m、幅は燃焼部際で0.43mである。

［壁　周　溝］　遺存していた部分では検出されていない。

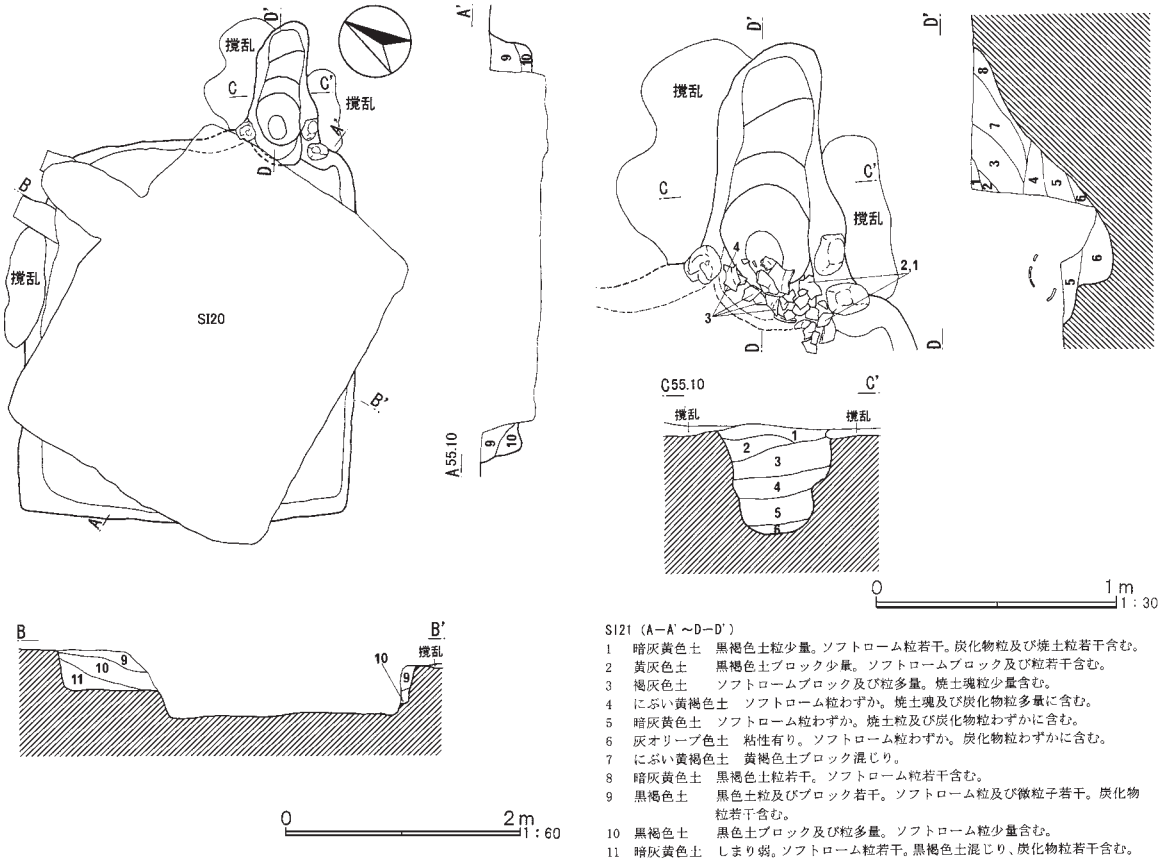
［貯　蔵　穴］　遺存していた部分では検出されていない。

［ピ　ッ　ト］　遺存していた部分では検出されていない。

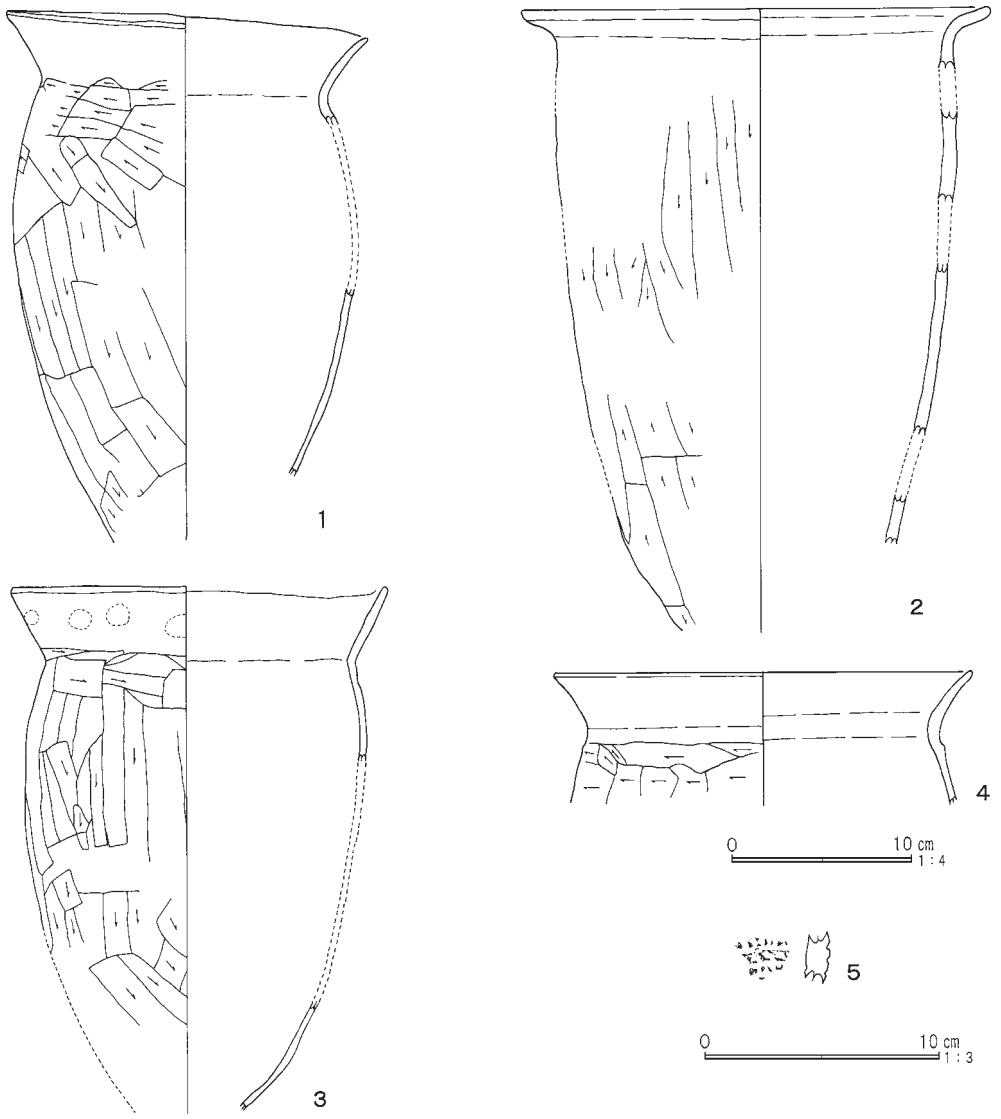
［掘　り　方］　遺存していた部分では検出されていない。

［出 土 遺 物］　第20号住居跡に切られるため、遺存していたカマドを中心に出土している。カマド構築材として用いられたと考えられる土師器甕４点（１～４）、流れ込みと考えられる縄文土器深鉢１点を図示した。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀前半～中頃と考えられる。



第39図　第21号住居跡・カマド



第40図　第21号住居跡出土遺物

第16表　第21号住居跡出土遺物観察表（第40図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器甕	20.0	(29.2)	—	ABIJK	にぶい橙色	B	50%	胴部上端横位ヘラケズリ、胴部中場・下端縦位ヘラケズリ。
2	土師器甕	(25.8)	(34.5)	—	ABIJK	橙色	B	口～胴20%	胴部外面縦位ヘラケズリ。
3	土師器甕	20.6	(29.2)	—	ABIJK	橙色	B	口～胴60%	頸部外面指頭圧痕、胴部外面上端横位・中場縦位・下端斜位ヘラケズリ。
4	土師器甕	(23.0)	(7.4)	—	ABIJK	橙色	A	口胴上30%	胴部外面上端横・斜位ヘラケズリ。
5	縄文土器深鉢	—	—	—	AB	にぶい橙色	A	胴部片	爪形文、勝坂式。

第22号住居跡（第41図、第17表）

［位　　置］　27・28―19・20グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　西側が撹乱を受けているため全容は不明である。主軸方向はN―73°―Eを示す。規模は南北軸4.23m、東西軸は遺存していた部分で4.03m、残存壁高は0.30mである。

［　床　］　ほぼ平坦で、壁際を除きハードロームの地山を直接床としている。中心から南半で硬化が認められる。わずかではあるが、北から南に向かって上がり傾斜となっていて、高低差は約0.09mある。

［覆　　土］　ロームブロックやローム粒を含む暗褐色土を主体し、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［カ　マ　ド］　東壁の南寄りに位置する。壁外へは0.93mほど張り出し、幅は焚口で0.61m、燃焼部で0.59mである。袖部は小礫を含む褐色の粘質土を用いて構築されていて、北で0.15m、南で0.18mほど遺存している。焚口前面では、床面がカマドへ向かって緩い傾斜でわずかに下がっている。燃焼部は急激に下がって深くなり、床面から0.12mほどの高低差がある。燃焼部奥壁は約45°の角度で立ち上がり、煙道部へ続いていたとみられる。側壁や底面に明瞭な被熱痕は検出されていない。

［貯　蔵　穴］　南東隅に検出されている。長軸0.60m、短軸0.54m、深さ0.33mである。上層は焼土粒、炭化物を含み、中層以下では焼土粒、炭化物ともに含まれない。

［ピ　ッ　ト］　南壁際中央で１基（Ｐ１）検出されている。直径0.30mの円形で深さ0.15mである。

［壁　周　溝］　遺存していた部分でカマドを除き全周する。幅0.15～0.30m、床面からの深さは0.08～0.19mである。

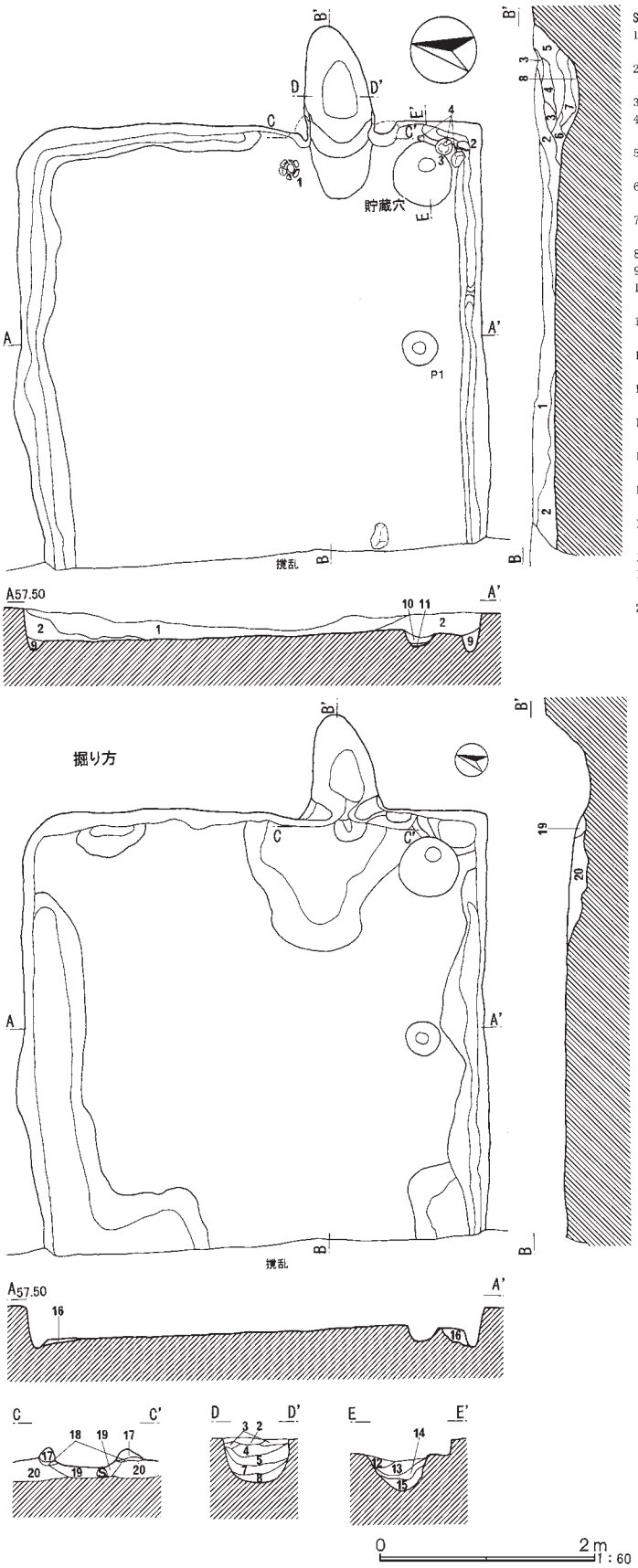
［掘　り　方］　中央部では地山を直接床としているが、壁際の周辺部では、ロームブロックを含んだにぶい黄褐色土を厚さ0.05～0.08mほど充填して貼床を構築している。

［出 土 遺 物］　出土量は比較的少ない。土師器坏１点（１）、須恵器坏（２～５）、土師器甕２点（６・７）を図示した。１は床直上のカマド前面北側、２～４は南東隅、他は覆土中から出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ８世紀中頃～後半と考えられる。

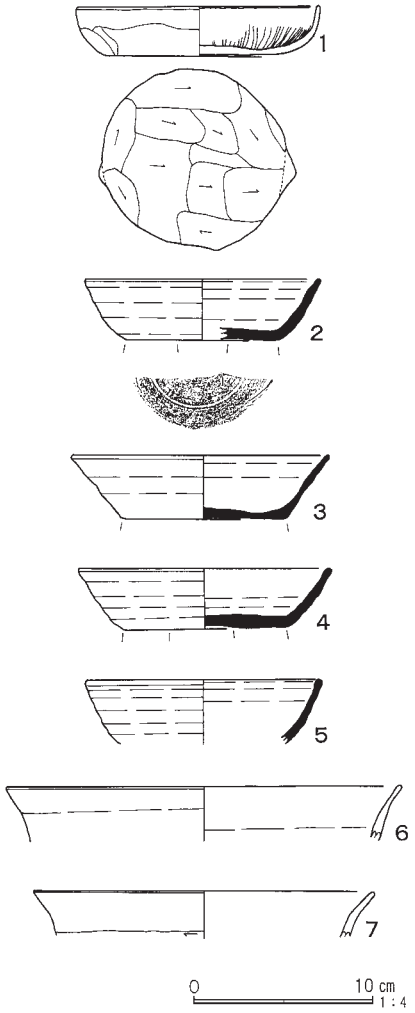
第17表　第22号住居跡出土遺物観察表（第41図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器坏	13.5	2.8	10.1	ABGIJ	橙色	A	90%	底部外面手持ヘラケズリ、内面暗文。
2	須恵器坏	(13.0)	(3.5)	(8.3)	ABH	灰白色	A	50%	底部周辺回転ヘラケズリ、南比企産。
3	須恵器坏	14.2	3.6	9.2	ABIN	灰白色	A	90%	底部全面回転ヘラケズリ。
4	須恵器坏	14.0	3.4	9.0	ABFKN	浅黄色	A	80%	底部周辺回転ヘラケズリ、南比企産。
5	須恵器坏	(13.0)	(3.6)	―	ABFJN	黒褐色	A	口縁部片	南比企産。
6	土師器甕	(22.0)	(3.1)	―	ABGJ	橙色	B	口縁部片	
7	土師器甕	(19.0)	(2.5)	―	ABJ	にぶい橙色	B	口縁部片	頸部外面横位ヘラケズリ。



SI22（A−A′～E−E′）

1	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒、黒褐色土ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ハードロームブロックを多く含み、ソフトローム粒を多量に含む。
3	褐色土	粘性有り。しまり強。粘土粒を多く含む。
4	暗褐色土	粘性有り。しまり強。焼土ブロック及び粒を多く含み、粘土粒をやや多く含む。
5	暗褐色土	粘性有り。しまり強。焼土粒をやや多く含み、炭化物及びソフトローム粒を少量含む。
6	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含みハードロームブロックを少量含む。焼土粒を少量含む。
7	暗褐色土	粘性有り。しまり強。焼土粒を少量含み、ソフトローム粒をやや多く含む。
8	暗褐色土	粘性有り。しまり普通。ソフトローム粒を多量に含む。
9	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
10	褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒を多く含む。
11	褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒を少量含む。
12	暗褐色土	粘性有り。しまり強。焼土粒及び炭化物を少量含み、ソフトローム粒を多く含む。
13	黒褐色土	粘性有り。しまり強。焼土粒をやや多く含み、炭化物を少量含む。ソフトローム粒をやや多く含む。
14	暗褐色土	粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。
15	褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。ハードロームブロックを少量含み、暗褐色土粒をやや多く含む。
16	褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含む。
17	褐色土	粘性有り。しまり強。黄褐色粘質土ブロック及び粒、小礫をやや多く含む。
18	黒褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
19	褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含む。
20	褐色土	粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。ハードロームブロックをやや多く含み、暗褐色土粒を少量含む。



第41図　第22号住居跡・掘り方・出土遺物

2　埋　　甕

第１号埋甕（第42・43図、第18表）

［位　　置］　20―29グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［形　　状］　掘り方は長軸0.41m、短軸0.37m不整楕円形で、確認面からの深さは0.23m、断面形は擂鉢状である。この中から破損した土器が１個体出土している。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ縄文時代早期と考えられる。

第２号埋甕（第42・43図、第18表）

［位　　置］　７―21グリッドに位置する。

［重　　複］　第29号土坑と重複し、本遺構が古い。上方過半を第29号土坑に切られている。

［形　　状］　掘り方は長軸1.14m、短軸1.02mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.54m、断面形は擂鉢状である。掘り込みの底面から、底部を欠く土器が正位の状態で確認されている。

［覆　　土］　土器周辺部は黄灰色土や灰褐色土で、内部では黒褐色土や黒褐色土が堆積する。いずれも、焼土や炭化物が少量含まれている。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ縄文時代後期（堀之内式期）と考えられる。

第３号埋甕（第42・43図、第18表）

［位　　置］　７―22グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［形　　状］　南北軸東側を撹乱により消失している。掘り方は残存長軸0.70m、短軸0.70mの楕円形と推定され、確認面からの深さは0.25m、断面形は凹状である。この中から破損した土器が１個体出土している。

［覆　　土］　暗褐色土が堆積し、焼土粒を少量含む。

［時　　期］　出土遺物から縄文時代前期（諸磯式期）と考えられる。

第４号埋甕（含第80号土坑）（第42・44図、第18表）

［位　　置］　24―20グリッドに位置する。

［重　　複］　本遺構の北東に第80号土坑とした土坑状の掘り込みが検出されている。他遺構が重複していることも考えられたが、礫の出土状況から本遺構と関連する可能性が高いと判断され、同一図面に図示した。

［形　　状］　土器が出土した掘り込みは長軸0.79m、短軸0.74mのほぼ円形で、確認面からの深さは0.74m、断面形は擂鉢状である。掘り込み上方の北西壁際に、口縁部を欠いた土器が傾いた状態で出土している。これに上面の一部が切り合うように、第80号土坑とした遺構の掘り込みが確認されている。長軸1.05m、短軸0.83mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.35mである。底面はほぼ平坦で、側壁は開いて立ち上がり、北側壁では底面から0.15m上がったところで中段があり、緩い傾斜で立ち上がっている。

周辺からは礫が出土していて、土器の南及び西側では、土器を囲むような状況がみ

られ、北東側ではやや散乱した状態で、第80号土坑の覆土上方や掘り込み周辺部からもほぼ同一レベルで出土している。このような状況から、本来は住居跡が存在し、本遺構はそれに伴う炉であり、最終的に壊された状況とも考えられる。

［覆　　土］　埋甕掘り方、第80号土坑ともに上層は暗褐色土、下層は黄褐色土が堆積する。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ縄文時代後期（称名寺式期）と考えられる。

第５号埋甕（第42・44図、第18表）

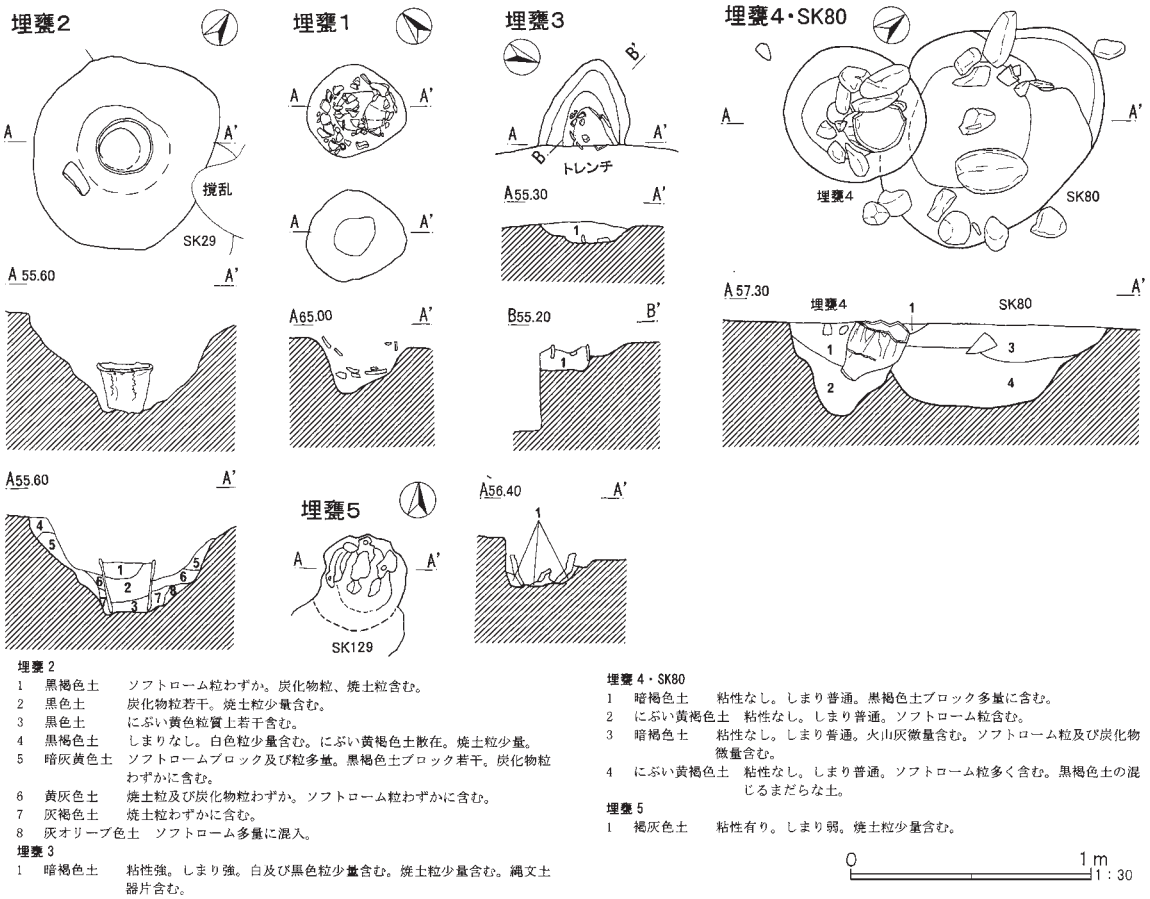
［位　　置］　16―22グリッドに位置する。

［重　　複］　第129号土坑と重複し、本遺構が新しい。

［形　　状］　掘り方は長軸0.80m、短軸0.70mの楕円形で、確認面からの深さは0.30m、断面形は凹状である。この中から破損した土器が１個体出土している。

［覆　　土］　掘り方下層は褐灰色土が堆積する。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ縄文時代早期と考えられる。



埋甕 2
1　黒褐色土　ソフトローム粒わずか。炭化物粒、焼土粒含む。
2　黒色土　炭化物粒若干。焼土粒少量含む。
3　黒色土　にぶい黄色粒質土若干含む。
4　黒褐色土　しまりなし。白色粒少量含む。にぶい黄褐色土散在。焼土粒少量。
5　暗灰黄色土　ソフトロームブロック及び粒多量。黒褐色土ブロック若干。炭化物粒わずかに含む。
6　黄灰色土　焼土粒及び炭化物粒わずか。ソフトローム粒わずかに含む。
7　灰褐色土　焼土粒わずかに含む。
8　灰オリーブ色土　ソフトローム多量に混入。

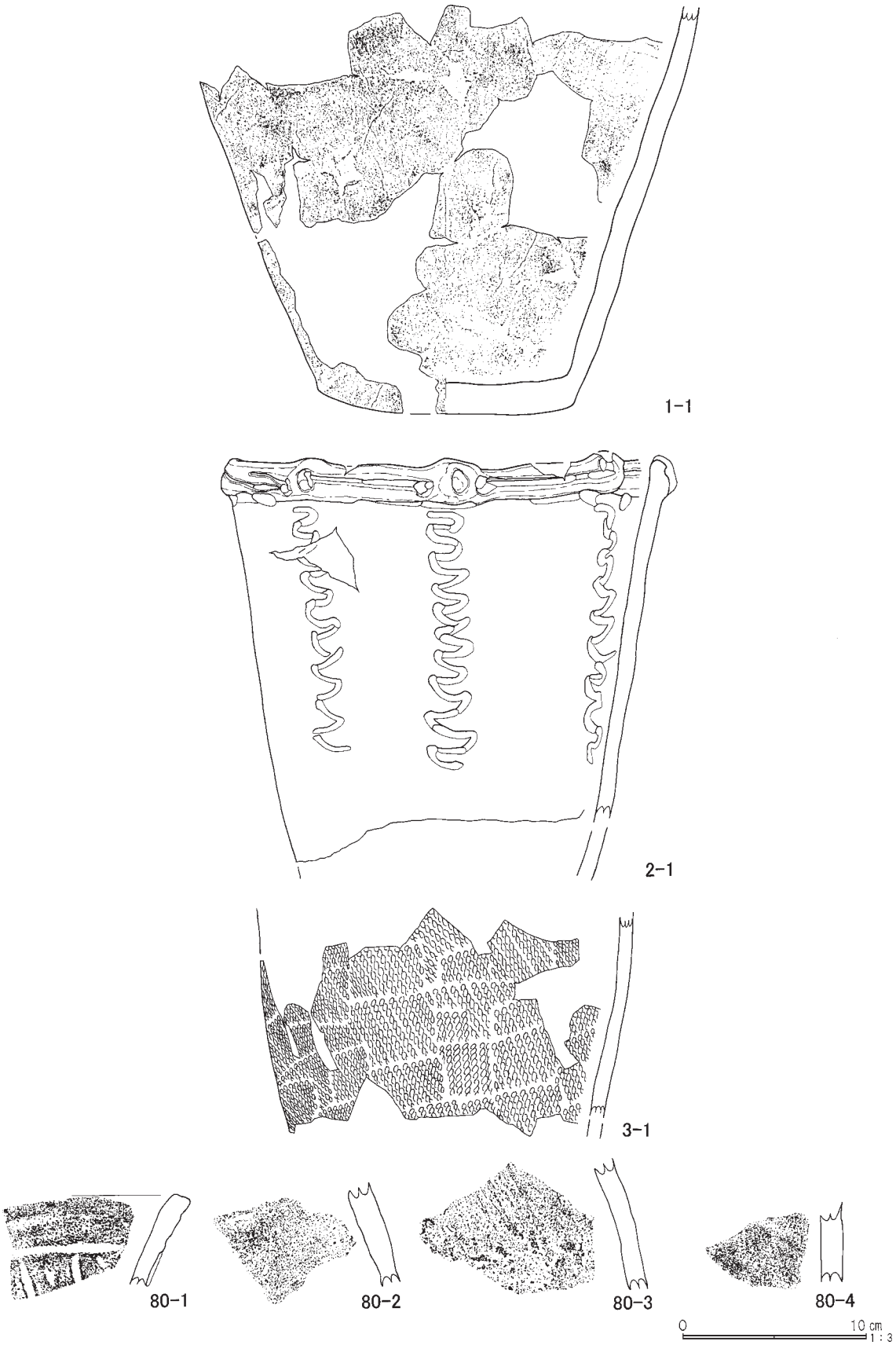
埋甕 3
1　暗褐色土　粘性強。しまり強。白及び黒色粒少量含む。焼土粒少量含む。縄文土器片含む。

埋甕 4・SK80
1　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。黒褐色土ブロック多量に含む。
2　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒含む。
3　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。火山灰微量含む。ソフトローム粒及び炭化物微量含む。
4　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒多く含む。黒褐色土の混じるまだらな土。

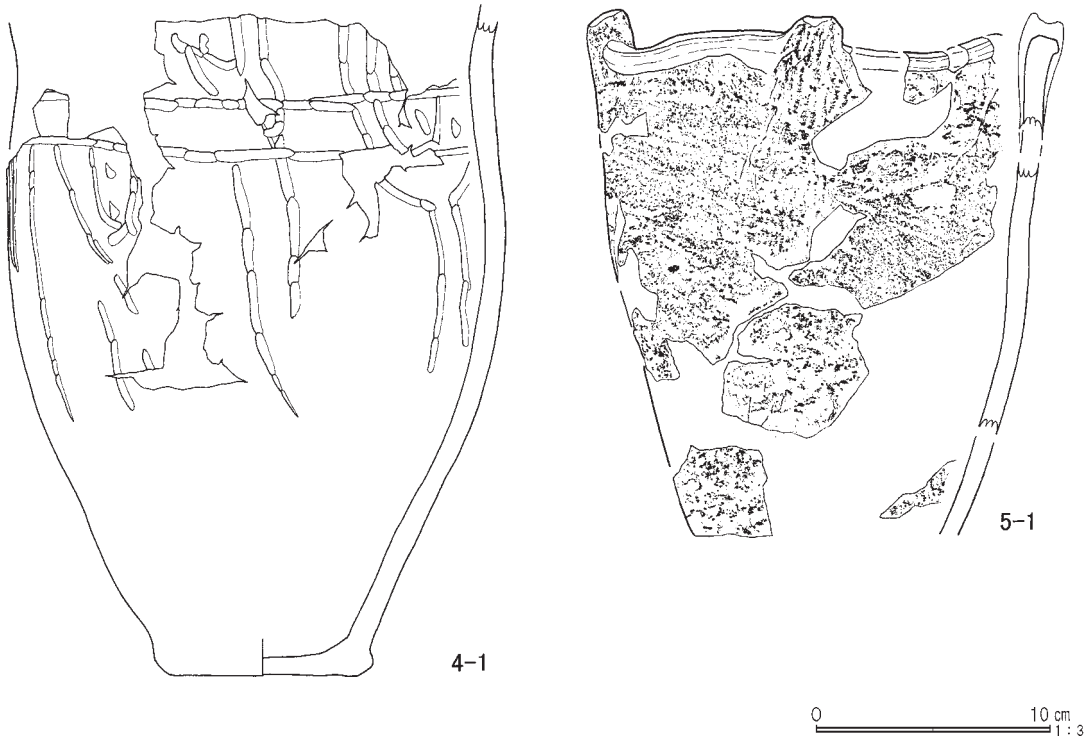
埋甕 5
1　褐灰色土　粘性有り。しまり弱。焼土粒少量含む。

0　1m
1：30

第42図　第１～５号埋甕・第80号土坑



第43図　第１・２・３号埋甕、第80号土坑出土遺物



第44図　第４・５号埋甕出土遺物

第18表　第１・２・３号埋甕、第80号土坑出土遺物（第43・44図）

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1－1	埋甕１	縄文土器深鉢	—	(28.0)	13.3	ABDN	明黄褐色	A	胴～底部片	条痕文（早期）。
2－1	埋甕２	縄文土器深鉢	22.3	(19.2)	—	ABDGKN	にぶい黄色	A	口～胴部片	堀ノ内式（後期）。
3－1	埋甕３	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	明黄褐色	A	胴部片	諸磯式（前期）。
80－1	SK80	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJKN	明黄褐色	A	口縁部片	称名寺式（後期）。
80－2	SK80	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJKN	にぶい黄橙色	B	胴部片	称名寺式（後期）。
80－3	SK80	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJKN	にぶい黄橙色	B	胴部片	称名寺式（後期）。
80－4	SK80	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJKN	にぶい橙色	B	胴部片	称名寺式（後期）。
4－1	埋甕４	縄文土器深鉢	—	(27.2)	7.8	ABKN	明黄褐色	A	胴～底部片	称名寺式（後期）。
5－1	埋甕５	縄文土器深鉢	(19.0)	(17.0)	—	ABEDN	暗灰褐色土	C	口～胴部片	貝殻沈線文（早期）。

3　円形柱穴列跡

第１号円形柱穴列跡（第45図、第19表）

［位　　置］　19～21―27～29グリッドに位置する。

［重　　複］　第６・７号溝跡と重複し、本遺構が古い。円周内側に検出された遺構では、円周上の北東部に第87号土坑、中央に第64号土坑、東寄りに第86号土坑がある。また、第23・93・115・121・130号ピットも円周内側に検出されている。

円周上にある第87号土坑は、覆土の状況が異なるため他遺構とした。本遺構に属する柱穴がこれに切られているか、または、断定はできないが本来は本遺構に伴うものであり、抜き取りなどの行為があった可能性も考えられる。

［平面形・規模］　隅丸方形や楕円形の15基（第87号土坑を含めると16基）の柱穴が円形に巡る。ピット心々間による直径は8.20m（掘り方外縁8.67m）である。南西部のＰ１―Ｐ15間で柱間が広くなる。Ｐ14―Ｐ15間は他遺構との重複やトレンチのため、検出できなかった可能性がある。

第64号土坑は、円周内のほぼ中央に検出された土坑で、断定はできないが、その位置関係から、本遺構に関連する遺構の可能性も考えられる。

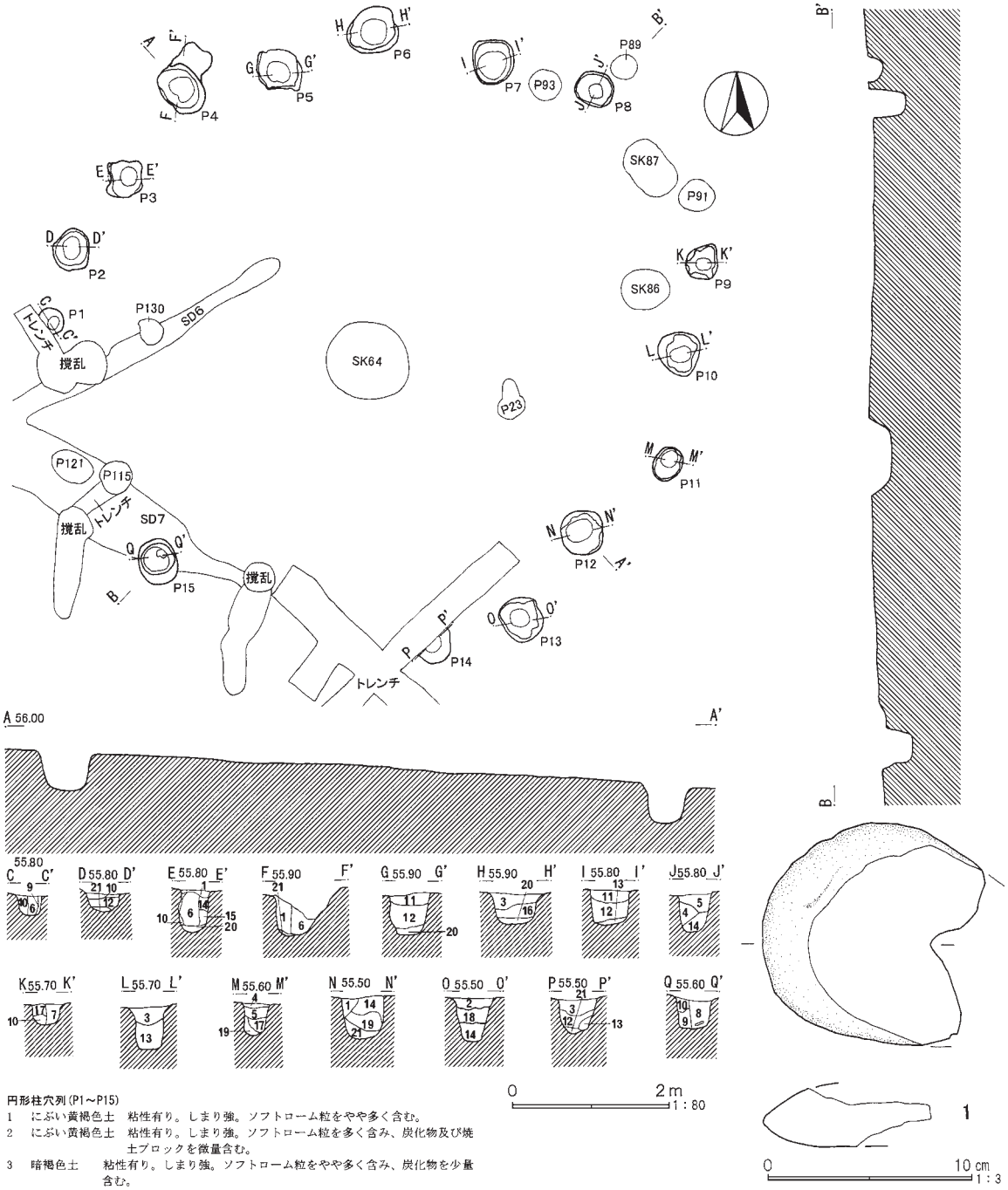
［柱　　穴］　各ピットは基本土層の第Ｖ層（ソフトローム層）で確認され、第VI層（ハードローム層）を掘り抜いて掘り込まれている。それぞれの規模は、Ｐ１は南東をトレンチに切られ全容は不明だが､直径0.34mの円形と考えられ深さ0.27mである｡Ｐ２は0.53×0.45mの不整楕円形で深さ0.25m、Ｐ３は0.44×0.41mの隅丸方形で深さ0.53m、Ｐ４は0.68×0.49mの楕円形で深さ0.54m、Ｐ５は0.52×0.50mの不整方形で深さ0.54m、Ｐ６は0.67×0.62mの不整形で深さ0.40m、Ｐ７は0.57×0.52mの隅丸方形で深さ0.48m、Ｐ８は0.48×0.41mの隅丸長方形で深さ0.50m、Ｐ９は0.51×0.41mの不整円形で深さ0.39m、Ｐ10は0.57×0.54mの不整形で深さ0.59m、Ｐ11は0.44×0.36mの楕円形で深さ0.41m、Ｐ12は0.54×0.53mの円形で深さ0.54m、Ｐ13は0.56×0.52mの隅丸方形で深さ0.56m、Ｐ14は北西をトレンチに切られ全容は不明だが、北東―南西軸0.49mで深さ0.56m、Ｐ15は0.57×0.50mの楕円形で深さ0.46mである。

［覆　　土］　ソフトローム似のにぶい黄褐色土を主体とし柱痕跡は明瞭ではなかったが、Ｐ１、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ９、Ｐ15は柱痕跡とみられる土層が確認されている。各ピットの底面は硬化が認められる。そのうちＰ３、Ｐ５、Ｐ６では、底面直上でかなり硬化した黒褐色土の層が確認され、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ12、Ｐ14では、同様に硬化したにぶい黄褐色土や褐色土の層が確認されている。

［出 土 遺 物］　Ｐ15から加工痕のある礫１点が出土している。

［時　　期］　本遺構そのものからは時期を特定できる出土遺物はないが、覆土の様子から縄文時代に所属するものと考えられる。

なお、近接する遺構の状況をみると、円周内に検出されている第64・86号土坑、南に近接して第１号埋甕があり、これらは出土遺物から縄文時代後期称名寺式の時期が



円形柱穴列（P1～P15）

1　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
2　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、炭化物及び焼土ブロックを微量含む。
3　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含み、炭化物を少量含む。
4　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及び粒をやや多く含み、炭化物を微量含む。
5　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、炭化物を微量含む。
6　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
7　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、炭化物を微量含む。
8　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックを多く含み、ソフトローム粒をやや多く含む。
9　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
10　褐色土　粘性弱。しまり強。ローム主体、暗褐色土粒をやや多く含む。
11　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒を多く含む。
12　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒をやや多く含む。
13　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。
14　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多量に含む。
15　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックを少量含み、ソフトローム粒をやや多く含む。
16　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含み、炭化物を少量含む。
17　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含む。
18　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含み、焼土ブロックを微量含む。
19　褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックを多く含む、ソフトローム粒を多量に含む。
20　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックを多量に含む。
21　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。

第45図　第１号円形柱穴列跡・出土遺物

考えられる。

また、北東に検出された第１号井戸跡は中世から近世の時期が考えられる井戸跡であるが、これの覆土中に混入して称名寺式期土器片が比較的多く出土している。

第19表　第１号円形柱穴列跡出土遺物観察表（第45図）

No.	出土位置	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	備　考
1	P15	礫	10.5	10.6	2.8	341.8g	加工痕有

4　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第46図、第20表）

［位　置］　22・23―30・31グリッドに位置する。

［重　複］　第14号土坑と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］　平面形は桁行３間、梁行２間の側柱式南北棟建物である。主軸方向はN―18°―Wを示す。建物の構造は、北及び南妻側の中央柱が妻側面から外方向へ0.4mほど外れていて、近接棟持柱建物と考えられる。これは、妻側側面に近接した位置に柱を立てることにより棟木を支持し、切妻屋根を固定したものと考えられる。

規模は、桁行5.7m、梁行4.2mで、面積はおよそ23.94㎡である。棟持柱のＰ５―Ｐ10間で6.6mである。

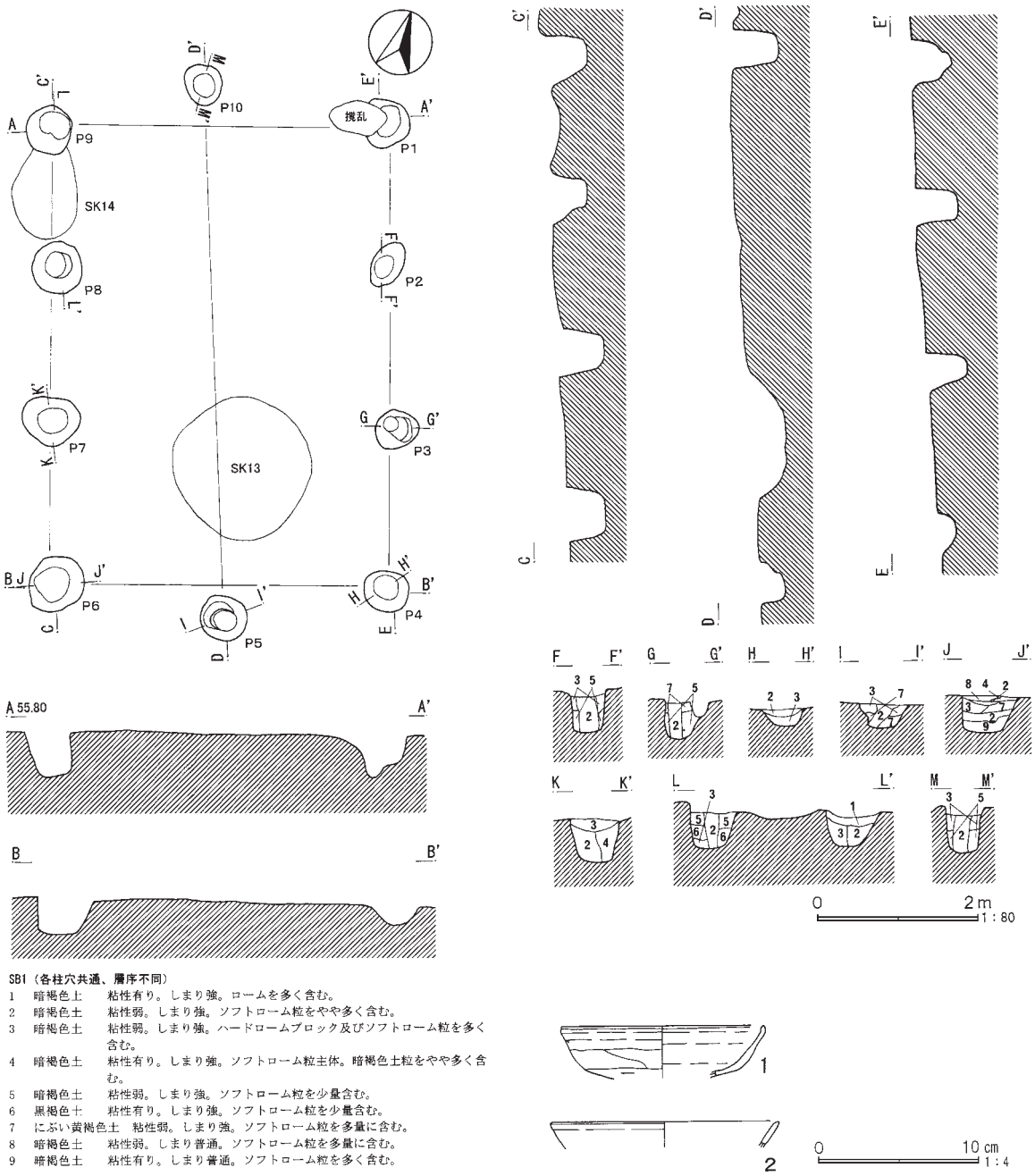
柱間寸法は、それぞれＰ１―Ｐ２間1.8m（６尺）、Ｐ２―Ｐ３間1.8m（６尺）、Ｐ３―４Ｐ間2.1m（７尺）、Ｐ４―Ｐ５間2.1m（７尺）、Ｐ５―Ｐ６間2.1m（７尺）、Ｐ６―Ｐ７間2.1m（７尺）、Ｐ７―Ｐ８間1.8m（６尺）、Ｐ８―Ｐ９間1.8m（６尺）、Ｐ９―Ｐ10間1.8m（６尺）（2.0）m、Ｐ10―Ｐ１間2.4m（８尺）である。

［柱　穴］　掘り方は隅丸方形や不整円形である。それぞれの規模は、Ｐ１が0.60×0.59mの不整円形で深さ0.43m、Ｐ２が0.60×0.38mの楕円形で深さ0.53m、Ｐ３が0.53×0.49mの不整楕円形で深さ0.52m、Ｐ４が0.57×0.50mの隅丸方形で深さ0.20m、Ｐ５が0.58×0.53mの隅丸方形で深さ0.32m、Ｐ６が0.73×0.63mの不整楕円形で深さ0.50m、Ｐ７が0.74×0.62mの不整円形で深さ0.54m、Ｐ８が0.66×0.61mの楕円形で深さ043m、Ｐ９が0.60×0.51mの楕円形で深さ0.57m、Ｐ10が0.62×0.57mの楕円形で深さ0.55mである。

［覆　土］　ソフトローム粒を含む暗褐色土が主体である。柱痕跡が捉えられたものは、Ｐ２、Ｐ８、Ｐ10で、他のものは明瞭には捉えられなかった。

［出 土 遺 物］　土師器坏•甕、須恵器小片が出土している。Ｐ３から出土した土師器坏（１）、Ｐ７から出土した須恵器坏（２）を図示した。

［時　期］　出土遺物からおおよそ９世紀後半と考えられる。



SB1（各柱穴共通、層序不同）

1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ロームを多く含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
3　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。
4　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含む。
5　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
6　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
7　にぶい黄褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
8　暗褐色土　粘性弱。しまり普通。ソフトローム粒を多量に含む。
9　暗褐色土　粘性有り。しまり普通。ソフトローム粒を多く含む。

第46図　第１号掘立柱建物跡・出土遺物

第20表　第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第46図）

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	P 3	土師器坏	(12.6)	(3.2)	(9.8)	ABI	黄褐色	B	口～底25%	底部外面ヘラケズリ。
2	P 7	須恵器坏	(14.0)	(1.6)	—	ABF	灰色	A	口縁部片	南比企産。

5　溝　　跡

第１号溝跡（第47図）

［位　　置］　５・６・８―21・22グリッドに位置する。

［重　　複］　８―21グリッド内で第115号土坑と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］　南東―北西走行で、ほぼ直線に走行する。南東端、北西端は次第に浅くなり消滅する。中間では撹乱により消滅している。検出長は14.0m、幅は0.15～0.38m、確認面からの深さは0.05～0.10mである。

［断　面　形］　浅いU字状である。

［覆　　土］　黄褐色土が混ざった黒褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第２号溝跡（第47図）

［位　　置］　４・５・６―24・25グリッドに位置する。

［重　　複］　６―25グリッド内で第48号土坑と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］　東―西走行で、ほぼ直線に走行する。東端は調査区域外まで延び、西端は第48号土坑との重複部分までである。中間は撹乱により消滅している。検出長は10.0m、幅は0.15～0.38m、確認面からの深さは0.25～0.50mである。

［断　面　形］　浅いU字状である。

［覆　　土］　黒褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第５号溝跡（第51図、第21表）

［位　　置］　18～21―21～25グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

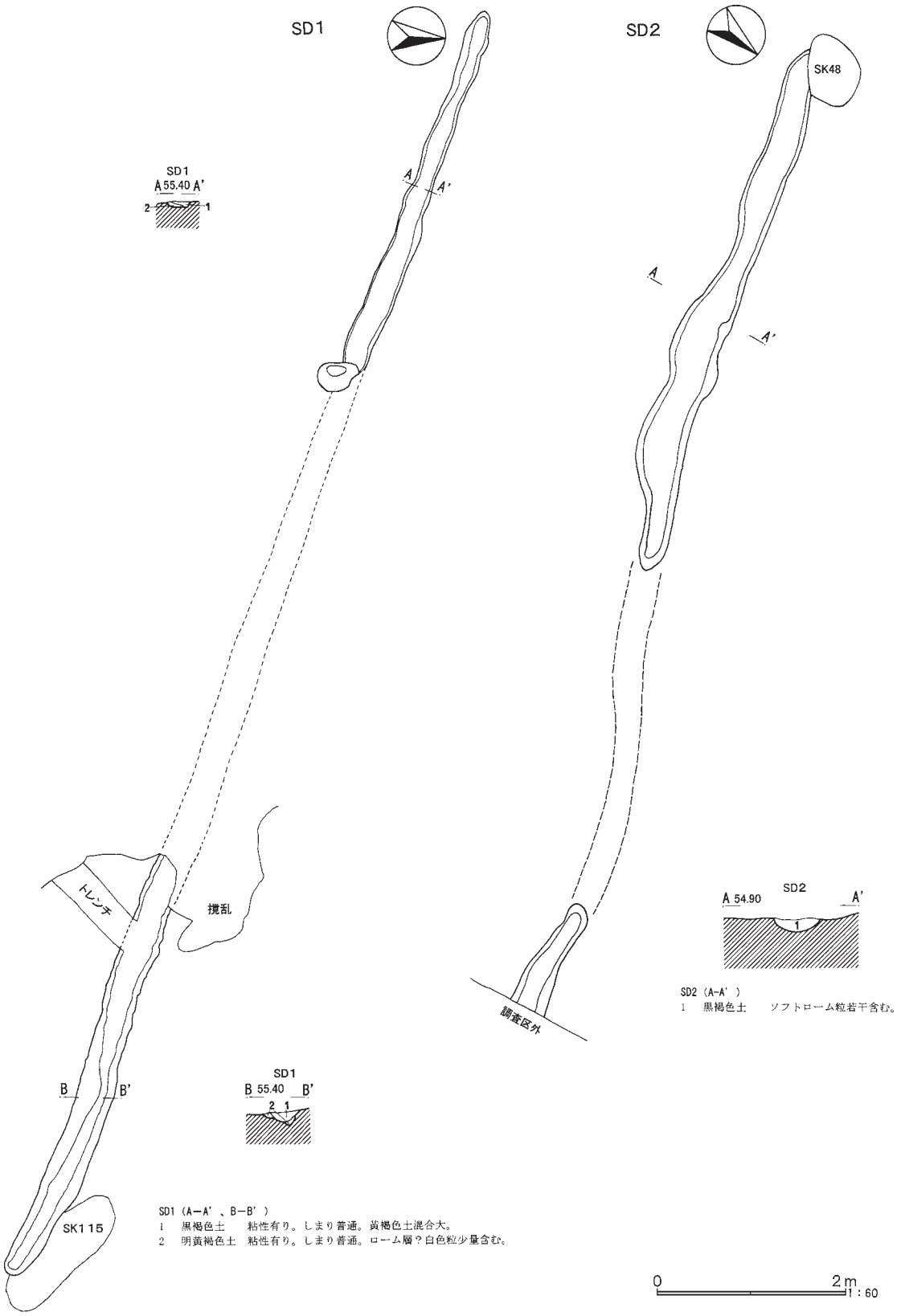
［平面形・規模］　西―東走行から20―21グリッド内で南側に90°屈曲し、北北西―南南東方向に走行する。西―東走行はほぼ直線状に、北北西―南南東走行は蛇行し、南南東端で浅くなり消滅する。本遺構の南約8.0m先には第14号溝跡があり、走行方向や形状•覆土の状況が近似している。この間における確認面のレベルが溝底面のレベルより低いため、消失した可能性があり、本来は連続した溝であったと考えられる。検出長は153.00m、幅は0.10～0.38m、確認面からの深さは0.07～0.18mである。底面のレベルは西端から東端向かって下がり、さらに北端から南端に向かって下がる。検出長間で約0.30mの高低差がある。

［断　面　形］　浅いU字状である。

［覆　　土］　灰黄褐色土が堆積する。一部その層より下に褐色土・明黄色褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　覆土中から流れ込みの可能性がある土師器坏（５―１）が出土した。

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。



第47図 第１・２号溝跡

第６号溝跡（第48図）

［位　　置］ 20・21・22―28グリッドに位置する。

［重　　複］　21―28グリッド内で第７号溝跡と接続するが、覆土の様子から同時期に埋没したと判断される。本遺構の東約3.6m先には第17号溝跡があり、走行方向や形状・覆土の状況が近似している。この間における確認面のレベルが溝底面のレベルより低いため、消失した可能性があり、本来は連続した溝であったと考えられる。また、21―28グリッド内で第30号ピットと重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］　北東―南西走行で、ほぼ直線状に走行する。北東端、南西端ともに次第に浅くなり消滅する。検出長7.39m、幅0.16～0.33m、確認面からの深さは0.03～0.09mである。底面のレベルは東から西に向かって下がり、検出長間で約0.13mの高低差がある。

［断　面　形］　浅いU字状である。

［覆　　土］　白色軽石を多く含む暗褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第７号溝跡（第48図）

［位　　置］　21―28・29グリッドに位置する。

［重　　複］　北西端で第６号溝跡と接続するが、前述のとおり両遺構は同一遺構と考えられる。その他、第１号円形柱穴列跡Ｐ15、第115号ピット、第121号ピットと重複するが、本遺構が最も新しい。

［平面形・規模］　北西―南東走行で、ほぼ直線状に走行する。北西端から南東に向かって次第に幅が狭くなり、南東端は浅くなり消滅する。検出長は3.88m、幅は0.18～0.80m、確認面からの深さは0.03～0.10mである。底面のレベルは北西から南東に向かって下がり、検出長間で約0.06mの高低差がある。

［断　面　形］　浅いU字状である。

［覆　　土］　白色軽石を多く含む暗褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第８号溝跡（第49・51図、第21表）

［位　　置］　15～17―27・28グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

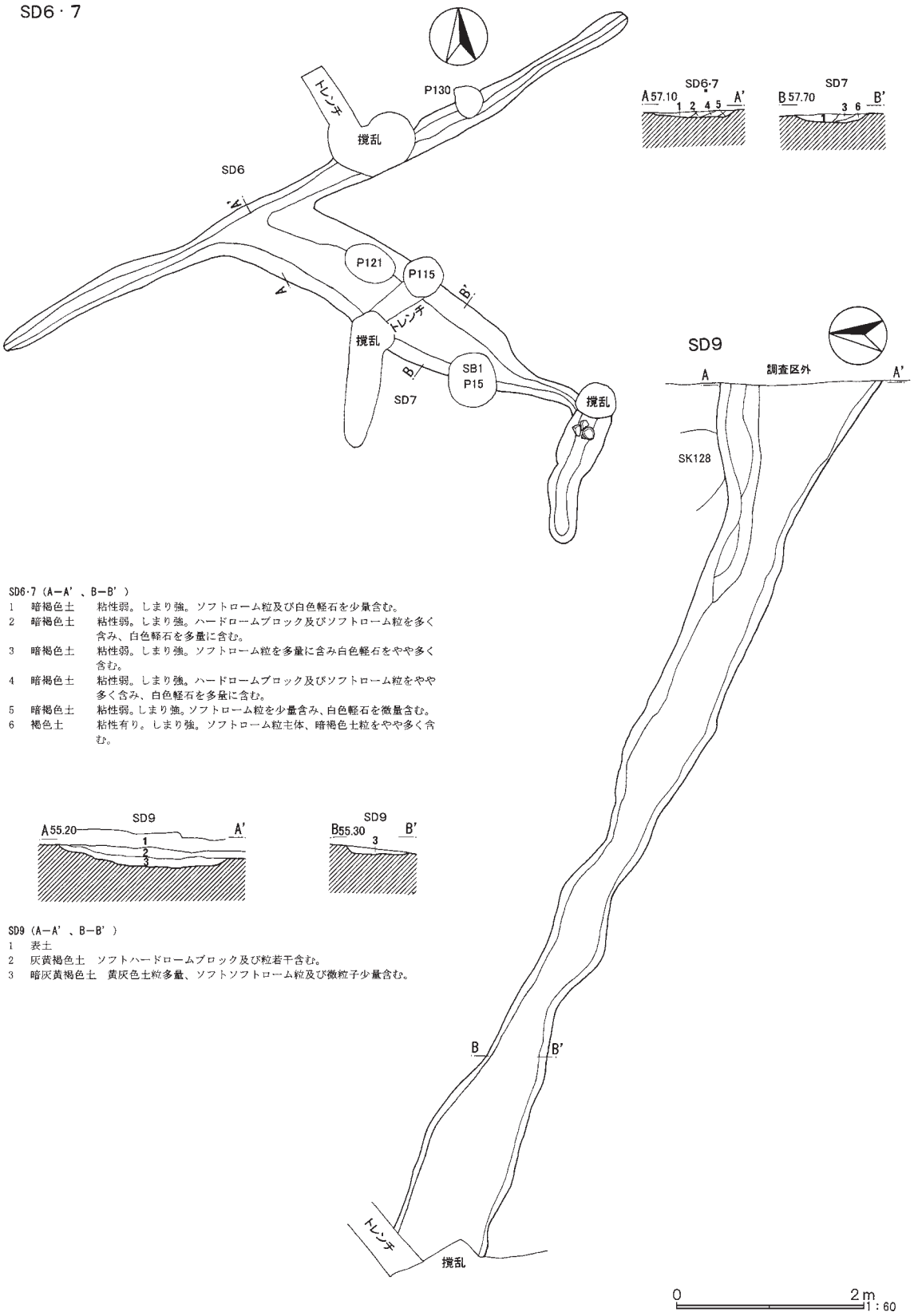
［平面形・規模］　北東―南西走行で、ほぼ直線状に走行する。北東端と南西端で浅くなり消滅する。本遺構の南西約1.0m先には第14号溝跡と重複する第97号土坑があり、走行方向や覆土の状況が近似している。この間における確認面のレベルが溝底面のレベルより低いため、消失した可能性があり、本来は連続したものであったと考えられる。検出長は9.60m、幅は0.30～1.15m、確認面からの深さは0.05～0.10mである。

［断　面　形］　浅いU字状である。

［覆　　土］　黒褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　覆土中から出土した流れ込みの可能性がある諸磯式期の縄文土器（８―１）と本遺構に伴うと思われる陶器（８―２）が出土した。

［時　　期］　出土遺物からおおよそ近世と考えられる。



SD6・7（A－A'、B－B'）

1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒及び白色軽石を少量含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含み、白色軽石を多量に含む。
3　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含み白色軽石をやや多く含む。
4　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含み、白色軽石を多量に含む。
5　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を少量含み、白色軽石を微量含む。
6　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体、暗褐色土粒をやや多く含む。

SD9（A－A'、B－B'）

1　表土
2　灰黄褐色土　ソフトハードロームブロック及び粒若干含む。
3　暗灰黄褐色土　黄灰色土粒多量、ソフトソフトローム粒及び微粒子少量含む。

第48図　第６・７・９号溝跡

第９号溝跡（第48図）

［位　　置］　５・６―22グリッドに位置する。

［重　　複］　５―22グリッド内で第128号土坑と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］　南東―北西走行で、ほぼ直線状に走行する。南東端は調査区域外、北西端は７―21グリッド内で撹乱により消滅している。検出長は10.0m、幅は0.42～1.68m、確認面からの深さは0.05～0.18mである。

［断　面　形］　浅いＵ字状である。

［覆　　土］　下層から暗灰黄褐色土、灰黄色土の順にレンズ状に堆積する。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第10号溝跡（第49図）

［位　　置］　15―27・28グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　北東―南西走行で、ほぼ直線状に走行する。北東端と南西端で浅くなり消滅する。検出長は2.15m、幅は0.45～0.60m、確認面からの深さは0.08mである。

［断　面　形］　浅いＵ字状である。

［覆　　土］　灰黄褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第11号溝跡（第49図）

［位　　置］　15・16―28グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　北東―南西走行で、断続してほぼ直線状に走行する。北東端と南西端で浅くなり消滅する。検出長は4.92m、幅は0.15～0.22m、確認面からの深さは0.05mである。

［断　面　形］　浅いＵ字状である。

［覆　　土］　灰黄褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第12号溝跡（第49図）

［位　　置］　15・16―30グリッドに位置する。

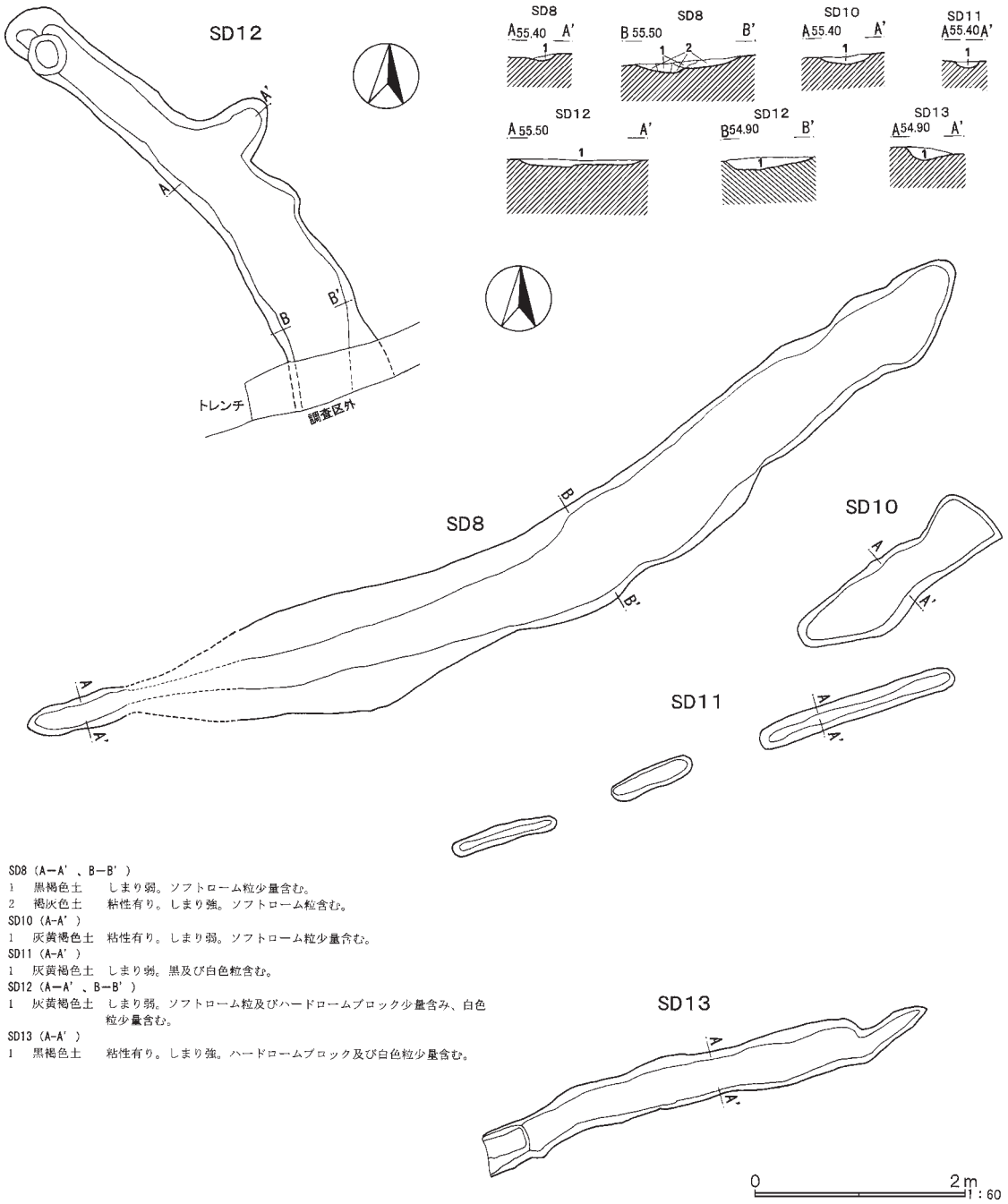
［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　北西―南東走行で、南北軸から西へ40°湾曲した状態で走行する。南東端は調査区域外まで延び、北西端は16―29グリッド内で終わる。検出長は4.65m、幅0.50～0.85m、確認面からの深さは0.03～0.07mである。

［断　面　形］　浅い平坦なＵ字状である。

［覆　　土］　灰黄褐色土が堆積する。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。



第49図　第８・10・11・12・13号溝跡

［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第13号溝跡（第49図）

［位　　置］　16・17—30・31グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　北東—南西走行で、ほぼ直線状に走行し、南西端は撹乱を受け、北東端は幅が狭く浅くなり消滅する。検出長は4.30m、幅は0.20～0.50m、確認面からの深さは0.13mである。

［断　面　形］　浅いU字状である。

［覆　　土］　黒褐色土が堆積する。
［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。
［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第14号溝跡（第50・51図、第21表）

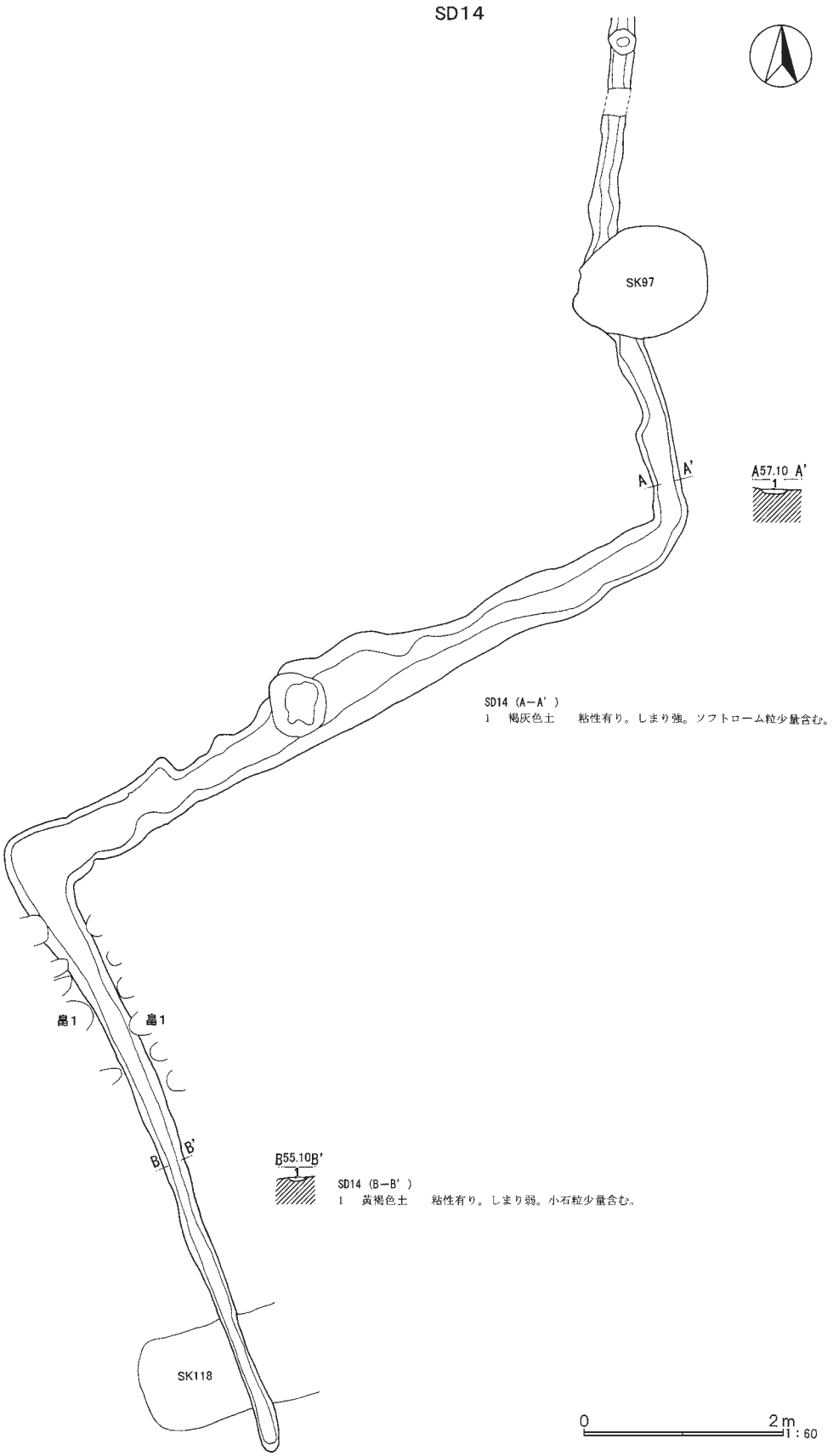
［位　　置］　18―28・29・30グリッドに位置する。
［重　　複］　17―28グリッド内で第97号土坑と重複し、本遺溝が古い。18―30グリッド内で第118号土坑と重複し、本遺溝が新しい。
［平面形・規模］　北北西―南南東走行から17―28グリッド内で南西側に90°屈曲して北東―南西方向に走行し、19―29グリッド内で南東側に90°屈曲して北西―南西方向に走行する。それぞれの走行はほぼ直線状で、各端部で浅くなり消滅する。検出長は183.00m、幅は0.17～0.80m、確認面からの深さは0.03～0.04mである。また、前述のとおり第５号溝跡と同一遺構の可能性がある。
［断　面　形］　浅いU字状である。
［覆　　土］　褐灰色土、黄褐色土が堆積する。
［出 土 遺 物］　覆土中から本遺構に伴うと思われる磁器碗（14―１）と流れ込みの可能性がある縄文土器深鉢（14―２）が出土した。
［時　　期］　出土遺物や覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第16号溝跡（第51図）

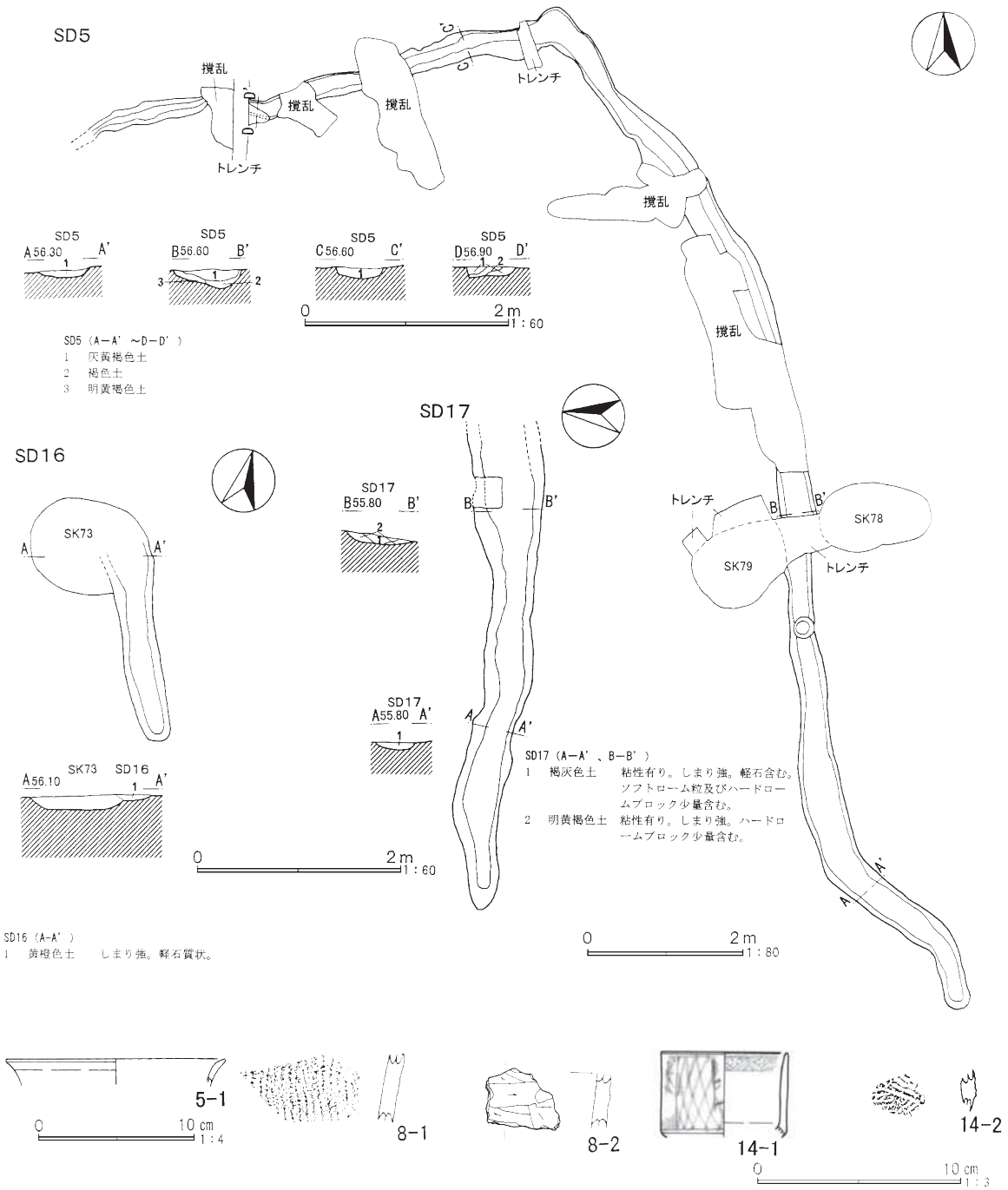
［位　　置］　17―25グリッドに位置する。
［重　　複］　第73号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］　南南東―北北西走行でほぼ直線状に走行する。北北西端で第73号土坑と重複し消滅し、南南東端では浅くなり消滅する。検出長は1.60m、幅は0.27～0.37m、確認面からの深さは0.10mである。
［断　面　形］　浅いU字状である。
［覆　　土］　黄橙色土が堆積する。
［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。
［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。

第17号溝跡（第51図）

［位　　置］　19―28グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　東―西走行で、ほぼ直線状に走行する。東端は検出できず、一方、西端は次第に浅くなり消滅する。検出長は4.50m、幅は0.25～0.70m、確認面からの深さは0.08mである。
［断　面　形］　浅いU字状である。
［覆　　土］　褐灰色土や明黄褐色土が堆積する。
［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。
［時　　期］　覆土の様子からおおよそ近世と考えられる。


SD14
SK97
A
A'
A57.10 A'
1
SD14 (A−A')
1　褐灰色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。
畠1
畠1
B
B'
B55.10B'
1
SD14 (B−B')
1　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。小石粒少量含む。
SK118
0
2m
1:60

第50図　第14号溝跡



第51図　第５・６・17号溝跡・溝跡出土遺物

第2表　溝跡出土遺物観察表（第51図）

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
5－1	SD 5	土師器坏	(14.0)	(1.6)	—	ABN	にぶい橙色	B	口縁部片	
8－1	SD 8	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDEGIJ	にぶい黄橙色	B	胴部片	諸磯式（前期）。
8－2	SD 8	陶器	—	—	—	ABIN	にぶい赤褐色	B	胴部片	胴部外面ヘラケズリ。
14－1	SD14	磁器染付碗	(8.8)	(5.3)	—	—	—	—	口～底10%	外面染色：竹林文＋斜格子文、内面染色：口縁部横位連続菱形文。
14－2	SD14	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIN	明赤褐色	B	胴部片	外面沈線文。

6　土坑・ピット（第52～73図、第22～25表）

検出された土坑は総数にして129基で、調査区全体に散在している。平面形状は、正方形・長方形・円形・不整円形・楕円形・不整楕円形・不整形などさまざまな形状があり、調査区南西寄りでは、長軸が極端に長くなる長方形のものがまとまって検出されている。それぞれの時期を特定できたものは少ないが、出土遺物から縄文時代から近世に至るものと考えられる。

縄文時代の土坑と考えられるものを出土遺物や重複関係から時期的に細分して見てみると、早期の条痕文系・三戸式・田戸式などの土器が出土している土坑が第42・54・70・103・129号土坑、前期沈線文系の土器やスタンプ型石器が出土している土坑が第３・４・108号土坑、中期阿玉台式の土器が出土している土坑が第19・21号土坑、後期称名寺式の土器が出土している土坑が第64・86～88・135号土坑、早期田戸下層式や前期関山式の土器が出土している土坑が第２号土坑、早期縄文土器片、そして前期黒浜式、中期加曽利Ｅ式、後期加曽利Ｂ式の土器が出土している土坑が第47号土坑、前期浮島式や中・後期縄文土器片などが出土している土坑が第25号土坑、早～後期の土坑が第５・13・15・16・28・29・48・49・84・90・99・100・118・119・121・125・138・143号土坑である。

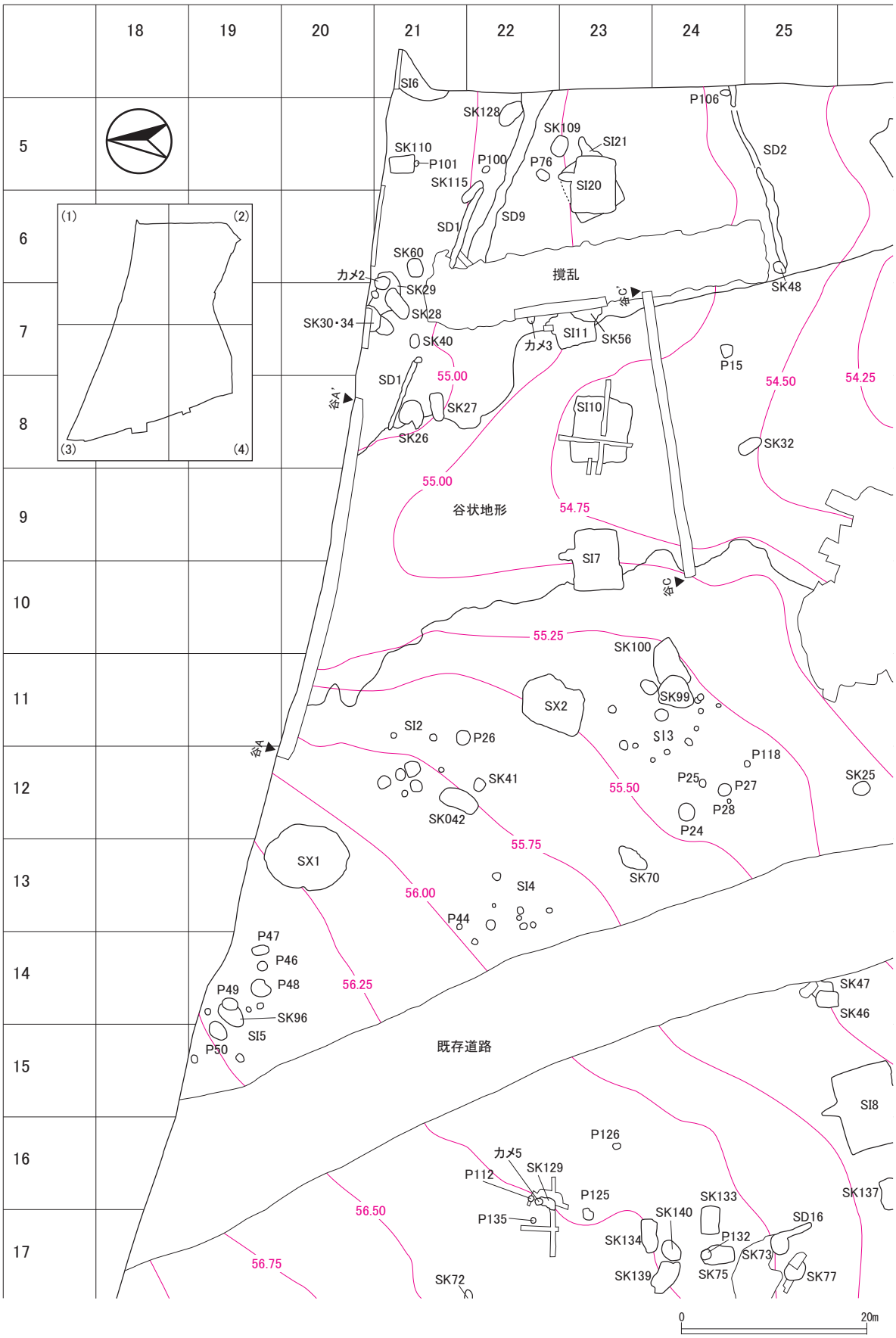
奈良・平安時代の土坑と考えられるものは第12・17・36・46・52・71・72・109・136号土坑で、出土遺物や重複関係から主に９世紀代である。第12号土坑からは白色針状物質を含む須恵器坏が出土し、第17号土坑からは須恵器甕口縁部片が出土しているが、頸部外面に横位沈線３条を施し、沈線区画内には櫛描波状文ではなく櫛描レ点状刺突文が施されていた。第46号土坑からは頸部外面に沈線を持つ須恵器甕口縁部片、第52号土坑からは外面に釉薬が見られる須恵器長頸瓶、第67・71号土坑からは底部回転糸切り離しの須恵器坏、第109号土坑からは土師器甕片、第136号土坑は須恵器坏片が出土している。

近世の土坑と考えられるものは、第６～10・14・31・37・57・58・61・62・73・81～83・91・115・128号土坑である。第６～10・31・37号土坑の覆土中には火山灰が検出された。また、第14・81・82・83・91号土坑では覆土中に多量の礫が検出され、第58号土坑からはかわらけ・陶器・磁器・焙烙・石臼が出土した。第61号土坑からは陶器・磁器・火鉢・焙烙が出土し、第81～83号土坑からは陶器・磁器・焙烙が出土した。

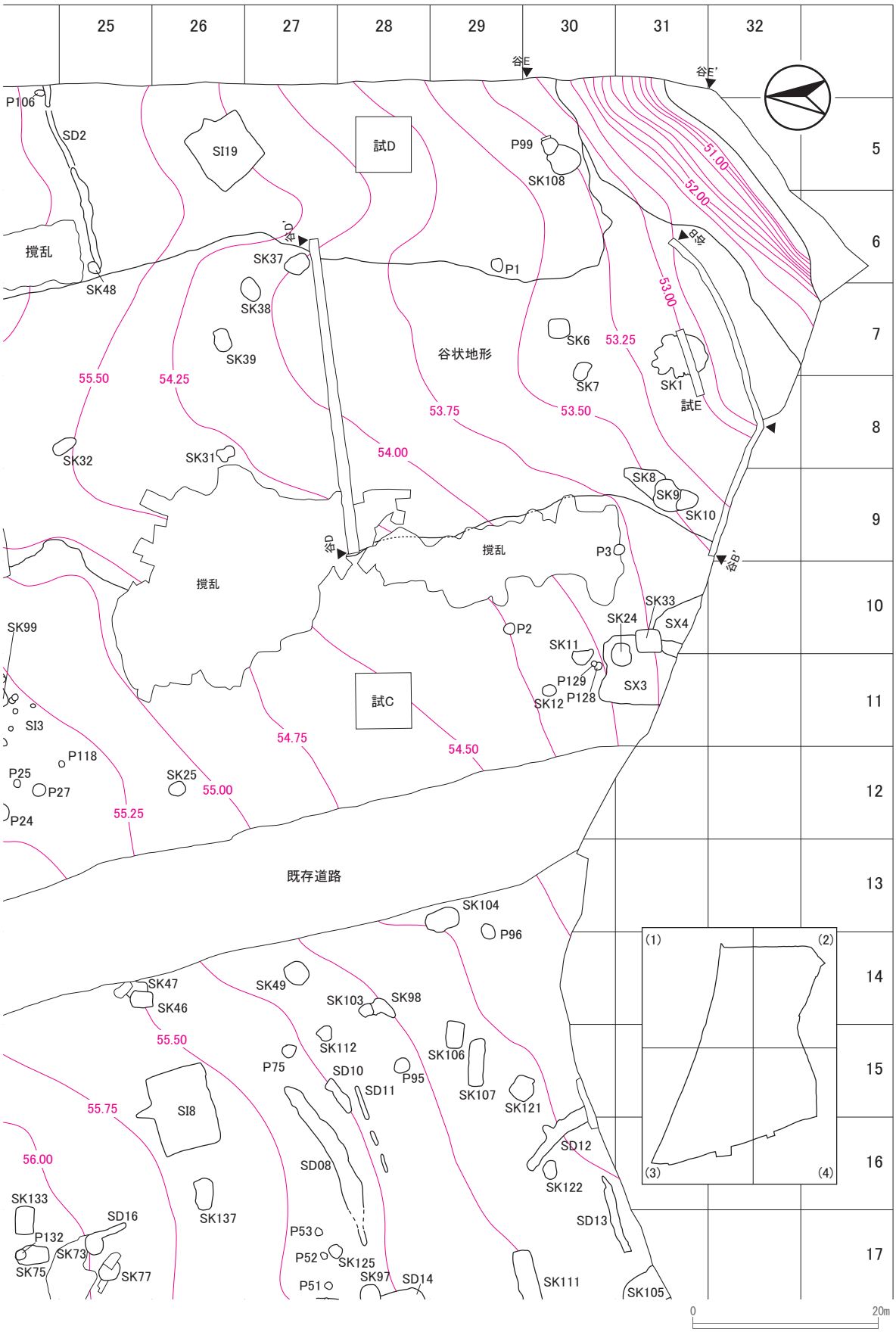
時期不明の土坑は、第１・11・18・20・23・24・26・27・30・32～34・38～41・59・60・63・66・68・75～79・85・89・92～98・102・104～107・110～114・116・117・122～124・126・127・130・133・134・137・139～142・144・145号土坑である。流れ込みと思われる縄文から近世の遺物が出土している。

一方、検出されたピットは総数にして98基で、調査区西部に比較的多く散在している。22・23－23・24グリッド付近では濃密に検出され、重複しているものも多い。いずれのピットも規則性は捉えきれず、建物跡等は想定できなかった。平面形状は、円形・不整円形・楕円形・不整楕円形・不整形が検出されている。それぞれの時期を特定できたものは少ないが、その中で、第10・14号ピットからは縄文後期の土器（称名寺式）、第76号ピットからは縄文早期の土器（押型文）、第106号ピットからは縄文中期の充塡縄文土器（加曽利Ｅ式）、第115・136号ピットからは単節縄文、沈線文の縄文土器が出土している。第１・３・24・25・27・45号ピットの覆土中には火山灰が検出されており、第２・14・15・39・44・46～48・51・53・57・95・97・104・111・132号ピットの覆土中には、炭化材・焼土粒が検出されている。また、第23・128号ピットの覆土中には多量の礫が検出されている。

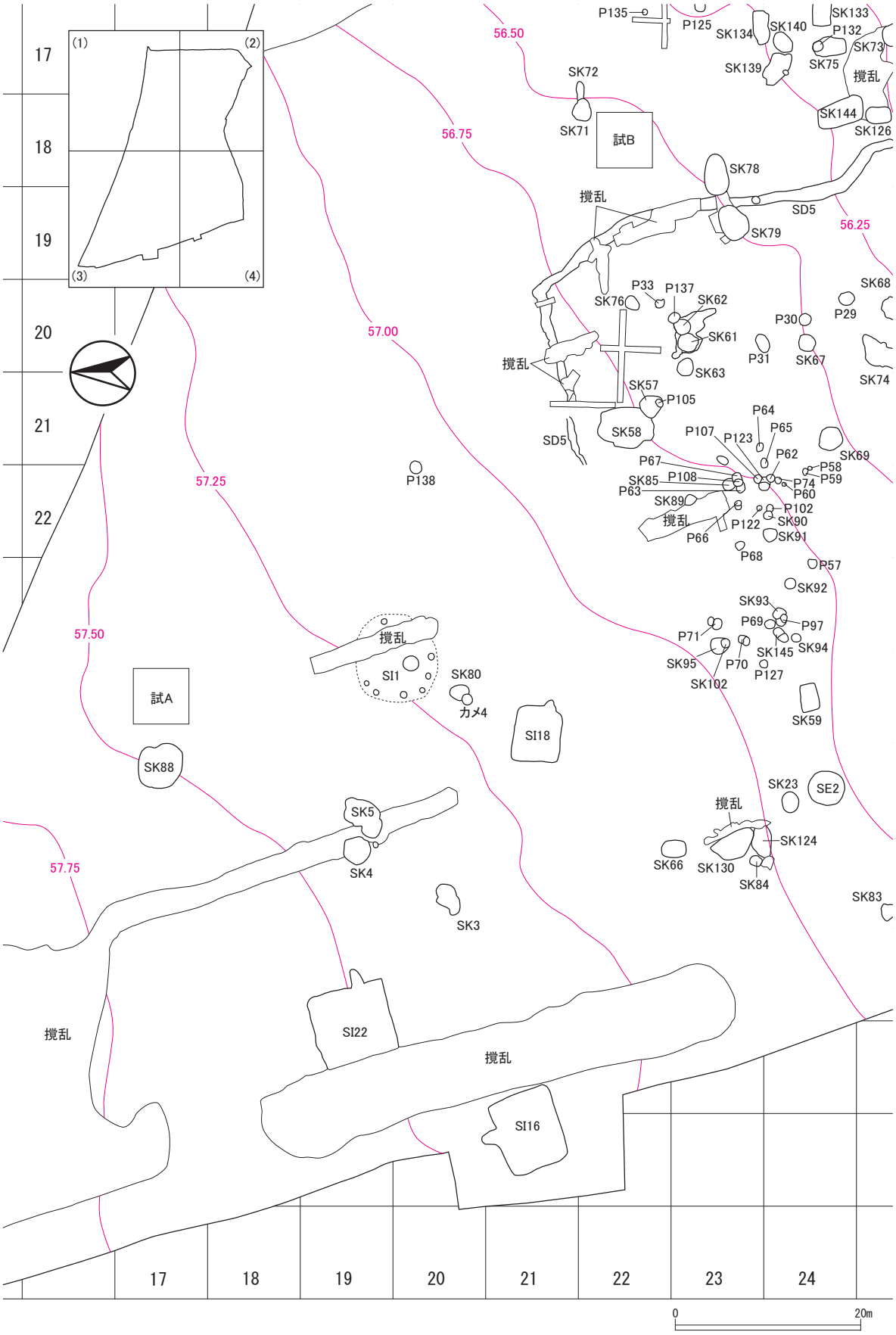
以下、各土坑・ピットの詳細について、表一覧で掲載し報告する（第22・25表）。



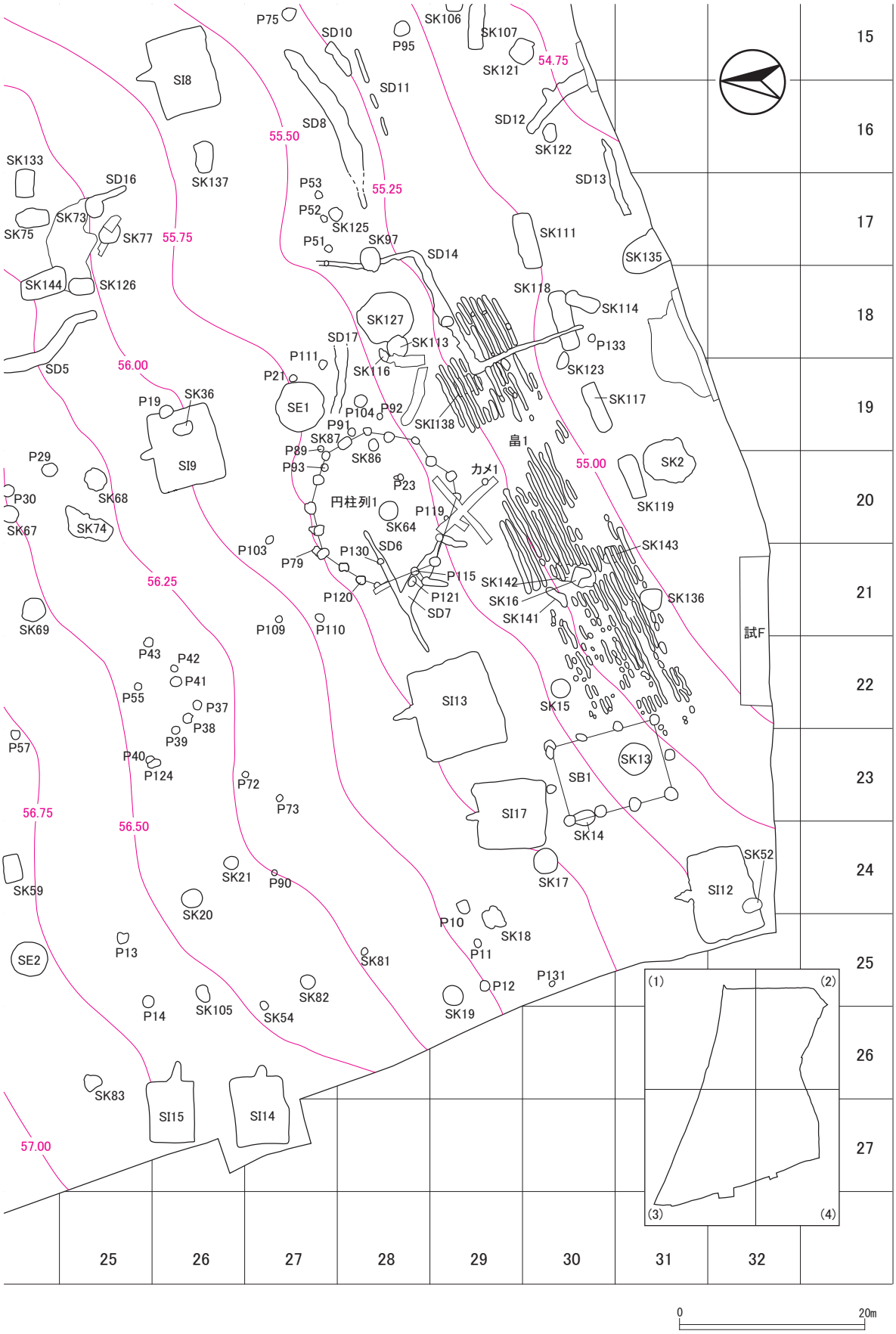
第 52図　土坑・ピット配置図(1)



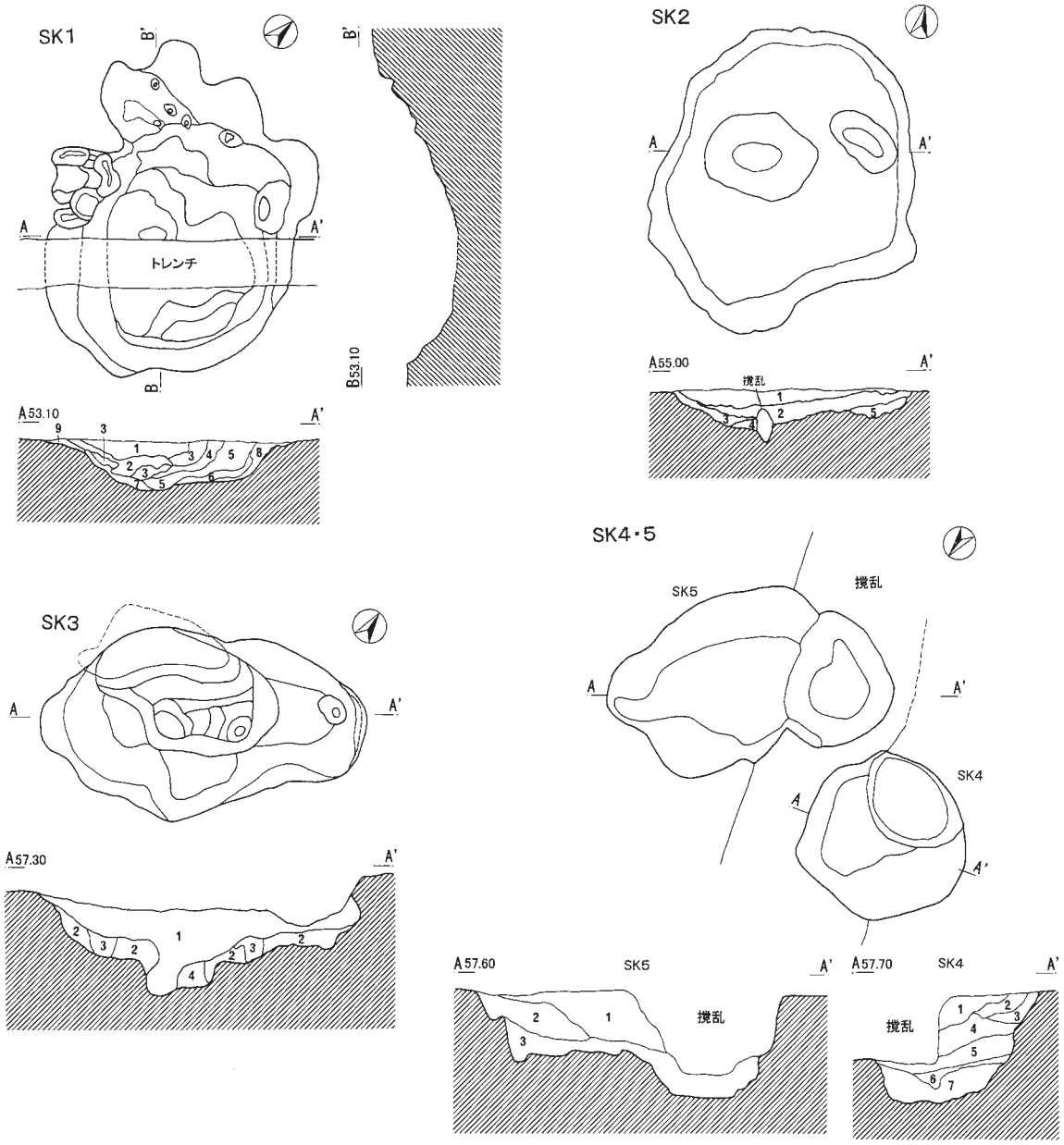
第53図　土坑・ピット配置図(2)



第54図　土坑・ピット配置図(3)



第 55図　土坑・ピット配置図(4)



SK1

1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。縄文土器片出土。
2　黒色土　粘性強。しまり強。
3　褐色土　粘性有り。しまり強。赤褐色粒をやや多く含む。
4　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。シルト質土。赤褐色粒を多く含む。
5　にぶい黄橙色土　粘性強。しまり強。シルト質土。
6　にぶい黄色土　粘性有り。しまり強。砂質シルト。
7　黒褐色土　粘性有り。しまり強。5層のブロック及び3層の粒を多量に含む。
8　にぶい黄褐色土　粘性弱。しまり強。黒色土ブロック及び粒を多量に含み、小礫及び砂粒を多量に含む。
9　褐色土　粘性有り。しまり強。

SK2

1　黒褐色土　しまり弱。ソフトロームブロック少量、灰白色粘土ブロック及び粒多量、ソフトローム粒少量含む。
2　明黄褐色土　ソフトローム。ハードロームブロック若干、黒褐色土粒若干含む。
3　黒褐色土　ソフトロームブロック少量含む。
4　明黄褐色土　ソフトローム。ハードロームブロック及び粒が多く、黒褐色土ブロック、微粒子少量含み、まだらに状に入る。
5　暗灰黄色土　しまり弱。ソフトローム微粒子少量含む。

SK3

1　黒褐色土　粘性なし、しまり普通。極微量の火山灰含む。ハードロームブロック及びソフトローム粒微量。黒褐色土ブロック少量含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり普通。ソフトローム粒及びハードブロック多量に含む。
3　黒褐色土　ソフトローム粒の混入が若干多い。
4　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり普通。微量のソフトローム粒を含む。

SK4

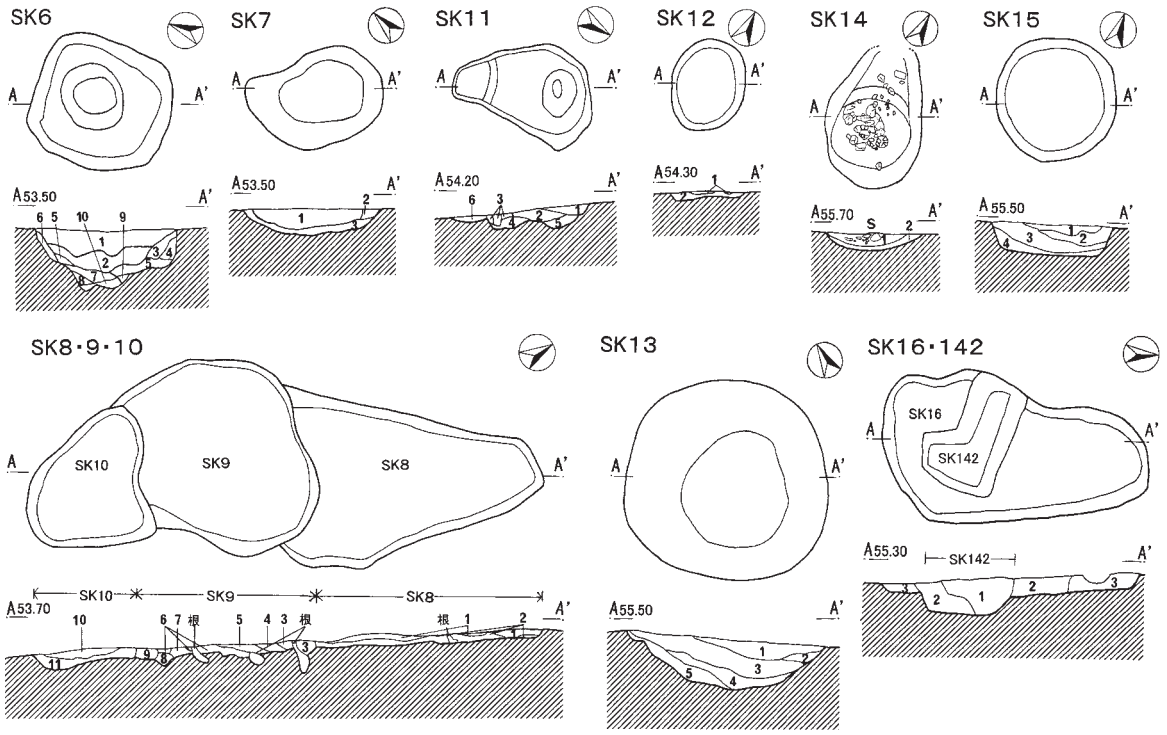
1　褐色土　粘性有り。しまり強。黒色粒をやや多く含む。キメ細かい。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒を多く含む。
3　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒、暗褐色土粒をやや多く含む。
4　褐色土　粘性有り。しまり強。黒色粒を多く含む。
5　褐色土　粘性有り。しまり強。黒色粒を多く含みハードロームブロックを多量に含む。
6　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。シルト質ブロック及び粒をやや多く含み、暗褐色土粒を多量に含む。
7　褐色土　しまり強。ハードロームブロック主体。ソフトローム粒を多く含み、暗褐色土粒を少量含む。

SK5

1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。硬質の黒褐色土ブロック及びソフトローム粒を多く含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒を少量含む。
3　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。ハードロームブロック及び暗褐色土粒を多く含む。

0　2m　1:60

第56図　土坑(1)



SK6
1　黒褐色土　火山灰わずか、ソフトローム微粒子わずかに含む。
2　オリーブ黒色土　ソフトローム粒ごくわずか含む。
3　オリーブ黒色土　ソフトローム粒少量含む。
4　暗灰黄色土　粘性有り。オリーブ黒色土ブロック、ソフトロームブロック若干含む。
5　黄灰色土　粘性弱。ソフトローム粒わずか。灰白色粘土粒わずかに含む。
6　にぶい黄褐色土　オリーブ黒色土混じり。
7　黒褐色土　ソフトローム粒少量含む。
8　灰黄色土　粘性強。しまり弱。マンガン粒含む。
9　オリーブ黒色土　ソフトローム粒少量含む。
10　黄褐色粘土　しまり強。ソフトローム粒、オリーブ黒色土粒少量含む。

SK7
1　黒褐色土　火山灰わずかに含む。
2　オリーブ黒色土　ソフトローム粒わずかに含む。
3　オリーブ黒色土　ソフトローム粒ブロック多量に含む。

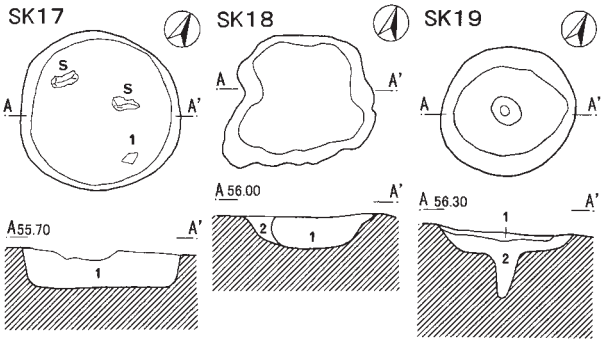
SK8・9・10
1　黒褐色土　ソフトローム粒及びブロック、ハードロームブロック少量含む。
2　にぶい黄褐色土　粘性弱。ソフトローム粒少量、黒色土粒少量含む。
3　オリーブ黒色土　ソフトローム粒少量含む。
4　黒褐色土　ソフトローム粒、オリーブ黒色土粒若干含む。
5　暗灰黄色土　ソフトローム粒少量含む。
6　にぶい黄褐色土　しまり強、4層粒ブロック少量含む。
7　にぶい黄褐色土　しまり強。火山灰若干含む。
8　黄褐色土　黄灰色土粒わずかに含む。
9　にぶい黄褐色土　オリーブ黒色土ブロックが多量に占める。
10　暗灰黄色土　黄褐色土ブロック少量、火山灰少量含む。
11　にぶい黄褐色土　10層土ブロック若干、火山灰少量含む。

SK11
1　灰黄褐色土　黒褐色土粒、ソフトローム粒少量含む。
2　黒褐色土　ソフトローム粒少量、暗灰黄色土混じり。
3　にぶい黄褐色土　暗灰黄色土粒多量に含む。
4　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒少量、黒褐色土粒若干含む。
5　にぶい黄褐色土　黒褐色土粒少量含む。
6　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒多量、黒褐色土粒若干含む。

SK12
1　灰黄褐色土　火山灰多量に含む。
2　暗灰黄色土　ソフトローム粒若干、火山灰若干含む。

SK13
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒を多量に含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック主体。ソフトローム粒をやや多く含む。
3　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。
4　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多量に含む。
5　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。

SK14
1　黒褐色土　粘性弱。ソフトローム粒を少量含む。目視では確認できないが、粉炭及び灰が含まれるとみられる。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含む。



SK15
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックを多く含み、ソフトローム粒を多量に含む。
4　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。

SK16・142
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。白色粒、ソフトローム粒まだらに含む。
2　明黄褐色土　粘性有り。しまり強。白色粒、ハードロームブロック少量まだらに含む。
3　明黄褐色土　粘性有り。しまり強。白色粒、ソフトローム粒少量含む。

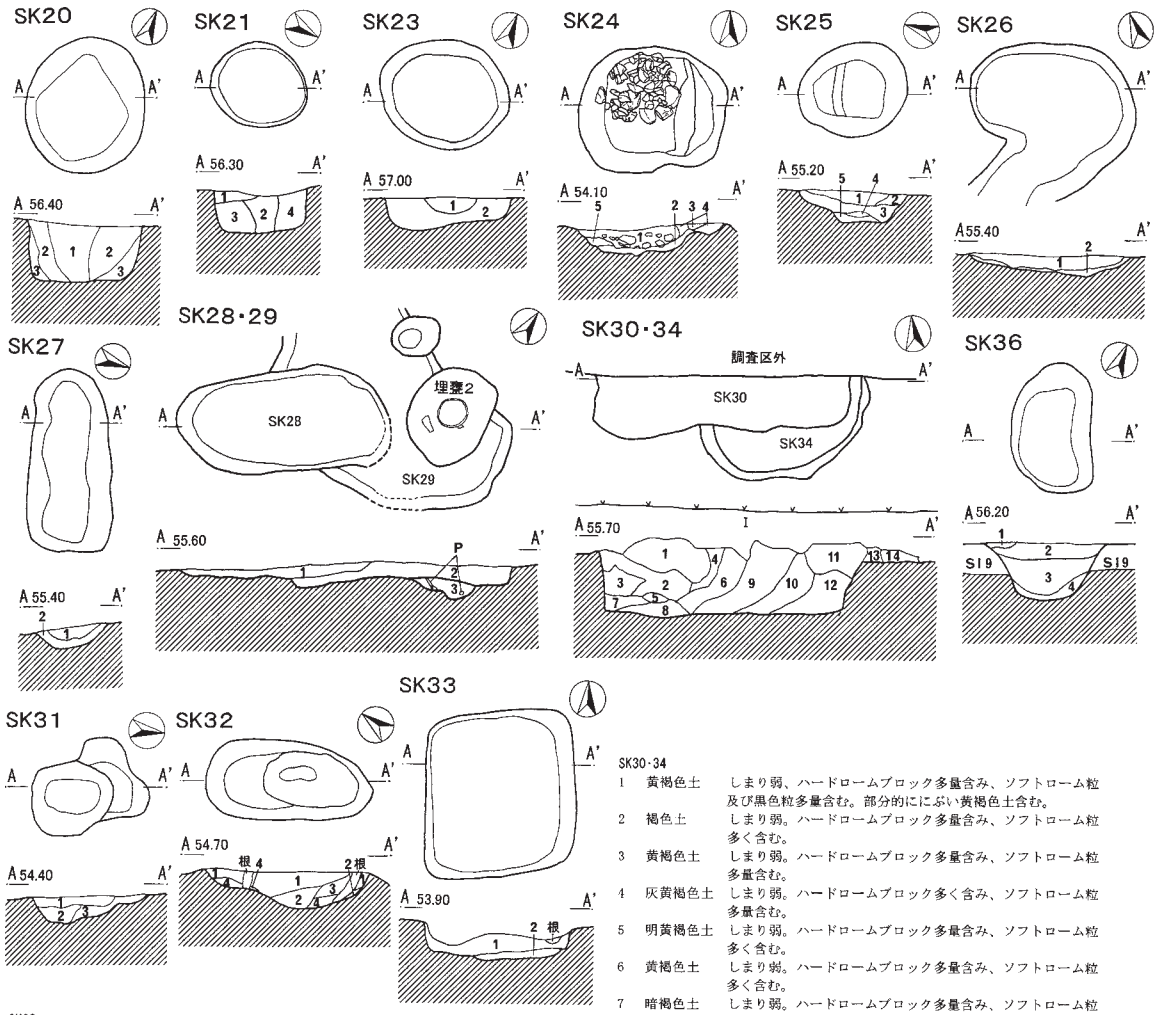
SK17
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多量に含む。

SK18
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多量に含む。
2　褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含む。

SK19
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、黒褐色土ブロックをやや多く含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒を多量に含む。

0　2m
1：60

第57図　土坑(2)



SK20
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。炭化物を少量含む。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。1層に似るがソフトローム粒の混入比率が高く色調が明るい。炭化物を少量含む。
3　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を主体。ハードロームブロックを多く含む。暗褐色土粒をやや多く含む。

SK21
1　褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームを主体とする。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。暗褐色土ブロックにソフトローム粒が混入。
3　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
4　褐色土　粘性有り。しまり普通。ソフトローム粒を主体とし、暗褐色土を多く含む。

SK23
1　暗褐色土　粘性なし。焼土粒多量に混入。炭化物含む。
2　褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒多量含む。

SK24
1　黒色土　ハードロームブロック若干。礫多量に含む。
2　オリーブ黒色土　ソフトロームブロック含む。炭化物性わずかに含む。
3　黒色土　ソフトローム微粒子わずかに含む。
4　灰色土　ソフトローム粒少量含む。
5　オリーブ黒色土　ソフトロームブロック含む。

SK25
1　黒褐色土　黄褐色土粒及びブロック若干。火山灰わずかに含む。
2　黄褐色土　黒褐色土粒少量含む。
3　黄褐色土　黒褐色土粒多量。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。
4　暗灰黄色土　ソフトローム粒若干含む。
5　黒褐色土　ソフトロームブロック及び粒多量に含む。

SK26
1　黒褐色土　粘性有り。しまり弱。白色粒少量含み、黄褐色土まばらに含む。
2　明黄褐色土　粘性有り。しまり強。一部黒褐色土含む。

SK27
1　黒褐色土　粘性有り。しまり弱。白色粒含み、黄褐色土混合。
2　明黄褐色土　粘性有り。しまり強。一部黒褐色土含む。

SK28・29
1　暗褐色土　しまりなし。ハードロームブロック少量含む。明黄褐色土一部散在。
2　褐色土　粘性弱。しまり普通。黒色粒少量含み、明黄褐色土散在。
3　黒褐色土　しまりなし。白色土少量含む。にぶい黄褐色土散在。焼土粒少量。

SK30・34
1　黄褐色土　しまり弱、ハードロームブロック多量含み、ソフトローム粒及び黒色粒多量含む。部分的ににぶい黄褐色土含む。
2　褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含み、ソフトローム粒多く含む。
3　黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含み、ソフトローム粒多量含む。
4　灰黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多く含み、ソフトローム粒多量含む。
5　明黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含み、ソフトローム粒多く含む。
6　黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含み、ソフトローム粒多く含む。
7　暗褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含み、ソフトローム粒多く含む。
8　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック少量含み、ソフトローム粒多く含む。
9　黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック少量含み、ソフトローム粒多く含む。黒色粒少量含む。
10　暗褐色土　しまり弱。ハードロームブロック少量含み、ソフトローム粒少量含む。
11　暗褐色土　しまり弱。ハードロームブロック少量含み、ソフトローム粒少量含む。
12　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック少量含み、ソフトローム粒少量含む。
13　褐色土　しまり強。黒色粒少量含む。
14　暗褐色土　しまり強、黒褐色土散在含む。

SK31
1　黒褐色土　しまり強。火山灰多量に含む。ハードロームブロックわずかに含む。
2　黒褐色土　しまり強。黒色土ブロック多量、ソフトローム粒少量含む。
3　黄褐色土　しまり強。黒褐色土ブロック多量、火山灰少量含む。

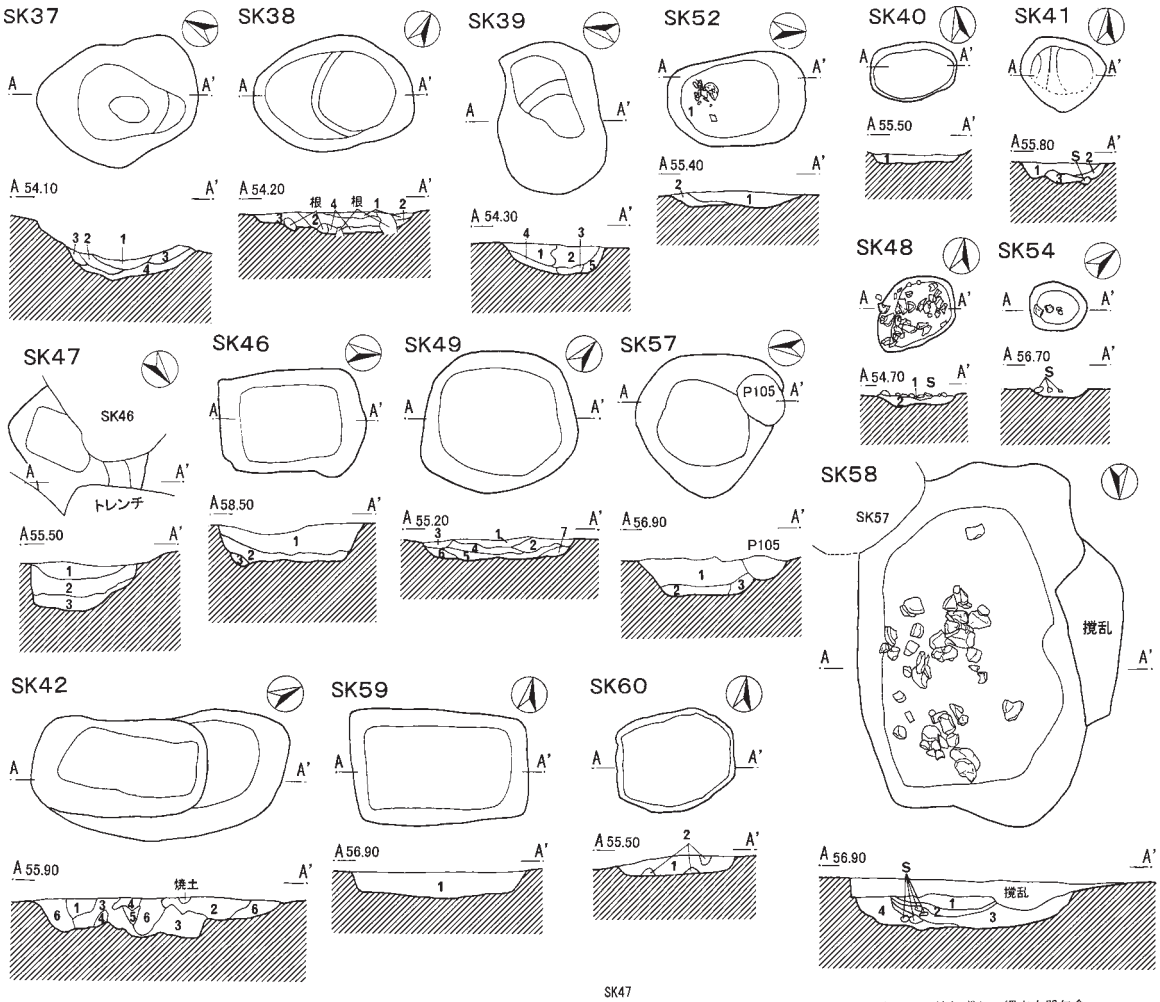
SK32
1　黒褐色土　ハードロームブロック及び粒少量含む。
2　黒色土　ソフトロームブロック及び粒若干、ハードロームブロックわずかに含む。
3　にぶい黄褐色土　ハードロームブロック及び粒多量、黒色土ブロック若干含む。
4　灰黄褐色土　黒褐色土混じり。

SK33
1　黒褐色土　ソフトローム粒及び微粒子多量含む。
2　褐灰色土　ソフトロームブロック少量。ソフトローム粒少量含む。

SK36
1　黒褐色土　粘性なし。しまり普通。炭化物を多量含み、ソフトローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　粘性なし。しまり普通。にぶい黄褐色土をダマ状に多く含む。焼土を含む。
3　黒褐色土　粘性なし。しまり弱。ハードロームブロック微量。ソフトローム粒を含む。
4　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック微量。ソフトローム粒微量。

0　2m
1：60

第58図　土坑(3)



SK37
1　黒色土　ソフトローム粒若干、火山灰少量含む。
2　黒褐色土　黒色土ブロック少量含む。
3　灰黄褐色土　ソフトローム粒若干、黒色土ブロックわずかに含む。
4　黒色土　ハードロームブロック及び粒多量に含み、多く占める。

SK38
1　黒褐色土　ソフトローム粒若干含む。
2　黒色土　ソフトローム粒若干。にぶい黄褐色土ブロック若干含む。
3　灰黄褐色土　黒褐色土ブロック及び粒、炭化物粒わずかに含む。
4　黒色土　ソフトロームブロック多量に含む。

SK39
1　褐灰色土　しまりなし。ソフトローム粒わずかに含む。
2　黒褐色土　にぶい黄褐色土ブロックわずかに含む。
3　灰黄褐色土　ソフトローム粒少量含む。
4　黒色土　ソフトローム粒若干含む。
5　灰黄褐色土　黒褐色土混じり。

SK40
1　灰黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量。

SK41
1　灰黄褐色土　粘性弱。しまり強。明黄褐色土散在。
2　黄橙色土　粘性弱。しまり強。一層土散在。
3　黄橙色土　粘性弱。しまり強。黒色滴顕極少量含む。

SK42
1　黒褐色土　粘性強。しまり強。焼土粒及び炭化材少量含む。白色粒少量含み、にぶい黄褐色土斑点状散在。
2　黄褐色土　粘性弱。しまり強。焼土粒部分的多く含み、全体に少量散在、黒及び白色粒少量含み、ソフトローム粒少量含む。
3　オリーブ褐色土　粘性強。しまり強。白色粒少量含み、ハードロームブロック含む。
4　暗オリーブ色土　粘性弱。しまり弱。黒色粒少量含み、黄橙色土ブロック極少量含む。
5　色調は3層よりやや明るめ、土層3層に類似。
6　黄褐色土　粘性弱。しまり弱。黒及び白色粒少量含む。

SK46
1　灰黄褐色土　ソフトローム粒及び微粒子多量に含む。
2　黒褐色土　ソフトロームブロック及び粒少量含む。
3　黒褐色土　ソフトロームブロック多量に含み、炭化物含む。

SK47
1　暗灰黄色土　黒色土ブロック少量、ソフトローム粒わずか。縄文土器包含。
2　灰色土　黒色土ブロック多量、ソフトロームブロックわずかに含む。縄文土器包含む。
3　黒色土　ソフトローム粒若干、ソフトロームブロック大わずかに含む。

SK48
1　黒褐色土
2　にぶい黄褐色土　黒褐色土ブロック粒少量含む。

SK49
1　黒色土　しまり強。ソフトローム粒若干含む。
2　灰黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒ごくわずか含む。
3　2層にほぼ同じ。
4　黒色土　しまり強。ソフトローム粒及び微粒子少量含む。
5　褐灰色土　しまり強。ソフトロームブロック少量含む。
6　黒褐色土　ソフトロームブロック少量含む。
7　灰黄褐色土　しまり弱。ソフトロームブロック含む、

SK52
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。焼土ブロックを多量に含み、焼土粒をやや多く含む。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒多量に含む。

SK57
1　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。オリーブ黄色の粘土ブロック及び粘土粒多量含む。
2　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。オリーブ黄色の粘土ブロック及び粘土粒多量含む。
3　黄褐色土　しまり強。ソフトローム粒主体、粘土粒多量含む。

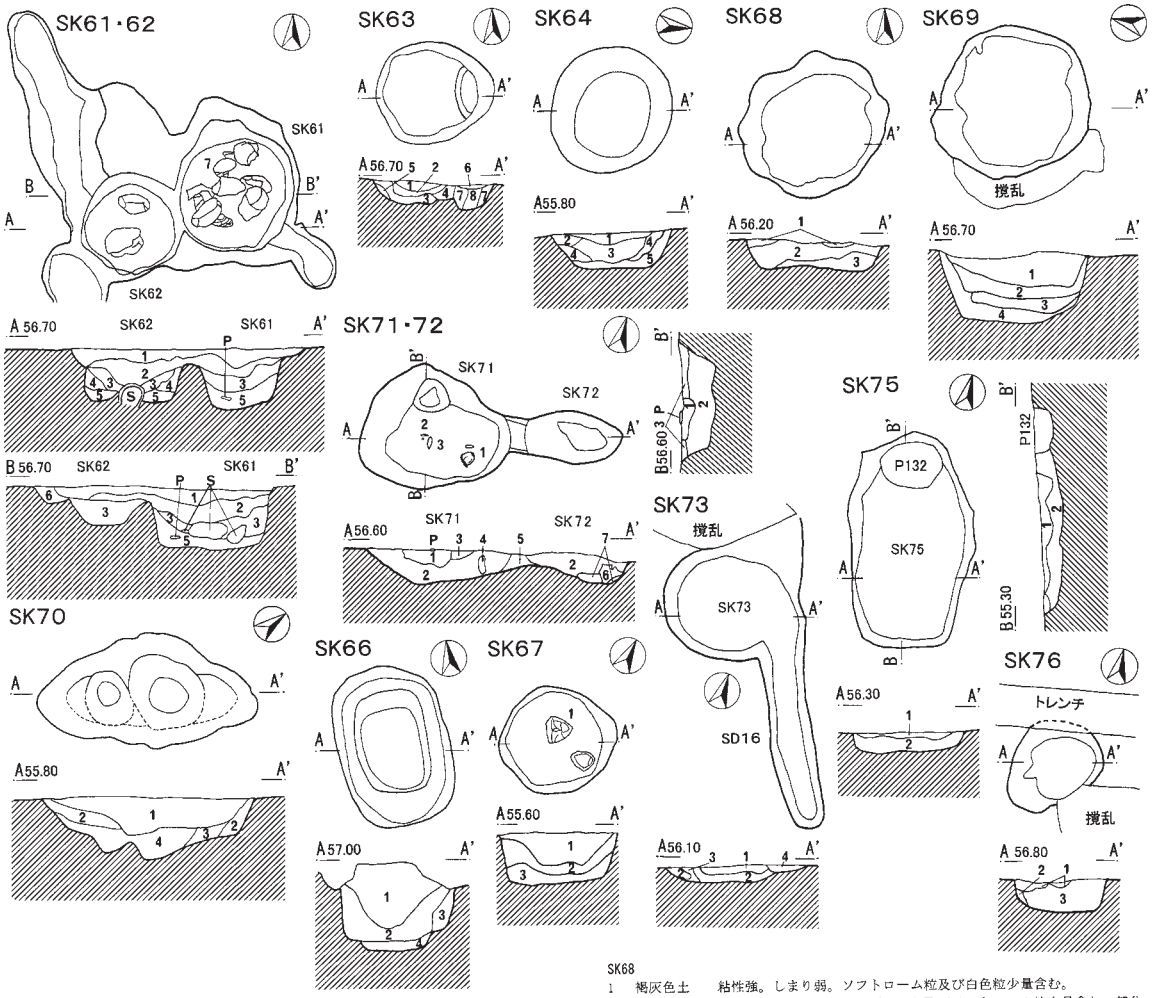
SK58
1　黒色土　粘性有り。しまり弱。カクラン＋2層混在。
2　褐灰色土　粘性有り。しまり弱。炭化状層、焼土粒混入。
3　褐灰色土　しまり弱。粘炭化物多く混入、ソフトローム粒混入、焼土粒少量含む。遺物包含、石包含。
4　褐灰色土　しまり弱。粘炭化物混入、ソフトローム粒混入、焼土粒少量含む。遺物包含、石包含。

SK59
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック多量。単層

SK60
1　明黄褐色土　粘性有り。しまり強。黒色粒少量含む。
2　黄橙色土　粘性有り。しまり強。黒色粒少量含む。

0　2m　1:60

第59図　土坑(4)



SK61・62

1　黄褐色土　しまり強。軟質白色粒多量含む。ソフトローム粒及び黒色粒多量含む。
2　黒褐色土　粘性強。しまり弱。黒色及び白色粒、ソフトローム粒、炭化材少量含む。
3　褐色土　粘性強。しまり弱。褐灰色土。灰白粘土散在。
4　黄褐色土　粘性強。しまり強。黒色粒少量含む。
5　褐灰色土　粘性強。しまり強。ハードロームブロック多量含む。粘土ブロック含む。
6　黄橙色土　粘性強。しまり強。黒色粒少量含む。

SK63

1　明黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒及び白色粒を少量含む。
2　明黄褐色土　しまり弱。白色粒少量含む。3層粘土ブロック少量含む。
3　灰白色土　しまり弱。灰白粘土層。
4　黄褐色土　しまり弱。黒色粒少量含む。
5　黄褐色土　しまり弱。黒色粒少量含む。
6　黒褐色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。
7　黄橙色土　しまり弱。黒褐色土混入。
8　黒褐色土　しまり弱。黄橙色土混入。

SK64

1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、焼土ブロック及び粒、炭化物粒を微量含む。
3　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を少量含む。焼土粒を微量含む。
4　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、焼土ブロック及び粒、炭化物粒を微量含む。
5　褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒主体。黒褐色土粒を多く含む。

SK66

1　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を含み、硬質の黒褐色土ブロックを多く含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
3　褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒をやや多く含み、ハードロームブロックを多く含む。
4　黒褐色土　粘性有。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。

SK67

1　黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒及び白色粒少量含む。
2　黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。
3　暗褐色土　しまり強。ソフトローム粒少量含む。

SK68

1　褐灰色土　粘性強。しまり弱。ソフトローム粒及び白色粒少量含む。
2　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック及びソフトローム粒少量含む。部分的に明黄褐色土混在。
3　黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック及びソフトローム粒少量含む。部分的に黒褐色土混在。

SK69

1　褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック含む。
2　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック含む。
3　褐灰色土　しまり弱。黒色粒少量含む。
4　黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック含む。

SK70

1　黄褐色土　黒色土粒及びブロックを非常に多く含む。火山灰多量に含む。
2　黄褐色土　黒色土粒若干含む。
3　灰オリーブ色土　粘性弱。ソフトローム微粒子若干含む。
4　暗灰黄色土　粘性強。オリーブ黒色土ブロック若干、ソフトロームブロック若干含む。

SK71・72

1　橙色土　粘性有り。しまり弱。ローム及び白色粒及び炭化粒多量含む。須恵器含む。
2　灰赤色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含む。
3　橙色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。
4　黒褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。
5　明黄褐色土　粘性有り。しまり弱。白色粒少量含む。
6　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多く含む。
7　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ソフトローム粒少量含む。

SK73

1　黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。軽石少量含む。
2　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック含む。
3　黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック含む。
4　黄橙色土　しまり強。軽石質状。(SD16)

SK75

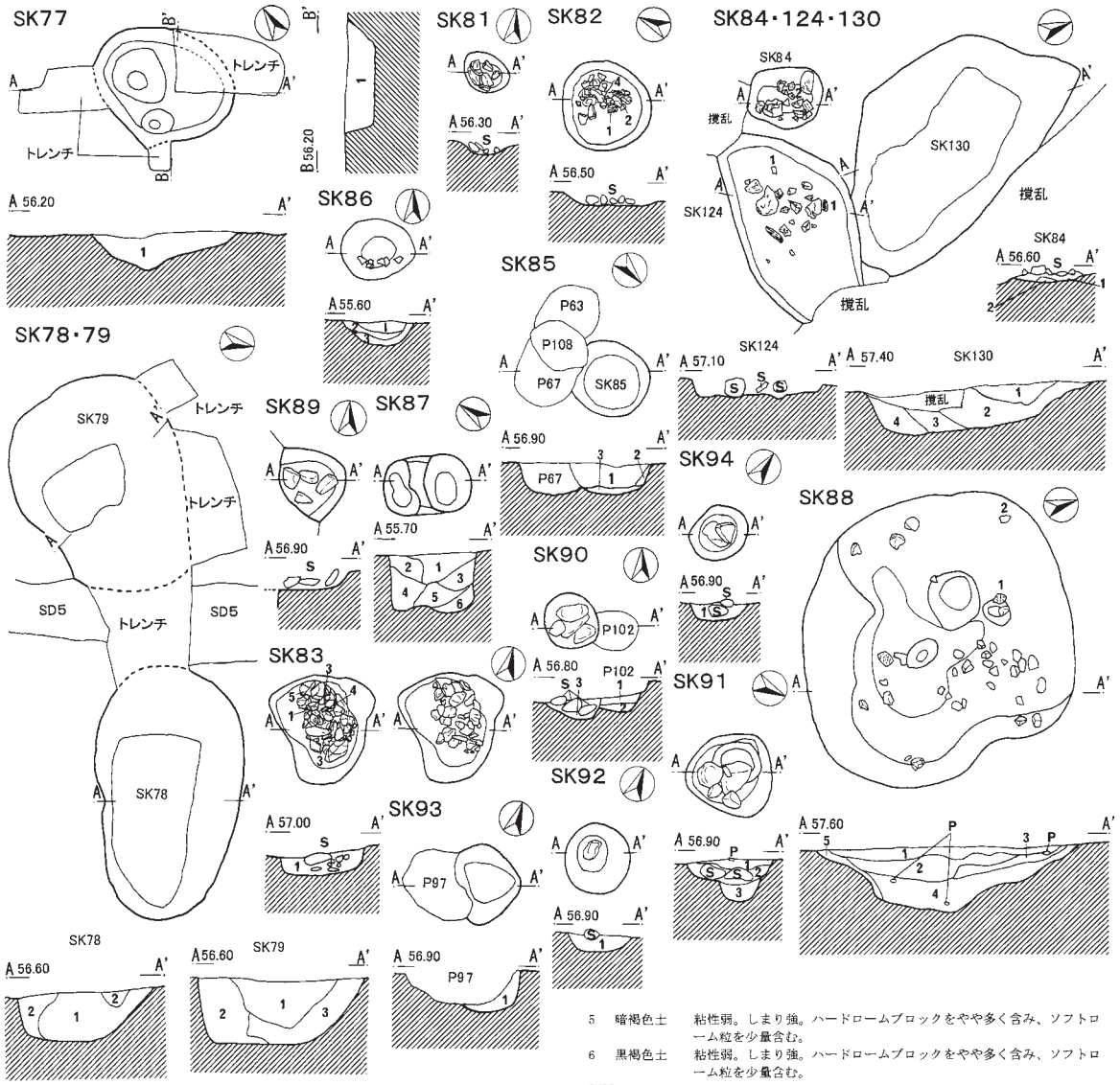
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含み、白色粒少量含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含み、白色粒少量含む。

SK76

1　黄橙色土　しまり弱。ソフトローム粒及び白色粒少量含む。
2　黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック含む。
3　黒褐色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック含む。部分的に黄褐色土混入。

0　2m　1:60

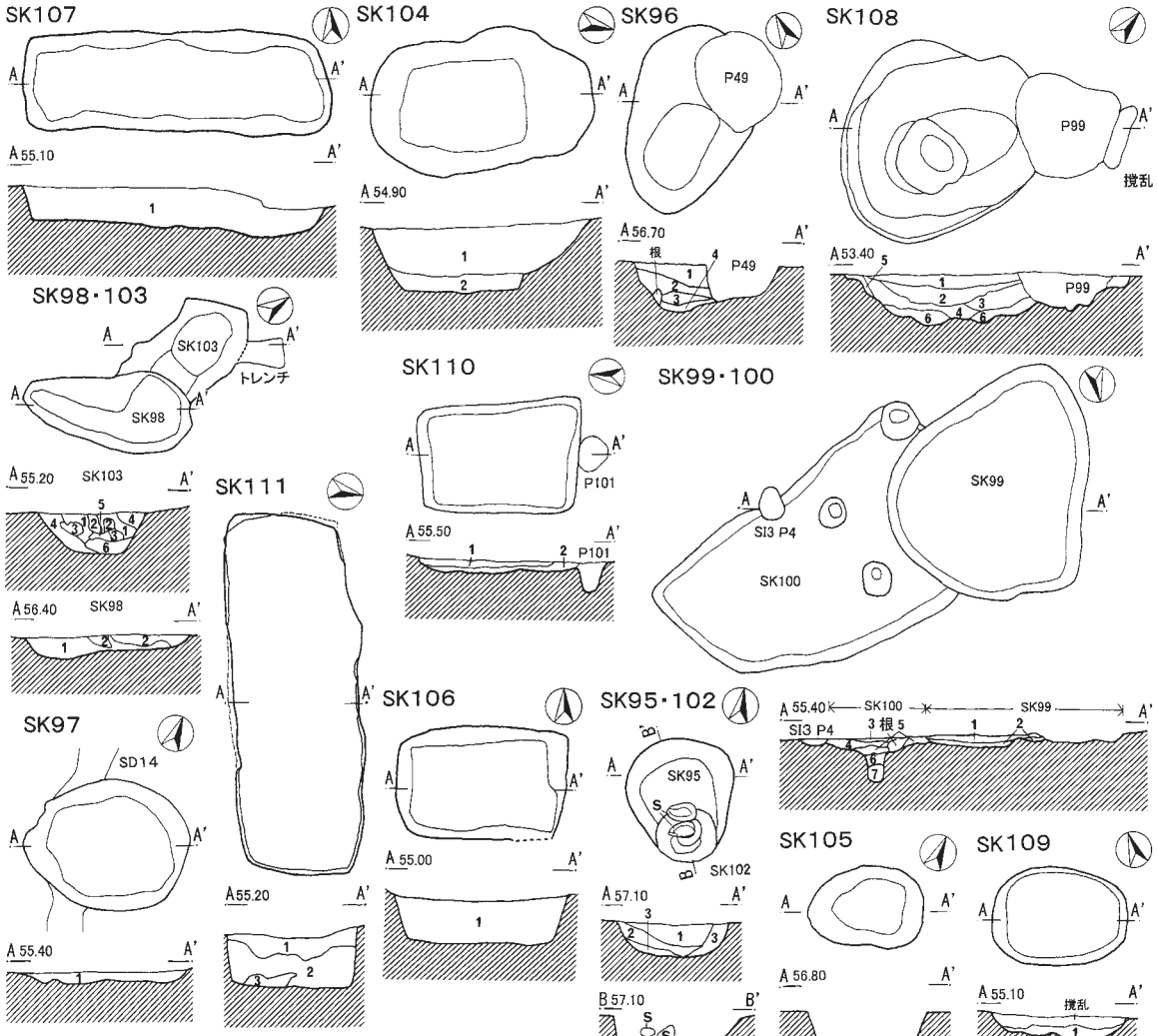
第60図　土坑(5)



SK77
1　黄褐色土　粘性有り。しまり強。白色粒及びソフトローム粒少量含む。
SK78・79
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。白色粒小量含み、ソフトローム粒少量含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。
3　明黄褐色土　粘性有り。しまり強。黒及び白色粒少量含む。
SK83
1　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック含む。黒褐色土多く混入。
SK84
1　暗褐色土　粘性弱。しまり有り。ソフトローム粒を少量含み、炭化物を微量含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体、暗褐色土粒をやや多く含む。
SK85
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒多量含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体、暗褐色土粒多量含む。
3　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒多量含む。
SK86
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。炭化物を多く含み、焼土粒を微量含む。
2　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
3　褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックを多く含み、炭化粒を微量含む。暗褐色土粒を少量含む。
SK87
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒を多く含む。
3　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多量に含む。
4　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を少量含む。
5　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒を少量含む。
6　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒を少量含む。
SK88
1　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。にぶい黄褐色土がまだらに混じる
2　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。黒褐色土まだらに混じる、ソフトローム粒微量含む。
3　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。ハードロームブロック含む。
4　褐色土　粘性なし。しまり普通。
5　褐色土　粘性弱。しまり普通。ソフトローム粒多く含む。
SK90
1　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒微量含む。
2　褐色土　粘性弱。しまり普通。ハードロームブロック含む。
3　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒含む。
SK91
1　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒少量含む、炭化物微量含む。
2　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒含む。
3　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒少量含む。
SK92
1　褐色土　粘性弱。しまり普通。ソフトローム粒多く含む。
SK93
1　暗褐色土　粘性なし。しまり弱。ハードロームブロックを少量含み、ソフトローム粒をやや多く含む。
SK94
1　褐色土　粘性弱。しまり普通。ソフトローム粒多い。
SK130
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含み、硬質の黒褐色土ブロックを少量含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
3　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
4　暗褐色土　粘性弱い。しまり強。ソフトローム粒及び黒褐色土をブロック状に多く含む。

0　2m　1:60

第61図　土坑(6)



SK95
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。
3　褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒主体。暗褐色土粒を少量含む。

SK96
1　明黄褐色土　マンガン粒ごくわずかに含む。
2　暗灰黄色土　しまり弱。
3　暗灰黄色土　黒色土ブロック多量、ソフトロームブロック少量含む。
4　暗灰黄色土　ソフトロームブロックわずかに含む。

SK97
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒及び白色粒少量含む。

SK98
1　灰黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック含み、焼土粒含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまりや強。炭化材及び焼土粒含む。

SK99・100
1　灰黄褐色土　ソフトローム粒少量、炭化物粒わずか、軽石粒多量に含む。
2　にぶい黄褐色土　ソフトロームブロック少量含む。
3　暗灰黄色土　黄灰色土ブロックわずか、軽石若干含む。
4　暗灰黄色土　ソフトロームブロック及び粒少量、ハードロームブロック多量に含む。
5　暗灰黄色土　粘性強。ソフトロームブロック若干含む。
6　ソフトロームブロック混合層
7　灰黄褐色土　ソフトローム粒少量若干含む。

SK103
1　灰黄褐色土　粘性有り。しまり強。焼土粒含み、ソフトローム粒及びハードロームブロック含む。炭化粒含む。
2　黒褐色土　しまり強。焼土粒含み、ソフトローム粒及びハードロームブロック含む。炭化粒含む。
3　明褐色土　しまり強。焼土ブロック及び粒多量含み、炭化粒含む。
4　黄橙色土　粘性有り。しまり弱。黒褐色斑点土混入及びハードロームブロック含む。
5　褐色土　しまりやや強、固質、焼土粒及びブロック含、炭化粒含む。
6　黒褐色土　粘性有り。しまり強。焼土粒少量含み、炭化粒含む。

SK104
1　褐灰色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック多く含む。黒及び白色粒多量含み、炭化物含む。
2　褐灰色土　しまり弱。ハードロームブロック半々混在状。

SK106
1　褐灰色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック多量含む。黒及び白色粒多量含み、炭化物含む。

SK107
1　褐灰色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック多量含む。黒及び白色粒多く含み、炭化物含む。

SK108
1　黒褐色土　灰黄褐色土ブロック及び粒混じり、ソフトローム粒わずか、焼土粒ごくわずか含む。遺物包含。
2　黒褐色土　灰黄褐色土。ブロック若干、黒色土ブロック多量、ソフトローム粒わずかに含む。
3　黒色土　灰黄褐色土ブロック若干含む。
4　黒色土　ハードロームブロックと褐灰色土ブロックの混合層。
5　にぶい黄褐色土　黒色土ブロック多量に含む。
6　黒色土　ソフトハードロームブロック少量、灰白色粘土粒わずかに含む。

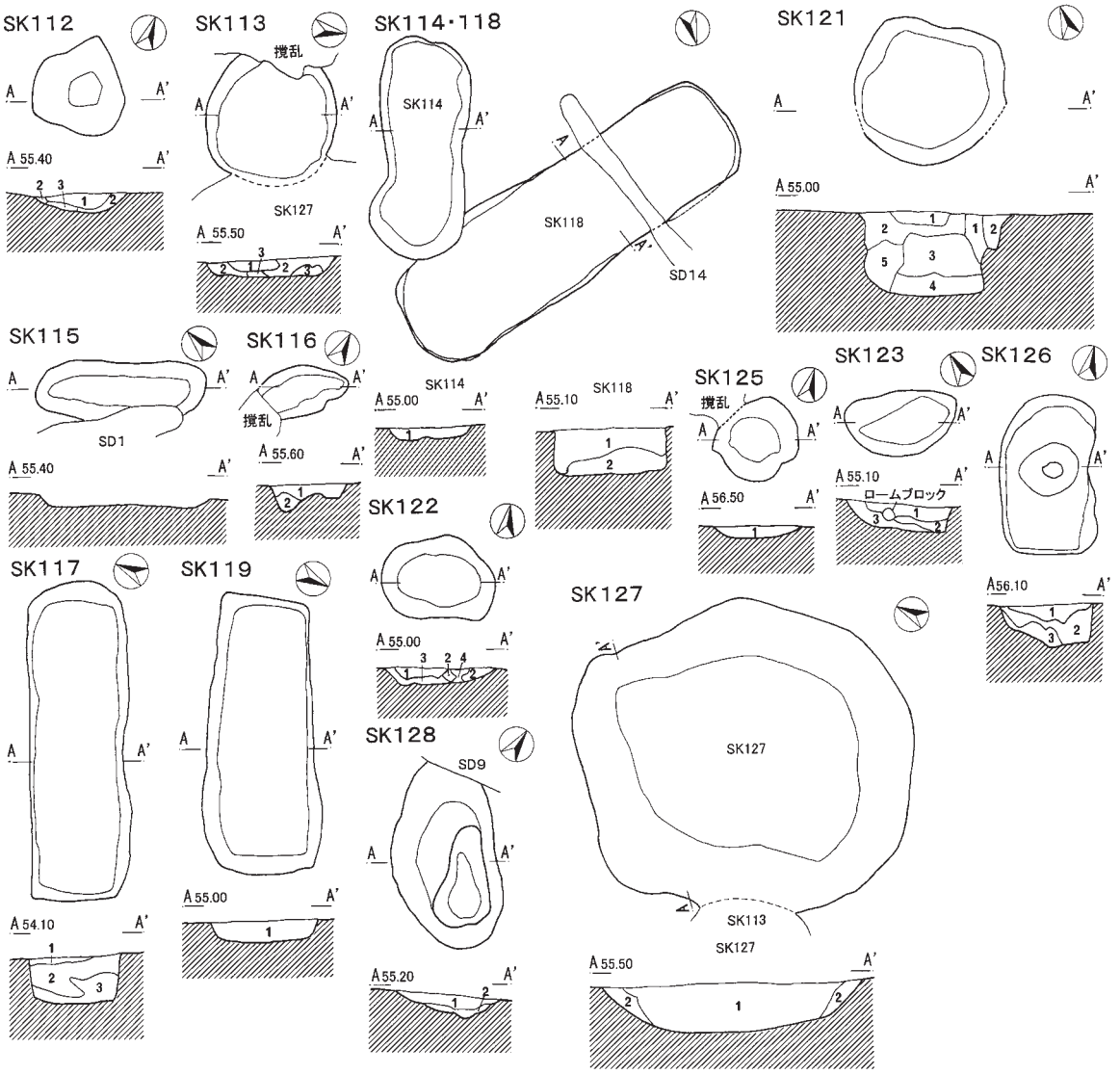
SK109
1　黒色土　黒褐色土混じり。ソフトローム粒及びブロック若干含む。

SK110
1　黒褐色土　ソフトローム粒多量に含む。
2　黒褐色土　ソフトローム粒多量、炭化物魂わずかに含む。

SK111
1　黄橙色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。
2　灰黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック多量含む。
3　黒褐色土　しまり弱。2層土散在、ソフトローム粒含む。

0　2m
1：60

第62図　土坑(7)



SK112
1　黒褐色土　しまり強。ソフトローム粒及びハードロームブロック、白色及び黒色粒少量含む。
2　褐灰色土　しまり強。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含み、黒色粒含む。
3　明黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック少量含む。

SK113
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒及びハードロームブロック多量含む。
2　黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック含む。
3　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒及びハードロームブロック多量含む。

SK114
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒、白色粒少量含む。

SK116
1　黒褐色土　粘性有り。しまり弱。炭化粒及びソフトローム粒少量含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック多量含む。

SK117
1　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含む。
2　灰黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含む。
3　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含む。

SK118
1　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含む。
2　灰黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含む。

SK119
1　黒褐色土　しまり弱。ハードロームブロック多量含む。

SK121
1　灰黄褐色土　しまり弱。炭化材少量含む。ソフトローム粒少量含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。炭化材少量含む。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。
3　黒褐色土　しまり強。ソフトローム粒含む。
4　黒褐色土　しまり強。ハードロームブロック粒少量含む。
5　黒褐色土　しまり弱。ソフトローム粒含む。

SK122
1　灰黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック少量含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。
3　明黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。
4　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。

SK123
1　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ソフトローム粒及び白色粒少量含む。
2　黒褐色土　しまり弱。ソフトローム粒、白色粒少量含む。
3　明黄褐色土　粘性有り。しまり弱。白色粒少量含む。

SK125
1　黒褐色土　ソフトローム粒及び白色粒、炭化粒少量含む。

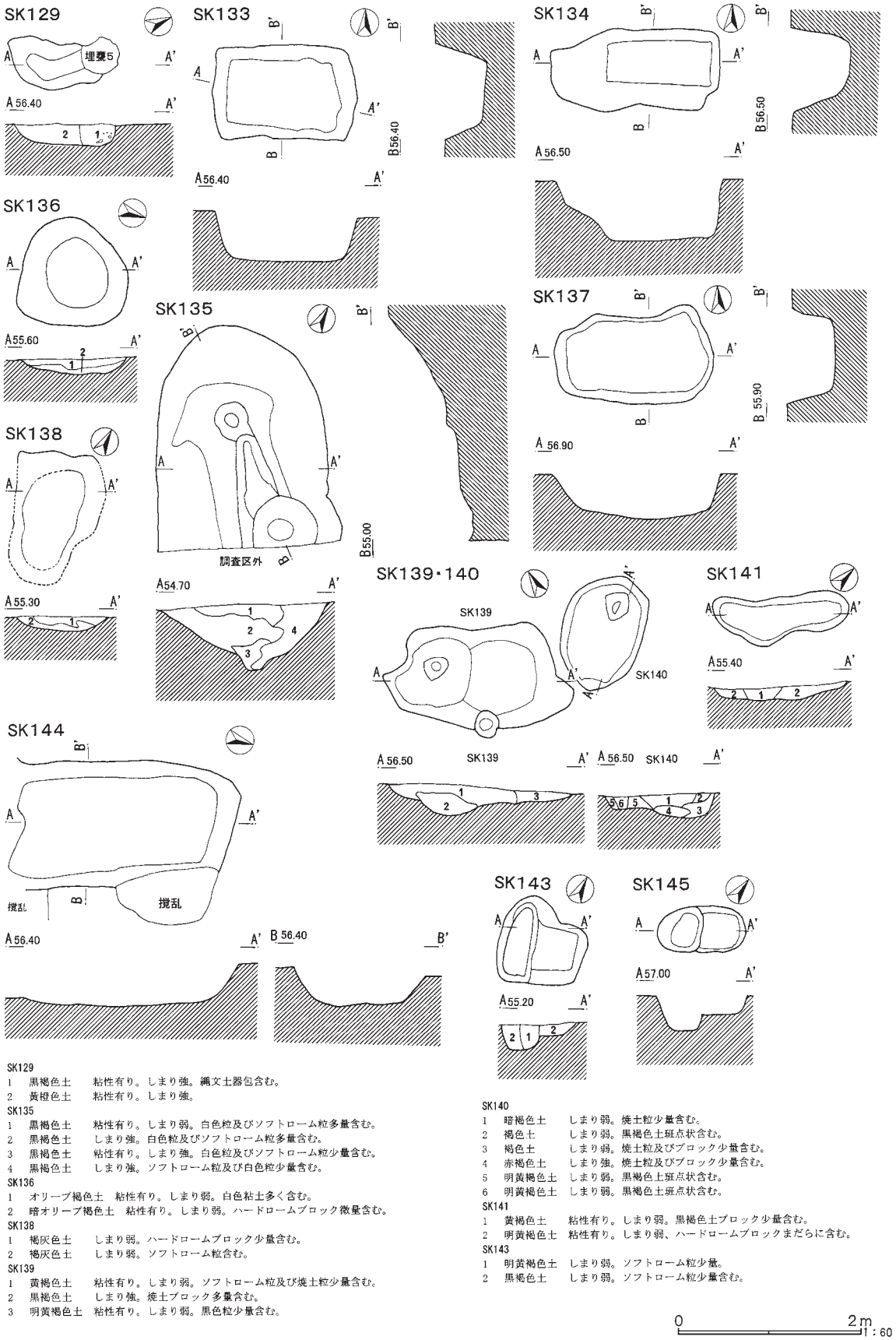
SK126
1　灰黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含み、炭化材少量含む。
2　灰黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック含む。
3　黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック含む。

SK127
1　黒褐色土　しまり強。ハードロームブロック多量含む。
2　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ソフトローム粒及び白色粒少量含む。黒色粒少量含む。

SK128
1　黒褐色土　ソフトロームブロック及び粒、微粒子を多量に含む。
2　暗灰黄色土　ソフトロームブロック及び粒含む。

0　2m　1:60

第63図　土坑(8)



SK129
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。縄文土器包含む。
2　黄橙色土　粘性有り。しまり強。

SK135
1　黒褐色土　粘性有り。しまり弱。白色粒及びソフトローム粒多量含む。
2　黒褐色土　しまり強。白色粒及びソフトローム粒多量含む。
3　黒褐色土　粘性有り。しまり強。白色粒及びソフトローム粒少量含む。
4　黒褐色土　しまり強。ソフトローム粒及び白色粒少量含む。

SK136
1　オリーブ褐色土　粘性有り。しまり弱。白色粘土多く含む。
2　暗オリーブ褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック微量含む。

SK138
1　褐灰色土　しまり弱。ハードロームブロック少量含む。
2　褐灰色土　しまり弱。ソフトローム粒含む。

SK139
1　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ソフトローム粒及び焼土粒少量含む。
2　黒褐色土　しまり強。焼土ブロック多量含む。
3　明黄褐色土　粘性有り。しまり弱。黒色粒少量含む。

SK140
1　暗褐色土　しまり弱。焼土粒少量含む。
2　褐色土　しまり弱。黒褐色土斑点状含む。
3　褐色土　しまり弱。焼土粒及びブロック少量含む。
4　赤褐色土　しまり強。焼土粒及びブロック少量含む。
5　明黄褐色土　しまり弱。黒褐色土斑点状含む。
6　明黄褐色土　しまり弱。黒褐色土斑点状含む。

SK141
1　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。黒褐色土ブロック少量含む。
2　明黄褐色土　粘性有り。しまり弱、ハードロームブロックまだらに含む。

SK143
1　明黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量。
2　黒褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。

0　2m
1：60

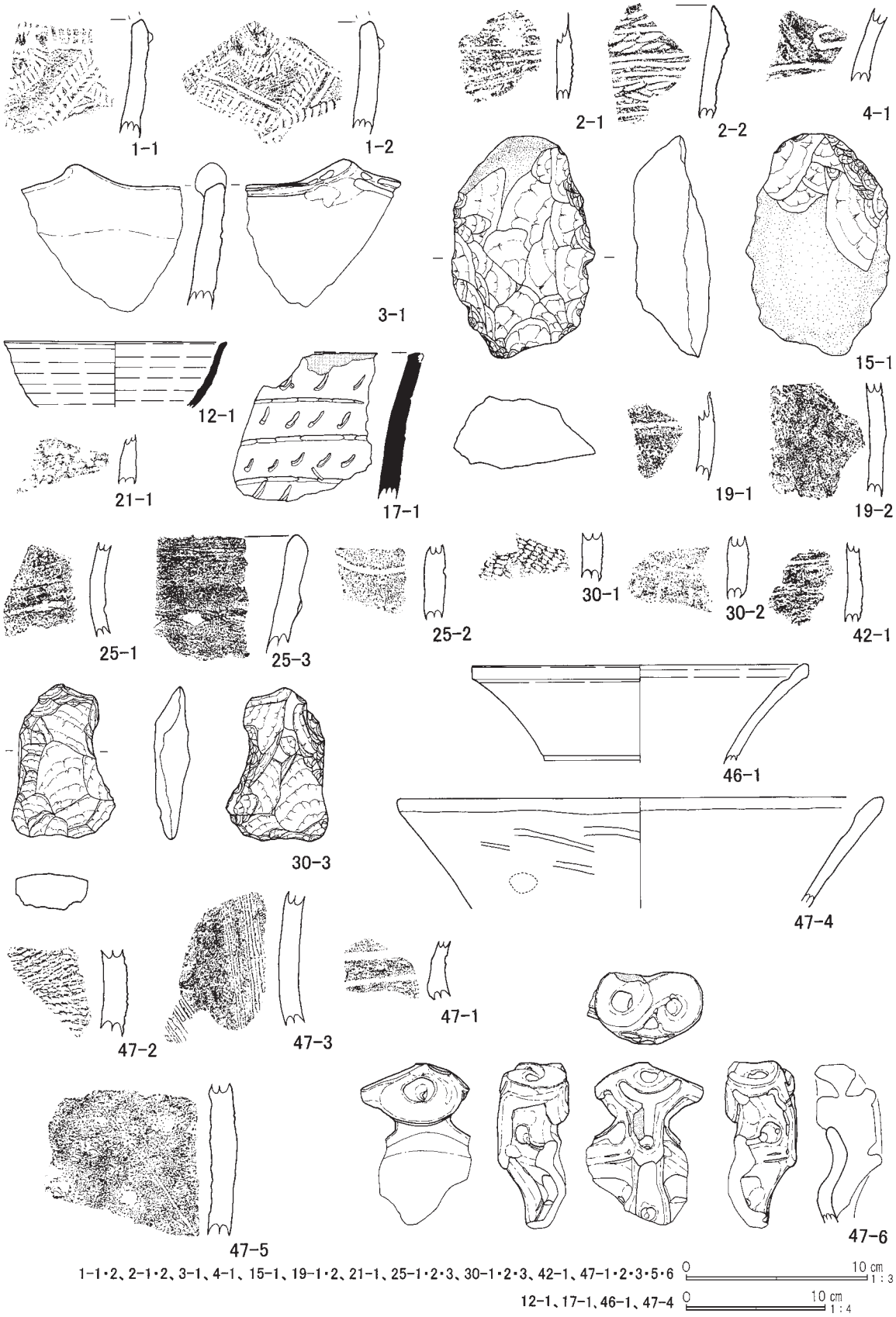
第64図　土坑(9)

第22表　土坑一覧表　（第52～64図）

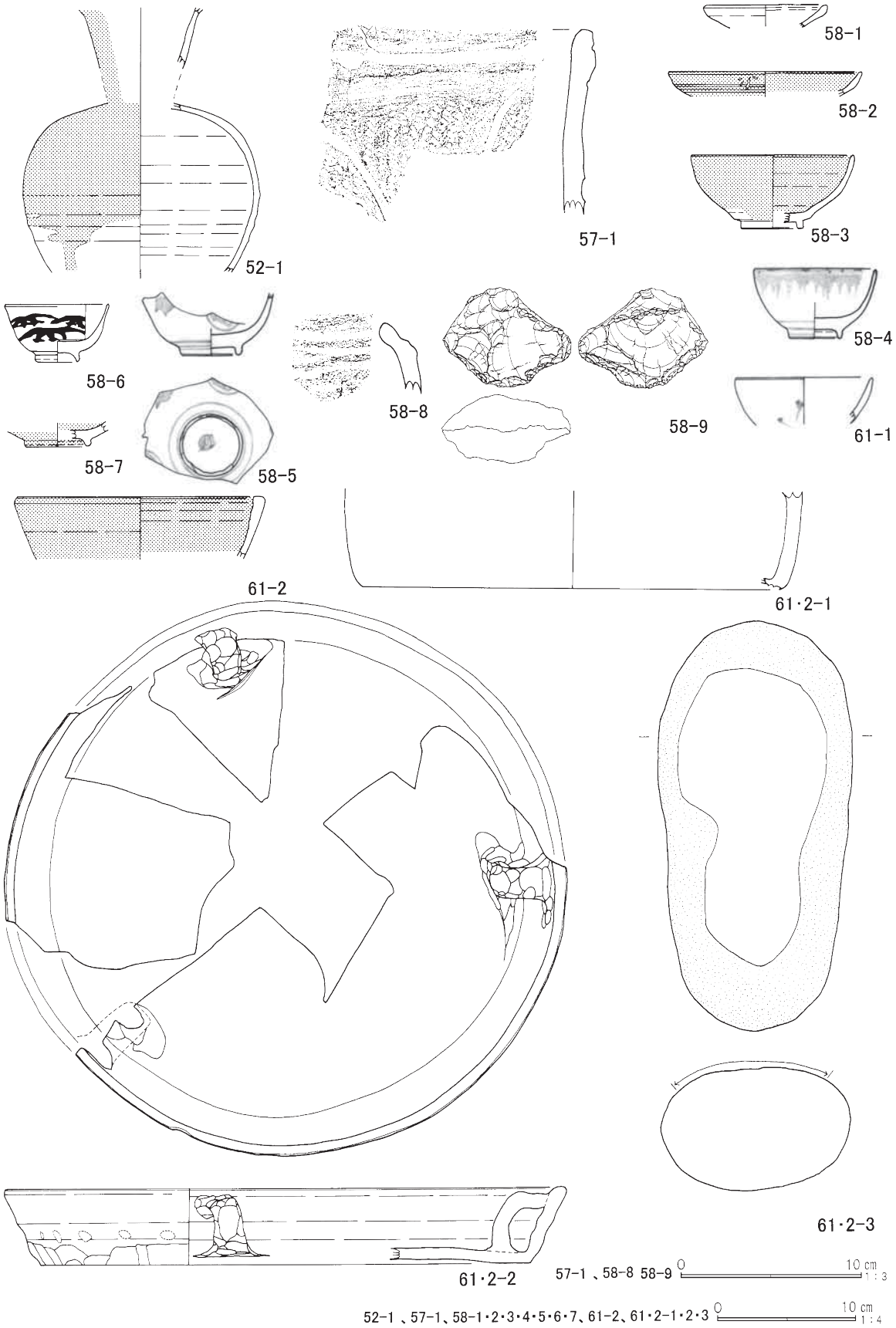
№.	位　　置	平面形状	長軸×短軸×深さ(m)	出土遺物	時　　期	重複関係(新旧)	備　　考
1	7・8-31G	不整形	2.98×2.32×0.80	縄文土器深鉢	不明		
2	19・20-31G	楕円形	2.84×2.40×0.38	縄文土器深鉢、須恵器、土師器	縄文早・前期		
3	26-20G	楕円形	1.78×1.16×0.65、0.71	縄文土器深鉢	縄文前期		
4	26-19G	不整円形	1.53×1.49×1.03	縄文土器深鉢	縄文前期		
5	25・26-19G	不整形	2.60×1.55×0.65	—	縄文？		
6	7-30G	正方形	1.15×1.05×0.50	—	近世		覆土中火山灰
7	7・8-30G	不整楕円形	1.13×0.85×0.23	—	近世		覆土中火山灰
8	8・9-31G	楕円形	(1.92)×1.35×0.16	—	近世		覆土中火山灰
9	9-31G	楕円形	1.63×(1.50)×0.23	—	近世		覆土中火山灰
10	9-31G	楕円形	1.30×1.08×0.20	—	近世		覆土中火山灰
11	10・11-30G	楕円形	1.20×0.81×0.25、0.09	—	不明		
12	11-30G	楕円形	0.77×0.63×0.07	須恵器坏	9C		
13	23-31G	不整円形	1.80×1.72×0.49	—	不明		
14	23-30G	不整楕円形	1.19×0.81×0.18	—	9C後以前	SB1（新）	覆土中礫
15	22-30G	円形	1.03×0.30×0.30	石核	縄文？		
16	21-30G	不整形	0.90×0.46×0.38	—	縄文？	SK142（新）	
17	24-30G	円形	1.36×1.33×0.48	須恵器甕	9C		
18	24・25-29G	不整形	1.40×1.26×0.28	—	不明		
19	25-29G	円形	1.15×1.05×0.62	縄文土器深鉢	縄文中期		内小ピット有
20	24-26G	楕円形	1.18×0.98×0.62	—	不明		
21	24-26G	楕円形	0.80×0.70×0.43	縄文土器深鉢、磁器	縄文中期		
23	25-24G	楕円形	1.12×0.90×0.27	—	縄文？		覆土中焼土粒
24	10・11-30・31G	楕円形	1.27×1.16×0.26	—	縄文？		
25	12-26G	楕円形	0.92×0.78×0.28	縄文土器深鉢	縄文前～後期		
26	8-21G	不整形	(1.48)×1.43×0.17	—	不明		
27	8-21G	長方形	1.53×0.71×0.21	—	不明		
28	7-21G	楕円形	1.80×0.83×0.21	—	縄文？	SK29（旧）	
29	6・7-20・21G	楕円形	(2.10)×(1.35)×0.37	—	縄文？	SK28、2号埋甕(新)	
30	7-20G	長方形	2.15×(0.55)×0.52	縄文土器深鉢、打製石斧	不明	SK34	
31	8-26G	不整形	0.98×0.75×0.25	—	近世		覆土中火山灰
32	8-24・25G	楕円形	1.39×0.68×0.28	—	不明		
33	10-31G	正方形	1.36×1.24×0.34	—	不明		
34	7-20・21G	楕円形	1.40×(0.86)×0.63	—	不明		
36	19-26G	楕円形	1.08×0.66×0.48	—	9C以後	SI9（旧）	
37	6-27G	楕円形	1.35×1.02×0.50	—	近世		覆土中火山灰
38	6・7-26・27G	楕円形	1.35×0.97×0.19	—	不明		
39	7-26G	楕円形	1.25×0.87×0.26	—	不明		
40	7-21G	楕円形	0.73×0.49×0.08	—	不明		
41	12-22G	楕円形	0.72×0.62×0.18	—	不明		
42	12-21・22G	長方形	2.10×1.02×0.34	縄文土器深鉢	縄文早期		覆土中焼土粒
46	14-25・26G	長方形	1.22×0.90×0.34	須恵器甕、土師器	9C	SK47（旧）	
47	14-25G	楕円形	(1.23)×(1.02)×0.42	縄文土器深鉢・浅鉢	縄文早～後期	SK46（新）	
48	6-25G	楕円形	0.79×0.55×0.10	縄文土器片	近世	SD2（旧）	覆土中礫
49	14-27G	円形	1.40×1.25×0.20	縄文土器片	縄文		

No.	位　　置	平面形状	長軸×短軸×深さ(m)	出土遺物	時　　期	重複関係(新旧)	備　　考
52	24-32G	楕円形	1.15×0.73×0.13	須恵器長頸瓶	9 C	SI12	
54	25-27G	円形	0.47×0.47×0.07	縄文土器	縄文早期		
57	21-22G	楕円形	1.24×1.16×0.30	縄文土器深鉢	近世	SK58（旧） P105（新）	
58	21-22G	楕円形	3.07×2.26×0.45	かわらけ、陶磁器、焙烙、石臼、縄文土器深鉢、石核	近世	SK57（新）	
59	24-24G	長方形	1.47×0.97×0.26	—	不明		
60	6 -21G	楕円形	1.06×0.86×0.16	—	不明		
61	20-23G	円形	1.10×1.00×0.52	陶磁器、内鍋、焙烙、磨石	近世		覆土中自然石
62	20-23G	円形	0.84×0.85×0.45	—	近世		覆土中自然石
63	20・21-23G	楕円形	0.90×0.85×0.22	—	不明		
64	20-28G	円形	1.08×1.80×0.34	縄文土器浅鉢	縄文後期		
66	26-22・23G	楕円形	1.35×0.93×0.73	—	不明		底面有段
67	20-24G	円形	0.98×0.90×0.44	須恵器坏	9 C		
68	20-25G	不整形	1.27×1.22×0.25	—	不明		
69	21-24G	円形	1.33×1.28×0.60	磁器	近世		
70	13-23G	不整形	1.85×0.96×0.51	縄文深鉢・打製石斧	縄文早期		内ピット2基有
71	18-21・22G	楕円形	1.20×1.03×0.30	須恵器坏	9 C	SK72（旧）	
72	17・18-21・22G	楕円形	0.98×0.45×0.24	—	9 C以前	SK71（新）	
73	17-25G	楕円形	1.22×0.97×0.14	—	近世以前	SD16（新）	
75	17-24G	楕円形	1.83×1.06×0.15、0.24	—	不明	P132	
76	20-22G	楕円形	0.87×0.70×0.27	—	不明		
77	17-25G	楕円形	1.22×1.07×0.34	—	不明		内ピット2基有
78	18・19-23G	楕円形	2.18×1.32×0.43	—	不明		
79	19-23G	楕円形	1.97×1.50×0.58	—	不明	SD 5	
81	25-28G	楕円形	0.42×0.34×0.14	陶磁器、須恵器甕	近世		礫多量出土
82	25-27G	円形	0.81×0.77×0.11	縄文土器深鉢、須恵器甕、陶磁器	近世		礫多量出土
83	26-25G	不整形	0.96×0.85×0.24	縄文土器深鉢、須恵器甕、陶磁器、焙烙	近世		礫多量出土
84	26-23G	不整楕円形	0.63×0.53×0.07	打製石斧、磨石、石棒	縄文		礫多量出土
85	22-23G	楕円形	0.72×0.64×0.29	—	不明	P67・108（新）	
86	19-28G	円形	0.54×0.54×0.21	縄文土器片、石鏃未製品	縄文後期		
87	19-28G	楕円形	0.76×0.51×0.52	縄文土器深鉢	縄文後期？		
88	25-17G	楕円形	2.72×2.46×0.56	縄文土器深鉢	縄文後期		
89	22-23G	楕円形	0.70×0.57×0.18	—	不明		礫出土
90	22-24G	円形	0.48×0.47×0.20、0.31	縄文土器深鉢	縄文	P102（旧）	
91	22-24G	不整円形	0.76×0.72×0.20、0.37	瓦質土器、砥石	中世		礫出土
92	22-24G	円形	0.61×0.58×0.22	—	不明		礫出土
93	23-24G	楕円形	0.72×0.52×0.36	—	不明	P97（新）	
94	23-24G	楕円形	0.52×0.45×0.13	—	不明		礫出土
95	23・24-23・24G	不整円形	1.06×1.00×0.31	—	不明	SK102（新）	
96	14・15-19G	楕円形	1.62×1.03×0.40	—	不明	P49（新）	
97	17-28G	楕円形	1.35×1.09×0.09	—	不明	SD14	
98	14-28G	楕円形	1.42×0.92×0.22	—	不明	SK103（旧）	
99	11-24G	楕円形	1.95×1.76×0.10	縄文土器深鉢	縄文	SK100（旧）	
100	10・11-24G	長方形	2.65×1.62×0.36	—	縄文	SK99(新)、SI 3 － P 4（新）	

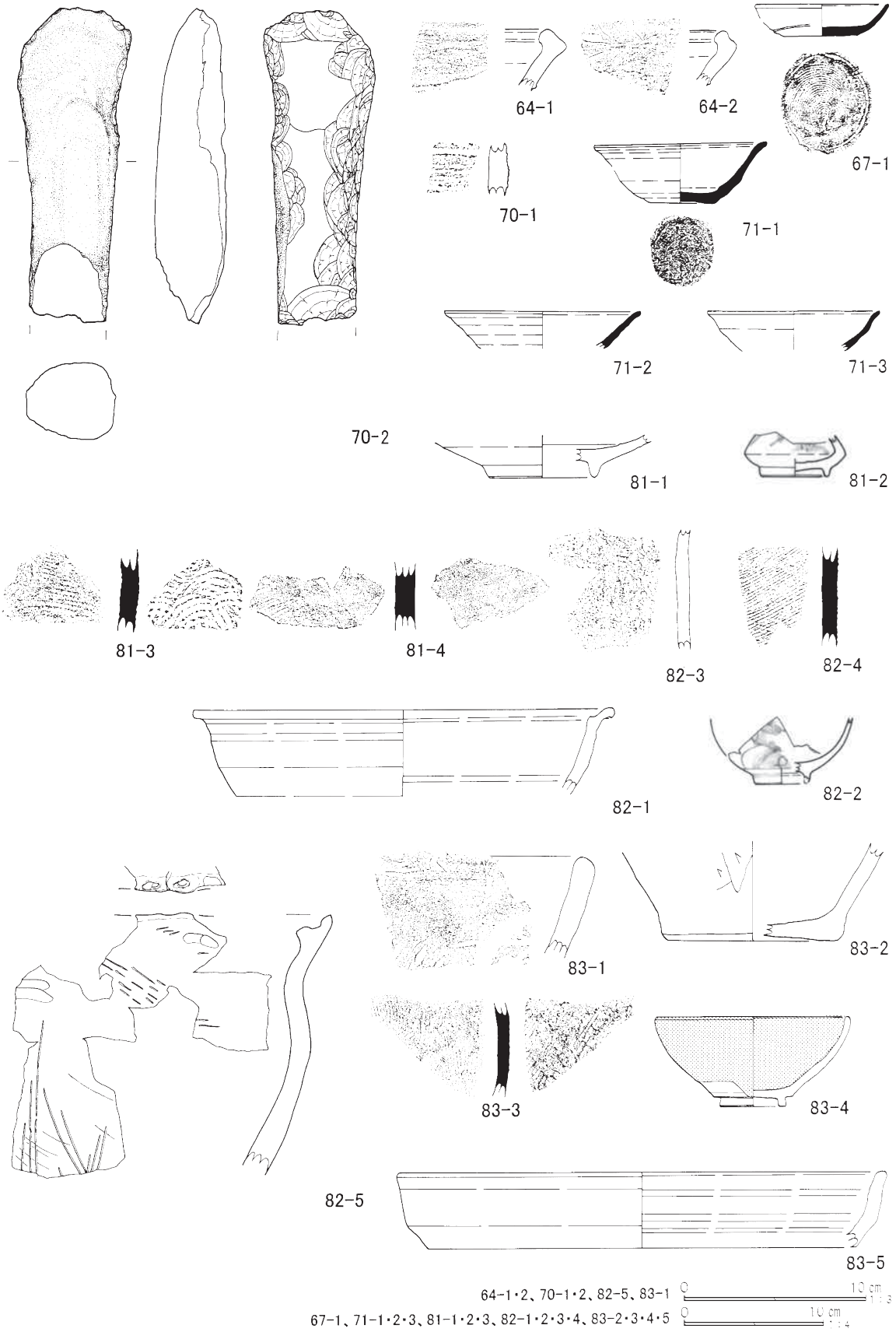
№	位　　置	平面形状	長軸×短軸×深さ(m)	出土遺物	時　　期	重複関係(新旧)	備　　考
102	23-23G	円形	0.50×0.50×0.27	—	不明	SK95（旧）	礫出土
103	14-28G	楕円形	0.80×0.75×0.36	縄文土器深鉢、磨石	縄文早期	SK98（新）	
104	13・14-28・29G	楕円形	1.87×1.16×0.55	縄文土器、削器、土師器、須恵器、焙烙、近世陶器	不明		
105	25-26G	楕円形	0.97×0.67×0.18	—	不明		
106	14・15-29G	長方形	1.45×0.94×0.43	縄文土器、土師器、須恵器、かわらけ	不明		
107	15-29G	長方形	2.58×0.86×0.45	須恵器	不明		
108	5 -30G	不整形	1.85×1.50×0.42	縄文土器深鉢、スタンプ形石器	縄文前期	P99（新）	
109	5 -22・23G	楕円形	1.12×0.81×0.22	土師器甕	9 C		
110	5 -21G	長方形	1.35×0.90×0.16	—	不明	P101（旧）	
111	17-29・30G	長方形	3.03×1.01×0.52	縄文土器深鉢、石鏃未製品、剝片石器、磨石、焙烙	不明		
112	15-27G	楕円形	0.85×0.82×0.17	—	不明		
113	18-28G	円形	(1.05)×1.12×0.14、0.20	縄文土器片、須恵器坏片	不明	SK127	
114	18-30G	楕円形	1.92×0.81×0.13	須恵器坏	不明	SK118（旧）	
115	5 ・ 6 -21・22G	長楕円形	1.45×0.52×0.11	—	近世以前	SD 1 （新）	
116	18・19-28G	楕円形	(0.71)×0.45×0.26	縄文土器片	不明		
117	19-30G	長方形	2.76×0.87×0.43	石棒	不明		
118	18-30G	長方形	3.32×1.08×0.41	縄文土器深鉢、石鏃未製品、剝片素材石器	縄文	SK114・SD14（新）	
119	20-31G	長方形	2.40×1.04×0.19	縄文土器深鉢、石錐、剝片素材石器	縄文		
121	15-29・30G	円形	1.38×1.32×0.73	打製石器	縄文		
122	16-30G	楕円形	1.10×0.77×0.15	—	不明		
123	18・19-30G	楕円形	0.98×0.58×0.20、0.29	—	不明		
124	25・26-25・26G	不整楕円形	1.26×1.08×0.14	須恵器坏、陶器片口鉢、焙烙、平瓦坏、敲石	不明	SK130（旧）	礫出土
125	17-27・28G	円形	0.75×0.74×0.11	縄文土器片	縄文		
126	18-25G	楕円形	1.27×0.80×0.39	—	不明		内ピット有
127	18-28G	円形	3.09×2.89×0.50	縄文土器、土師器片	不明	SK113	
128	5 -22G	楕円形	(1.62)×0.92×0.22	—	近世以前	SD 9 （新）	
129	16・17-22G	不整形	1.07×0.50×0.27	—	縄文早期	5 号埋甕（新）	
130	25・26-23G	楕円形	1.42×2.42×0.35、0.45	土師器甕片、磨石	不明	SK124（新）	礫出土
133	16・17-24G	長方形	1.54×1.00×0.54	—	不明		
134	17-23・24G	長方形？	1.80×0.88×0.66	—	不明		
135	17・18-31G	楕円形	(2.39)×1.96×0.65、0.72	縄文土器深鉢、剝片石器、打製石斧	縄文後期		
136	21-31G	円形	1.24×1.21×0.18	須恵器坏	9 C		
137	16-26G	楕円形	1.71×1.03×0.49	—	不明		
138	19-29G	楕円形	(1.44)×0.92×0.15	縄文土器片	縄文		
139	17-23・24G	楕円形	2.06×1.11×0.23、0.34	—	不明		内ピット有
140	17-24G	楕円形	1.28×0.86×0.28	—	不明		内ピット有
141	21-30G	楕円形	1.46×0.52×0.14、0.20	—	不明		
142	21-30G	楕円形	2.26×1.30×0.22	—	不明	SK16（旧）	
143	21-30G	不整形	0.93×0.92×0.30	縄文土器片	縄文		
144	18-24・25G	長方形	2.35×1.35×0.42	—	不明		
145	23-24G	楕円形	0.95×0.50×0.37	—	不明		



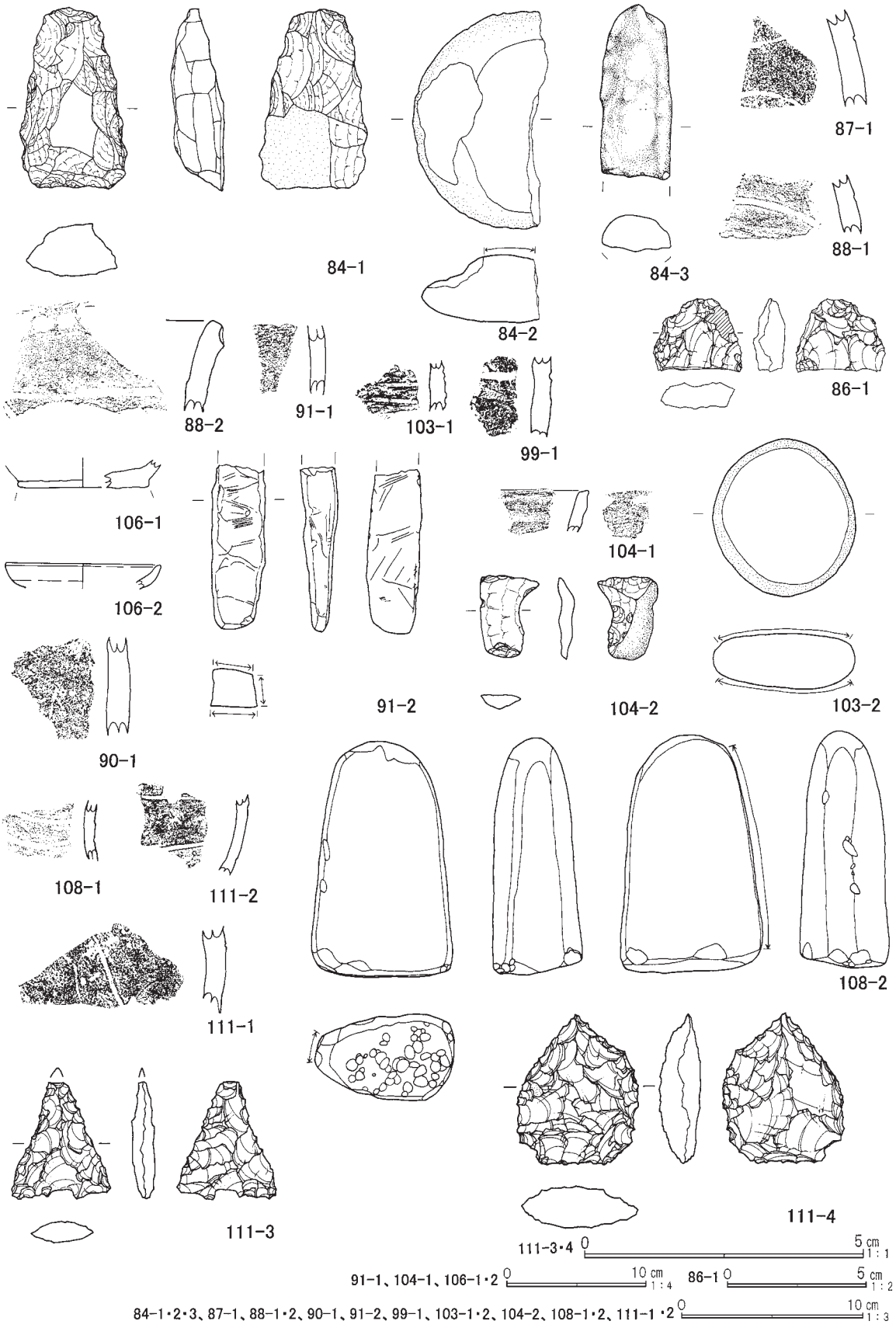
第65図　土坑出土遺物(1)



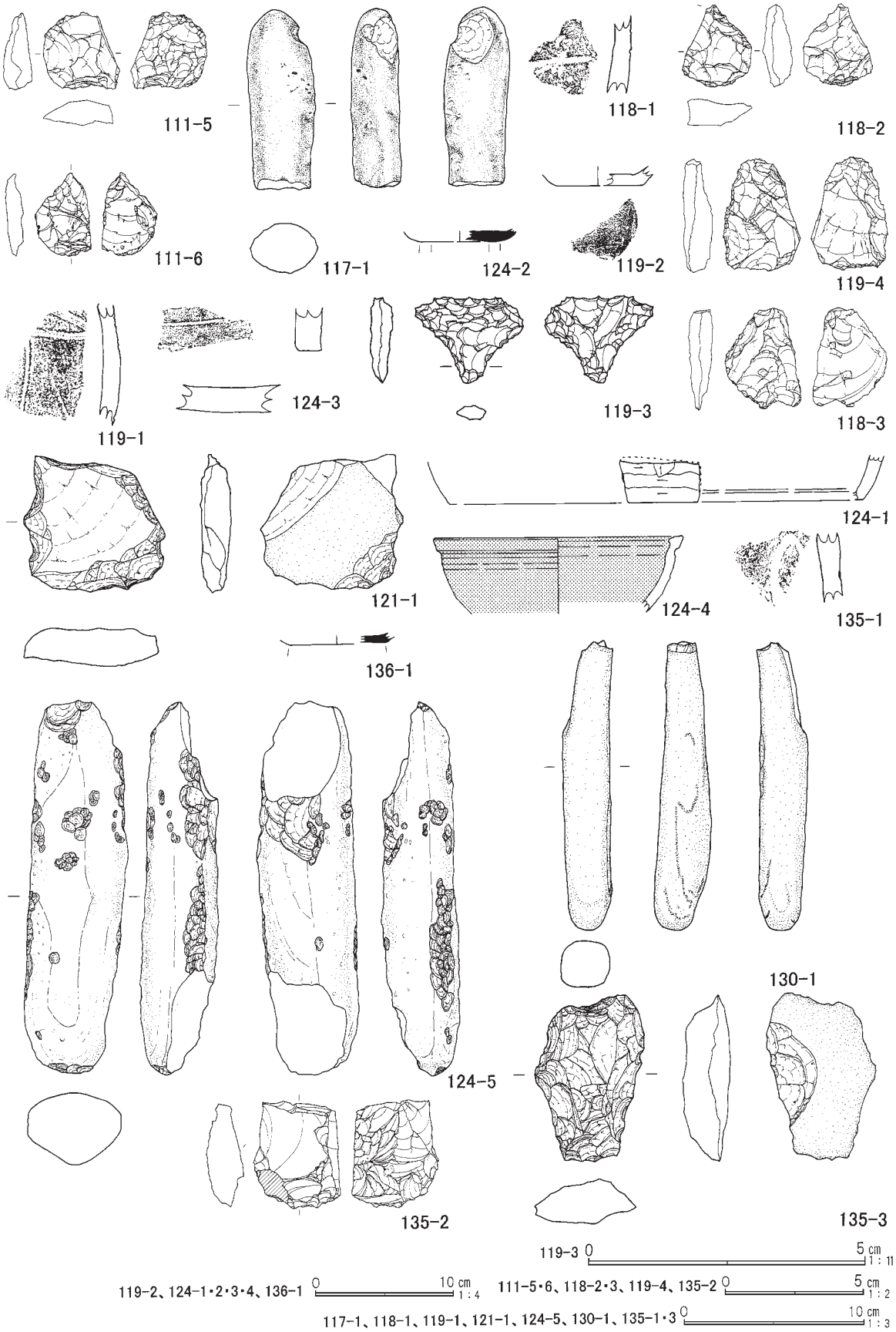
第66図　土坑出土遺物(2)


64-1
64-2
67-1
70-1
71-1
71-2
71-3
70-2
81-1
81-2
81-3
81-4
82-3
82-4
82-1
82-2
83-1
83-2
83-3
83-4
82-5
83-5
64-1・2、70-1・2、82-5、83-1
0
10 cm
1:3
67-1、71-1・2・3、81-1・2・3、82-1・2・3・4、83-2・3・4・5
0
10 cm
1:4

第 6図　土坑出土遺物(3)



第68図　土坑出土遺物(4)



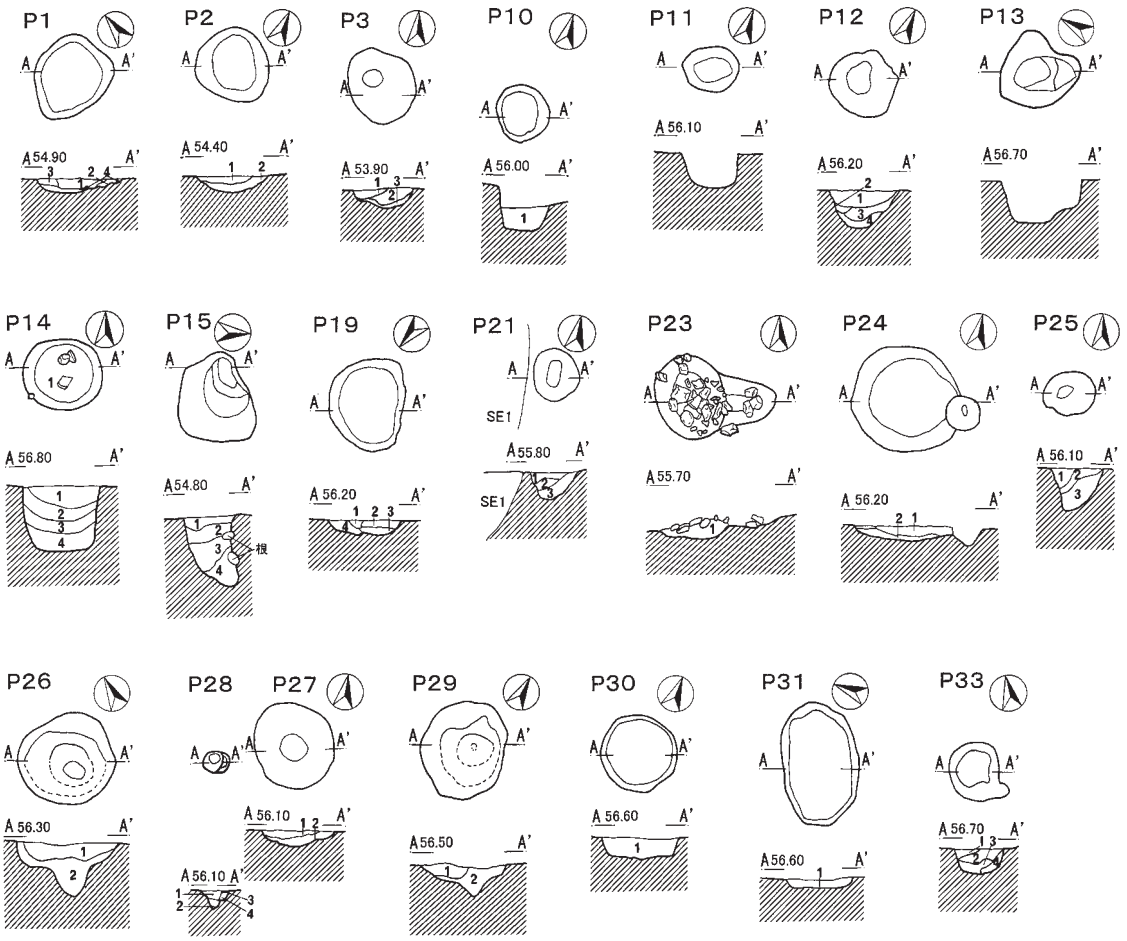
第69図　土坑出土遺物(5)

第23表　土坑出土遺物観察表（第65～69図）

№	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1－1	SK 1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJK	にぶい橙色	A	口縁部片	関山式(前期)、瘤状貼付、平行沈線。
1－2	SK 1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJK	にぶい橙色	A	口縁部片	関山式(前期)、瘤状貼付、平行沈線。
2－1	SK 2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGIN	橙色	B	胴部片	浮島式？(前期)、沈線。
2－2	SK 2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABHIN	橙色	A	口縁部片	田戸下層式（早期)。
3－1	SK 3	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJKN	にぶい黄橙色	A	口縁部片	沈線文、刺突文。
4－1	SK 4	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJKN	にぶい黄橙色	A	胴部片	沈線文。
12－1	SK12	須恵器坏	(15.8)	(4.7)	—	ABF	灰黄色	A	口～体20%	南比企産。
15－1	SK15	石核	長：11.9　幅：7.7　厚：4.1　重：380.8ｇ							
17－1	SK17	須恵器甕	—	—	—	ABDN	灰色	A	口～頸部片	頸部外面沈線３条、沈線区画内櫛描文。
19－1	SK19	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIN	橙色	A	胴部片	沈線文。
19－2	SK19	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGIJN	にぶい橙色	B	胴部片	沈線文。
21－1	SK21	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIN	赤色	B	胴部片	阿玉台式？（中期)。
25－1	SK25	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIN	橙色	A	胴部片	沈線文。
25－2	SK25	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJK	黄橙色	B	胴部片	湾曲沈線文。
25－3	SK25	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	にぶい黄橙色	A	口縁部片	浮島式(前期)、押捺文。
30－1	SK30	縄文土器深鉢	—	—	—	BI	にぶい橙色	B	胴部片	単節 LR 縄文。
30－2	SK30	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIKN	橙色	B	胴部片	沈線文。
30－3	SK30	打製石斧	長：8.2　幅：5.5　厚：2.0　重：88.0ｇ							
42－1	SK42	縄文土器深鉢	—	—	—	ABE	橙色	B	胴部片	条痕文（早期)。
46－1	SK46	須恵器甕	(24.0)	(7.1)	—	ABDHIK	浅黄橙色	B	口～頸片	頸部外面沈線。
47－1	SK47	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDHIK	浅黄橙色	B	胴部片	沈線文。
47－2	SK47	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJN	にぶい橙色	B	胴部片	加曽利Ｅ式（中期)、複節。
47－3	SK47	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJK	にぶい橙色	B	胴部片	黒浜式(前期)、沈線文。
47－4	SK47	縄文土器浅鉢	(26.0)	(6.0)	—	ABDGIN	浅黄橙色	B	口縁部片	外面指頭圧痕。
47－5	SK47	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJKN	橙色	B	胴部片	器壁厚手。
47－6	SK47	縄文土器深鉢	—	—	—	ABEI	にぶい橙色	B	口縁突起部	加曽利Ｂ式（後期)。
52－1	SK52	須恵長頸瓶	—	—	—	ABI	灰色	A	頸～胴30%	胴部外面釉薬
57－1	SK57	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDEIJKN	浅黄色	B	口縁部片	堀之内式(後期)、縄文地沈線、口縁部刺突文、単節 LR 縄文。
58－1	SK58	かわらけ	(8.6)	(1.6)	—	ABI	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
58－2	SK58	陶器埦	(13.8)	(1.8)	—	—	—	—	口縁部片	灰釉。
58－3	SK58	陶器高台埦	(11.4)	(5.1)	(5.0)	—	—	—	50%	灰釉。
58－4	SK58	磁器染付碗	(9.0)	(5.0)	(3.4)	—	—	—	60%	染色部短冊文様。
58－5	SK58	磁器染付碗	—	(4.5)	(4.1)	—	—	—	体～高台60%	肥前系（伊万里)。
58－6	SK58	磁器染付碗	(7.4)	4.2	(3.0)	—	—	—	70%	肥前系？
58－7	SK58	陶器高台埦	—	(1.7)	(4.6)	—	—	—	胴～高台20%	内：灰釉、外：鉄釉。
58－8	SK58	縄文土器浅鉢	—	—	—	ABDEIJN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	瘤付文。
58－9	SK58	石器	長：5.4　幅：7.05　厚：3.7　重：107.38ｇ							打斧あるいはスクレイパー類の破片か？、不定形な剝片(破片)の縁辺部に細かい剝離痕が連続する。

№	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
61-1	SK61	磁器染付碗	(10.0)	(3.3)	—	—	—	—	口縁部片	肥前系。
61-2	SK61	陶器片口鉢	(17.8)	(4.5)	—	—	明黄褐色	A	口縁部片	内外面灰釉。
61-2-1	SK61・2	瓦質土器火鉢	—	7.0	30.0	ABI	黒褐色	A	胴部片	内耳部分破損。
61-2-2	SK61・2	焙烙	41.0	5.5	35.5	ABI	黒褐色	B	胴部片	
61-2-3	SK61・2	磨石	長：22.3　幅：10.5　厚：6.8　重：2673.6g							上面磨り痕。
64-1	SK64	縄文土器浅鉢	—	—	—	ABIJ	黄褐色	A	口縁部片	
64-2	SK64	縄文土器浅鉢	—	—	—	ABIJ	黄褐色	A	口縁部片	
67-1	SK67	須恵器坏	(9.4)	(2.3)	5.1	ABDEGIJK	浅黄色	B	60%	底部外面回転糸切り離し。
70-1	SK70	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJK	橙色	B	胴部片	三戸式？（早期）、沈線文。
70-2	SK70	打製石斧	長：17.0　幅：4.8　厚：4.1　重：484.0g							上下側面敲打痕。
71-1	SK71	須恵器坏	(12.2)	(4.4)	4.7	ABEIN	灰色	B	60%	底部外面回転糸切り離し。
71-2	SK71	須恵器坏	(14.0)	(2.6)	—	ABDEIK	灰白色	A	口縁部片	
71-3	SK71	須恵器坏	(12.4)	(2.8)	—	ABDEI	灰白色	A	口～体25%	
81-1	SK81	磁器染付皿	—	(3.0)	(7.5)	—	—	—	体～高台30%	染付模様不明。
81-2	SK81	磁器染付碗？	—	(3.2)	4.8	—	—	—	胴～高台100%	染付模様不明。
81-3	SK81	須恵器甕	—	—	—	AB	灰色	A	胴部片	胴部外面平行タタキ、内面青海波文。
81-4	SK81	須恵器甕	—	—	—	ABHI	灰色	B	胴部片	外面平行タタキ、内面無文。
82-1	SK82	陶器鉢	(32.0)	(6.2)	(24.0)	—	にぶい黄褐色	A	口～胴部片	口縁部自然釉、瀬戸・美濃系？。
82-2	SK82	磁器染付碗	(10.2)	(4.7)	(4.0)	—	—	—	体～高台部片	肥前系。
82-3	SK82	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDEIJN	淡赤橙色	B	胴部片	器壁厚手、粗雑。
82-4	SK82	須恵器甕	—	—	—	ABN	灰色	A	胴部片	外面平行タタキ、内面無文当て目。
82-5	SK82	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGIN	橙色	B	口～胴部片	堀ノ内式（後期）。
83-1	SK83	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJK	にぶい黄橙色	B	口縁部片	刺突文。
83-2	SK83	縄文土器深鉢	—	(5.3)	(9.0)	ABGIN	にぶい黄橙色	B	胴～底部25%	胴部外面下端縦位ヘラケズリ。
83-3	SK83	須恵器甕	—	—	—	AB	灰色	A	胴部片	外面平行タタキ、内面無文。
83-4	SK83	陶器高台埦	—	(6.5)	(5.0)	—	暗緑灰色	A	40%	織部釉？
83-5	SK83	焙烙	34.6	5.4	30.6	ABEIK	外：浅黄色 内：灰色	B	口～底部片	
84-1	SK84	打製石斧	長：9.6　幅：5.7　厚：2.8　重：172.6g							
84-2	SK84	磨石	長：11.8　幅：(6.4)　厚：3.6　重：416.4g							上面磨痕
84-3	SK84	石棒	長：(9.3)　幅：3.9　厚：2.0　重：140.9g							
86-1	SK86	石鏃未製品	長：2.68　幅：2.2　厚：1.13　重：9.21g　石材：チャート							小型剝片の縁辺部に２次加工を施す、節理面有り
87-1	SK87	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDEI	にぶい橙色	B	胴部片	称名寺式（後期）沈線文
88-1	SK88	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGI	にぶい橙色	A	胴部片	称名寺式（後期）沈線文
88-2	SK88	縄文土器深鉢	—	—	—	ABHIJ	にぶい橙色	B	口縁部片	口縁部外面刺突文、頸部外面沈線文
90-1	SK90	縄文土器深鉢	—	—	—	ABKN	淡橙色	B	胴部片	器壁厚手・粗雑
91-1	SK91	瓦質土器甕	—	—	—	ABDN	明赤褐色	A	胴部片	
91-2	SK91	砥石	長：(8.9)　幅：2.9　厚：2.0　重：62.3g							上下右側面磨痕
99-1	SK99	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	橙色	B	胴部片	沈線文
103-1	SK103	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGIJK	にぶい橙色	B	胴部片	田戸式？（早期）、沈線文。
103-2	SK103	磨石	長：8.4　幅：7.7　厚：2.9　重：293.3g							上下面磨痕。

№	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
104-1	SK104	焙烙	—	—	—	ABDEI	黒褐色	A	口縁部片	
104-2	SK104	削器	長：4.4　幅：3.2　厚：0.7　重：9.3g							
106-1	SK106	縄文土器深鉢	—	(1.4)	(7.2)	ABE	にぶい黄橙色	C	底部片	底部手持ヘラケズリ。
106-2	SK106	かわらけ	(11.0)	(1.8)	—	ABIN	橙色	B	口～体部片	器壁厚手。
108-1	SK108	縄文土器深鉢	—	—	—	ABEI	にぶい橙色	B	胴部片	沈線文。
108-2	SK108	スタンプ状石器	長：12.6　幅：7.7　厚：4.8　重：683.7g							左側面磨痕、下端面敲打痕
111-1	SK111	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDN	にぶい橙色	B	胴部片	沈線文。
111-2	SK111	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDEIJKN	にぶい橙色	A	胴部片	沈線文。
111-3	SK111	石鏃	長：(2.1)　幅：1.75　厚：0.4　重：1.11g　石材：チャート							凹基無茎、先端部欠損。
111-4	SK111	石鏃未製品	長：2.68　幅：2.15　厚：0.75　重：4.35g　石材：チャート							小型制片の表裏面に調整制離痕。
111-5	SK111	石鏃未製品	長：2.8　幅：2.75　厚：1.05　重：7.59g　石材：							小型剥片の縁辺部に２次加工を施す。
111-6	SK111	剥片石器	長：3.0　幅：2.0　厚：0.7　重：4.34g　石材：黒曜石							小型制片の縁辺部に２次加工を施す。
117-1	SK117	石棒	長：9.7　幅：3.7　厚：2.7　重：136.9g							先端部敲打痕。
118-1	SK118	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIN	赤褐色	B	胴部片	沈線文。
118-2	SK118	石鏃未製	長：2.95　幅：2.5　厚：1.05　重：6.48g　石材：チャート							小型剥片の縁辺部に２次加工を施す。
118-3	SK118	剥片素材	長：3.6　幅：2.75　厚：0.9　重：7.32g　石材：チャート							小型剥片の縁辺部に微細剥離痕。
119-1	SK119	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJ	橙色	B	胴部片	沈線文。
119-2	SK119	かわらけ	—	(1.4)	(6.4)	AB	橙色	B	底部50%	底部回転糸切離し。
119-3	SK119	石錐	長：1.55　幅：1.95　厚：0.4　重：1.00g　石材：チャート							錐部分がやや磨滅により丸みを帯びる。
119-4	SK119	剥片素材	長：4.05　幅：2.8　厚：1.09　重：12.62g　石材：チャート							小型剥片の縁辺部に２次加工を施す。
121-1	SK121	打製石器	長：7.3　幅：7.8　厚：1.8　重：126.2g							
124-1	SK124	焙烙	—	(3.0)	(15.0)	ABI	オリーブ黒色	A	口縁部片	外面横位ヘラケズリ。
124-2	SK124	須恵器坏	—	(0.7)	(5.8)	ABD	灰色	A	底部25%	底部周辺回転ヘラケズリ。
124-3	SK124	平瓦	—	—	—	AB	灰色	A	端片	中世瓦。
124-4	SK124	陶器片口鉢	(17.8)	(5.5)	—	—	にぶい黄橙色	A	口～胴部片	内外面釉薬。
124-5	SK124	敲石	長：20.0　幅：5.0　厚：4.1　重：580.5g							各面敲打痕。
130-1	SK130	石棒	長：16.7　幅：2.6　厚：2.5　重：227.1g							
135-1	SK135	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJK	外：にぶい褐色 内：橙色	B	胴部片	称名寺式(後期)、沈線文。
135-2	SK135	剥片石器	長：3.9　幅：3.13　厚：1.35　重：17.88g　石材：黒曜石							小型剥片の縁辺部に２次加工を施す。
135-3	SK135	打製石斧	長：9.0　幅：5.5　厚：2.6　重：147.3g							
136-1	SK136	須恵器坏	—	(0.6)	(7.0)	ABF	灰白色	A	底部片	底部全面回転ヘラケズリか？、南比企産。



P1
1　黒褐色土　火山灰多量、ソフトローム微粒子少量含む。
2　灰黄褐色土　火山灰少量、ソフトローム微粒子多量に含む。
3　黄褐色土　黒褐色土混じる。
4　灰オリーブ色土　火山灰若干、黒褐色土粒少量含む。

P2
1　黒色土　ソフトローム粒少量含む。
2　灰黄色土　ソフトローム粒多量、炭化物魂わずかに含む。黒色土粒少量含む。

P3
1　暗灰黄色土　ソフトロームブロック及び粒多量に含む、火山灰わずかに含む。
2　にぶい黄色土　暗灰黄色土ブロック多量、黒褐色土粒少量含む。
3　にぶい黄色土　ソフトローム粒わずかに含む。

P10
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。

P12
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。黒褐色土粒を多く含む。
3　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
4　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。

P14
1　にぶい黄褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒多く含み、炭化物を少量含む。
2　褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含み、炭化物を少量含む。
3　褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒主体、炭化物少量含む。
4　褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒主体、炭化物を少量含む。

P15
1　灰黄褐色土　しまり弱。
2　黒褐色土　にぶい黄色粘質土粒若干含む。
3　黒褐色土　粘性有り。にぶい黄色粘質土ブロックわずか、ソフトローム粒わずかに含む。
4　黒褐色土　粘性強。ソフトローム微粒子わずか、炭化物粒わずかに含む。

P19
1　暗灰黄色土　明黄褐色土粒わずか、炭化物粒わずかに含む。
2　灰色土　暗灰黄色土ブロック及び粒含む、炭化物粒多量、焼土粒わずかに含む。
3　灰色土　炭化物粒を非常に多く含み、全体的に黒色呈す。
4　灰黄褐色土　明黄褐色土粒少量、炭化物粒少量含む。

P21
1　灰黄褐色土　ソフトローム粒若干含む。
2　黒褐色土　ソフトローム粒少量含む。
3　黒色土　ソフトローム粒若干。炭化物粒含む。

P23
1　黒褐色土　粘性有り。しまり普通。炭化粒を多量に含み、ソフトローム粒を少量含む。

P24
1　黄褐色土　火山灰多量に含む。
2　オリーブ褐色土　火山灰わずかに含む。

P25
1　黄褐色土　しまり弱。火山灰若干含む。
2　暗灰黄色土　1層土粒わずかに含む。
3　にぶい黄褐色土　黒褐色土粒多量、ソフトローム粒若干含む。

P26
1　明黄褐色土　黒色粒及び白色粒少量含む。
2　明黄褐色土　黒色粒及び白色粒少量含む。

P27
1　黄褐色土　火山灰多量に含む。
2　オリーブ褐色土　火山灰わずかに含む。

P28
1　黒褐色土　黄褐色土ブロック含む。
2　黒褐色土　しまり弱。
3　黒褐色土
4　オリーブ褐色土

P29
1　にぶい黄褐色土　粘性強。しまり弱。黒色粒及びソフトローム粒少量含む。
2　灰黄褐色土　粘性強。しまり弱。黒色粒少量含む。

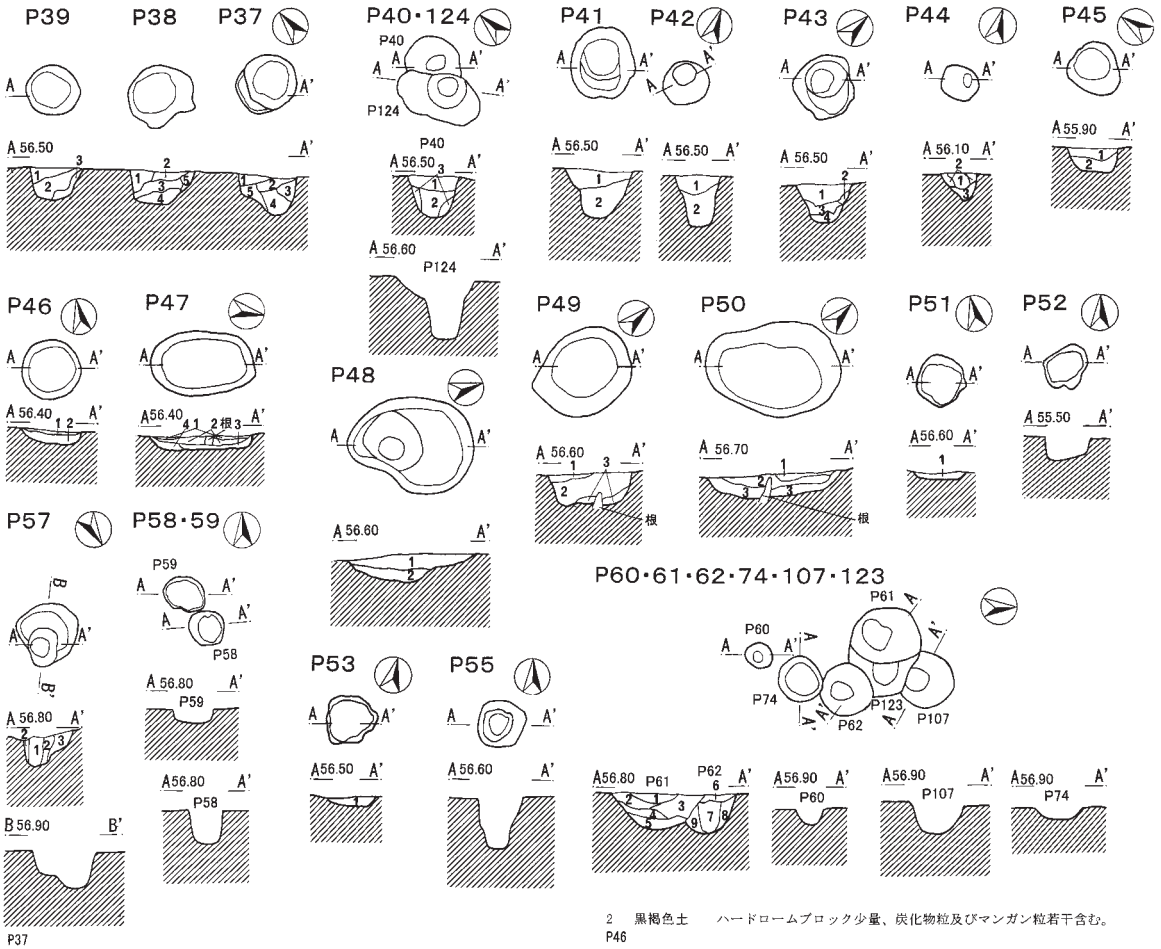
P30
1　黄褐色土　粘性強。しまり弱。ソフトローム粒少量含む。白色粒少量含む。

P31
1　明黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ソフトローム粒少量含む。

P33
1　明黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。
2　黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。
3　にぶい黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック粒含む。
4　黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。

0　2m　1:60

第70図　ピット(1)



P37
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
4　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を微量含む。
5　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。

P38
1　褐色土　粘性弱。しまり強。ローム主体、暗褐色土粒を少量含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
3　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
4　褐色土　粘性弱。しまり強。ローム主体、暗褐色土粒を少量含む。
5　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。

P39
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含み、炭化物を微量含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。

P40
1　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及び粒を多く含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
3　にぶい黄褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックを少量含み、ソフトローム粒を多く含む。

P41
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックを少量含み、ソフトローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。

P42
1　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。

P43
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック及び粒をやや多く含む。
3　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
4　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックを少量含み、ソフトローム粒を微量含む。

P44
1　オリーブ黒色土　ソフトローム粒若干、炭化物粒ごくわずかに含む。
2　黄灰色土　ブロック含む。
3　黒褐色土　ハードロームブロック化に含む。

P45
1　黄灰色土　ハードロームブロック少量、黄褐色土ブロック及び火山灰若干、炭化物粒わずかに含む。
2　黒褐色土　ハードロームブロック少量、炭化物粒及びマンガン粒若干含む。

P46
1　暗灰黄色土　ソフトローム粒多量に含む。
2　にぶい黄色土　炭化物粒ごくわずかに含む。

P47
1　暗灰黄色土　ソフトローム粒多量に含む。
2　黄褐色土　ハードローム粒ごくわずかに含む。
3　暗灰黄色土　ハードローム粒少量含む。
4　にぶい黄色土　炭化物粒ごくわずかに含む。

P48
1　灰黄褐色土　ソフトローム微粒子わずか、黒褐色土ブロック若干、炭化物粒わずかに含む。
2　暗灰黄色土　ソフトロームブロックわずかに含む。

P49
1　にぶい黄色土　しまり弱。
2　P48の第2層にほぼ同じ。黒褐色土粒若干含む。
3　2層にほぼ同じ、但し、ハードロームブロック多量に含む。

P50
1　にぶい黄色土　しまり弱。
2　P48の第2層にほぼ同じ。黒褐色土粒若干含む。
3　32層にほぼ同じ。但し、ハードロームブロック多量に含む。

P51
1　黒褐色土　しまり強。焼土粒及びブロック、炭化粒少量含む。

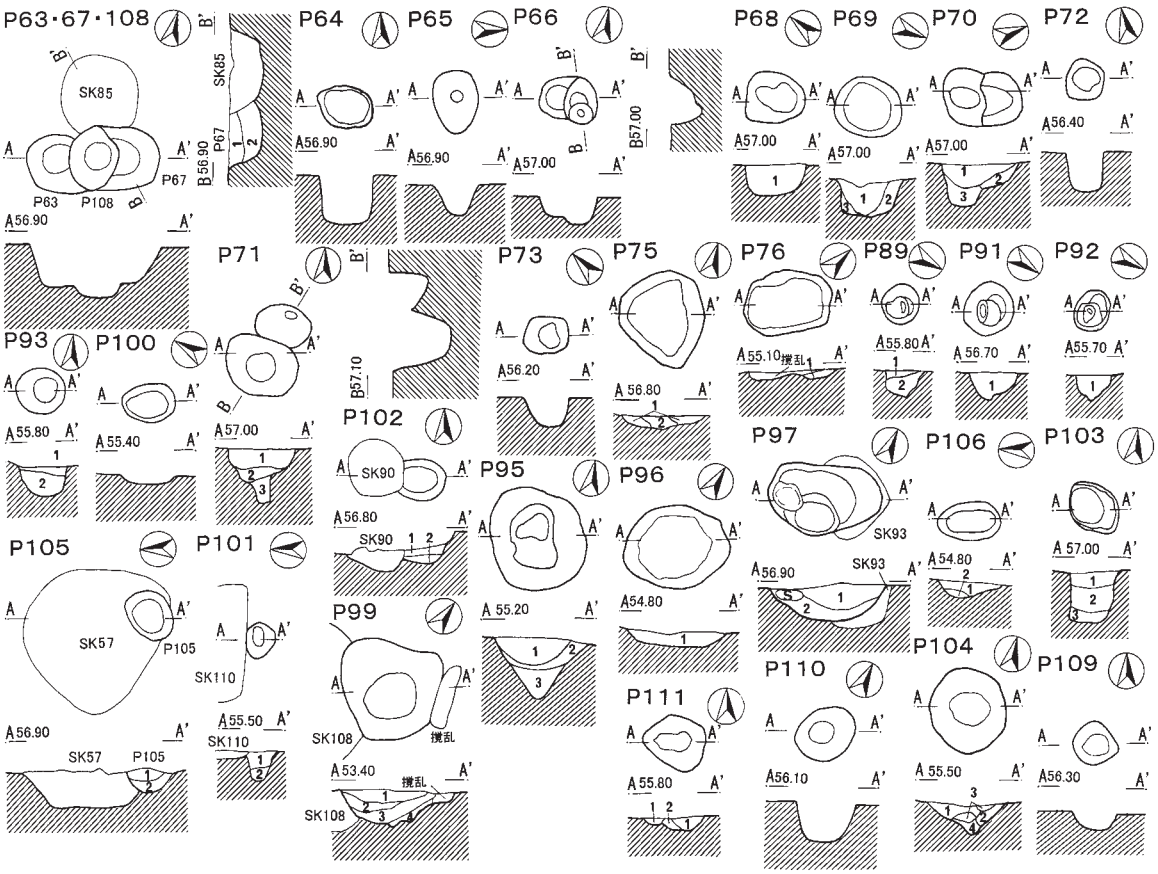
P53
1　黒褐色土　しまり強。焼土粒及びブロック、炭化粒少量含む。

P57
1　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒少量含む。炭化物微量含む。
2　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒含む。
3　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒少量含む。

P61・62
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
3　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を少量含む。
4　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
5　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を多く含む。
6　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。
7　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
8　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
9　褐色土　しまり普通。ソフトローム粒主体、暗褐色土粒をやや多く含む。

0　2m　1:60

第71図　ピット(2)



P67
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒混入。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。

P68
1　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒及びハードロームブロック微量含む。

P69
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
3　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。

P70
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　粘性あり。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
3　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体、暗褐色土粒を多く含む。

P71
1　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり弱。ハードロームブロックをやや多く含み、ソフトローム粒を多量に含む。
2　暗褐色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒を少量含む。
3　にぶい黄褐色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒を多量に含む。

P75
1　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。白色粒少量含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒及びブロック少量含む。白色粒少量含む。

P76
1　黒褐色土　ソフトロームブロック若干含む。

P89
1　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
2　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。

P91
1　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒をやや多く含む。

P92
1　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及びソフトローム粒を少量含む。

P93
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
2　黒褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を少量含む。

P95
1　褐灰色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック混在。焼土粒若干含む。
2　褐灰色土　しまり弱。ソフトローム粒及びハードロームブロック多量混在。
3　褐灰色土　しまり強。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。

P96
1　黄褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロック含む。黒褐色土斑点状混在。

P97
1　暗褐色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒を多く含み焼土粒及び炭化物をやや多く含む。

P99
1　黒褐色土　しまり弱。
2　黒褐色土　黄褐色土粒若干。ソフトローム粒わずかに含む。
3　黒褐色土　黒色土ブロック少量、ソフトローム粒若干含む。
4　黒色土　ソフトロームブロック少量含む。

P101
1　灰黄褐色土　黒褐色土ブロック多量、ソフトローム粒わずかに含む。
2　暗褐色土　黒褐色土ブロック多量に含む。

P102
1　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒微量含む。
2　褐色土　粘性弱。しまり普通。ハードロームブロック含む。

P103
1　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒を多量に含み、暗褐色土粒をやや多く含む。
3　にぶい黄褐色土　粘性有り。しまり強。ローム主体。

P104
1　黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。
2　黄褐色土　しまり弱。ソフトローム粒少量含む。
3　黒褐色土　しまり弱。炭化材少量含む。ソフトローム粒少量含む。
4　黄橙色土　しまり弱。ハードロームブロック少量含む。

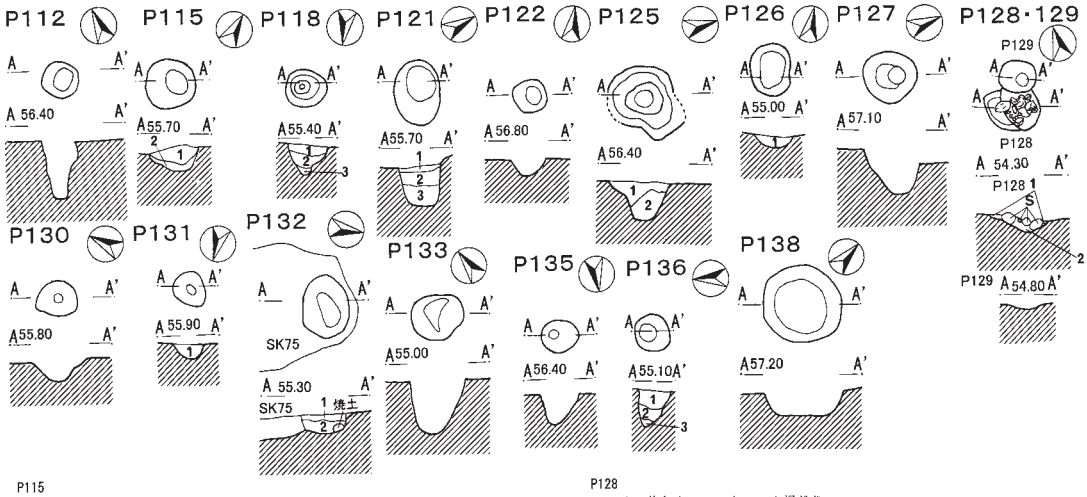
P105
1　暗褐色土　粘性有り。しまり強。ハードロームブロックやや多く、ソフトローム粒多量。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒主体。ハードロームブロック多量。暗褐色土粒多く含む。

P106
1　暗灰黄色土　ハードロームブロック及び粒多量。ソフトローム粒若干含む。
2　暗灰黄色土　ソフトロームブロック及び粒多量含む。

P111
1　黒褐色土　しまり弱。焼土粒及び炭化粒少量含む。ソフトローム粒及びハードロームブロック少量含む。
2　明黄褐色土　しまり弱。ハードロームブロック少量含む。1層土少含。

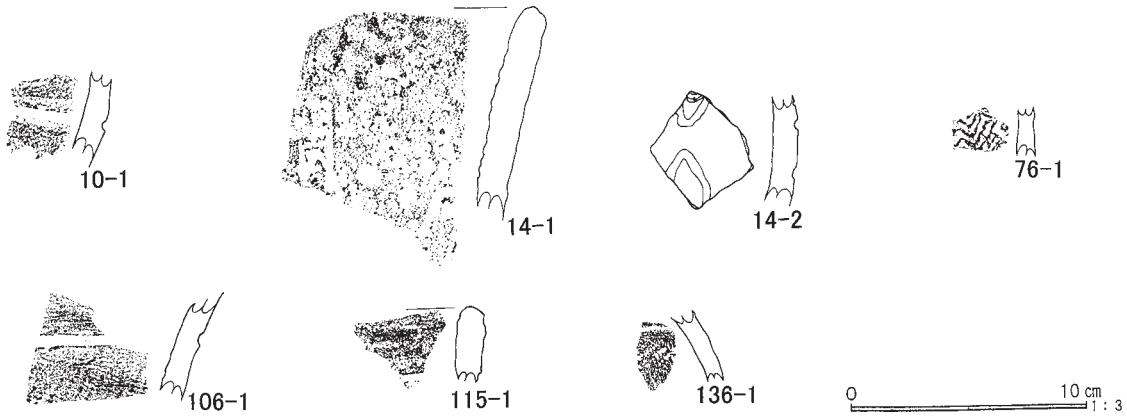
0　2m
1：60

第72図　ピット(3)



P115
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多く含む。
2　にぶい黄褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒を多量に含む。
P118
1　暗灰黄色土　ソフトローム粒少量、黒色土ブロック多量に含む。
2　暗灰黄色土　ソフトローム粒及び微粒子少量、黒色土ブロック若干含む。
3　黄褐色土　ソフトローム粒少量含む。
P121
1　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ソフトローム粒をやや多く含む。
2　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロック及び粒を多く含む。
3　暗褐色土　粘性弱。しまり強。ハードロームブロックを少量含み、ソフトローム粒をやや多く含む。
P125
1　灰黄褐色土　粘性有り。しまり強。白色粒及びソフトローム粒少量含む。
2　黒褐色土　粘性有り。しまり強。ソフトローム粒少量含む。
P126
1　褐灰色土　しまり弱。ソフトローム粒及び炭化粒少量含む。
P128
1　暗灰黄色土　ソフトローム混じり。
2　黒褐色土　ソフトローム粒若干含む。
P131
1　暗褐色土　粘性なし。しまり普通。ソフトローム粒含む。ハードロームブロック微量含む。
P132
1　黄褐色土　しまり強。焼土粒少量含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり強。焼土粒含む。
P136
1　にぶい黄褐色土　黒褐色土ブロック粒多量に含む。
2　灰黄褐色土　ソフトローム。ブロック若干含む。
3　黒色土　しまり強。

0　2m　1:60



第73図　ピット(4)・ピット出土遺物

第24表　ピット出土遺物観察表（第73図）

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
10-1	P10	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	橙色	B	胴部片	称名寺式(後期)、沈線文。
14-1	P14	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIJN	浅黄橙色	B	口縁部片	沈線文？
14-2	P14	縄文土器深鉢	—	—	—	ABEIJ	明褐灰色	B	胴部片	称名寺式(後期)、沈線文。
76-1	P76	縄文土器深鉢	—	—	—	AI	橙色	B	胴部片	押型文（早期)。
106-1	P106	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJ	橙色	A	胴部片	加曽利E式（中期)、充填縄文。
115-1	P115	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJK	にぶい橙色	B	口縁部片	沈線文。
136-1	P136	縄文土器深鉢	—	—	—	ABEI	明赤褐色	B	胴部片	単節LR縄文、沈線文。

第25表　ピット一覧表　（第52～55・70～73図）

No.	位　　置	平面形状	長軸×短軸×深さ(m)	出土遺物	時　　期	重複関係(新旧)	備　　考
1	6-29G	円形	0.71×0.60×0.12	—	不明		覆土中火山灰
2	10-29G	円形	0.61×0.60×0.13	—	不明		覆土中炭化物
3	9-31G	楕円形	0.64×0.54×0.16	—	不明		覆土中火山灰
10	24-29G	楕円形	0.73×0.60×0.18	縄文土器深鉢	縄文後期		
11	25-29G	楕円形	0.47×0.38×0.29	—	不明		
12	25-29G	楕円形	0.54×0.54×0.30	—	不明		
13	25-25G	不整形	0.59×0.50×0.32	—	不明		
14	25-25G	円形	0.66×0.55×0.55	縄文土器深鉢	縄文後期		覆土中炭化物
15	7-24G	不整形	0.75×0.64×0.58	—	不明		覆土中炭化物
19	19-26G	楕円形	0.78×0.60×0.13	—	9C以降	SI 9（旧）	
21	19-27G	楕円形	0.48×0.36×0.24	—	不明		
23	20-28G	不整形	0.51×0.35×0.08	—	近世		覆土中礫多量
24	12-24G	楕円形	0.95×0.90×0.13	—	不明		覆土中火山灰
25	12-24G	楕円形	0.43×0.36×0.34	—	不明		覆土中火山灰
26	11-21・22G	楕円形	0.77×0.74×0.43	—	不明		内小ピット有
27	12-24G	楕円形	0.74×0.65×0.13	—	不明		覆土中火山灰
28	12-24G	楕円形	0.23×0.18×0.15	—	不明		
29	20-24G	楕円形	0.84×0.71×0.24	—	不明		
30	20-24G	円形	0.65×0.64×0.18	—	不明		
31	20-23・24G	楕円形	1.03×0.63×0.07	—	不明		
33	20-22G	不整形	0.49×0.42×0.20	—	不明		
37	22-26G	楕円形	0.51×0.45×0.36	—	不明		
38	22・23-26G	不整楕円形	0.56×0.48×0.29	—	不明		
39	22・23-26G	円形	0.41×0.41×0.25	—	不明		覆土中炭化物
40	23-25・26G	(円形)	0.45×(0.32)×0.34	—	不明	P124（新）	
41	22-26G	不整円形	0.59×0.54×0.39	—	不明		
42	22-26G	円形	0.39×0.36×0.43	—	不明		
43	22-25G	不整楕円形	0.52×0.48×0.33	—	不明		
44	13-21G	楕円形	0.31×0.27×0.23	—	不明		覆土中炭化物
45	13-21G	楕円形	0.45×0.42×0.20	—	不明		覆土中火山灰・炭化物
46	14-19G	円形	0.48×0.48×0.11	—	不明		覆土中炭化物
47	14-19G	楕円形	0.86×0.54×0.11	—	不明		覆土中炭化物
48	14-19G	不整形	1.06×0.80×0.23	—	不明		覆土中炭化物
49	14-19G	楕円形	0.80×0.68×0.25	—	不明		
50	15-19G	楕円形	1.12×0.80×0.18	—	不明		
51	17-27G	不整円形	0.43×0.41×0.06	—	不明		覆土中炭化物
52	17-28G	不整円形	0.37×0.38×0.14	—	不明		
53	17-28G	不整楕円形	0.41×0.40×0.07	—	不明		覆土中炭化物
55	22-25G	円形	0.38×0.37×0.43	—	不明		
57	23-24G	不整円形	0.51×0.49×0.30	—	不明		覆土中炭化物
58	22-24G	円形	0.30×0.28×0.27	—	不明		
59	22-24G	楕円形	0.35×0.27×0.11	—	不明		
60	22-24G	円形	0.23×0.20×0.14	—	不明		
61	22・23-24G	楕円形	0.72×0.59×0.32	—	不明	P123（旧）	

№	位　　置	平面形状	長軸×短軸×深さ(m)	出土遺物	時　　期	重複関係(新旧)	備　　考
62	22-24G	円形	0.46×0.42×0.32	—	不明	P74（新） P123（旧）	
63	22-23G	(楕円形)	0.47×(0.50)×0.33	—	不明	P108（新）	
64	21-23G	楕円形	0.50×0.37×0.39	—	不明		
65	21・22-23・24G	楕円形	0.52×0.38×0.25	—	不明		
66	22-23G	不整楕円形	0.47×0.35×0.28	—	不明		
67	22-24G	(楕円形)	(0.35)×0.51×0.29	—	不明	SK85（旧） P108（新）	
68	22-23G	不整楕円形	0.50×0.43×0.27	—	不明		
69	23-24G	楕円形	1.02×0.50×0.32	—	不明		
70	23-23G	不整楕円形	0.57×0.45×0.25、0.37	—	不明		
71	23-23G	不整楕円形	0.60×0.47×0.50	—	不明		
72	23-26・27G	円形	0.34×0.33×0.22	—	不明		
73	23-27G	楕円形	0.36×0.32×0.23	—	不明		
74	22-24G	円形	0.37×0.36×0.10	—	不明	P62（旧）	
75	15-27G	楕円形	0.80×0.70×0.11	—	不明		
76	5 -22G	楕円形	0.71×0.53×0.08	縄文土器深鉢	縄文早期		
89	19・20-27G	円形	0.34×0.32×0.23	—	不明		
91	20-27G	円形	0.45×0.41×0.24	—	不明		
92	20-27G	円形	0.35×0.30×0.16	—	不明		
93	20-27G	円形	0.42×0.38×0.26	—	不明		
95	15-28G	楕円形	0.88×0.75×0.52	—	不明		覆土中焼土粒
96	13・14-29G	楕円形	0.89×0.70×0.13	—	不明		
97	23-24G	不整楕円形	0.72×0.46×0.32	—	不明	SK93（旧）	覆土中焼土粒・炭化物
99	5 -30G	不整楕円形	0.83×0.79×0.29	—	不明	SK108（旧）	
100	5 -22G	楕円形	0.45×0.32×0.05	—	不明		
101	5 -21G	楕円形	0.29×0.24×0.24	—	不明	SK110（新）	
102	22-24G	(楕円形)	(0.39)×0.35×0.27	—	縄文	SK90（新）	
103	20-27G	楕円形	0.50×0.38×0.46	—	不明		
104	19-28G	円形	0.72×0.64×0.24	—	不明		覆土中炭化材
105	21-22G	楕円形	0.48×0.34×0.16	—	近世	SK57（旧）	
106	5 -24G	楕円形	0.53×0.32×0.13	縄文土器深鉢	縄文中期		
107	22-23G	(楕円形)	0.45×(0.41)×0.14	—	不明	P123（新）	
108	22-23G	楕円形	0.53×0.40×0.27	—	不明	SK85、P63、 P67（旧）	
109	21-27G	円形	0.35×0.33×0.67	—	不明		
110	21-27G	楕円形	0.50×0.42×0.99	—	不明		
111	19-27G	楕円形	0.50×0.41×0.12	—	不明		覆土中焼土粒・炭化物
112	16-22G	円形	0.46×0.44×0.48	—	不明		
115	21-28G	円形	0.45×0.42×0.21	縄文土器深鉢	縄文	SD7（新）	
118	12-25G	円形	0.35×0.31×0.25	—	不明		
121	21-28G	楕円形	0.55×0.39×0.36	—	不明	SD7（新）	
122	22-23G	円形	0.28×0.26×0.12	—	不明		
123	22-23・24G	不整形	0.59×(0.28)×0.16	—	不明	P61・62（新） P107（旧）	
124	23-25・26G	楕円形	0.72×0.40×0.70	—	不明	P40（旧）	
125	17-23G	不整楕円形	0.43×0.33×0.32	—	不明		

No.	位　　置	平面形状	長軸×短軸×深さ(m)	出土遺物	時　　期	重複関係(新旧)	備　　考
126	16-23G	楕円形	0.42×0.30×0.09	—	不明		
127	24-23・24G	楕円形	0.45×0.44×0.30	—	不明		
128	11-30G	不整楕円形	0.48×(0.33)×0.18	—	不明	P129（新）	覆土中礫多量
129	11-30G	楕円形	0.30×0.25×0.45	—	不明	P128（旧）	
130	21-28G	楕円形	0.35×0.30×0.21	—	不明	SD6（新）	
131	25-30G	楕円形	0.31×0.25×0.12	—	不明		
132	17-24G	楕円形	0.54×0.54×0.19	—	不明	SK75（旧）	覆土中焼土粒
133	18-30G	楕円形	0.44×0.38×0.42	—	不明		
135	17-22G	楕円形	0.32×0.27×0.47	—	不明		
136	21-31G	円形	0.30×0.30×0.31	縄文土器深鉢	縄文		
138	22-20G	円形	0.70×0.63×0.19	—	不明		

7　井戸跡

第１号井戸跡（第74～76図、第26表）

［位　　置］　19―27グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　長軸2.74m、短軸25.2mの不整円形で、確認面からの深さは2.06mである。

［断　面　形］　側壁は崩落によるものか擂鉢状に傾斜していて、底面は狭くなる。

［覆　　土］　側壁の崩落とみられるソフトロームやハードロームが多く含まれ、黒褐色土や灰黄褐色土を主体としている。概ねレンズ状に近い堆積状況であるが、下半が自然堆積の後、上半を人為に埋め戻した可能性が考えられる。

［出 土 遺 物］　覆土中から多種多様な遺物が出土している。かわらけ６点（１～６）、磁器皿１点（７）、陶器埦３点（８～10）、陶器鉢１点(11)、陶器高台埦１点(12)、陶器天目茶埦３点(13・15・16)、陶器甕１点（14）、陶器三足盤１点（17）、須恵器坏１点（18）、須恵器甕１点（19）、焙烙１点（20）、砥石２点（21・22）、石匙１点（23）、石篦２点（24・26）、礫器１点（25）を図示した。その他、図示はしていないが、流れ込みと考えられる縄文土器片が比較的多く出土している。

［時　　期］　出土遺物から近世の時期が考えられる。

第２号井戸跡（第73・76図、第27表）

［位　　置］　25―24グリッドに位置する。

［重　　複］　なし。

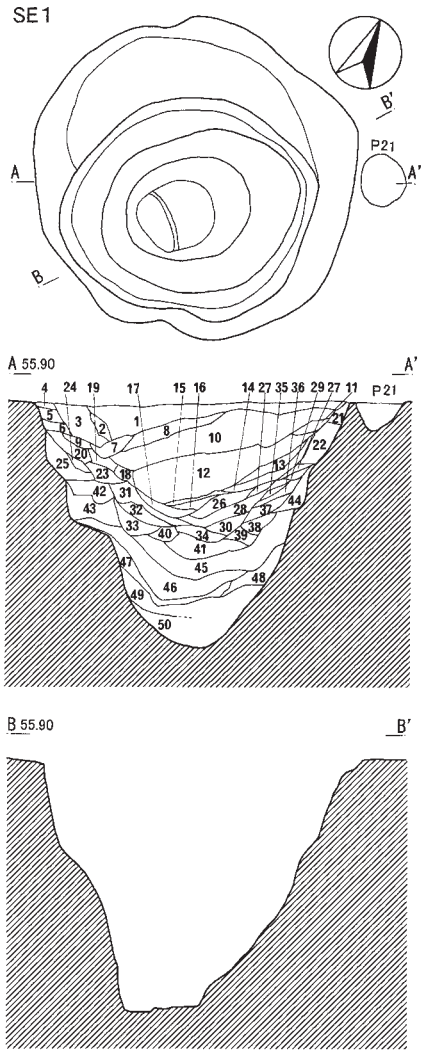
［平面形・規模］　長軸1.90m、短軸1.90mのほぼ円形である。湧水があり掘り下げを断念したため、深さは不明である。

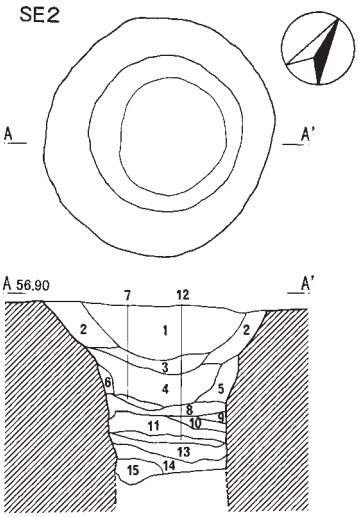
［断　面　形］　ロート状で、側壁は崩落によるものか肩部は擂鉢状に傾斜し、確認面から0.42m付近から下部はほぼ垂直になり筒状を呈している。

［覆　　土］　第８層以下では、黄褐色土や明黄褐色土が水平に堆積していて、人為的に埋められた可能性が高い。第７層から上方では、黒褐色土や側壁の崩落とみられる褐色土がほぼレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。

［出 土 遺 物］　覆土中から比較的多く出土している。かわらけ４点（１～４）、磁器碗３点（５・６・９）、陶器埦２点（７・８）、陶器徳利１点（10）、陶器鉢２点（11・12）、板状鉄製品１点（14）、寛永通宝１点（15）、流れ込みと考えられる石鏃未製品１点（16）を図示した。

［時　　期］　出土遺物から近世の時期が考えられる。





SE1

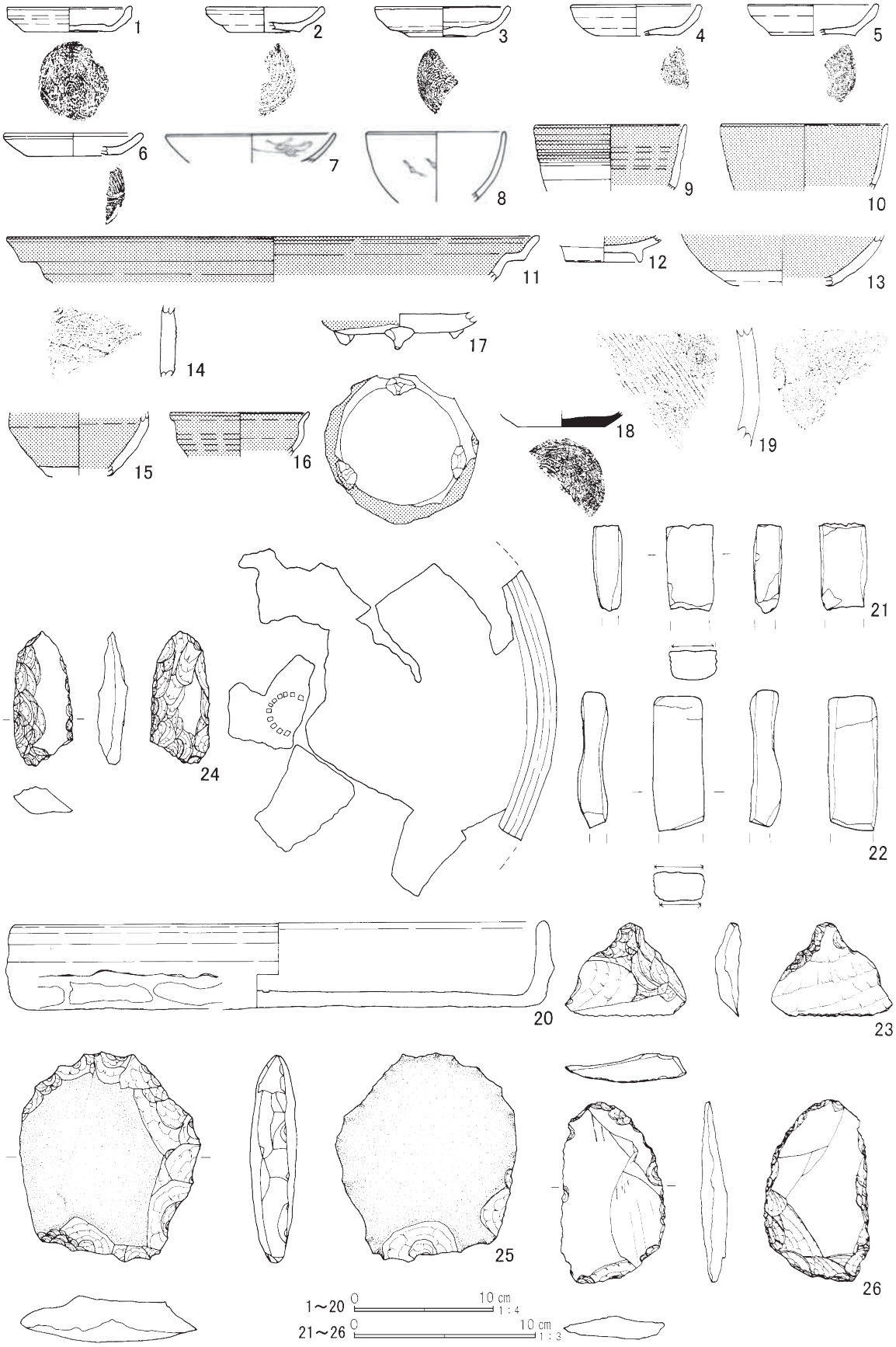
1　暗灰黄色土　ソフトロームブロック及び粒、微粒子若干。灰白色粘土ブロック若干。炭化物粒わずかに含む。
2　灰白色土　粘性強。ブロック層、酸化し明黄褐色呈す。
3　灰色土　ソフトローム微粒子わずかに含む。
4　ソフトローム土　灰色土ブロックわずかに含む。
5　褐灰色土　ソフトローム微粒子少量含む。
6　灰黄褐色土　ソフトローム粒多量に混入。
7　暗灰黄色土　しまり強。炭化物粒ごくわずか含む。
8　暗灰黄色土　灰白色粘土ブロック粒若干含む。
9　黒褐色土　ソフトローム粒わずかに含む。
10　黄褐色土　しまり強。灰白色粘土ブロック及び小ブロック非常に多く含む。マンガン粒若干含む、遺物包含。
11　褐灰色土　ソフトローム微粒子少量含む。
12　黒褐色土　円礫、角礫など礫が多量に入る礫を中心とした層。ソフトローム粒若干混入、灰白色粘土ブロック若干含む。
13　暗灰黄色土　しまり強。灰白色粘土ブロック若干含む。
14　黒褐色土　ソフトローム粒わずかに含む。
15　灰白色土　粘性強。ブロック層、酸化し明黄褐色呈す。
16　黒褐色土　ソフトローム微粒子わずかに含む。
17　灰色土　粘性有り。
18　灰白色土　粘性強。ブロック層、酸化し明黄褐色呈す。
19　黒褐色土　しまり強。ソフトローム微粒子少量含む。
20　にぶい黄褐色土　ソフトロームブロック及び黒褐色土ブロック混合層。
21　暗灰黄色土　ソフトローム粒少量含む。
22　灰黄褐色土　ソフトロームブロックわずか、黒褐色土ブロックわずかに含む。
23　黒褐色土　しまり強。ソフトローム微粒子わずか。礫含む。
24　にぶい黄褐色土　20層にほぼ同じ。含有率が逆転し黒褐色土の方が多く含む。
25　にぶい黄褐色土　しまりなし。石器と思われる石含む。
26　暗灰黄色土　ソフトローム微粒子非常に多く含む。
27　暗灰黄色土　ソフトローム粒が層状にサンドイッチ状に入る。
28　黒褐色土　しまり強。酸化した灰白色粘土わずかに含む。
29　にぶい黄色土
30　黒褐色土　ソフトローム微粒子及び粒多量に含む。
31　黄灰色土　しまり強。
32　黒色土　しまり強。にぶい黄褐色土ブロックわずかに含む。
33　黒褐色土　ソフトローム多量に混入。
34　灰黄褐色土　粘性有り。ソフトローム粒若干含む。
35　灰白色粘土
36　28層にほぼ同じ。
37　黒褐色土　ソフトロームブロック及び粒少量含む。
38　黒色土　しまり強。にぶい黄褐色土ブロックわずかに含む。
39　にぶい黄褐色土　ソフトローム粒ごくわずか含む。
40　黒色土　しまり普通。
41　灰黄褐色土　灰黄褐色土ブロック少量含む。
42　黒褐色土　ソフトローム多量に混入。
43　明黄褐色土　しまり強。ソフトローム。ハードローム化している。
44　明黄褐色土　ソフトローム。黒褐色土ブロック少量、灰黄褐色土ブロック多量に含む。
45　にぶい黄橙色土　しまり強。マンガン粒若干、灰黄褐色土ブロック少量含む。
46　にぶい黄褐色土　45層土ブロック少量、若干砂質。
47　褐灰色土　にぶい黄褐色土がサンドイッチ状に入る。
48　にぶい黄褐色土　褐灰色土帯状に入る。にぶい黄褐色土微粒子非常に多く含む。
49　灰黄褐色土　しまり強。マンガン粒多量に含む。
50　にぶい黄褐色土　しまり弱。礫含む。

SE2

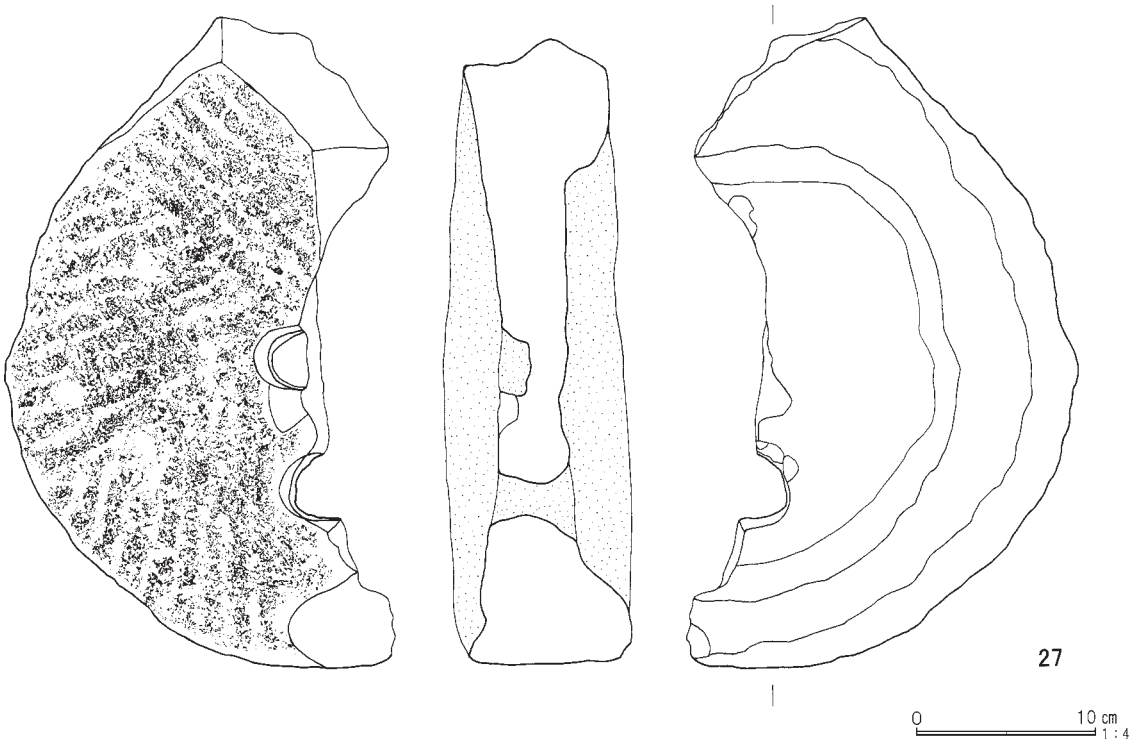
1　黒褐色土　粘性なし。しまり普通。炭化物及び焼土含む。ソフトローム粒含む。
2　褐色土　粘性有り。しまり普通。ソフトローム粒及びハードロームブロック微量含む。
3　黒褐色土　粘性なし。しまり弱。焼土粒を均一に多く含む。
4　暗褐色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒多い。
5　褐色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒含む。
6　褐色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒含む。
7　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロックの層。
8　褐色土　粘性有り。しまり弱。ハードロームブロック微量混じる。
9　明褐色土　粘性なし。しまり弱。酸化したような土がブロック状に混じる。
10　灰黄褐色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒含む。
11　黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ブロック状の土が堆積。
12　褐灰色土　粘性なし。しまり弱。ソフトローム粒含む。
13　明黄褐色土　粘性有り。しまり弱。ブロック状の土が多い。
14　褐灰色土　粘性なし。しまり弱。水量の影響で詳細不明だが、13及び14層と同様と思われる。
15　明黄褐色土　粘性有り。しまり弱。水量の影響で詳細不明だが、13及び14層と同様と思われる。

0　2m　1:60

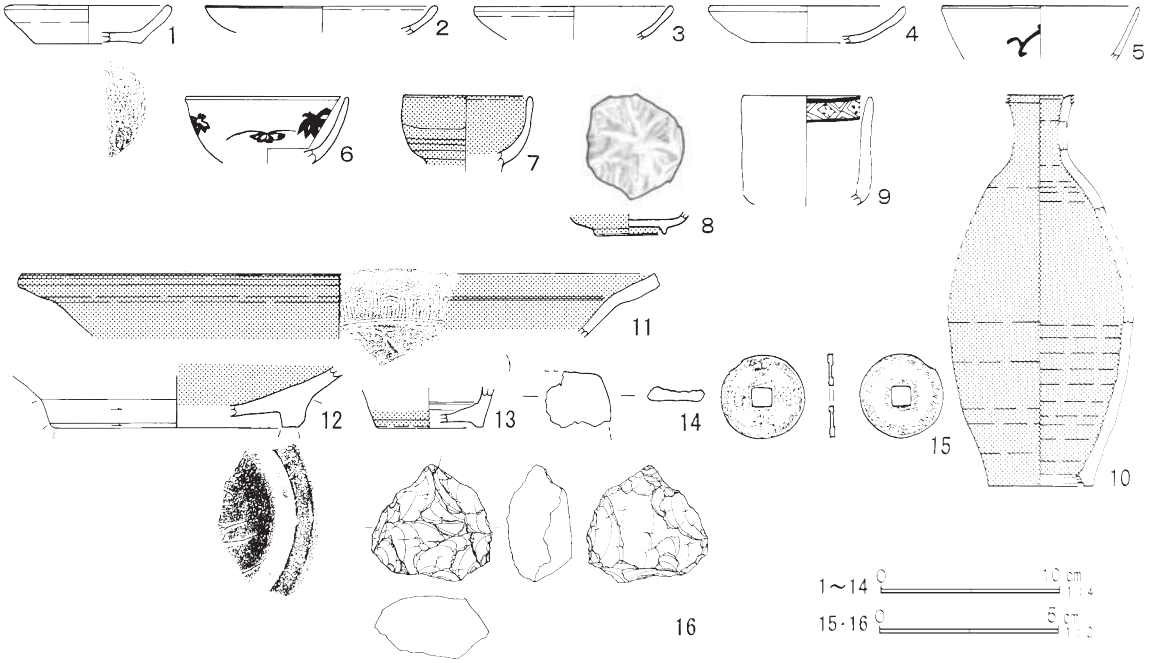
第74図　第1・2号井戸跡



第75図　第１号井戸跡出土遺物(1)



第76図　第１号井戸跡出土遺物(2)



第77図　第２号井戸跡出土遺物

第26表　第１号井戸跡出土遺物観察表（第75～76図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	かわらけ	(9.0)	(1.8)	(6.4)	ABDEIJKN	橙色	B	口～底部70%	底部外面回転糸切り離し。
2	かわらけ	(8.2)	(1.8)	(5.2)	ABDEIJKN	橙色	B	口～底部50%	底部外面回転糸切り離し。
3	かわらけ	(9.5)	(2.2)	(4.8)	ABDEIJKN	橙色	B	口～底部50%	底部外面回転糸切り離し。
4	かわらけ	(9.0)	2.2	(5.8)	ABDEIJK	橙色	B	口～底部20%	底部外面回転糸切り離し。
5	かわらけ	(9.0)	2.2	(6.0)	ABDEIJKN	橙色	B	口～底部30%	底部外面回転糸切り離し。
6	かわらけ	(9.7)	(1.6)	(6.6)	ABDEJK	にぶい橙色	B	口～底部25%	底部外面回転糸切り離し。
7	磁器染付皿	(11.8)	(1.9)	—	—	—	—	口縁部25%	肥前系。
8	磁器染付碗	(9.8)	(5.0)	—	—	—	—	口～体部片	肥前系。
9	陶器埦	(10.8)	(4.8)	(9.0)	—	灰白色、褐色	A	口～体部25%	灰釉、鉄釉、腰錆茶埦、瀬戸・美濃。
10	陶器埦	(11.9)	(4.7)	—	—	淡黄色	A	口～体部25%	灰釉。
11	陶器鉢	(38.1)	(3.2)	—	—	暗オリーブ褐色	A	口縁部片	鉄釉、瀬戸・美濃。
12	陶器高台埦	—	(1.9)	(5.3)	—	淡黄色	A	高台部100%	灰釉。
13	陶器天目茶埦	—	(3.6)	(7.0)	—	黒褐色	A	体～底部片	内外面鉄釉。
14	陶器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	A	胴部片	常滑？
15	陶器天目茶埦	—	(4.5)	(4.5)	—	黒褐色	A	体～底部片	内外面鉄釉。
16	陶磁天目茶碗	(9.9)	(3.2)	—	—	にぶい黄褐色	A	口～胴部片	内外面鉄釉。
17	陶器三足盤	—	(2.5)	8.5	—	灰白色	A	底部100%	灰釉、脚部指頭圧痕。
18	須恵器坏	—	(1.1)	(6.3)	ABF	にぶい黄橙色	B	底部60%	底部外面周辺回転ヘラケズリ、南比企産。
19	須恵器甕	—	—	—	ABE	灰色	A	胴部片	外面平行タタキ。
20	焙烙	(37.6)	6.3	(31.2)	ABN	褐灰色	B	底部片	
21	砥石	長：(4.6)　幅：2.5　厚：1.6　重：28.7g							上面磨り痕。
22	砥石	長：(7.2)　幅：2.7　厚：1.6　重：48.5g							上下面磨り痕。
23	横型石匙	長：6.1　幅：5.4　厚：1.5　重：35.5g							
24	石篦	長：7.2　幅：3.1　厚：1.6　重：35.7g							
25	礫器	長：11.2　幅：9.7　厚：2.5　重：314.7g							
26	石篦	長：9.7　幅：5.6　厚：1.4　重：74.0g							
27	石臼	長：(36.0)　幅：(17.5)　厚：10.2							

第27表　第２号井戸跡出土遺物観察表（第77図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	かわらけ	(8.8)	2.1	(5.8)	ABI	橙色	B	口～底20%	底部外面回転糸切り離し。
2	かわらけ	(12.8)	(1.5)	—	ABI	外：にぶい黄橙色 内：黒色	C	口縁部20%	内面黒色処理。
3	かわらけ	(11.0)	(1.8)	—	ABEIK	にぶい黄橙色	B	口縁部20%	
4	かわらけ	(11.0)	(2.0)	(6.2)	ABEIK	にぶい橙色	C	口～底部片	底部外面回転糸切り離し。
5	磁器染付碗	(11.0)	(3.0)	—	—	—	—	口縁部片	肥前系。
6	磁器染付碗	(9.0)	(3.8)	—	—	—	—	口～体25%	肥前系。
7	陶器埦	7.2	(4.2)	—	—	黒褐色	A	口～体50%	内外面鉄釉。
8	陶器埦	—	(1.0)	(3.8)	—	器面（褐色） 染色(浅黄橙色)	A	高台部片	
9	磁器湯呑碗	(7.0)	(6.0)	—	—	—	—	口～体50%	肥前系。
10	陶器徳利	—	(21.8)	(5.6)	—	—	—	30%	内外面灰釉、瀬戸・美濃？
11	陶器鉢	(35.4)	(3.6)	—	—	オリーブ褐色	A	口縁部片	内面唐草文、半截多重六角文、内外面釉薬、肥前か？

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
12	陶器鉢	—	(3.4)	(13.6)	—	外：明赤褐色 内：オリーブ褐色、淡黄色	A	高台部25%	唐津。
13	陶器徳利	—	(2.2)	(5.8)	—	褐灰色	A	高台部片	外面灰釉。
14	板状鉄製品	長：(2.3)　幅：(2.7)　厚：(0.6)							
15	銭貨	長：2.3　幅：2.3　厚：0.1～0.2							寛永通宝。
16	石鏃未製品	長：3.27　幅：3.38　厚：1.84　重：19.60　石材：チャート							やや厚みのある小型剝片の縁辺に２次加工を施す。

8　畠　跡

第１号畠跡（第78図）

［位　置］　18～21―29、19・20―30、21・22―31グリッドに位置する。

［重　複］　北東で第14号溝跡と重複し、本遺構が古い。その他土坑と重複するが、本遺構が新しい。

［平面形・規模］　検出された範囲は、北東―南西24.90m、北西―南東6.30mである。畝の走行方向はＮ―61～68°―Ｅで、ほぼ調査区内の地形の等高線に並行している。畝の幅は広いところで0.39m、狭いところで0.11m、畝間の幅は0.05～0.31mである。深さは0.03～0.17mである。中央から北東寄りの部分で寸断するが、この部分で確認面が北西から南東へ溝状の落ち込みとなり、畝の底面レベルより低くなっている。これにより、消失したと考えられるが、走行方向からは本来連続していたものと考えられる。東寄りでは遺存状況が悪く断続的な検出である。

［覆　土］　灰オリーブ褐色土や黒褐色土が堆積する。

［出土遺物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。

［時　期］　近世が想定される第14号溝跡に切られるものの、時期を特定できる出土遺物はなく、詳細は不明である。

9　性格不明遺構

第１号性格不明遺構（第79図、第28表）

［位　置］　12・13―19・20グリッドに位置する。

［重　複］　なし。

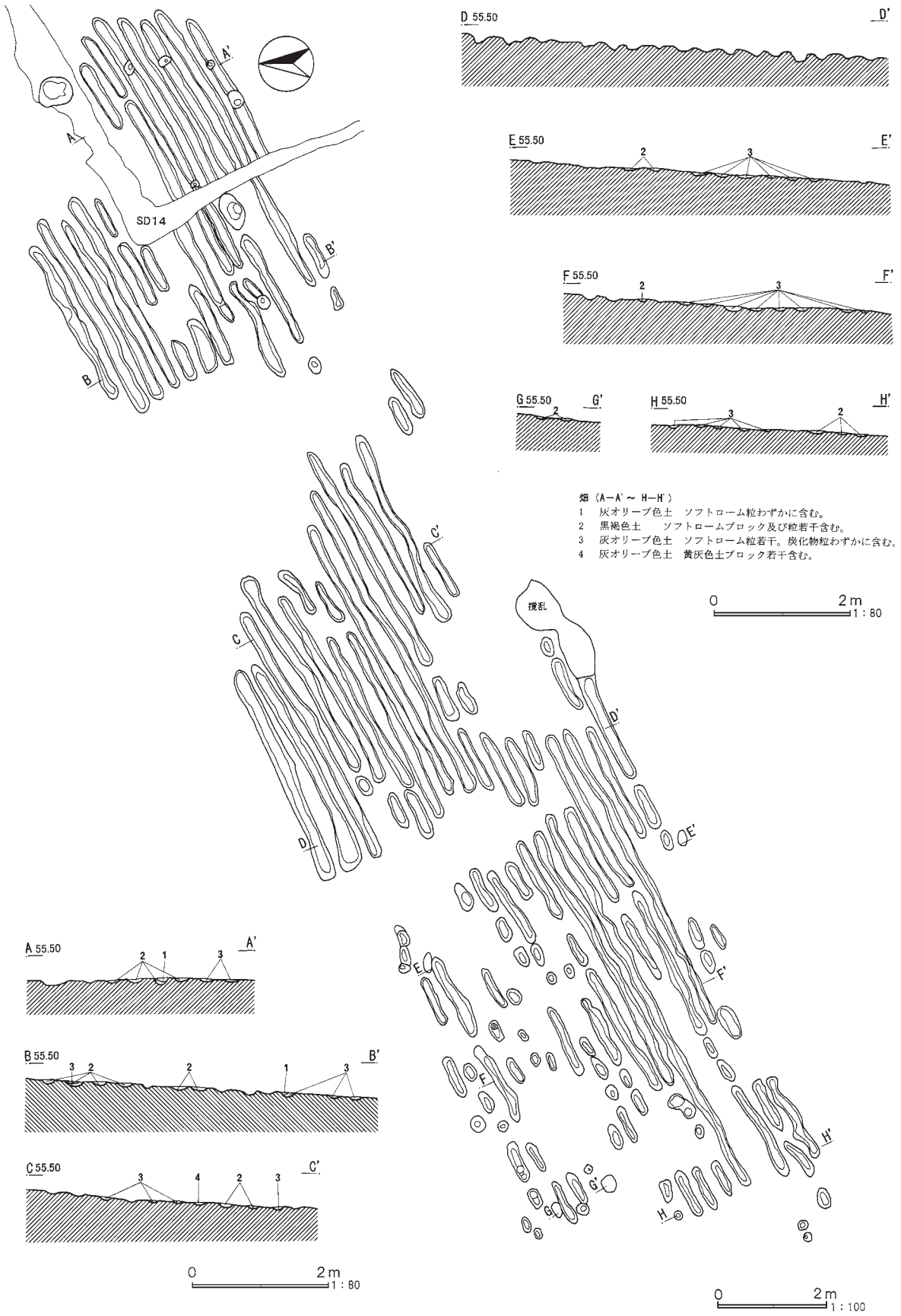
［平面形・規模］　長軸43.0m、短軸36.0mである。確認面からの深さは、最も深いところで9.5mである。

［底　面］　やや凹凸があるが、ほぼ平坦な面となっている。壁面は約45°の角度で立ち上がっている。

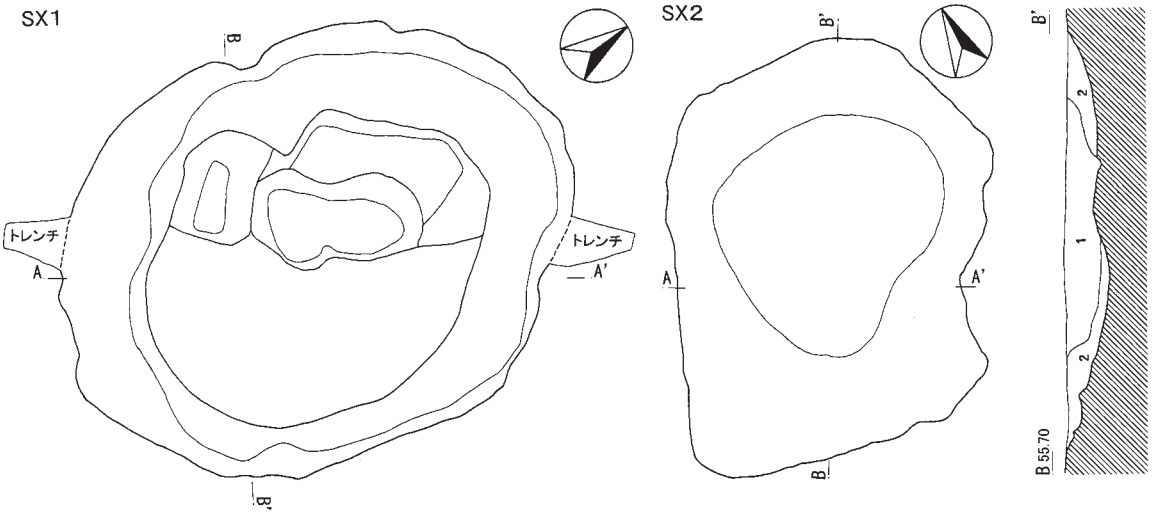
［覆　土］　黄褐色土や黒褐色土、灰白色土が乱雑に堆積し、人工堆積と考えられる。

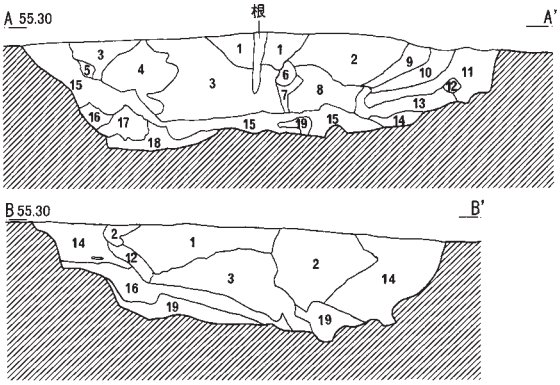
［出土遺物］　流れ込みと見られる縄文土器深鉢（１―１）と打製石斧（１―２）が出土している。

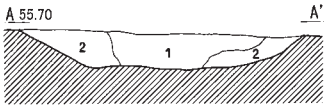
［時　期］　本遺構に直接かかわる出土遺物がなく不明である。


SD14
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
撹乱
D 55.50
E 55.50
F 55.50
G 55.50
H 55.50
A 55.50
B 55.50
C 55.50
畑（A—A' ～ H—H'）
1　灰オリーブ色土　ソフトローム粒わずかに含む。
2　黒褐色土　ソフトロームブロック及び粒若干含む。
3　灰オリーブ色土　ソフトローム粒若干。炭化物粒わずかに含む。
4　灰オリーブ色土　黄灰色土ブロック若干含む。
0　2m
1：80
1：100

第78図　第1号畠跡

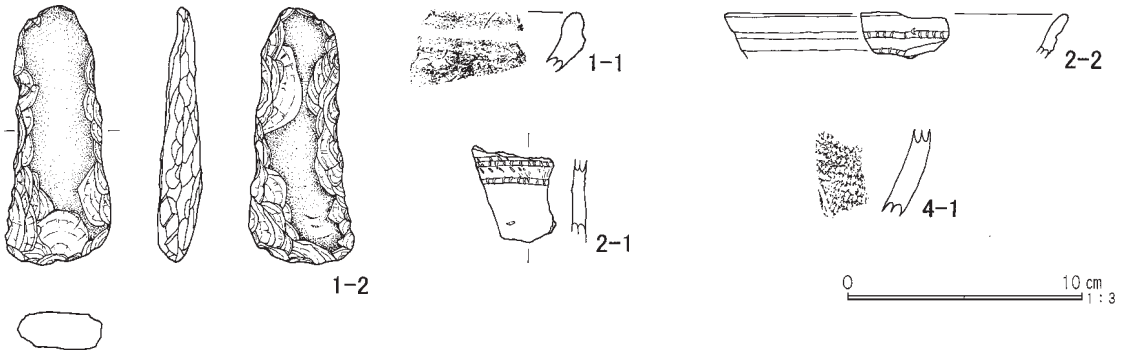






SX1
1　明黄褐色土　粘性有り。しまり普通。黒色粒少量含む。
2　黄橙色土　しまりなし。くさった根片少量含む。部分的黒褐色土混入。
3　灰白色土　しまり普通。黒色マンガン多量含む。
4　灰白色土　粘性強。しまり普通。黒色マンガン混入、地山流入層。
5　灰白色土　粘性強。しまり普通。3層＋16層混在層。
6　黄褐色土　粘性強。しまり普通。黒色粒少量含み、白色粒少量含む。
7　黄褐色土　粘性強。しまりなし。黒色粒少量含み、白色粒少量含む。
8　黄褐色土　粘性強。しまり普通。黒色粒少量含み、白色粒少量含む。
9　黄橙色土　しまりなし。全体的に黒褐色土散在、ソフトローム粒少量、黒褐色粒少量。
10　黒褐色土　しまりなし。全体的に黄褐色土散在、ハードロームブロック少量。ソフトローム粒少量。白色粒少量。
11　黄橙色土　しまり普通。全体的に黒褐色土散在、ハードロームブロック少量。
12　灰白色土　しまり強。地山ブロック、黒色マンガン混入。
13　黒褐色土　粘性有り。しまり普通。全体的に黄橙色土散在、ハードロームブロック少量。
14　黄橙色土　粘性強。しまり普通。ハードロームブロック多量含む。
15　黒褐色土　粘性強。しまり普通。ハードロームブロック多量含む。
16　灰白色土　しまり普通。黒色マンガン多量含む。地山ブロック。
17　黒褐色土　粘性強。しまり普通。ハードロームブロック及び粒含む。
18　明黄褐色土　粘性強。しまり普通。ハードロームブロック層。
19　灰白色土　しまり普通。地山ブロック、黒色マンガン混入。
SX2
1　明黄褐色土　しまり強。白色粒少量含む。黒色マンガン散在。
2　黒褐色土　しまり弱。にぶい黄褐色及び部分的に含み、白色粒少量含む。

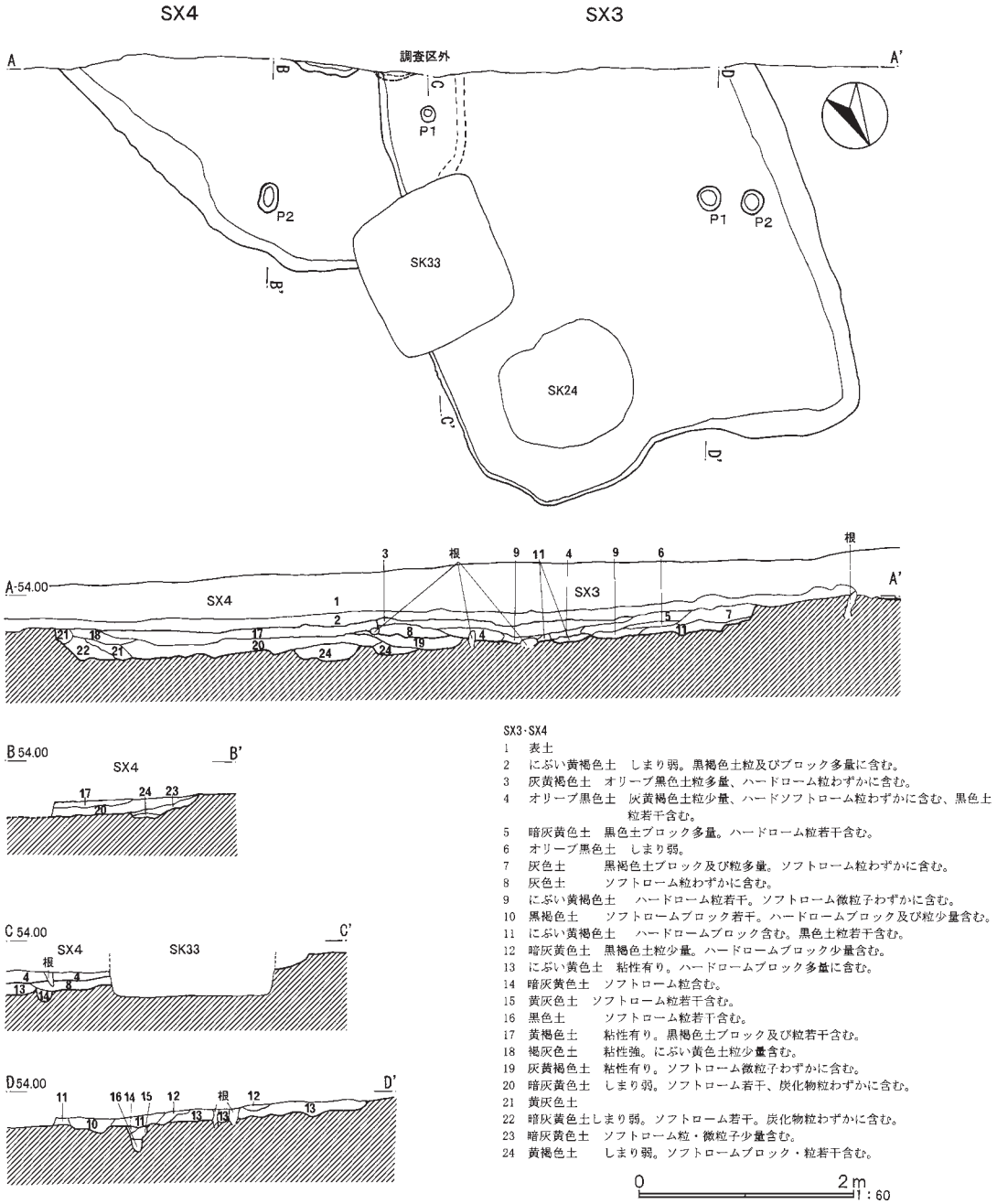
0　2m　1:60



第79図　第1・2号性格不明遺構・出土遺物

第28表　性格不明遺構出土遺物観察表（第79図）

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1-1	SX 1	縄文土器浅鉢	—	—	—	ABDEJ	淡橙色	B	口縁部片	沈線文。
1-2	SX 1	打製石斧	長：10.4　幅：3.2　厚：0.8～1.6　重：92.7g							
2-1	SX 2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	淡橙色	B	胴部片	縄文、平行沈線内爪形文。
2-2	SX 2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDI	にぶい橙色	B	口縁部片	平行沈線内爪形文。
4-1	SX 4	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	橙色	B	胴部片	縄文、平行沈線。



第80図 第３・４号性格不明遺構

第２号性格不明遺構（第79図、第28表）

［位　　置］ 11―21・22グリッドに位置する。

［重　　複］ なし。

［平面形・規模］ 長軸35.0m、短軸24.0mである。確認面からの深さは、最も深いところで3.5mである。

［底　　面］ やや凹凸があるが、ほぼ平坦な面となっている。壁面は約45°の角度で立ち上がっている。

［覆　　土］ 黄褐色土や灰黄色土、暗灰黄色土がほぼレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。

［出 土 遺 物］　流れ込みと見られる縄文土器深鉢（２―１・２―２）が出土している。

［時　　期］　本遺構に直接かかわる出土遺物がなく不明である。

第３号性格不明遺構（第80図）

［位　　置］　10・11―31グリッドに位置する。

［重　　複］　第４号性格不明遺構、第24・33号土坑と重複し、第４号性格不明遺構より新しく、第24・33号土坑より古い。

［平面形・規模］　南側が調査区域外となるため全容は不明である。確認できた部分で長軸3.96m、短軸3.70mで、やや不整形な長方形と想定される。確認面からの深さは、最も深いところで0.34mである。

［底　　面］　凹凸があり、やや舟底状である。北から南へ向かって傾斜して下がり、0.27mほどの高低差がある。壁面は緩い傾斜で立ち上がっている。

［覆　　土］　黄褐色土や暗灰黄色土、にぶい黄褐色土がほぼレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。

［ピ　ッ　ト］　西壁際に２基（Ｐ１・２）検出されている。それぞれの規模は、Ｐ１が長軸0.25m、短軸0.20mの楕円形、Ｐ２が長軸0.23m、短軸0.20mの楕円形で、底面からの深さはそれぞれ0.25m前後である。

［出 土 遺 物］　本遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。。

［時　　期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、覆土の様子から縄文時代に属すると考えられる。

第４号性格不明遺構（第80図、第28表）

［位　　置］　10・11―31グリッドに位置する。

［重　　複］　第３号性格不明遺構、第33号土坑と重複し、本遺構が最も古い。

［平面形・規模］　南側が調査区域外となるため全容は不明である。確認できた部分で南北軸2.69m、短軸2.54mである。確認面からの深さは、最も深いところで0.14mである。

［底　　面］　やや凹凸があるが、ほぼ平坦な面となっている。壁面は約45°の角度で立ち上がっている。

［覆　　土］　黄褐色土や灰黄色土、暗灰黄色土がほぼレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。

［ピ　ッ　ト］　西壁際に１基、東壁際に１基検出されている。規模は、Ｐ１が長軸0.15m、短軸0.13mの楕円形で、底面からの深さ0.10m、Ｐ２が長軸0.28m、短軸0.18mの楕円形で、底面からの深さ0.11mである。また、南の調査区壁際に落ち込みが２箇所検出されているが、大半が調査区域外になると考えられ、全容は不明である。底面からの深さは、西側のもので0.08m、東側のもので0.14mである。

［出 土 遺 物］　縄文時代前期前葉と考えられる縄文土器深鉢が１点（１）出土している。

［時　　期］　出土遺物や覆土の様子から縄文時代に属すると考えられる。

10　谷状地形（第52・53・81・82図、第29表）

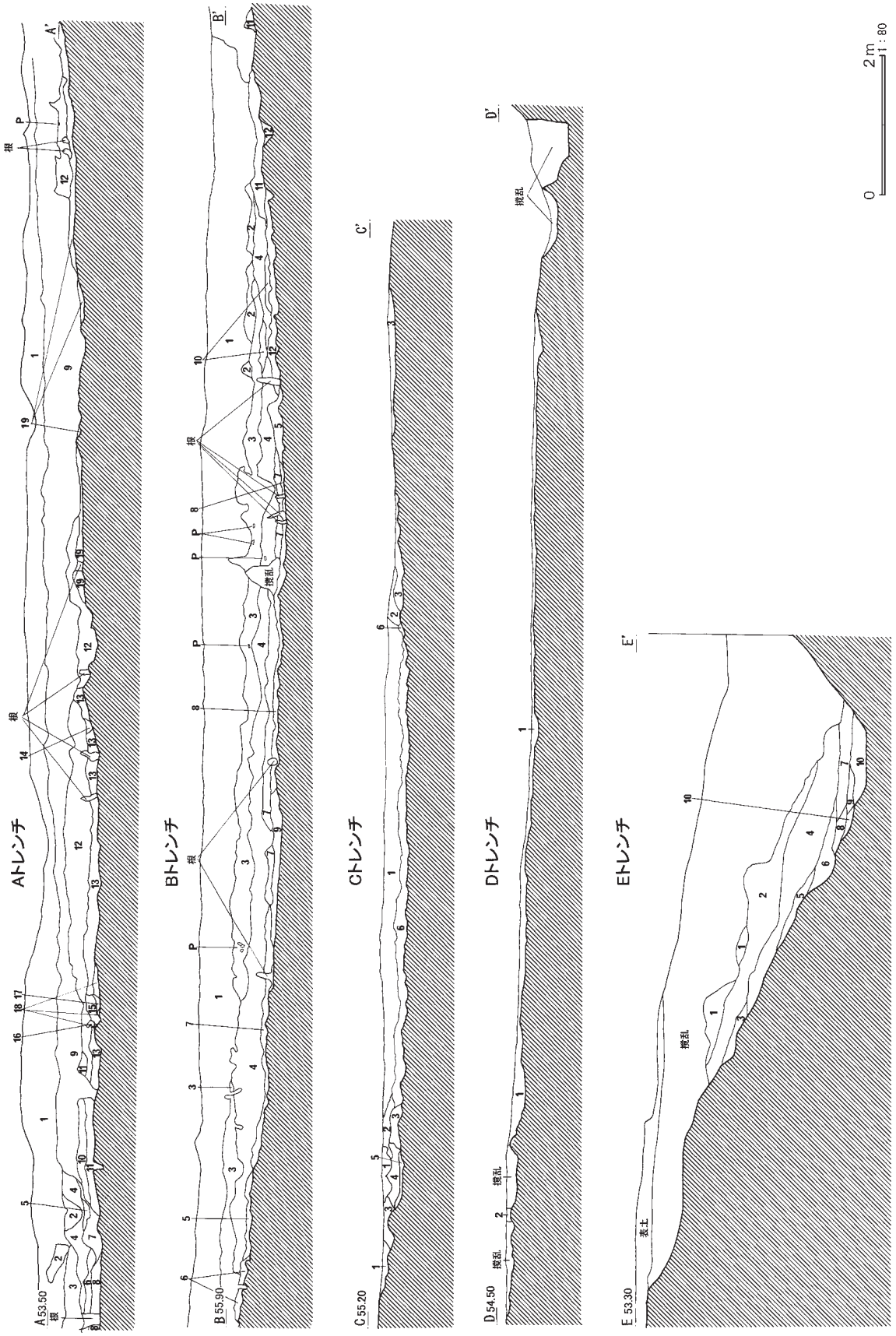
［概　　要］　調査区の東寄りに確認された谷状の落ち込みである。北北西から南南東に傾斜する地形に対し、直行して走行している。周辺部がソフトロームを基本とした基盤であるのに対して、溝状に落ち込んだ地形に黒褐色土が堆積している。この土層中からは、縄文早期から後期にかけての土器片が出土している。上面ではこの黒褐色土を掘り込んで平安時代（10世紀前半）の竪穴住居跡が造られていて、少なくとも同時期以前には埋没していたといえる。

［位　　置］　4～11―20～33グリッドに位置する。

［平面形・規模］　北―南走行で、中央でやや西に角度を変える。幅は10.0～16.8m、断面形は浅いU字状で確認面からの深さは最も深いところで0.33mである。底面のレベルは地形の傾斜に沿って下がり、最も高い北端と最も低い南端では約2.3mの高低差がある。

［覆　　土］　粘性の黒褐色土や黒色土が堆積している。地形が高くなる北側では、層下方では粘性のある黄褐色土や灰黄褐色土が堆積し、基本土層のⅣ層に相当すると考えられる。

［出 土 遺 物］　縄文早期から前期にかけての土器片、石器が出土している。縄文土器片９点（１～９）、石器１点（10）を図示した。１・２は早期撚糸文系で、１は口縁部が肥厚外反し、口唇部と胴部に撚糸文を施す。また、口唇部下には指頭による連続圧痕を加えている。２は縄文が施されている。３は早期条痕文系、４は前期黒浜式、５～７は前期諸磯ａ式、８は前期諸磯ｃ式、９は詳細は不明だが、胴部から底部にかけての破片である。10はスタンプ形石器である。



第81図　谷状地形土層断面

谷状地形Ａトレンチ

1　黒褐色土　しまり弱。耕作土。
2　黒褐色土　灰白粘土塊を多量に含む。耕作土。
3　黒褐色土　しまり弱。耕作土粒のたぐいではない。
4　暗灰黄色土　粘性強。オリーブ黒色土粒多量、白色粘土粒若干含む。
5　黄灰色土　粘性強。にぶい黄色粘質土粒わずかに含む。
6　黄灰色土　暗灰黄色粘質土ブロック及び粒多量に含む。
7　暗灰黄色土　粘性強。にぶい黄色粘質土粒多量に含む、石化した灰白色粘土ブロック多量に含む。
8　オリーブ黄色土　粘性強。石化した灰白色粘質土粒多量に含む。
9　暗灰黄色土　しまり弱。西側には明黄褐色土粒及びブロック、黒色粘質土ブロックが多量に混入し、様相を呈している。
10　灰色上　粘性有り。しまり強。黒色粘質土粒わずかに含む。
11　灰色土　粘性強黒色粘質土ブロック粒多量に含む。
12　黒色土　粘性強。にぶい黄色土ブロック、明黄褐色粘質土ブロック若干含む。
13　浅黄色土　粘性有り。黒色粘質土粒若干、にぶい黄色土粒少量、白色砂質土ブロック若干含む。
14　にぶい黄色土　黒色粘質土ブロック少量含む。
15　暗黄灰色土　しまり弱。黒色粘質土粒及び浅黄色土粒若干含む。
16　にぶい黄色土　ブロック層。
17　暗灰黄色土　粘性強。しまり強。酸化鉄若干含む。
18　暗灰黄色土　粘性強。しまり弱。黒色粘質土粒わずかに含む。
19　暗灰黄土　粘性強。しまり強。黒色粘質土粒多量、明黄褐色土粒少量含む。

谷状地形Ｂトレンチ

1　黒褐色土　しまり弱。耕作土。明黄褐色土微粒子少量含む。
2　黒褐色土　粘性弱。明黄褐色土粒少量含む。
3　黒色土　しまり強。明黄褐色土粒少量。縄文土器片を含む遺物包含層。
4　黒色土　粘性強。にぶい黄色粒及びブロック若干含む。SP-A-A'の第12層。
5　黒色土　粘性強。しまり強。にぶい黄色ブロック及び粒多量に含む。
6　黒褐色土　粘性強。にぶい黄色ブロック及び粒多量、黒色粘質土ブロック若干含む。
7　黒褐色土　粘性強。しまり強。にぶい黄色土ブロック若干含む。
8　にぶい黄褐色土　しまり強。にぶい黄色土ブロック及び粒少量、焼土粒わずかに含む。
9　灰黄褐色土　明黄褐色粘土粒少量、焼土粒わずかに含む。
10　黄灰色土　粘性強。にぶい黄色粘土ブロックわずかに含む。
11　灰黄色　粘質土黒色土ブロック及びにぶい黄色粘質土ブロック非常に多く含む。
12　黒褐色土　粘性強。しまり強。にぶい黄色土ブロック若干含む。にぶい黄色粘質土ブロック及び粒少量含む。

谷状地形Ｃトレンチ

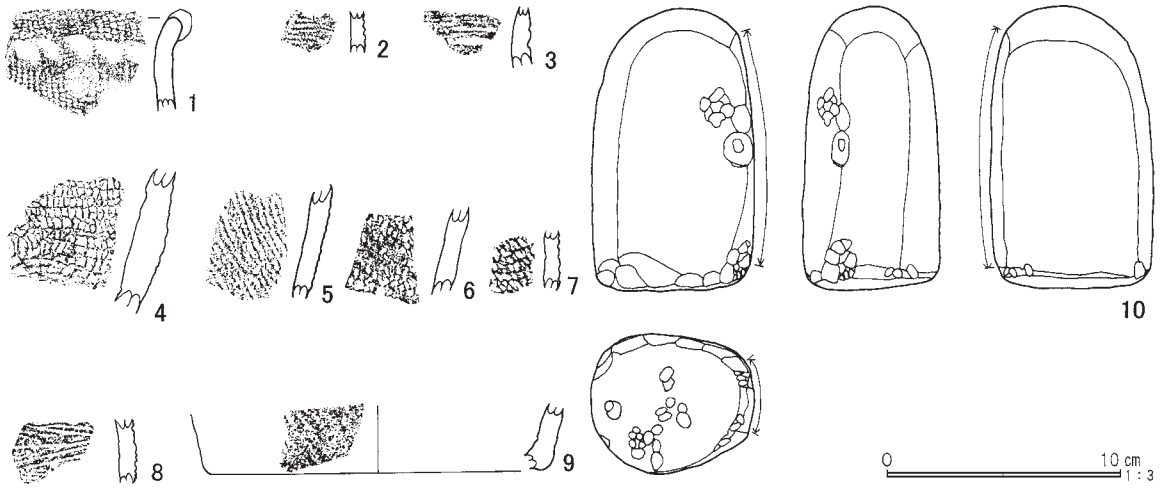
1　黒色土　粘性強。にぶい黄色土粒及びブロック若干含む＝SP-A-A'の第12層。
2　黒色土　粘性強。にぶい黄色土ブロック及び粒少量含む＝SP-B-B'の第5層。
3　黄褐色土　褐灰色土ブロック多量、黒色粘質土ブロック若干、にぶい黄色土ブロックわずかに含む。
4　浅黄色土　黒色粘質土若干混入。
5　浅黄色土　粘性強。しまり有り。
6　黒褐色土　粘性強。しまり強。にぶい黄色土ブロック及び粒少量含む。＝SP-B-B'の第7層。

谷状地形Ｄトレンチ

1　黒褐色土　粘性強。しまり強。にぶい黄色土ブロック及び粒少量含む＝SP-B-B'の第7層。
2　黄褐色土　にぶい黄色土粒少量含む。

南端谷状地形Ｅトレンチ

1　黒褐色土　黄褐色土ブロック及び粒若干含む。
2　黒色土　黄褐色土ブロック及び粒少量含む。
3　暗灰黄色土　黒色土ブロック少量、礫少量含む。
4　黒色土　黄褐色土ブロック若干、礫若干含む。
5　黄灰色土　粘性強。黒色土ブロック少量、礫多量に含む。
6　暗灰色土　粘性強。黒色土ブロック多量、礫大小多量に含む。
7　黒色土　粘性強。黒色土ブロック若干、砂礫非常に多く含む。
8　黄灰色土　砂礫を非常に多く含み土体をなす。
9'　黒褐色　砂礫P-1黒色粘土混じり。
10　灰色土　粘性強。しまり強。



第82図　谷状地形出土遺物

第29表　谷状地形出土遺物観察表　（第82図）

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	8・9-24G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGJK	黒褐色	B	口縁部片	井草Ⅰ式(早期)、撚糸文。
2	9-29G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	にぶい橙色	B	口縁部片	撚糸文（早期)。
3	9-30G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDG	橙色	B	口縁部片	条痕文（早期)。
4	8・9-20G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABG	橙色	B	胴部片	黒浜式（前期)。
5	8・9-22G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	にぶい橙色	B	口縁部片	諸磯ａ式（前期)。
6	—	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	淡橙色	B	胴部片	諸磯ａ式（前期)。
7	—	縄文土器深鉢	—	—	—	AB	にぶい橙色	B	注口部片	諸磯ａ式（前期)。
8	8・9-27G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDI	にぶい黄橙色	A	胴部片	諸磯ｃ式(前期)、沈線文。
9	8・9-23G	縄文土器深鉢	—	(2.8)	(14.0)	ABKN	橙色	B	胴部片	前期か？、縄文施文。
10	9-21G	スタンプ形石器	長：11.7　幅：6.7　厚：5.9　重：800.1ｇ							横端部磨り痕、下部敲打痕。

11　遺構外遺物（第83～89図、第30表）

調査区内の撹乱内、その他遺構に伴わない出土遺物、及び表採遺物（旧江南町遺跡宮下遺跡と押出遺跡で、現在は宮下遺跡に統合した遺跡からの表採遺物）を掲載した。時期は、縄文時代早期から近世に至るもので、長期にわたり当地が生活の場として利用されていたことが窺われる。

⑴　遺構外遺物

遺構外遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、近世陶器・磁器、鉄製品、石器、石製品などがある。弥生時代と中世の遺物は確認されなかった。以下、時代、時期及び種別ごとに順を追って記述する。

１～５・７～11は縄文時代早期の土器。１・２は押型文、３～５は撚糸文、７～９は条痕文、10～13は沈線施文の田戸下層式である。６・14～18は縄文時代前期の土器。６は沈線文の諸磯式、14・15は単節 RL 縄文の黒浜式、16・17は浮線文の諸磯ｂ式、18は集合条線の諸磯ｃ式である。19～28・31～36・42は縄文時代中期の土器。19～22は隆線・角押文の阿玉台式、23は横帯区画内爪形文の勝坂式、24は横位沈線・刺突文、25～27は沈線・刺突文・爪形文・突帯の勝坂式、28は連続刺突文、31・32は沈線文、33・35は充填縄文、34・42は単節 RL 縄文、36は口縁部突帯の加曽利Ｅ式である。29・30・37～41・43～47は縄文時代後期の土器。29・30は沈線文・レ点文の称名寺式、37は口縁部紐線文点刻の曽谷式、38は口縁部隆帯の高井東式、39は口唇部小突起刺突文の堀ノ内式、40は口唇部沈線の堀ノ内式、41は頸部小突起円形刺突文、43・47は口縁部紐線文点刻の安行式、44は口縁部円形刺突文の堀ノ内式、45は注口部片、46は横位沈線文・刺突文の高井東式である。

48～57は縄文時代の打製石斧。58・62は剝片石器。60は横型石匙。61は石篦。63は打製石器。64は削器（サイドスクレイパー）。71～85・90・91・93は小型剝片の表裏に調整剝離痕や２次加工痕をもつ石鏃未製品。86は礫皮をもつ小型剝片の縁辺部に２次加工を施す剝片素材。87は横長剝片の縁辺部に２次加工を部分的に施す剝片素材。88は小型剝片の縁辺部に２次加工を施す剝片素材。89は剝片の縁辺部に２次加工を施す剝片素材。92は凹基無茎、先端部及び方脚欠損の石鏃。103は凹基無茎、ほぼ完形の石鏃。104は凹基無茎、先端部欠損の石鏃。105は凹基無茎、ほぼ完形の石鏃。106は凹基無茎、先端部～片脚部欠損の石鏃。107は凹基無茎、先端～上部欠損の石鏃。108は凹基無茎、上部欠損の石鏃。94～96は小型剝片の表裏面に調整剝離痕や制離痕をもつ細部加工剝片。97・98・100は磨石。99は石棒。101は石錘。112は縦型石匙である。

113は９世紀前半の底部外面手持ちヘラケズリ調整の土師器坏。114は９世紀後半の底部外面回転糸切り離しの須恵器坏。115は９世紀前半の底部外面周辺回転ヘラケズリとヘラ記号「×」の南比企産の須恵器坏。116は須恵器長頸瓶の高台部片。

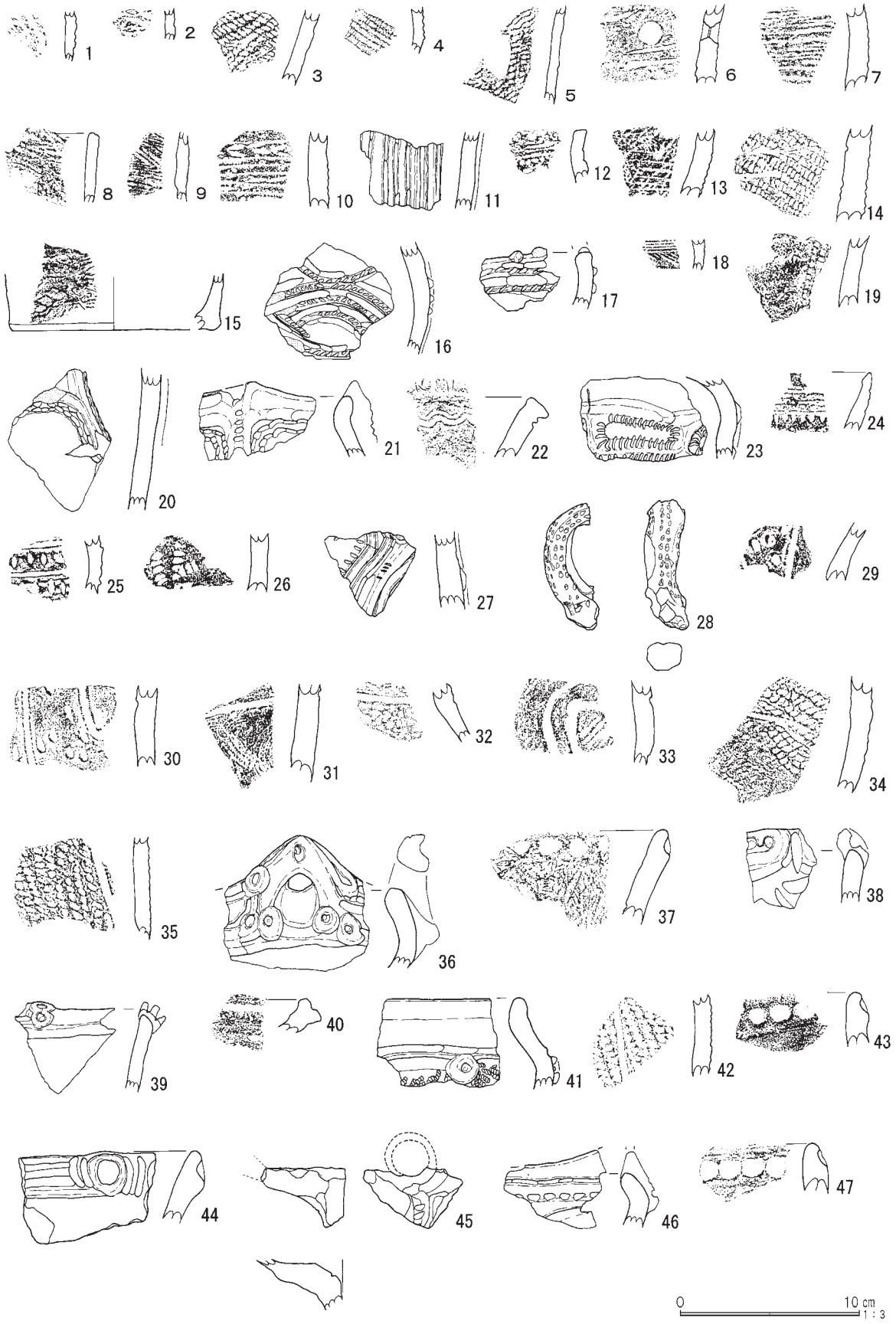
117・118は近世の青磁碗。

119は時期不明の鉄鎌。120・121は時期不明の板状の不明鉄製品。122～126は時期不明の各上下側面に磨痕をもつ砥石である。

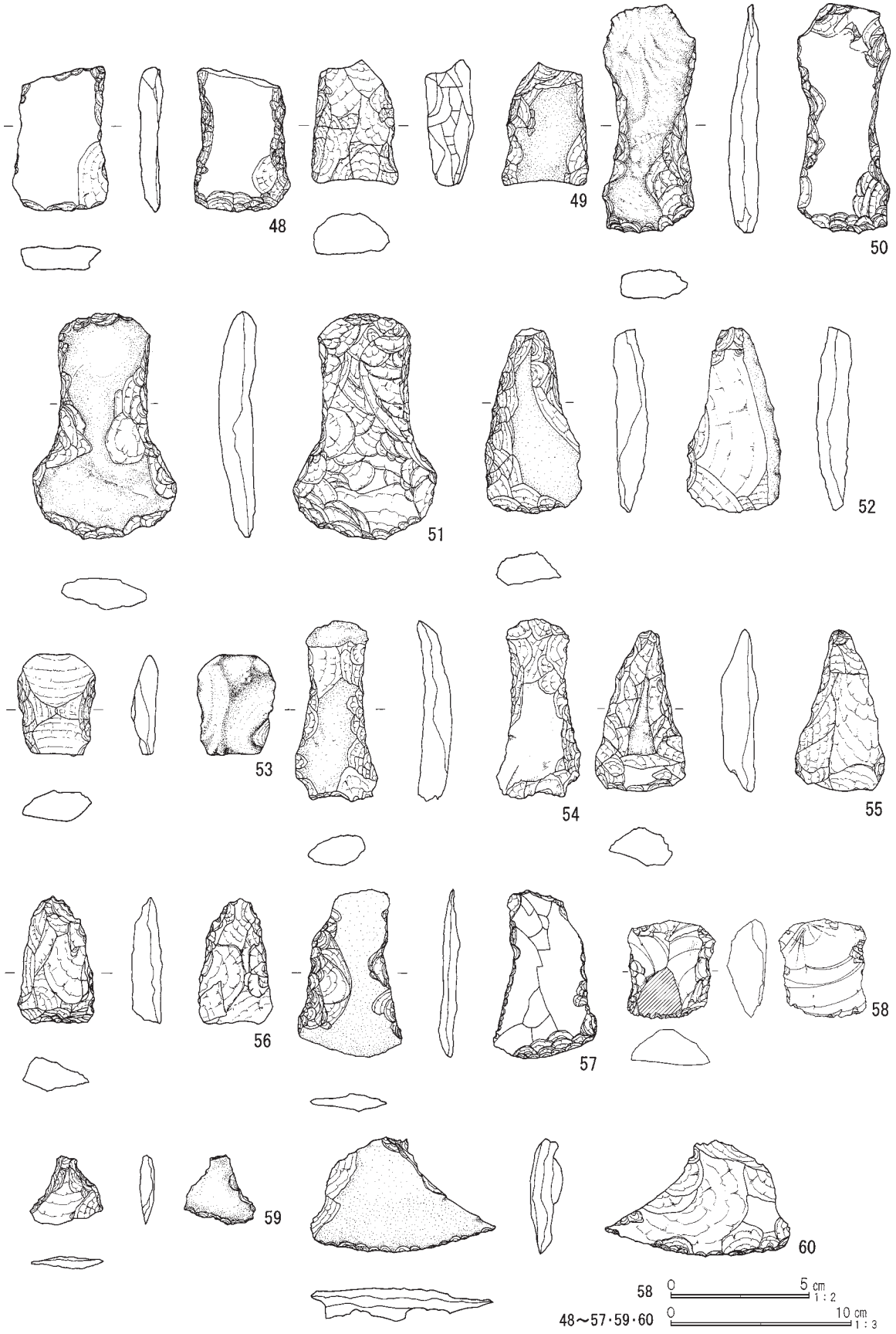
⑵　表採遺物

表採遺物は、縄文時代の石器を図示した。

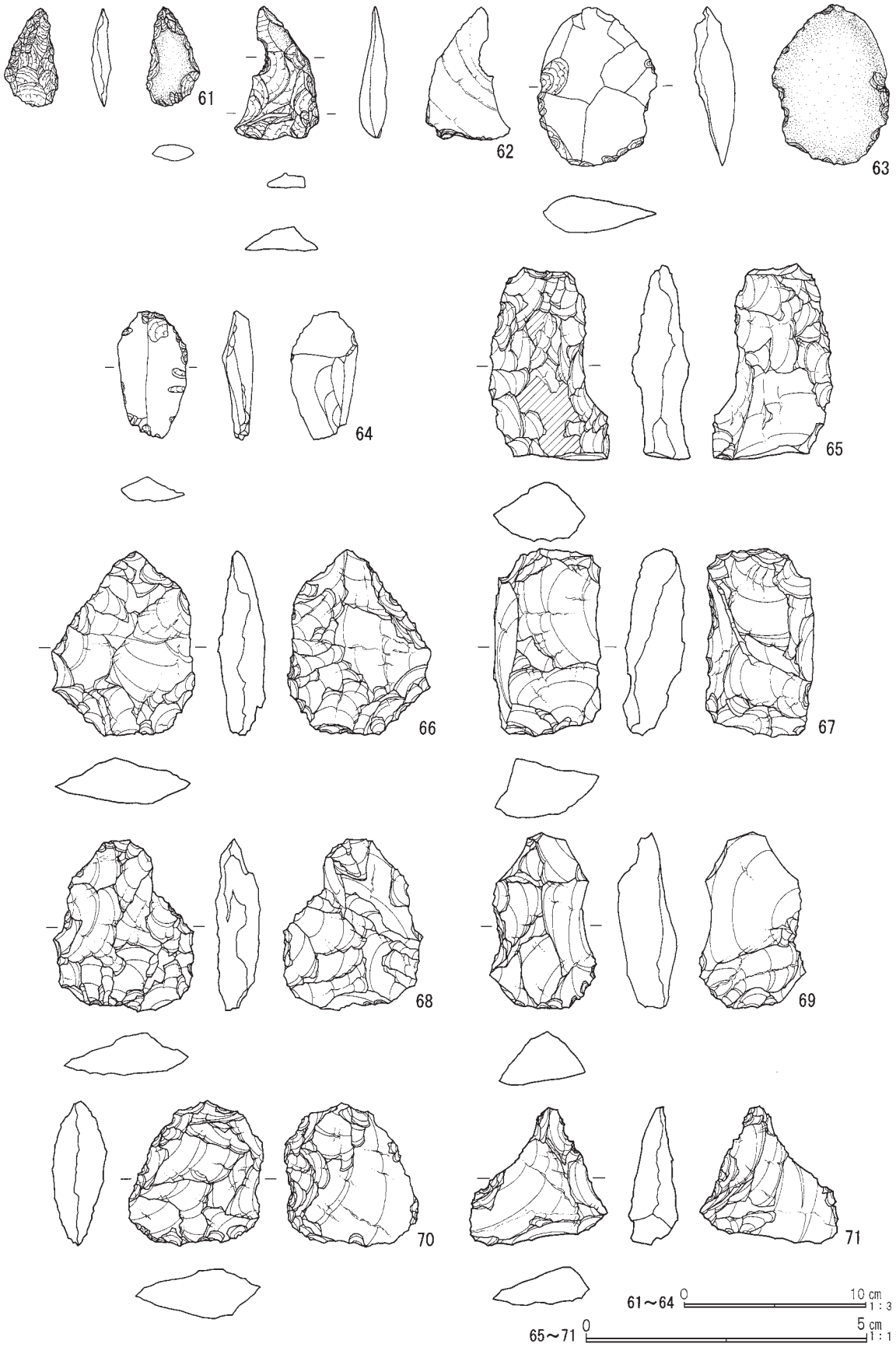
59は横型石匙。65・66・68～70は小型剝片の表裏に調整剝離痕や２次加工痕をもつ石鏃未製品。67は小型剝片の表裏に２次的な加工痕をもつ細部加工片。102・109は凹凸基無茎、先端部及び方脚欠損の石鏃。110は凹基無茎、ほぼ完形の石鏃。111は平基無茎、ほぼ完形の石鏃である。



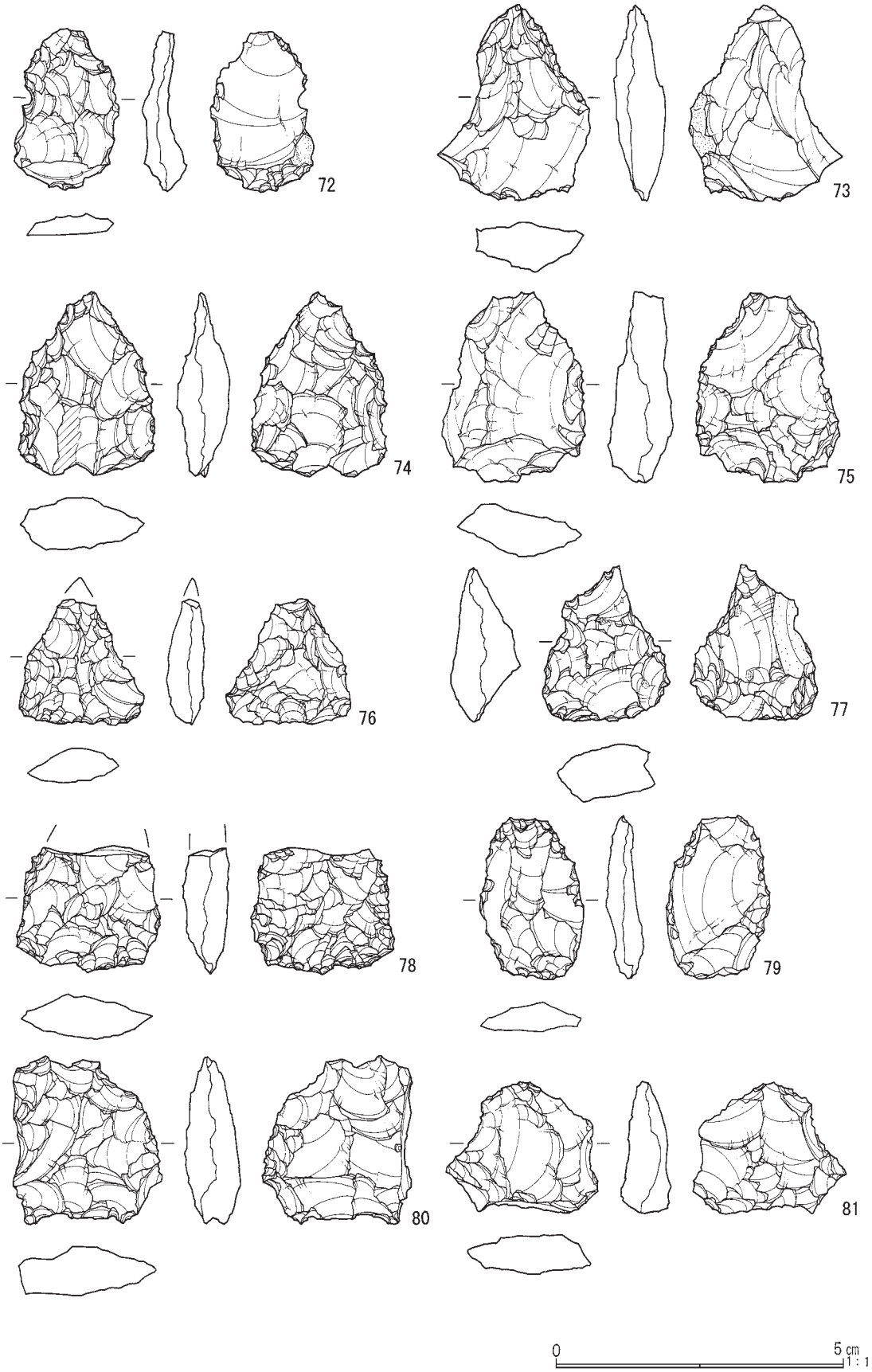
第 83図　遺構外遺物(1)



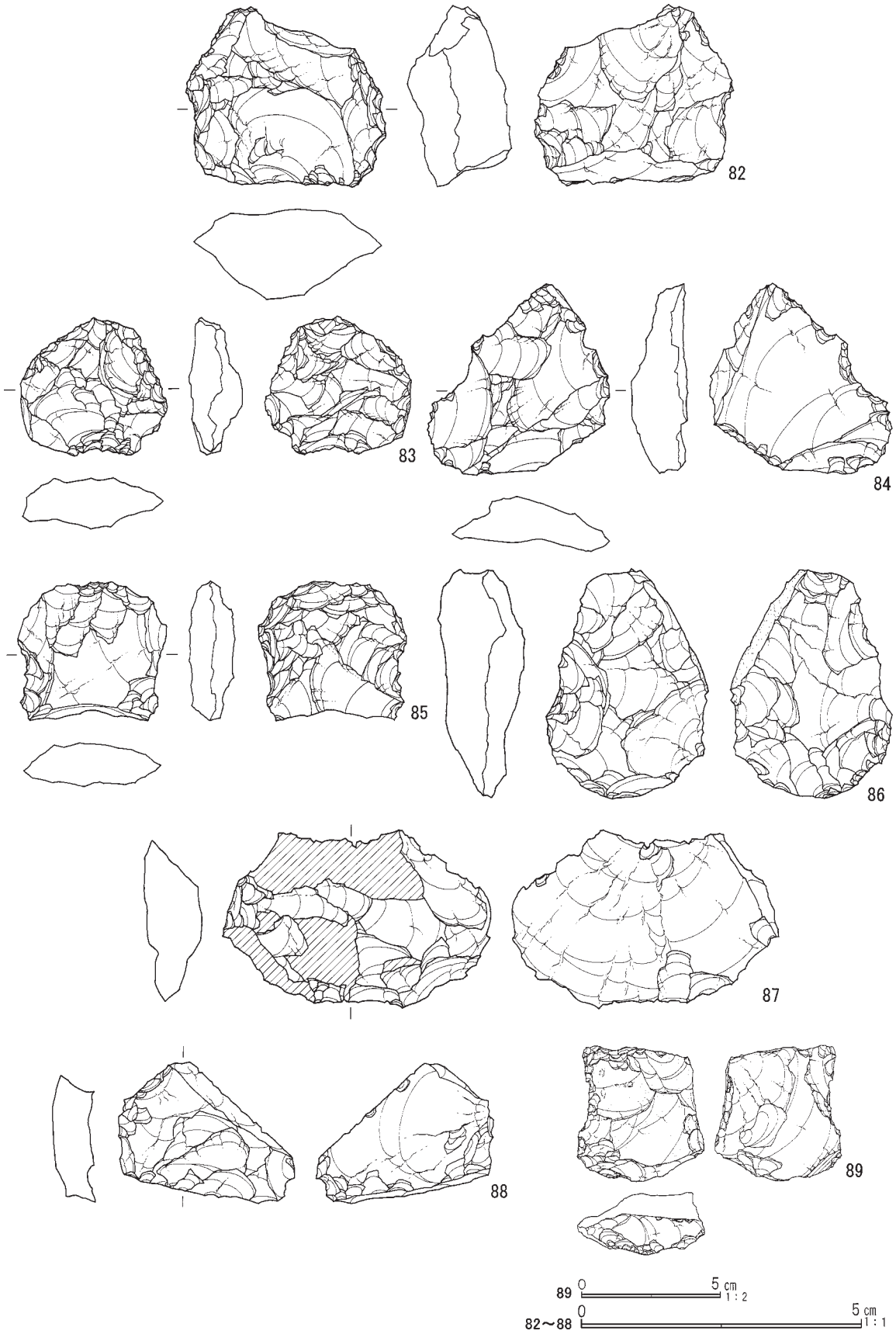
第84図　遺構外遺物(2)



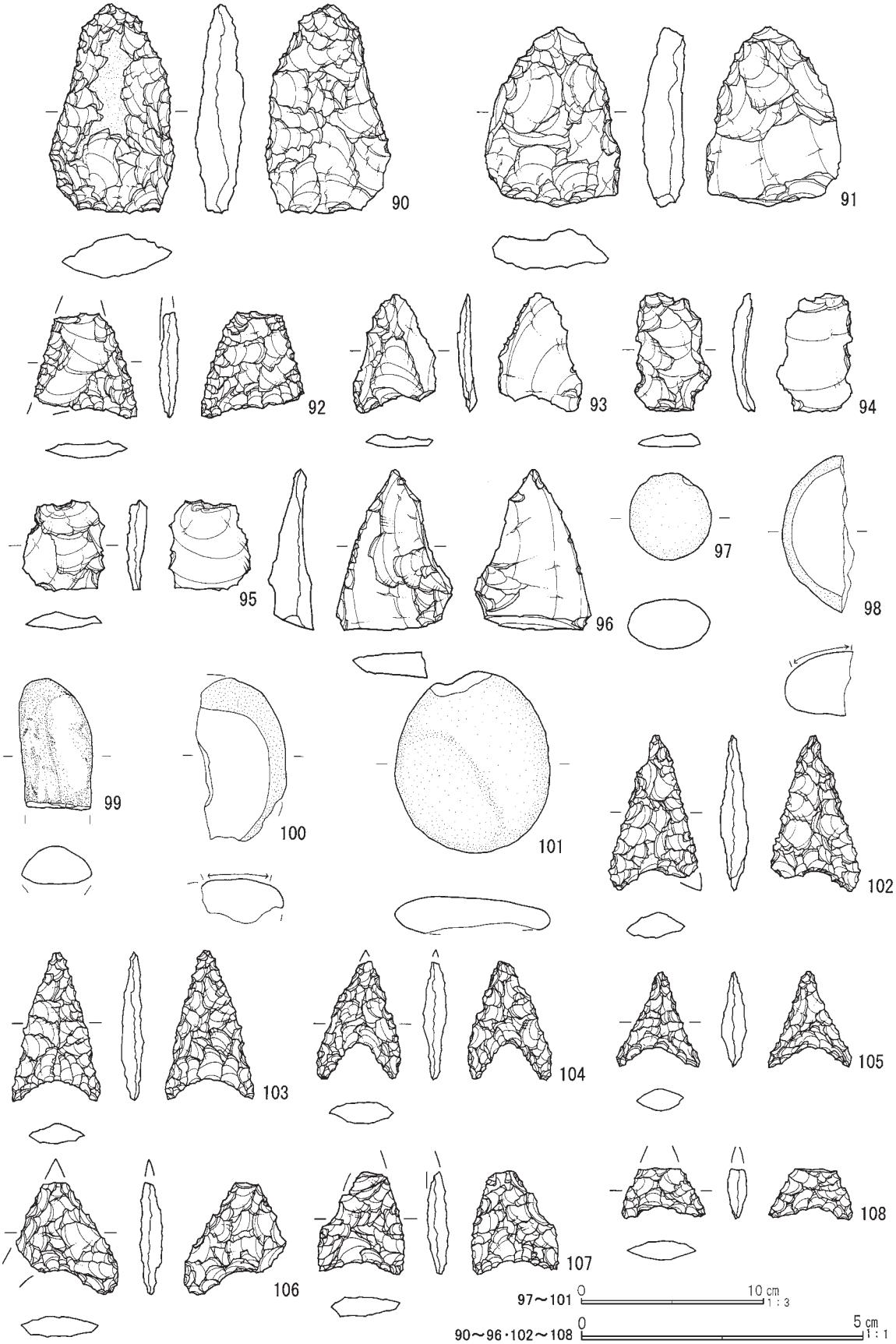
第85図　遺構外遺物(3)



第86図　遺構外遺物(4)



第8図　遺構外遺物(5)


90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
97～101 0 10 cm 1：3
90～96・102～108 0 5 cm 1：1

第88図　遺構外遺物(6)

109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
113～121 0 10 cm 1:4
122～126 0 10 cm 1:3
112 0 5 cm 1:2
109～111 0 5 cm 1:1

第 89図　遺構外遺物(7)

第30表　遺構外遺物観察表（第83～89図）

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	試Nトレ	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	赤橙色	B	胴部片	押型文（早期）。
2	試Nトレ	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	橙色	B	胴部片	押型文（早期）。
3	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIK	橙色	A	胴部片	撚糸文（早期）。
4	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABG	橙色	B	胴部片	撚糸文（早期）。
5	10-27•28G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDG	橙色	A	胴部片	撚糸文（早期）。
6	18•19-29G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDEIN	淡赤橙色	A	胴部片	諸磯式(前期)、沈線文。
7	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDGN	にぶい橙色	B	胴部片	条痕文（早期）。
8	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDI	にぶい橙色	B	胴部片	条痕文（早期）。
9	16•17-22•23G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDN	赤灰色	B	胴部片	条痕文（早期）。
10	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIN	橙色	B	胴部片	田戸下層式（早期）、沈線文。
11	29-13～17G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGIN	にぶい橙色	A	胴部片	田戸下層式（早期）、沈線文。
12	26-16G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	橙色	A	口縁部片	田戸下層式（早期）、沈線文。
13	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	橙色	B	胴部片	田戸下層式（早期）、沈線文。
14	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIN		B	胴部片	黒浜式(前期)、単節RL縄文。
15	19-23～25G	縄文土器深鉢	(11.8)	(3.1)	(11.0)	ABI	にぶい赤褐色	C	底部片	黒浜式（前期）。
16	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIN	橙色	A	胴部片	諸磯ｂ式(前期)、浮線文。
17	19－31G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJ	橙色	A	口縁部片	諸磯ｂ式(前期)、浮線文。
18	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJ	橙色	A	胴部片	諸磯ｃ式(前期)、集合条線。
19	27-17～19G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	明赤褐色	B	胴部片	阿玉台式(中期)、角押文。
20	25-21G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	にぶい赤橙色	B	胴部片	阿玉台式（中期）。
21	24-15G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	橙色	B	口縁部片	阿玉台式（中期）。
22	25-21G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	赤黒色	B	口縁部片	阿玉台式（中期）。
23	25-21G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	明赤褐色	A	胴部片	勝坂式(中期)、横帯区画内爪形文。
24	27-17～19G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	にぶい橙色	A	口縁部片	中期。
25	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	橙色	A	胴部片	勝坂式(中期)、沈線、刺突文。
26	26-20G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIN	橙色	A	胴部片	勝坂式(中期)、刺突文。
27	29-13～17G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	にぶい橙色	A	胴部片	勝坂式(中期)、突帯、爪形文。
28	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABI	明赤橙色	A	把手部片	中期、連続刺突文。
29	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDI	にぶい橙色	B	胴部片	称名寺(後期)、沈線、列点文。
30	19-30G以西	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDI	にぶい橙色	B	胴部片	称名寺(後期)、沈線、列点文。
31	22-24•25G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJN	浅黄橙色	B	胴部片	中期、沈線文。
32	6・7-21G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJN	橙色	B	胴部片	中期、沈線文。
33	6・7-21G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJN	明黄褐色	A	胴部片	加曽利Ｅ式（中期）、充填縄文。
34	6・7-21G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJN	にぶい橙色	B	胴部片	加曽利Ｅ式（中期）、単節RL縄文。
35	7-21G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIJN	赤灰色	B	胴部片	加曽利Ｅ式（中期）、充填縄文。
36	13-22•23G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIN	赤灰色	B	口縁部片	加曽利Ｅ式（中期）。
37	16-26G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIN	にぶい橙色	A	口縁部片	曽谷式（後期）。
38	19-30G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJKN	淡橙色	B	口縁部片	高井東式（後期）。
39	20・21-26・27G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIN	にぶい橙色	B	口縁部片	堀ノ内式(後期)、口唇部小突起刺突文。
40	東西ライン23以西	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIN	橙色	B	口縁部片	堀ノ内式(後期)、口唇部沈線。
41	25-19G	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJKN	橙色	A	口縁部片	後期、小突起円形刺突文。
42	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJN	にぶい橙色	B	胴部片	加曽利Ｅ式（中期）。
43	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGIK	にぶい橙色	B	口縁部片	安行式（後期）。
44	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJN	にぶい橙色	A	口縁部片	堀ノ内式(後期)、円形刺突文。
45	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJN	にぶい黄橙色	B	注口部片	高井東式（後期）。
46	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABN	淡橙色	A	口縁部片	高井東式(後期)、沈線文、刺突文。

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
47	表土除去	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIN	にぶい橙色	A	口縁部片	安行式（後期）。
48	東西ライン23以西	打製石斧	長：7.7	幅：5.3	厚：1.8	重：75.3g				
49	10-29G	打製石斧	長：6.6	幅：4.6	厚：2.1	重：91.7g				
50	20・21-26・27G	打製石斧	長：12.3	幅：5.0	厚：2.5	重：127.8g				
51	7-23G	打製石斧	長：12.1	幅：7.8	厚：2.0	重：186.7g				
52	16・17-29・30G	打製石斧	長：10.0	幅：5.1	厚：1.8	重：99.1g				
53	15～18-29・30G	打製石斧	長：5.4	幅：4.2	厚：1.5	重：38.5g				
54	表土除去	打製石斧	長：9.7	幅：4.4	厚：2.3	重：86.6g				
55	表土除去	打製石斧	長：8.6	幅：4.8	厚：2.0	重：77.8g				
56	表土除去	打製石斧	長：6.8	幅：4.1	厚：1.6	重：49.2g				
57	17-25G	打製石斧	長：9.0	幅：5.5	厚：1.0	重：48.5g				
58	29-20・21G	剝片石器	長：3.55	幅：3.18	厚：1.45	重：13.6g	石材：黒曜石			やや厚みのある小型剝片。
59	表採	石匙	長：3.7	幅：4.0	厚：0.7	重：9.0g				
60	24-23・24G	横型石匙	長：6.1	幅：10.1	厚：1.7	重：72.7g				
61	表土除去	石篦	長：5.3	幅：2.9	厚：1.0	重：12.0g				
62	表土除去	剝片石器	長：7.1	幅：4.6	厚：1.5	重：25.1g				
63	表土除去	打製石器	長：8.5	幅：6.3	厚：2.2	重：96.1g				
64	24・25-16G	削器（サイドスクレーパー）	長：6.8	幅：3.7	厚：1.3	重：30.7g				
65	表採（旧押出遺跡）	石鏃未製	長：3.48	幅：2.18	厚：1.15	重：6.71g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に２次加工を施す。
66	表採（旧押出遺跡）	石鏃未製	長：3.3	幅：2.58	厚：0.85	重：6.16g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
67	表採（旧押出遺跡）	細部加工剝片	長：3.35	幅：1.9	厚：1.1	重：7.43g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に２次的な剝離痕。
68	表採（旧押出遺跡）	石鏃未製	長：3.08	幅：2.5	厚：0.8	重：5.71g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
69	表採（旧押出遺跡）	石鏃未製	長：3.15	幅：1.9	厚　1.05	重：5.42g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に２次加工を施す。
70	表採	石鏃未製	長：2.6	幅：2.4	厚：0.95	重：5.37g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
71	24-19・20G	石鏃未製	長：2.47	幅：2.48	厚：0.88	重：3.47g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に２次加工を施す。
72	東西ライン23以西	石鏃未製	長：2.8	幅：1.8	厚：0.8	重：2.23g	石材：チャート			小型剝片の表面に調整剝離痕、裏面に２次加工を施す。
73	表土除去	石鏃未製	長：3.4	幅：2.68	厚：0.95	重：6.12g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に２次加工を施す。
74	表土除去	石鏃未製	長：3.2	幅：2.38	厚：0.9	重：5.71g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
75	表土除去	石鏃未製	長：3.3	幅：2.5	厚：1.15	重：7.72g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
76	表土除去	石鏃未製	長：(2.2)	幅：2.19	厚：0.68	重：2.74g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
77	表土除去	石鏃未製	長：2.7	幅：2.2	厚：1.2	重：4.53g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
78	表土除去	石鏃未製	長：(2.2)	幅：2.5	厚：0.8	重：4.62g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕、先端部欠損。
79	10-29G	石鏃未製	長：2.85	幅：1.8	厚：0.65	重：2.82g	石材：チャート			剝面の縁辺に細かい調整剝離を施す。
80	23-21・22G	石鏃未製	長：2.9	幅：2.6	厚：0.95	重：7.36g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
81	22-31G	石鏃未製	長：2.3	幅：2.68	厚：0.85	重：4.55g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
82	17・18-28・29G	石鏃未製	長：3.27	幅：3.6	厚：1.85	重：20.18g	石材：チャート			やや厚みのある小型剝片の縁辺部に２次加工を施す。
83	15～18-29・30G	石鏃未製	長：2.45	幅：2.62	厚：0.95	重：5.70g	石材：チャート			小型剝片の縁辺部に２次加工を施す。
84	16・17-29・30G	石鏃未製	長：3.4	幅：3.25	厚：1.0	重：75.0g	石材：チャート			小型剝片の縁辺部に２次加工を施す。
85	15～18-29・30G	石鏃未製	長：2.5	幅：2.67	厚：0.85	重：6.27g	石材：チャート			小型剝片の縁辺部に２次加工を施す。
86	表土除去	剝片素材	長：4.08	幅：2.9	厚：1.58	重：15.28g	石材：チャート			礫皮をもつ小型剝片の縁辺部に２次加工を施す。
87	14・15-27・28G	剝片素材	長：3.2	幅：4.8	厚：1.02	重：16.31g	石材：チャート			横長剝片の縁辺部に２次加工を部分的に施す。
88	東西ライン23以西	剝片素材	長：2.5	幅：3.1	厚：0.8	重：7.44g	石材：チャート			小型剝片の縁辺部に２次加工を施す。

No.	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
89	22・23-G	剝片素材	長：4.9	幅：4.58	厚：2.25	重：45.96g	石材：チャート			やや厚みのある剝片の縁辺部に２次加工を施す、表面の中央付近には時期の古い剝離痕（風化面）が認められる。
90	10-27G	石鏃未製	長：3.7	幅：2.2	厚：8.5	重：6.46g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
91	22-29・30G	石鏃未製	長：3.2	幅：2.4	厚：0.75	重：5.69g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整剝離痕。
92	15～18-29・30G	石鏃	長：(1.89)	幅：(1.8)	厚：0.35	重：1.09g	石材：チャート			凹基無茎、先端部及び方脚欠損。
93	18-27G	石鏃未製	長：2.1	幅：1.48	厚：3.3	重：0.60g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に細かな調整剝離痕。
94	16-25G	細部加工剝片	長：2.1	幅：1.35	厚：0.4	重：0.82g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に調整らしき剝離痕。
95	18-28G	細部加工剝片	長：1.6	幅：1.45	厚：0.35	重：0.72g	石材：チャート			小型剝片の一部に２次的な剝離痕。
96	22-23G	細部加工剝片	長：2.87	幅：2.09	厚：0.8	重：3.58g	石材：チャート			小型剝片の表裏面に小さな調整剝離痕。
97	19-30G以西	磨石	長：4.6	幅：4.4	厚：2.6	重：74.0g。				
98	19-23～25G	磨石	長：8.4	幅：3.9	厚：3.5	重：142.1g				上面磨り痕。
99	表土除去	石棒	長：6.9	幅：3.9	厚：2.0	重：97.9g				
100	表土除去	磨石	長：8.6	幅：4.8	厚：2.4	重：139.0g				
101	表土除去	石錘	長：9.7	幅：8.2	厚：2.0	重：211.8g				
102	表採	石鏃	長：2.8	幅：1.6	厚：0.5	重：1.30g	石材：チャート			凹基無茎、片脚部欠損。
103	表土除去	石鏃	長：2.65	幅：1.55	厚：0.4	重：1.08g	石材：チャート			凹基無茎、ほぼ完形。
104	表土除去	石鏃	長：(2.1)	幅：1.5	厚：0.42	重：0.81g	石材：チャート			凹基無茎、先端部欠損。
105	24-19G	石鏃	長：1.7	幅：1.49	厚：0.43	重：0.54g	石材：チャート			凹基無茎、ほぼ完形。
106	表土除去	石鏃	長：(2.0)	幅：(1.8)	厚：0.4	重：1.13g	石材：チャート			凹基無茎、先端部～片脚部欠損。
107	16・17-29・30G	石鏃	長：(1.85)	幅：1.55	厚：0.4	重：0.95g	石材：チャート			凹基無茎、先端～上部欠損。
108	表土除去	石鏃	長：(0.9)	幅：1.48	厚：0.35	重：0.37g	石材：チャート			凹基無茎、上部欠損。
109	表採（旧押出遺跡）	石鏃	長：(1.28)	幅：(1.4)	厚：0.3	重：0.44g	石材：チャート			凹基無茎（抉り浅い）、先端部及び方脚欠損。
110	表採	石鏃	長：1.56	幅：1.58	厚：0.3	重：0.45	石材：チャート			凹基無茎（抉り浅い）、ほぼ完形。
111	表採（旧押出遺跡）	石鏃	長：2.95	幅：1.7	厚：0.4	重：1.90g	石材：チャート			平基無茎、ほぼ完形。
112	表土除去	石匙	長：7.2	幅：3.50	厚：1.0	重：21.23g	石材：チャート			縦型の石匙、上部につまみを持つ縦長剝片を素材とする、両側縁（刃部）周辺には縦細剝離痕がありやや磨耗する。
113	25-22G	土師器坏	12.0	3.7	7.0	ABDI	橙色	B	90%	底部外面手持ヘラケズリ。
114	25-22G	須恵器坏	12.8	3.9	(6.7)	ABDI	灰色	A	80%	底部外面回転糸切り離しロクロ目強い。
115	19-30G以西	須恵器坏	—	(0.8)	(6.4)	ABF	灰色	A	口縁部片	底部外面周辺回転ヘラケズリ、「×」ヘラ記号、南比企産。
116	25-23	須恵器長頸瓶	—	(2.7)	(9.0)	—	にぶい黄橙色	B	高台部20%	内外面施釉。
117	27-27G	青磁碗	—	—	—	—	オリーブ灰色	A	胴部片。	
118	10-29G	青磁碗	—	—	—	—	青灰色	A	口縁部片。	
119	23-21・22G	鉄鎌	長：(7.5)	幅：1.8	厚：0.3					
120	26-23G	不明鉄製品	長：(4.6)	幅：2.5	厚：0.6					
121	24-19・20G	不明鉄製品	長：2.2	幅：2.3	厚：0.4					
122	21-22G	砥石	長：9.1	幅：3.3	厚：2.2	重：75.9g				上下面磨り痕。
123	表土除去	砥石	長：(5.1)	幅：2.9	厚：1.4	重：14.7g				上下右側面磨り痕。
124	表土除去	砥石	長：(7.2)	幅：3.2	厚：1.3	重：29.6g				各側面磨り痕。
125	表土除去	砥石	長：8.1	幅：3.1	厚：3.2	重：124.0g				上面磨り痕。
126	表土除去	砥石	長：3.6	幅：1.5	厚：1.4	重：12.4g				各側面磨り痕。

Ⅴ　調査のまとめ

1　遺構・遺物について

宮下遺跡は、これまでに第１・２次調査が実施されている。昭和60・63年に町道の拡幅工事に伴う発掘調査を行い、調査の結果、主に平安時代の竪穴住居跡及び製鉄関連遺構が検出されている。また、第２次調査においては縄文時代後期の埋甕（堀ノ内式土器）１基が検出されている。第１次調査では縄文時代の遺物も検出され、早期撚糸文土器、条痕文土器、撚糸文土器に伴うと考えられる石器などが出土している。

今回の第３次調査は遺跡範囲の東側にあたり、千代遺跡群の東側の台地上である。

本調査では、縄文時代の竪穴住居跡６軒、埋甕５基、円形柱穴列跡１基、奈良・平安時代の竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡１棟、近世の溝跡14条、井戸跡２基、畠跡１か所、縄文～近世の土坑・ピット、時期不明の性格不明遺構４基が検出された。また、調査区東側には南北に走る谷状地形が検出された。

以下、各時代の遺構・遺物について、特筆すべき点を中心に記述していきたい。

⑴　縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡、埋甕、円形柱穴列跡、土坑、ピットが検出された。竪穴住居跡は、調査区北西部に１軒（第１号住居跡）、北東部西寄りに４軒（第２～５号住居跡）、北東隅に１軒（第６号住居跡）それぞれ検出された。各住居跡は撹乱による削平が著しく、炉跡及び柱穴のみの検出となった。そのなかで、第１号住居跡からは河原石や片岩を用いた石囲炉が検出され、その石囲炉の中からは撹乱の削平による上部破損の炉体土器（第７図２）とその内部覆土中から破損した状況で土器（第７図１）が検出された。それぞれ縄文時代後期称名寺式期の深鉢土器である。同住居跡南西側には近接する形で河原石と共伴して第４号埋甕（後期称名寺式土器）が検出されており、両遺構の検出位置状況や同時期出土遺物などから柄鏡型住居だった可能性も考えられる。第３号住居跡からは縄文早期の条痕文土器が出土している。

埋甕は、調査区北西部に１基（第４号埋甕）、南西部に１基（第１号埋甕）、中央部に１基（第５号埋甕）、北東隅に２基（第２号埋甕･第３号埋甕）それぞれ検出された。各埋甕の時期については、第４号埋甕は縄文時代後期称名寺式期の土器、第１号埋甕の埋甕は縄文時代早期の土器、第５号埋甕の埋甕は縄文時代早期の土器、第３号埋甕は縄文時代前期諸磯式期の土器、第２号埋甕は縄文時代後期堀ノ内式期の土器がそれぞれ埋設されていた。

円形柱穴列跡は、調査区南西部から１基検出された。各柱穴の規模は長軸約0.4～0.6m、短軸約0.4～0.6m、深さ約0.2～0.6mのもので、平面形状が楕円形や隅丸方形を呈した柱穴が、15基円形に巡る。柱穴心々間による直径は8.20mで、Ｐ１－Ｐ15間で柱間が広くなる。Ｐ14－Ｐ15間は他遺構との重複やトレンチのため、検出できなかった可能性がある。断定はできないが、円周内のほぼ中央に検出された第64号土坑は、位置関係から本遺構に伴う遺構の可能性がある。柱穴の覆土はソフトロームに似るにぶい黄褐色土を主体とし、各柱穴とも明瞭な柱痕跡は認められなかったが、Ｐ１・３・４・９・15からは柱痕跡とみられる土層が確認された。また、各ピットの底面は硬化が認められている。遺物は、Ｐ15から加工痕のある礫が１点出土している。

本遺構の時期については、時期を特定できる資料は得られていない。しかしながら、近接する遺構か

らの出土遺物状況や本遺構の形態、近隣遺跡における円形柱穴列跡の周辺遺構出土遺物状況などの点を参考にしてある程度の推定時期が考えられる。

まず、近接する遺構からの出土遺物状況であるが、円周内に検出された第64号土坑、円周外南に近接した第１号埋甕からは、いずれも縄文時代後期称名寺式土器が出土しており、北東に検出された近世期の第１号井戸跡からは、覆土中に混入して称名寺式土器片が比較的多く出土している。

次に、本遺構の形態であるが、内部に炉が検出されていないことと、柱穴の掘り込みの深さについて、傾斜している地形にあるにもかかわらず、地山からの深さは高い北と低い南とでほぼ同じで、柱穴底面のレベルは地形に沿って下がっている状況がある。このため、本来床としての水平面を意識した構造でないことが考えられ、通常の住居とは考えにくい。同様に柱穴が円形に巡る遺構は、石川県金沢市チカモリ遺跡（縄文時代後期後葉～晩期）に代表されるような石川県や富山県を中心に確認されている。これらはモニュメント的な施設と考えられており、本遺跡で検出された円形柱穴列跡も、同様の機能をもつ可能性があったと考えられる。

そして、近隣遺跡の円形柱穴列跡の周辺遺構出土遺物状況では、群馬県安中市（旧松井田町）の八城二本杉東遺跡・東畑遺跡、同県長野原町の横壁中村遺跡から円形に巡る柱穴列跡が検出されている。八城二本杉遺跡では周辺の住居跡の状況から前期関山式期の可能性が考えられ、東畑遺跡は諸磯式期、横壁中村遺跡は後期称名寺・堀ノ内式期が考えられている。本遺跡においても、遺構自体から時期を特定できる資料は得られていないが、周辺の遺構・遺物の状況から後期称名寺式期の可能性が高い。

以上の３つの点から、本遺構の時期は縄文時代、特に縄文時代後期と考えておきたい。

谷状地形は調査区の東部に検出された。北北西から南南東に傾斜する地形に対し、直行して走行し、土層中からは、縄文早期から後期にかけての土器片が出土している。上面ではこの黒褐色土を掘り込んで10世紀前半の竪穴住居跡が造られていて、少なくとも同時期には埋没していたものと考えられる。

⑵　奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、ピットが検出された。竪穴住居跡は16軒検出されたが、調査区西端付近に北東カマドの住居跡１軒（第22号住居跡）・東カマドの住居跡３軒（第14・15・18号住居跡）・北西カマドの住居跡１軒（第16号住居跡）、調査区西部等高線55.50～56.00m上に並行して北西カマドの住居跡５軒（第８・９・12・13・17号住居跡）、調査区東部等高線55.00m上に並行して北カマドの住居跡３軒（第７・11・20号住居跡）・カマド無の住居跡１軒（第10号住居跡）、調査区東端部に北東カマドの住居跡２軒（第19・21号住居跡）が検出された。検出位置の状況からは４つの範囲（①調査区西端　②調査区西部同一標高上　③調査区東部同一標高上　④調査区東端部）に分けられる。次にカマド方向で見てみると、４つの方向グループ（①北東カマド　②北西カマド　③東カマド　④北カマド）に分けられる。また、このカマド方向については、各住居跡の時期と概ねリンクする。①北東カマドは８世紀前半～後半、②北西カマド・③東カマドは８世紀後半～９世紀前半、④北カマドは９世紀後半～10世紀前半（ただし、第７号住居跡については８世紀後半～９世紀前半）である。本調査区における住居跡の集落形成状況を考えると、検出位置状況やカマド方向から見て４つのパターンが看て取れ、その上で住居跡の時期から見てみると、３時期の集落形成が考えられる。

調査区南西端の第12号住居跡からは、鉄製品（鉄鏃・刀子）や石製品（台石・石皿・砥石・磨石）などが出土している。前述のとおり、宮下遺跡では第１・２次調査が行われ、第１次調査においても鍛冶

関連遺構が検出されている。詳しく検出状況を見てみると、まず第１次調査は同遺跡の南限と推定される部分で行われ、南北に走る溝跡・土坑などが検出され、土坑や包含層からは多量の鉄滓が出土し、窯壁などを含むことから鍛冶炉が近くに存在した可能性がある。鉄滓が集中して出土した範囲はタタキ状床面として考えられ、そこには建物跡の柱穴跡が検出されていることから作業場的な性格が想定されている。また、出土遺物は９世紀代の須恵器坏などがあり、羽口破片も多く出土されていることなどから鉄器の製作工房跡と推定されている。周辺遺跡の熊野遺跡や向比遺跡からも鍛冶関連遺構が検出されており、９世紀代を主体とした集落跡の熊野遺跡では、４号竪穴住居跡から鍛冶及び鋳造関連施設と羽口や坩堝、鋳型などが検出され、４・６号竪穴住居跡からは鉄製品および未製品と思われる鉄片が出土している。また、向比遺跡では、竪穴住居跡内に２基の鍛冶炉が検出され、炉の内部およびその周囲から鉄滓や羽口片が検出されている。出土土器からこの竪穴住居跡は９世紀代と推定され、鉄器製作に関わる小鍛冶工房跡と考えられている。以上、同遺跡や周辺遺跡の鍛冶関連遺構の状況を踏まえ第12号住居跡を見てみると、工房的要素（小鍛冶など）をもっていた可能性が考えられる。

住居跡の出土遺物については、調査区西端の第12・13・14・15・17・18号住居跡からは南比企産の墨書土器が出土しており、須恵器坏底部外面に「蔵」「足刀」などの墨書が見られた。「足刀」は第12･13･17号住居跡から計５点出土しており、字体から同一人物によるものと考えられる。また、第22号住居跡からは色調が灰白色、口縁～体部が直線的、器厚薄手、底部調整回転ヘラ切り調整の須恵器坏１点（第41図３）が出土しているが、この須恵器坏は外来工人によるものと考えられる。

掘立柱建物跡は調査区西部南西端に１棟検出された。桁行３間、梁行２間の側柱式南北棟建物である。建物の構造は､北及び南妻側の中央柱が妻側面から外方向へ0.4mほど外れる近接棟持柱建物と考えられる。時期としては、第17号住居跡との近接状況から９世紀前半以降が考えられ、さらに出土遺物の土師器坏・須恵器坏などから９世紀後半と考えられる。

⑶　近　　世

近世の遺構は、溝跡、井戸跡、畠跡、土坑、ピットが検出された。溝跡は、調査区東部に２条、西部に12条検出された。調査区西部中央に位置する東西軸走向と南北軸走向を合わせた逆Ｌ字状の第５号溝跡と調査区西側南部に位置する南北軸走向のクランク状の第14号溝跡については、本来同一の溝だった考えられる。また、第５号溝跡の東西軸走向の西端は撹乱による消滅のため途絶えてしまっているが、本来は、西に向けさらに延びていたと考えられる。井戸跡は２基検出されているが、調査区西部南に第１号井戸跡、中央部西寄りに第２号井戸跡が検出され、畠跡は調査区西部南端に北東―南西走向で１か所検出されている。第５号溝跡・第14号溝跡、第１号井戸跡・第２号井戸跡・第１号畠跡は検出位置状況から相互関係が看て取れる。第５号溝跡・第14号溝跡については前述の検出状況から区画溝の可能性が高く、その区画内に第１号井戸跡・第２号井戸跡・第１号畠跡が存在し、土坑やピットも多数検出されている。ピットについては建物柱穴跡と断定できるものはなかったが、撹乱の削平の影響がなければ建物跡の柱穴と断定できたものがいくつかあった可能性が考えられる。以上のことから、この区画内に近世の屋敷跡が存在していたとも考えられる。

以上が、本調査における各時代の遺構･遺物について、特筆すべき点を中心に記してきたものである。今後、他地点の調査により遺跡の状況、性格がさらに明確になることを期待してまとめに代えたい。

2　墨書土器について

今回の調査では、前述のとおり古代の6軒の住居跡から、須恵器坏底部に墨書されたものが少ないながら8点検出できた。文字の種類としては、「足刀」、「蔵」、「二□」、判読不明のものの計4種類が見られ、「足刀」の墨書が推定も含めて最も多く、5点であった。いずれの須恵器も、胎土に含まれる特徴的な鉱物の白色針状物質から南比企産と判断できる。

まず、墨書土器が出土した住居跡の状況を見ていくことにする。該当する住居跡は、第12・13・14・15・17・18号住居跡と呼称した竪穴住居跡であるが、第18号住居跡を除いて、すべて8世紀後半～9世紀前半の時期が与えられるもので、第18住居跡も9世紀前半と若干後出するだけで、時期的に重なる部分が認められる。構造の共通性から、第12・13・17号住居跡と第14・15・18号住居跡と二つのグループに分けることができた。それは設置されたカマドの方向で、前者が東カマド、後者が北西カマドという特徴である。立地と絡めて考えると、第12・13・17号住居跡（標高55.50～55.75m）→第14・15号住居跡（標高56.50～56.75m）→第18号住居跡（標高57.00～57.25m）という変遷の可能性が考えられる。これは、標高の低い立地から時期が下ると標高の高い立地へと変遷しているともいえる。

次に、住居跡ごとにその内容を詳細に見てみると、第12号住居跡は、小鍛冶などの工房的要素をもつ住居跡であるが､生活面を二面確認しており比較的長い時期にわたり利用されていたことが推定できた。遺物は、土師器坏・甕・台付甕、須恵器蓋・坏などのほか、工房的要素の傍証となる鉄鏃や刀子、小鍛冶に使ったと考えられる台石や石皿が検出されている。この住居跡からは、「足？刀」の二文字の墨書土器が出土した。

第13号住居跡は、本調査区では最大規模の住居跡で、土師器坏・甕、須恵器坏などが検出され、墨書土器を最も多く出土した住居跡であった。字の種類にも特徴があり、「足刀」のみ3点検出された。

第14号住居跡は、調査区中段の標高に立地し、主軸方向が長い平面形を呈す。遺物は、土師器坏･甕、須恵器坏などが出土しているが、須恵器鉢が唯一出土した住居跡でもある。墨書は、「蔵」と推定できるものであるが、一文字かそれ以上かは破片のため不明である。

第15号住居跡は、第14号住居跡と同様な立地と形態のもので、双方は南北の位置関係で隣接する。遺物の出土量は比較的少なく、土師器坏・甕・台付甕、須恵器蓋・坏・甕が検出された。墨書は判読が難しいもので、「二□」と二文字に読めるが、二文字目の字は「田」とも読めるものであった。

第17号住居跡は、第12号住居跡と第13号住居跡に挟まれる箇所に造られ、第13号住居跡とほぼ同じ標高に立地し、東西の位置関係で隣接する。遺物はカマドを中心に出土し、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏のほか土錘を1点検出した。墨書は「足刀」の1点が確認された。

第18号住居跡は、墨書土器が検出された住居跡で最も標高の高い位置に立地する。時期的にも最も後出すると考えられる。遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏のほか砥石が出土した。墨書は、判読不明なものが1点出土した。

ここで、墨書の全て字の種類を概観すると、前述のとおり「足刀」という文字が最も多く、字体にも共通性が認められることが注目される。また、これらの文字が出土した第12・13・17号住居跡間の関係を見てみると、位置関係から隣接・近接する同一グループと見ることができた。そして、既に記述のとおり時期的にもほぼ一致する。

一方、住居跡のもつ性格を比較すると、第12号住居跡だけ、工房的要素をもち異質である。また、こ

の文字をもつ点数を比較すると、最も大きな規模をもつ第13号住居跡が３点と突出している。

さて、この「足刀」とは、どういう意味をもつのかここで考えてみたい。まず、「足」と「刀」別々に一文字で見てみると、かつて平川　南氏が、東日本各地のうち墨書土器の出土量が比較的豊富な20遺跡を対象に文字の種類の統計をとっている（平川　南「墨書土器とその字形―古代村落における文字の実相―」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』）。それによると、20遺跡で文字の種類の総数は205種で、そのうち２遺跡以上で共通する文字は83種であった。さらに、５遺跡以上共通する文字は、30種であった。また、近年の諸研究では、全国各地の遺跡から出土する膨大な量の墨書土器の文字に共通性が認められ、極めて限定された種類の文字や特殊な字形が使用されていることが分かってきている。本遺跡で見られた、「足」と「刀」は、前述の平川氏の論考内のデータでは、いずれも４遺跡で共通する文字であった。これは、決して多いというデータではないが、確認された地域を見ると山形県・福島県・群馬県・神奈川県・千葉県と東日本で広範に使われていた字体であったと言えるのではないだろうか。

では、果たしてこの二文字の組み合わせ文字は、どのような意味と意義をもっていたのか。「足」は、生産・集積という動詞的意味合いをもつと言う。すなわち、「じゅうぶんにする」、「満たす」、「過ぎる」といった意味である。「刀」は、「かたな」、「はもの」、「小舟」といった意味をもつ。この二文字を簡単に解釈すると、一例として、刀や刃物を十分にする、または満たすなどの意味が与えられるだろうか。しかしながら、この文字が意味するものとして用いられていたか、単なる記号として用いられていたかは、ここでは判断するのに困難な状況である。

古代の集落において、文字がどのような機能をもっていたか、これまでに様々な議論がなされ、論考がいくつかある。ここでは、この論考を参考に本例について考えていきたいと思う。

まず、平川　南氏は、「墨書土器の文字は、その種類が極めて限定され、各地の遺跡で共通して記されている。その字形も、各地で類似し、しかも本来の文字が変形したままの字形が広く分布している。この傾向、おそらく一定の祭祀や儀礼や儀礼行為等の際に土器になかば記号化した文字が記載された。」と述べている。また、松村恵司氏は、「古代集落遺跡出土の墨書土器は、祭祀に関係したものが中心を占める。その背景には、文字文化や仏教思想の浸透に伴い、文字を呪術的なものとして受容した農村社会の特質を垣間みることができ、神仏への供献用の土器に祭祀の主体者や祈願内容、日常食器との区別を文字で明示する行為の展開が想定された。」と述べている。さらに、高島秀之氏は、「墨書土器は、集落全体、もしくは集落の１単位集団内、或いはより狭く単位集団内におけるところの１住居単位内といった非常に限定された空間・人的関係の中における祭祀や儀礼行為に伴って使用されたものであり、記された文字の有する意味は、おそらくそれぞれの限定された空間や集団内において共通する祭儀方式の中でのみ通用するものであった。」と述べている。

さて、本遺跡例ではどうであろうか、ある一定の空間すなわち立地として一つのグループと考えられる空間、及び共通した時期の住居跡でこの「足刀」の墨書土器が出土していることから、この住居跡が属するグループ内で共通したアイテムとして使われていたことが容易に想像できる。だが、文字が果たしてある意味をもっていたかは定かではない。

よって、諸氏が述べているように、記号化された文字が、限定された空間や人間関係に中の祭祀や儀礼行為に使われていたかまでは言及できないにしろ、集落内の１単位内で共通の認識をもって使われていたことには疑う余地はない。

一方、高島氏が述べている「墨書土器自体が僅少な集落は、墨書土器を使用しない祭式を行う集団である。」という点については、本遺跡はこの例にあたるが、一定の共通認識としての墨書土器の使用には影響がなく、祭祀や儀礼行為における使用については、今後検討の余地があると考える。

ただし、高島氏が言う「土器に墨書するという行為は、日常什器とは異なるという非日常の標識を施すことであり、祭祀用に用いる土器を日常什器と区別し、」という点では、本遺跡においても妥当性があると考える。これについては、今後の本遺跡及び近隣遺跡の出土例の増大を待って検討していきたい。

最後に、高島氏が述べている「文字を呪術的なものとして受容したところに、古代の在地社会の特質があるわけであり、宮都や官衙において本来的に用いられていた墨書土器の用途・機能からはかけ離れ、祭具として東国を中心とする在地社会に浸透していった」という部分では、まさに本遺跡における墨書土器の在り方を物語っているとも考えられる。

3　第22号住居跡出土の須恵器坏について

本遺跡において出土している須恵器坏の多くが白色針状物質含む南比企産の製品である。その中で、第22号住居跡からはそれらとは一線をひく形状をもった須恵器坏（第41図３）が出土している。その須恵器坏について見てみると、口径14.2㎝、器高3.6㎝、底径9.2㎝で、色調が灰白色、口縁部から体部にかけて直線的、体部から底部にかけて変換が角状、器厚は非常に薄手、底部調整は回転ヘラ切り未調整もしくは全面回転ヘラ削り調整である。全体的にみて非常に丁寧な作りのものと看て取れる。また、胎土については、南比企産の製品としての根拠となり得る白色針状物質を含んでいなかった。

周辺の遺跡にこの坏と同形状の出土例を求めてみると、類似したものが東京都日野市落川遺跡第327号住居跡から出土している。紙面上の図面のみの確認ではあるが、法量、形状、調整と非常に類似している点が多く見受けられた。

一方、南比企窯跡群内の鳩山窯跡群柳原Ｂ遺跡第15号竪穴住居跡（８世紀前半）からは、当時、須恵器生産の先進地であった岐阜県・美濃須衛窯跡群産と考えられている土師器小型甕やその甕などを搬入してきた工人によって造られた須恵器坏などが出土している。土師器小型甕については、外面ハケ目調整で、器厚は薄く、口縁の外反を特徴とする。また、焼き上がりの色調は、南比企の粘土とは異なる灰白色である。これは、本例の第22号住居跡出土坏とは器種は違うが、器厚や焼き上がりの色調が類似する点は興味深く、本例も外来工人による搬入品もしくはその工人の手によるものの可能性が考えられる。

また、本遺跡第22号住居跡からは白色針状物質を含む南比企産の須恵器坏が３点出土しているが、出土状況は住居跡北東隅の床直上面に本例の坏を含み纏まって出土している。同産坏の一群に異種の坏が入り込んだ形で出土している状況は、前述の南比企窯跡群と美濃須衛窯跡群との外来工人による関係と類似する点は興味深い。

以上、現段階での本例の第22号住居跡出土坏について考えられるのは、①南比企産ではない、②本遺跡内においての形状の異種性、③周辺（県外）遺跡に存在する同形状遺物の存在、④外来工人との関係があるか、などの点が挙げられる。

時間の都合上十分な検討ができなかったが、今後前述の検討に加え、さらに多くの資料収集を行い、より詳しく実態に迫れればと考える。

引用文献・参考文献

熊谷市　1963　『熊谷市史』前編
江南町　1995　『江南町史』資料編１　考古
埼玉県　1980　『新編　埼玉県史』資料編１
埼玉県　1982　『新編　埼玉県史』資料編２
埼玉県　1984　『新編　埼玉県史』資料編３
江南町教育委員会　1985　『宮下・元稲荷』
埼玉県遺跡調査会　1974　『下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡発掘調査報告書』
新井　端・森田安彦　1996　『千代遺跡群』―縄文時代編―』　江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会
新井　端・森田安彦　1996　『千代遺跡群』―弥生・古墳時代編―』　江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会
宮本　長二郎　1996　『日本原始古代の住居建築』　中央公論美術出版
大工原　豊他　1994　『中野谷地区遺跡群』　安中市教育委員会
黒澤　照弘他　2007　『横壁中村遺跡（７）』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
南　久和他　1983　『金沢市新保本町チカモリ遺跡』―遺構編―　金沢市教育委員会
南　久和　1982　「金沢市チカモリ遺跡」　考古学ジャーナル№203　ニューサイエンス社
南　久和　1985　「巨大な木柱」　別冊考古学ジャーナル1985.１　ニューサイエンス社
南　久和　1986　「石川県チカモリ遺跡」　季刊考古学第15号
井口村教育委員会　1980　『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1980　『井口遺跡』―発掘調査概要―
小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1980　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概要』
小矢部市教育委員会　2004　『桜町遺跡発掘調査報告書』―縄文遺構編Ⅰ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ―
小矢部市教育委員会　2005　『桜町遺跡発掘調査報告書』―縄文遺構編Ⅱ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ―
能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　1986　『真脇遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1989　『金沢市米泉遺跡』
群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987　『上野国分僧寺・尼寺中間地域』
西　弘海　1986　『土器様式の成立とその背景』　有限会社真陽社
古代生産史研究会　1997　97シンポジウム『東国の須恵器』―関東地方における歴史時代須恵器の系譜―
渡辺　一他　1988　『鳩山窯跡群Ⅰ』　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺　一他　1990　『鳩山窯跡群Ⅱ』　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺　一他　1991　『鳩山窯跡群Ⅲ』　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺　一他　1993　『鳩山窯跡群Ⅳ』　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺　一他　1995　『竹之城・石田・皿沼下遺跡』　鳩山町教育委員会
渡辺　一　2006　『古代東国の窯業生産の研究』　青木書店
埼玉考古学会　1987　『討論「奈良時代前半の須恵器編年とその背景―前内出窯跡その後―」資料』
鳩山町　2006　『鳩山の歴史』上
鳩山町　2007　『鳩山の遺跡・古代窯業』鳩山町史編纂調査報告書第10集
平川　南　1991　「墨書土器とその字形―古代村落における文字の実相―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　国立歴史民俗博物館
松村恵司　1993　「特集「墨書土器の世界」から」『月刊文化財』363
栗田則久　1993　「古代集落と墨書土器」『月刊文化財』362
松村恵司　1995　「古代東国集落の諸相……村と都の暮らしぶり」『第９回　古代の集落―しもつけのムラとその生活―』　栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
高島英之　2000　「墨書土器村落祭祀論序説」『日本考古学』第９号　日本考古学協会

Ⅵ　宮下遺跡出土縄文土器および土師器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

埼玉県熊谷市（旧江南町）に所在する宮下遺跡は、荒川上流域右岸に分布する江南台地北部の平坦面上に位置する。江南台地は、堀口（1986）により武蔵野Ⅰ面とされている河岸段丘であり、その層序記載からは、約10万年前に形成された武蔵野台地のＭ１面（貝塚ほか編　2000）に対比される。本遺跡の発掘調査では、縄文時代後期および奈良・平安時代の各時期の竪穴住居跡などの遺構や、それらに伴う土器をはじめとする遺物が多数確認されている。

本報告では、縄文時代後期とされる土器と８世紀後半および10世紀前半とされる各時期の土器の胎土の特性を捉えることにより、その製作事情に関わる資料を作成する。なお、江南台地では、台地を構成する段丘礫層と台地表層を覆うローム層との間に厚さ３ｍ程度の粘土層の堆積が広範に認められる。これまでに、この粘土層が土器の原材料として利用された可能性を検討するため、実験的な側面から検討された例もある（江南町千代遺跡群発掘調査会･江南町教育委員会　1998）。今回の分析では、調査区内で確認された粘土層より採取された粘土も試料に含まれており、土器胎土との比較から、その原材料としての可能性も検討する。

2　試　　料

試料は、宮下遺跡より出土した縄文時代後期に比定される土器片４点（№１～４）と８世紀後半および10世紀前半と考えられる土師器片４点（№５、６、９、10）、さらに、焼成粘土１点（岸本２）の計９点である。各試料の詳細および観察所見を第31表に示す。

ところで、上記した焼成粘土試料は、試掘Ｆトレンチで作成された土層断面より採取されている。土層断面は、発掘調査所見により、上位より第１～８層まで分層されている。その記載を前述した基本土層に合わせると第Ⅰ～Ⅲ層はいわゆる黒ボク土層、第Ⅳ層が漸移層、第Ⅴ･Ⅵ･Ⅷ層までがいわゆるローム層に相当し、灰白色土とされた第Ⅹ層が試料の採取された粘土層となっている。第Ⅹ層上面の深度は、現地表から約1.4mである。この粘土層は、堀口（1986）により、層位的には下末吉ローム層の中部～上部に対比されているが、成因的には武蔵野台地の板橋粘土層や下総台地などで広く認められている常総

第３表　分析試料一覧および胎土分類結果

№	地点・遺構	器種・種別	部位	時　期	肉眼観察所見			胎土分類							
					色調		砂粒など	鉱物・岩石				粒径組成			
					表	裏		A	B	C	D	1	2	3	4
1	２号埋甕	縄文深鉢	胴部	掘ノ内式期（縄文後期）	明赤褐(5YR5/6)～にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	最大径２㎜ほどの灰色～黒色岩片多量	■				■			
2	４号埋甕	縄文深鉢	胴部	称名寺式期（縄文後期）	にぶい褐(7.5YR6/3)～灰褐(7.5YR6/2)	にぶい褐(7.5YR6/3)	砂粒目立たず。	■					■		
3	21-23G	縄文深鉢	胴部	称名寺式期（縄文後期）	にぶい橙(7.5YR6/3)	にぶい橙(7.5YR6/3)	径１㎜以下の白色粒および灰色岩片多量	■					■		
4	東西ライン23以西	縄文深鉢	胴部	称名寺式期（縄文後期）	にぶい橙(7.5YR6/4)～橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	径１㎜以下の白色粒および灰色岩片多量	■							■
5	SI12床直	土師器杯	体部	８世紀後半	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	微細な石英片微量				■			■	
6	SI12貯蔵穴	土師器甕	胴部	８世紀後半	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい橙(5YR6/4)	微細な石英片散在、結晶片岩あり		■					■	
9	SI10	土師器杯	口縁部	10世紀前半	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	径１㎜以下の白色粒散在､径１～２㎜の岩片極めて微量	■						■	
10	SI10	土師器甕	胴部	10世紀前半	灰褐(7.5YR4/2)	褐(7.5YR4/3)	微細な石英片散在	■						■	
—	調査区南面トレンチ	焼成粘土（岸本２）	—	試掘Ｆトレンチ第８層	橙(5YR6/6)～橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	砂粒なし			■					■

粘土層に対比されるものであり、河成段丘が離水に向かう段階で形成された低湿地堆積物(菊地，1981)であると考えられる。提供された粘土試料は、長径約10㎝程度の楕円形をした厚さ約７㎜の焼成され固結した粘土板である。焼成には電気炉が用いられ、800℃で１時間焼かれている。

3　分析方法

ここでは、松田ほか（1999）の方法を用いる。この方法は、土器の薄片を作製して、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べるものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができることから、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析にも、松田ほか(1999)の方法は有効である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製する。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかとする。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行う。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数し、これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

4　結　　果

⑴　鉱物・岩石組成

結果を第32表、第90･91･92図に示す。各試料の鉱物・岩石組成は、縄文土器試料でほぼ同様の組成が認められる。一方、土師器試料は、縄文土器ともまた土師器間でも、異なる組成が認められる。ここでは、鉱物片および岩石片の種類構成とその量比から、以下に示すＡ～Ｄ類までの４種類に分類することができる。

〔Ａ類〕　鉱物片では石英と斜長石が主体であり、両者は同量程度かあるいは石英の方がやや多い。この他に、鉱物片では微量または少量のカリ長石、微量の斜方輝石、角閃石、緑廉石などを伴う。岩石片では、チャート、頁岩、砂岩の堆積岩類が多く、少量の多結晶石英を伴い、微量の凝灰岩、流紋岩・デイサイト、花崗岩類、石英片岩、ホルンフェルス、緑色岩、変質岩、珪化岩などが含まれる。なお、流紋岩・デイサイトには結晶質のものが認められ、変質岩は主に原岩不明の風化岩などである。今回の試料では、縄文土器試料４点（№１～４）がＡ類に分類される。また、土師器試料のうち№９および№10は、岩石片では凝灰岩や石英片岩などが認められないが、これは薄片の面積が小さいことにより岩石片全体の数が少ないことで微量の岩石片は計数されなかった可能性がある。№９は鉱物片の組成がＡ類と同様であることや、№10は鉱物片では輝石類や緑廉石などが含まれないが、岩石片において花崗岩類や緑色岩および珪化岩も認められることから、これらの２試料はＡ類として分類しておきたい。

〔Ｂ類〕　鉱物片および岩石片の種類構成はＡ類とほぼ同様であるが、岩石片の組成において、堆積岩類よりも石英片岩および雲母片岩の岩石片が多いことで区別される。今回の試料では土師器試料の№６が

第 32表　薄片観察結果

試料No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																														合計
		鉱物片												岩石片															その他			
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ザクロ石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	石英片岩	雲母片岩	千枚岩	ホルンフェルス	粘板岩	緑色岩	脈石英	トリディマイト塊	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
1	砂	細礫																																0
		極粗粒砂														2																		2
		粗粒砂	3	3										7	8	6	1	2	5		4			3		2	4		1					49
		中粒砂	7	1	3									4	6	2			2		1						2		1					29
		細粒砂	6	1	3			1						1	1																			13
		極細粒砂	10	1	2						1				1				1															16
		粗粒シルト	5		2						1																							8
		中粒シルト	1																															1
	基質																																	390
	孔隙																																	20
2	砂	細礫																																0
		極粗粒砂												1	2				1	1										1				6
		粗粒砂	1												12	2								1										16
		中粒砂	5	2	1	2								3	4			2	1	1						1			1	1		1		25
		細粒砂	1		2	1		1				1			1																			7
		極細粒砂	1	1	1									1					1												1			6
		粗粒シルト	5		5																												1	11
		中粒シルト																																0
	基質																																	305
	孔隙																																	12
3	砂	細礫																																0
		極粗粒砂			1									3	2														1	1				8
		粗粒砂	4		14	1		1						4	6	2	1	1	6	3	2		1	2	1	1			1	2				53
		中粒砂	11	1	18	5								8	4	2	2		3	1	1			1					1	1	2			61
		細粒砂	14	1	16	4		1		1		1		1	2		1		1												2			45
		極細粒砂	12	3	6									2					1												1			25
		粗粒シルト	5		2																													7
		中粒シルト	1																															1
	基質																																	759
	孔隙																																	21
4	砂	細礫												1																				1
		極粗粒砂												1	5					1	1													8
		粗粒砂			4	2	1							7	5	4	1		2	1		1	1	2		1	2			2				36
		中粒砂	9	7	12	3	1							4	3	2			2												2			45
		細粒砂	20	3	12	2	1							6	4	1			6												2			57
		極細粒砂	22	2	8		1	1		1				3	1				2															41
		粗粒シルト	10		2																													12
		中粒シルト																																0
	基質																																	793
	孔隙																																	23
5	砂	細礫																																0
		極粗粒砂																1																1
		粗粒砂			4								1				1												1					7
		中粒砂			7	1	3											1																12
		細粒砂	1		6		1																								1			9
		極細粒砂	2		3								1																					6
		粗粒シルト	1		2								1																				2	6
		中粒シルト	1																															1
	基質																																	243
	孔隙																																	2
6	砂	細礫																																0
		極粗粒砂																																0
		粗粒砂	2	1											1						8	3							1					16
		中粒砂	7		8	4	1				1	1		4		1	1		7		6	4		3			2							50
		細粒砂	14		6		2				1		1		1	1			1		4	3		1			2							37
		極細粒砂	6																2		1													9
		粗粒シルト	2																															2
		中粒シルト																																0
	基質																																	473
	孔隙																																	21

試料№	砂粒区分		砂粒の種類構成																														合計
			鉱物片												岩石片															その他			
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ザクロ石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	石英片岩	雲母片岩	千枚岩	ホルンフェルス	粘板岩	緑色岩	脈石英	トリディマイト塊	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
9	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂																												1					1
		粗粒砂			1	1			1							1														1					5
		中粒砂	1		3	1	3	1							1	1				2										3	1				17
		細粒砂	4		4		1	1					1			1																1			13
		極細粒砂	2	2	1			3			1									1															10
		粗粒シルト			2																													1	3
		中粒シルト																																	0
	基質																																		208
	孔隙																																		11
10	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂													1																				1
		粗粒砂	2												1	1					1										1				6
		中粒砂	3	1	2			1		1					3	1	1			4							1				1				19
		細粒砂	9	1	3										3	1												1							18
		極細粒砂	4		2										1																				7
		粗粒シルト	3		2																													1	6
		中粒シルト																																	0
	基質																																		367
	孔隙																																		9
焼成粘土	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂																																	0
		粗粒砂	1					1												1															3
		中粒砂	7	2	3			1							1					11									1						26
		細粒砂	12	3	6			1	1						4					6															33
		極細粒砂	15	1	4										2					1															23
		粗粒シルト	14	1	6										1																			1	23
		中粒シルト	2		1																														3
	基質																																		648
	孔隙																																		4

Ｂ類に分類される。

〔Ｃ類〕 鉱物片では石英が多く、次いで斜長石が多く、少量のカリ長石と微量の角閃石を伴う。岩石片は、多結晶石英が多く、この他に少量のチャートと微量のトリディマイト塊が含まれるのみである。今回の試料では、焼成粘土試料がＣ類に分類される。

〔Ｄ類〕 鉱物片では斜長石が多く、石英は少量である。この他に微量の斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物が含まれる。岩石片は全体的に微量であるが、検出されたのは凝灰岩と流紋岩・デイサイトおよび変質岩であり、堆積岩類は認められない。今回の試料では、土師器試料の№５がＤ類に分類される。

⑵ 粒径組成および砕屑物の量比

胎土中の砂粒の粒径組成では、モードとする粒径と次に割合の高い粒径により、以下の分類ができる。

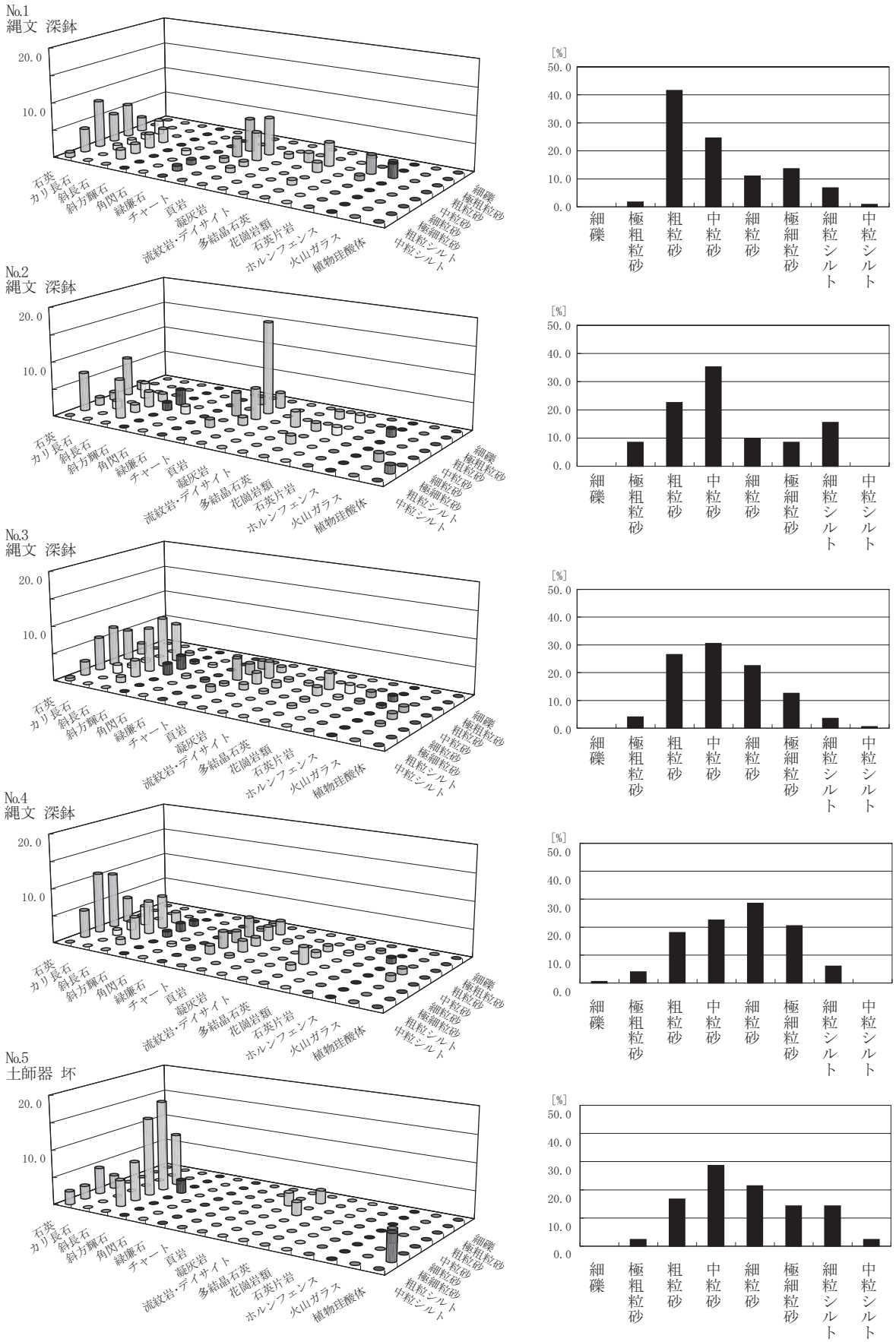
１類：粗粒砂をモードとする組成。縄文土器試料の№１が、１類に分類される。

２類：中粒砂をモードとし、次いで粗粒砂の割合が高い。縄文土器試料の№２および３が、２類に分類される。

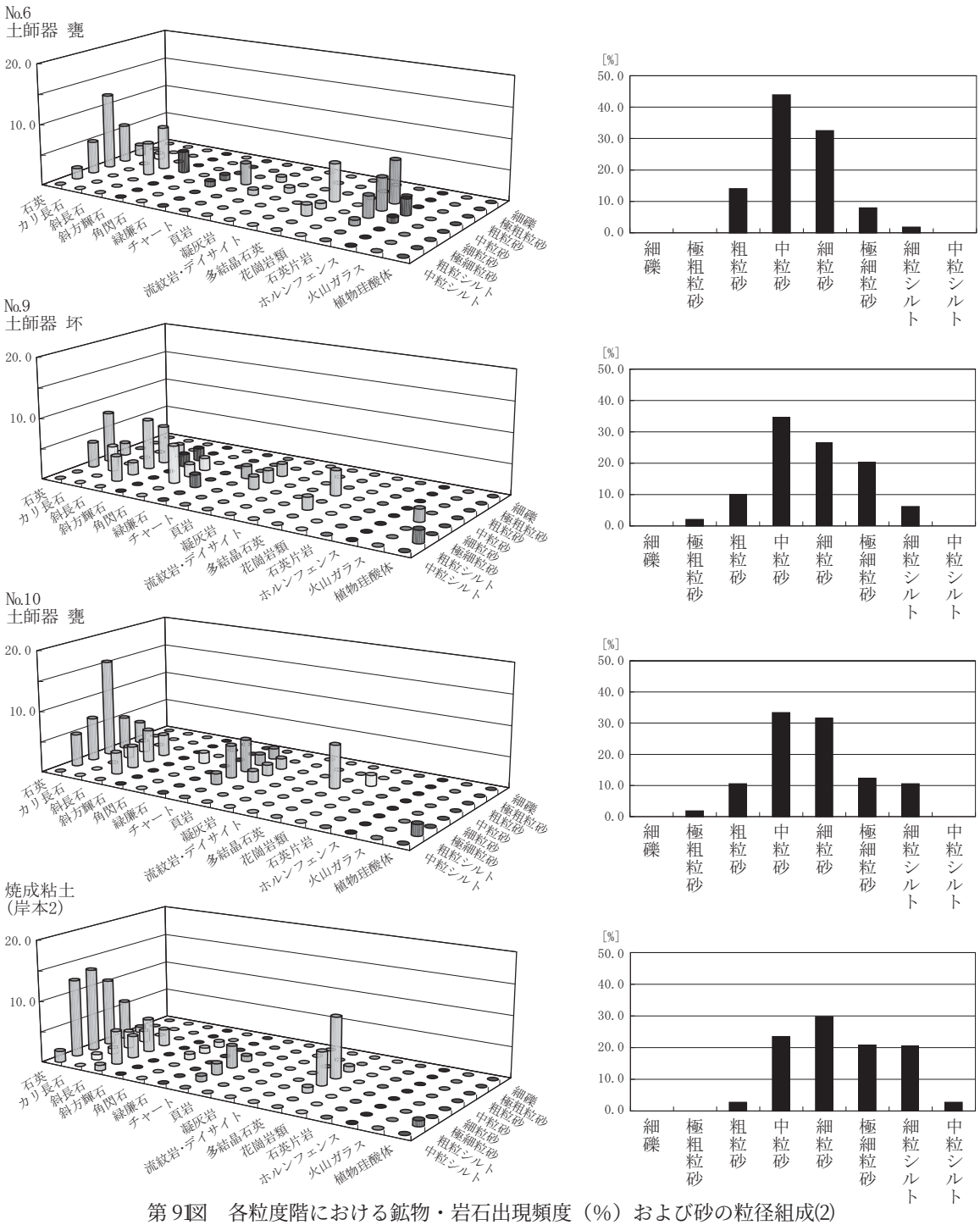
３類：中粒砂をモードとし、次いで細粒砂の割合が高い。土師器試料４点（№５、６、９、10）が、３類に分類される。

４類：細粒砂をモードとする組成。縄文土器試料の№４と焼成粘土試料が４類に分類される。

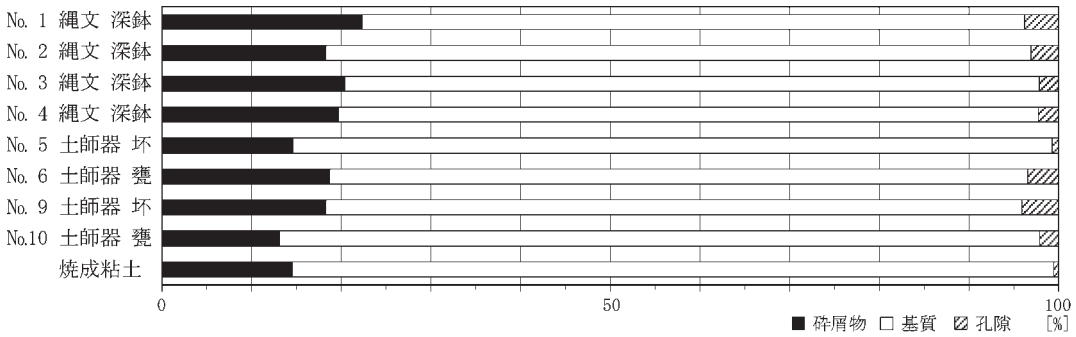
また、砕屑物の量比（第91図）では、縄文土器試料の４点はいずれも20％前後の値を示す。一方、土師器試料の４点は15～20％の範囲内にあり、傾向としては縄文土器試料よりも低いと言える。焼成粘土の砕屑物の量比は、土師器試料の低い値に近い。



第90図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）および砂の粒径組成(1)



第91図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）および砂の粒径組成(2)



第92図　砕屑物・基質・孔隙の割合

5　考　　察

⑴　胎土の地域性について

胎土中に認められた鉱物片および岩石片の組成は、土器の原材料となった土（一般には粘土と呼ばれることが多いが、実際にはシルトや砂も含まれている）が採取された場所の地質学的背景を示唆している。今回の分析では、A類に分類した鉱物・岩石組成の胎土が、縄文土器にも土師器にも共通して認められた。このことは、宮下遺跡から出土した縄文土器も古代の土師器も、ともに同一の地質学的背景を有する地域内で採取された土を原材料にしている可能性が高いと考えられる。A類の鉱物・岩石組成から推定される地質学的背景としては、まず、堆積岩類を主体とする地質が広く分布する地域が推定される。そして、その地質に接して結晶片岩からなる変成岩帯の分布のあることが考えられる。さらに、花崗岩類からなる深成岩体や流紋岩・デイサイト質の結晶質の火砕岩および凝灰岩も地域内に分布するという推定ができる。

ここで、宮下遺跡の位置する江南台地の地質学的背景である荒川上流域の地質を日本の地質「関東地方」編集委員会（1986)、堀口（1986)、須藤ほか（1991）などにより概観すると、荒川源流域の関東山地には秩父帯と呼ばれる堆積岩類からなる地質が広く分布し、荒川上流域の関東山地北東部には三波川帯と呼ばれる主に結晶片岩（雲母片岩、石英片岩、緑色片岩など）と緑色岩からなる地質が分布する。さらに荒川が山地から平野へ出る付近の関東山地北東縁部には、中生代の深成岩類である金勝山石英閃緑岩の分布や古第三紀の流紋岩・デイサイト溶結凝灰岩～花崗斑岩である寄居酸性岩類等が分布している。また、江南台地背後の比企丘陵は、新第三紀中新世の砂岩・泥岩および凝灰岩からなる荒川層や福田層などの地質により構成されている。このような地質学的背景は、今回のA類における岩石組成とよく整合すると言える。A類において堆積岩類の量比が比較的高いことは、物理的化学的に風化に対する抵抗性の高い岩石の割合が高いことを示唆している可能性があり、その場合、例えば江南台地周辺の沖積低地中の砂などが由来として推定される。

B類は、A類とほぼ同様の鉱物・岩石組成であることから、基本的にはA類と同様の地域性すなわち江南台地周辺域の堆積物に由来すると考えられる。A類との違いである片岩類の割合が高いことは、片岩類の分布域に至近の場所の堆積物に由来することを示している可能性がある。荒川流域でみれば、寄居町の市街地付近から上流の山地縁辺が三波川帯の分布域であり、B類の地域性の一つとしてこの周辺の地域が想定される。

C類は、土器胎土ではなく焼成粘土の鉱物•岩石組成である。焼成温度は800℃であることと、鏡下でも熱で変質したような鉱物や岩石は認められなかったことから、焼成粘土の鉱物・岩石組成は高温被熱による影響はなく、焼成前の粘土における鉱物・岩石組成と変わりはないと考えられる。したがって、C類の鉱物・岩石組成は、江南台地の段丘礫層の上位に堆積する粘土層の鉱物・岩石組成であると言える。すなわちC類の鉱物・岩石組成も当然のことながら江南台地域を示すものである。ただし、A類やB類との違いとして、石英の量比が高いことと岩石片がチャートしか認められないことが指摘できる。これは、前述した粘土層の成因に由来する組成であると考えられる。低湿地における粘土層とは、砂を主体とする粗粒の河川堆積物が及ばなかった場で形成された堆積物であり、砂の含有量自体が非常に少ない。したがって、含有される砂の鉱物・岩石組成は、河川砂の中でも量比の高いもののみが検出される結果となる。C類の鉱物・岩石組成は、地域性よりも堆積物の成因的な影響が及んだものと推定される。

D類は、A類からC類までの組成と異なる点が多い。その第一の違いは、斜長石の量比が非常に高いことであり、第二の違いは堆積岩類も片岩類も認められなかった一方、微量ではあるが凝灰岩と流紋岩・デイサイトが確認されたことである。この鉱物・岩石組成は、上述した荒川流域の地質学的背景とは整合しない。したがって、荒川流域の沖積低地堆積物に由来する可能性は低いと考えられる。その由来として、江南台地周辺の地質から考えられるのは、比企丘陵の縁辺あるいは丘陵中の谷などの堆積物である。前述したように比企丘陵は新第三紀中新世の堆積物により構成されており、その中には厚い凝灰岩層も分布している。D類の胎土は、背後に凝灰岩層の堆積するような場の堆積物に由来する可能性がある。

(2) 土器胎土と粘土層との関係について

前述したように、焼成粘土試料の鉱物・岩石組成は、今回の土器試料の胎土が示した鉱物・岩石組成とは一致しなかった。このことから、縄文土器でも土師器においても、粘土層の粘土のみで土器が製作されている可能性は低いと考えられる。ただし、粘土層の粘土が土器の材料の一部として使用された可能性はあり、例えば、荒川流域の河川砂を加えることによって、A類やB類のような胎土が得られると考えることができる。今回の分析では、縄文土器の砕屑物の割合は、いずれも粘土試料よりも高く、また粒径組成も、そのモードは粘土試料に比べて粗い傾向にある。土師器も、砕屑物の割合は粘土試料と同程度あるいは高いものがあるが、粒径組成はいずれも粗い傾向にある。これらのことは、粘土に砂を加えた状況を示唆している可能性がある。

(3) 土器胎土と器種・時期などとの関係について

縄文土器は、縄文時代後期の堀之内式（№1）と称名寺式（№2～4）からなるが、胎土の鉱物・岩石組成および砕屑物の割合では大きな違いは認められなかった。一方、胎土の粒径組成では、堀之内式（№1）は1類であるのに対し、称名寺式（№2～4）は、1類よりも細粒傾向の2類と4類に分類された。現時点では、これを型式に対応する胎土の特徴とすることはできないが、胎土の砂の粒径組成にも注目する必要があると考えられる。

土師器については、胎土の粒径組成はいずれも3類であったが、鉱物・岩石組成は8世紀後半の土師器間および10世紀前半の土師器間で異なる分類を示した。前述したように、胎土の鉱物・岩石組成の違いは、原材料となった堆積物の採取地（おそらく製作地に近い）の違いや、坏と甕という器種の違いなどが関係している可能性がある。

引用文献

堀口萬吉　1986 「埼玉県の地形と地質」『新編　埼玉県史』別編3　自然　埼玉県　7-74p
貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編　2000 『日本の地形4　関東・伊豆小笠原』東京大学出版会　349p
菊地隆男　1981 「常総粘土層の堆積環境」『地質学論集　20　関東の地震と地質』129-145p
江南町千代遺跡群発掘調査会・江南町教育委員会　1998 『埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書2　千代遺跡群―弥生・古墳時代―』326p
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高　1999 「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察―岩石学的・堆積学的による―」『日本文化財科学会第16回大会発表要旨集』120-121p
日本の地質「関東地方」編集委員会　1986 『日本の地質3　関東地方』共立出版　335p
須藤定久・牧本　博・秦　光男・宇野沢　昭・滝沢文教・坂本　亨　1991 『20万分の1地質図幅「宇都宮」』地質調査所

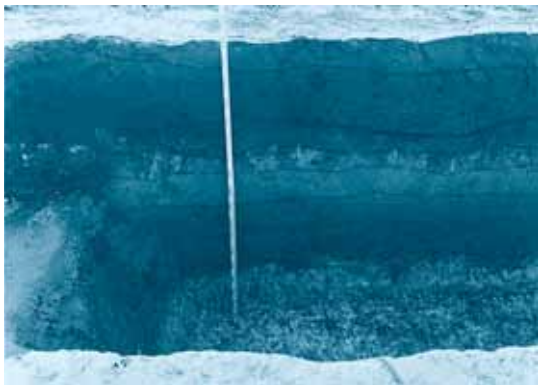
写　真　図　版

図版1

宮下遺跡調査区全景（左が北）

図版2

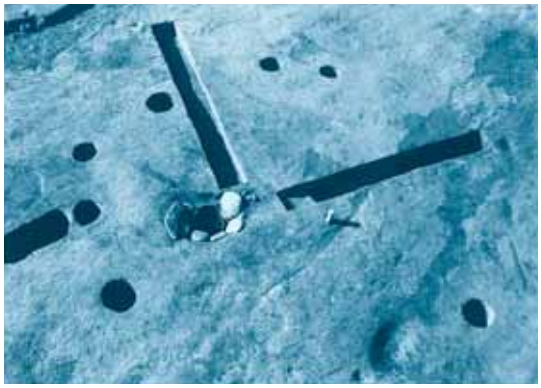
宮下遺跡全景（東から）



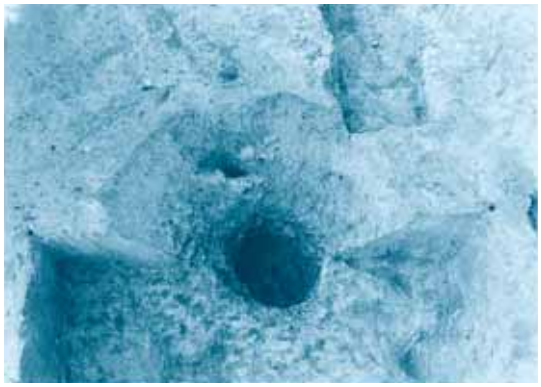
基本土層断面（北から）

第１号住居跡炉土層断面（南東から）

第１号住居跡炉（南東から）

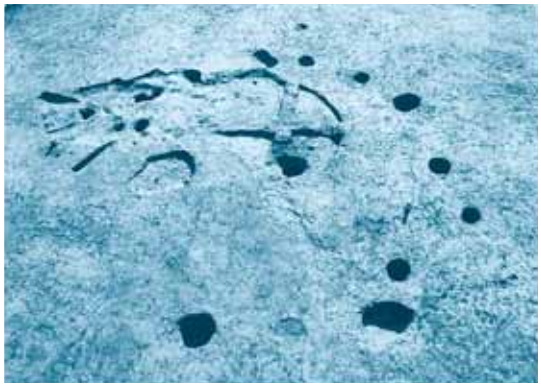


第１号住居跡（南東から）



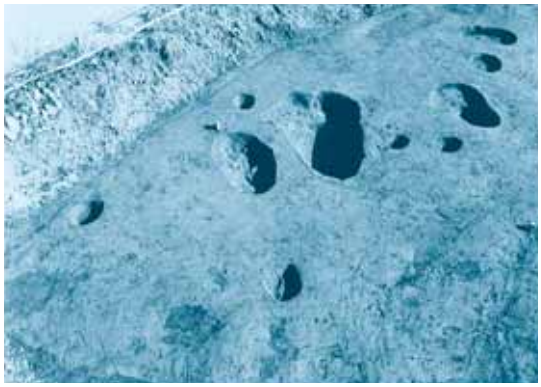
第１号住居跡炉掘り方（南西から）

第２号住居跡（南から）



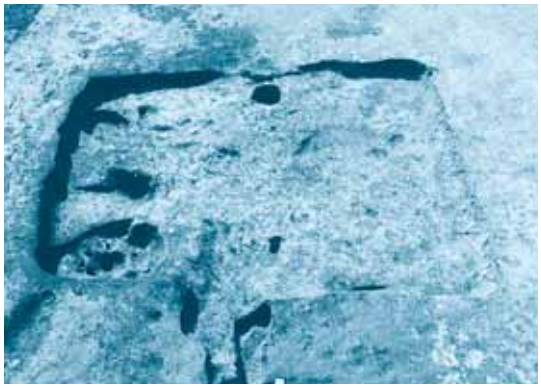
第３号住居跡（北から）

第４号住居跡（南から）

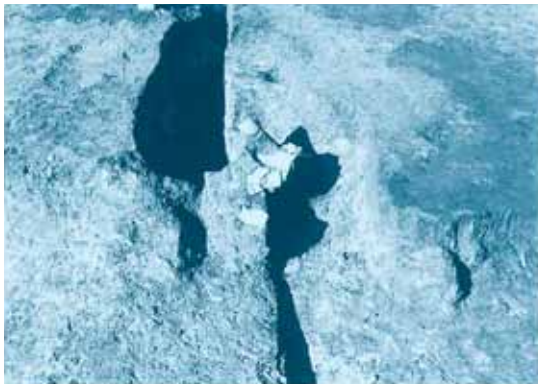


第５号住居跡（南西から）

第６号住居跡（西から）



第７号住居跡（北から）

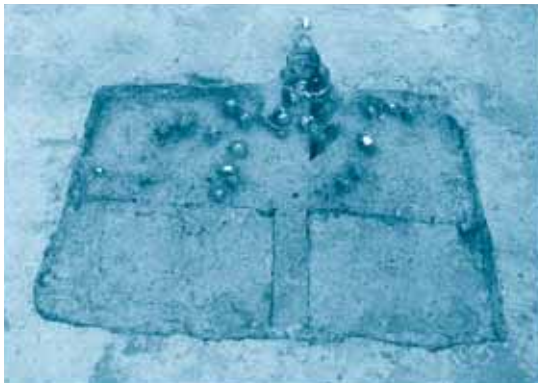


第７号住居跡カマド内遺物出土状況（南から）

図版4

第７号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（北から）

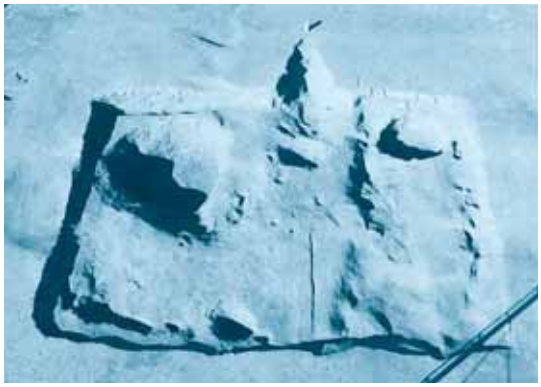
第７号住居跡掘り方（北から）



第８号住居跡遺物出土状況（南から）

第８号住居跡カマド遺物出土状況（南から）

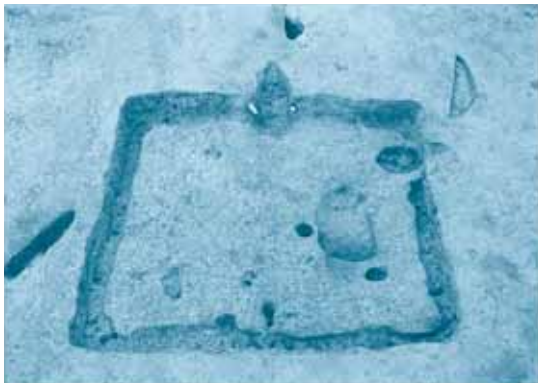
第８号住居跡（南から）



第８号住居跡掘り方（南から）

第９号住居跡遺物出土状況（南から）

第９号住居跡カマド遺物出土状況（南東から）

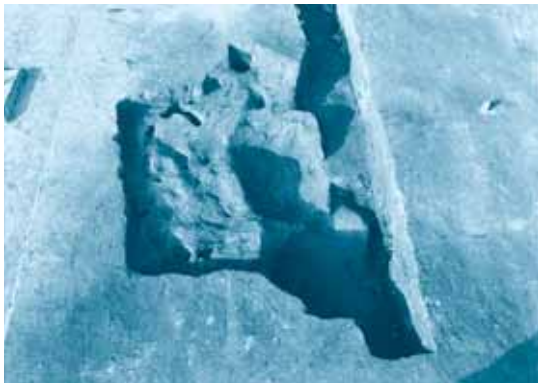


第９号住居跡（南から）

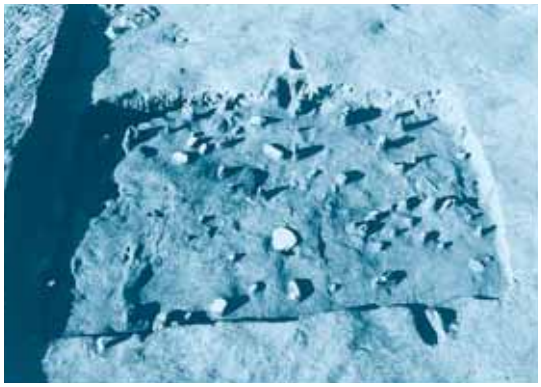
第10号住居跡遺物出土状況（北から）

第11号住居跡（南から）

第11号住居跡遺物出土状況（北から）



第11号住居跡掘り方（南から）



第12号住居跡遺物出土状況（南から）

第12号住居跡床第１面（南から）

第12号住居跡カマド（南から）

図版6

第12号住居跡貯蔵穴１遺物出土状況（南から）

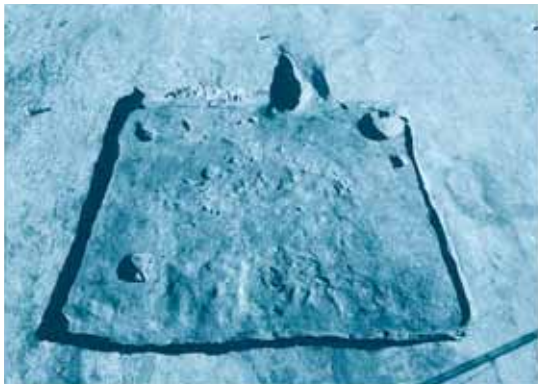
第12号住居跡貯蔵穴２遺物出土状況（南から）

第12号住居跡掘り方（南から）

第12号住居跡床第２面（南から）

第13号住居跡遺物出土状況（南から）

第13号住居跡カマド遺物出土状況（南から）



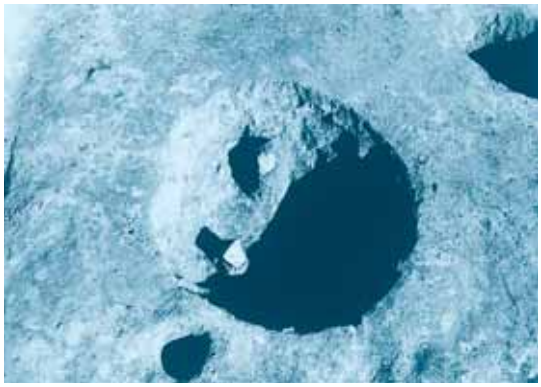
第13号住居跡（南から）

第13号住居跡掘り方（南から）

第14号住居跡遺物出土状況（西から）

第14号住居跡カマド（西から）

第14号住居跡（西から）

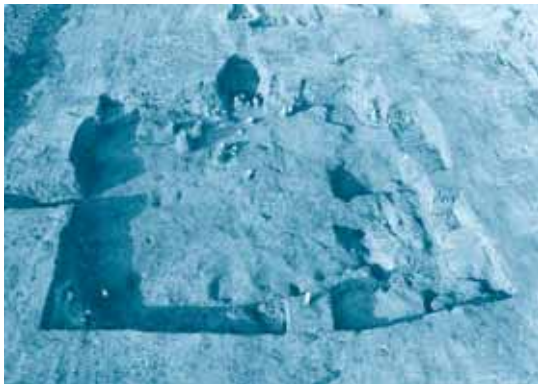


第14号住居跡内土坑遺物出土状況（西から）

第14号住居跡掘り方（西から）

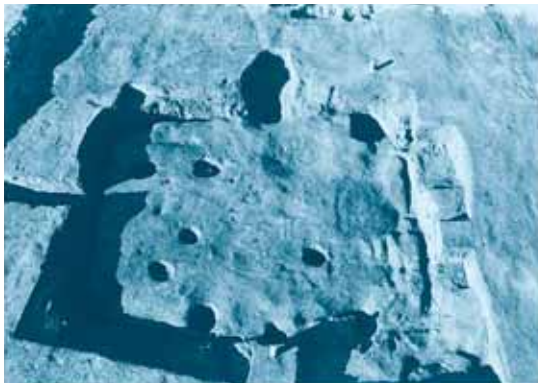
第15号住居跡遺物出土状況（西から）

第15号住居跡（西から）



第16号住居跡遺物出土状況（南から）

図版8

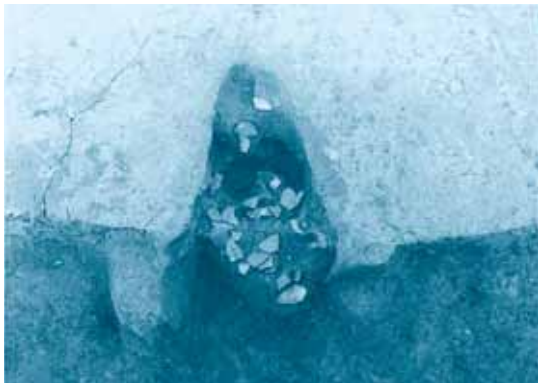


第16号住居跡（南から）

第16号住居跡カマド（南から）

第16号住居跡掘り方（南から）

第17号住居跡遺物出土状況（南から）



第17号住居跡カマド遺物出土状況（南から）

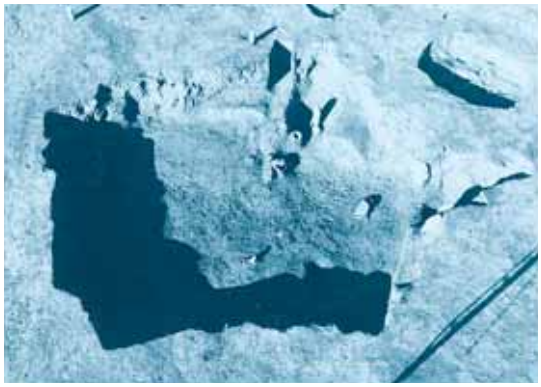
第17号住居跡（北から）

第17号住居跡カマド（南から）

第18号住居跡遺物出土状況（南から）

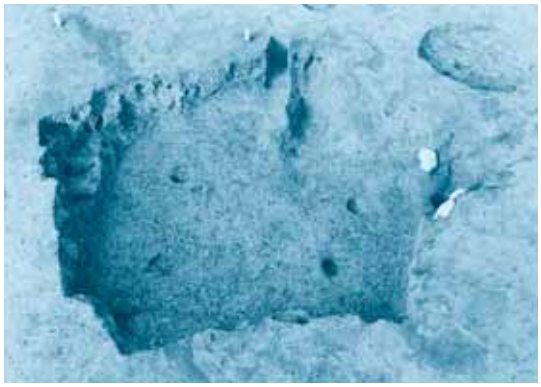
第18号住居跡掘り方（西から）

第19号住居跡（南西から）



第20号住居跡遺物出土状況（南から）

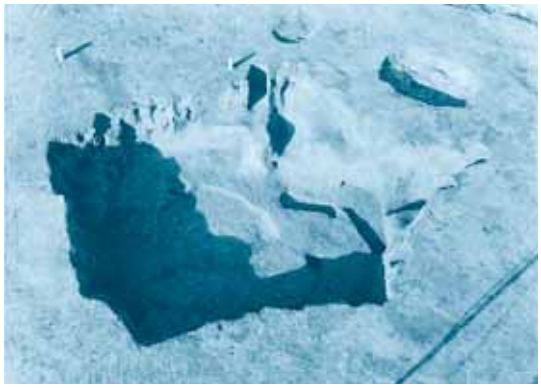
第20号住居跡カマド遺物出土状況（南から）



第20号住居跡（南から）

第21号住居跡遺物出土状況（南西から）

第21号住居跡カマド遺物出土状況（南西から）



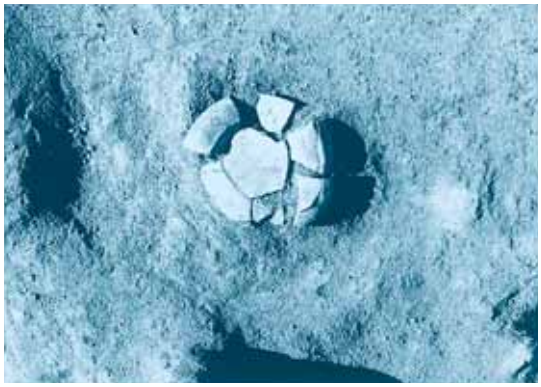
第21号住居跡（南西から）

図版10

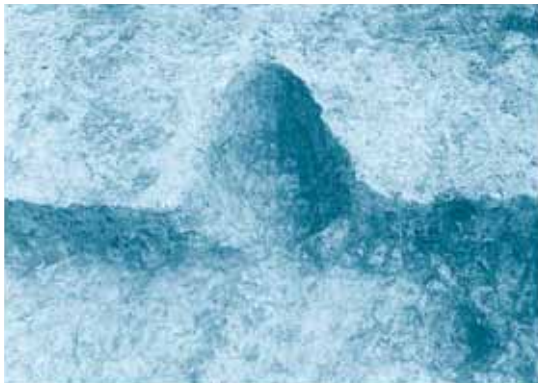
第22号住居跡遺物出土状況（西から）

第22号住居跡カマド（西から）

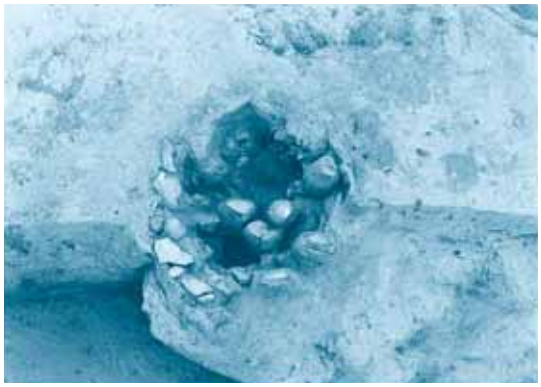
第22号住居跡遺物出土状況（西から）



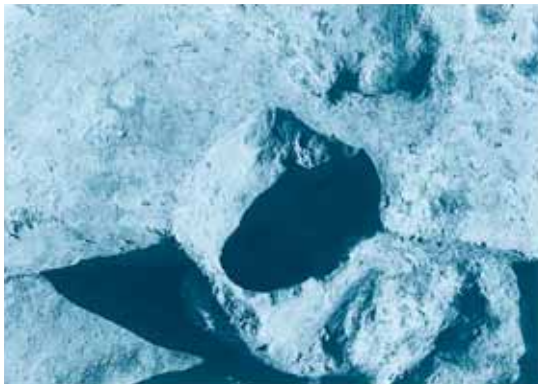
第22号住居跡遺物出土状況（西から）



第22号住居跡カマド（西から）

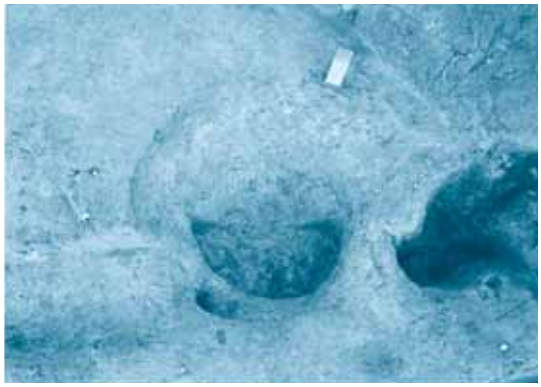


第１号埋甕出土状況（南西から）

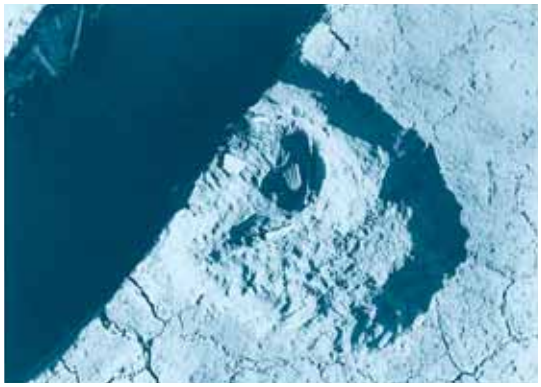


第１号埋甕掘り方（南西から）

第２号埋甕出土状況（南東から）



第２号埋甕掘り方（南東から）



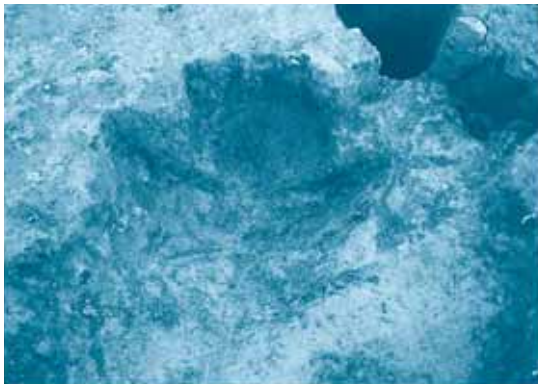
第３号埋甕出土状況（北西から）

第４号埋甕土層断面（南東から）

第４号埋甕出土状況（南東から）

第４号埋甕掘り方（南東から）

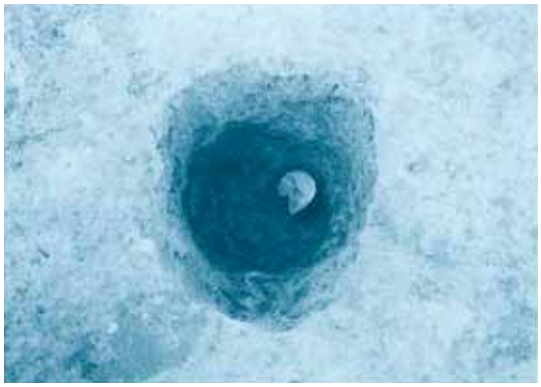
第５号埋甕出土状況（南から）



第５号埋甕掘り方（南から）

第１号円形柱穴列跡（南東から）

図版12



第１号円形柱穴列跡P15遺物出土状況（南から）

第１号掘立柱建物跡（南から）

第５号溝跡（北東から）

第６・７号溝跡（北西から）

第１・９号溝跡（西から）

第２号溝跡（東から）

第12号溝跡（北から）

第８・10号溝跡（東から）

第13号溝跡（北から）

第14号溝跡（東から）

第11号溝跡（東から）

第２号土坑（南から）

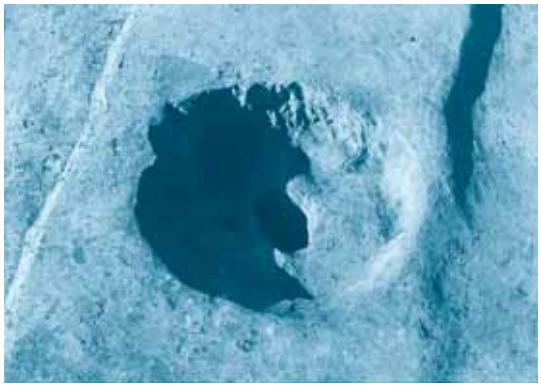
第４号土坑（北東から）

第12号土坑（東から）

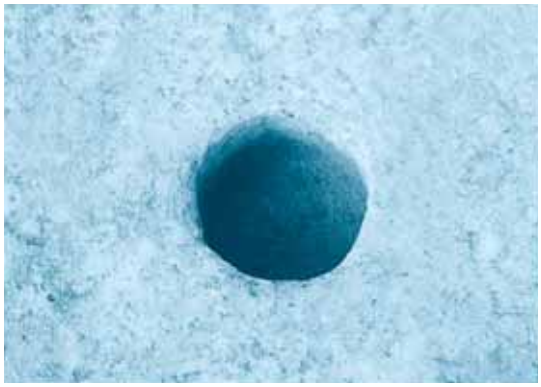
図版14

第15号土坑（南東から）

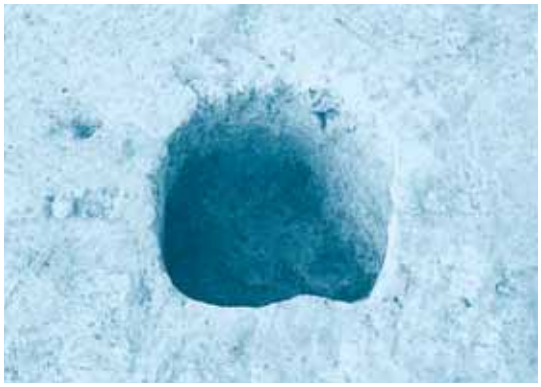
第17号土坑（南東から）



第19号土坑（南東から）

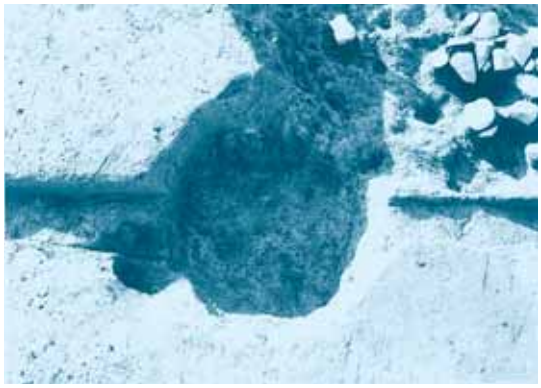


第21号土坑（南から）

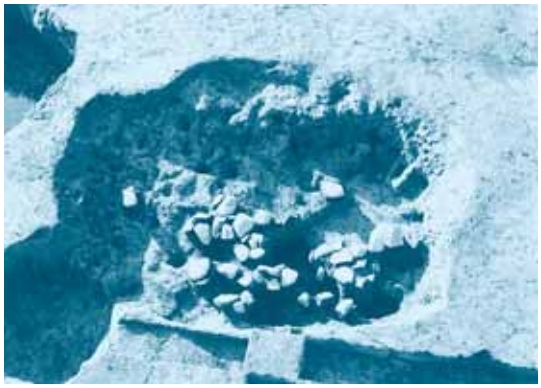


第25号土坑（南から）

第30・34号土坑（南西から）



第57号土坑（東から）



第58号土坑石出土状況（東から）

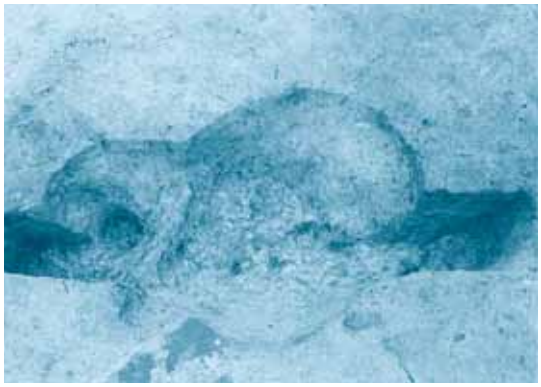
第61・62号土坑遺物出土状況（南から）

第61・62号土坑（南から）

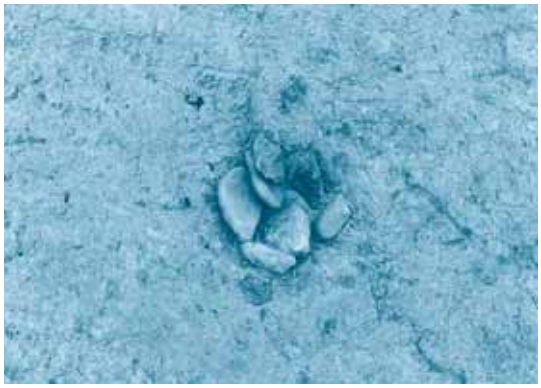
第64号土坑遺物出土状況（南東から）

第70号土坑（北から）

第71号土坑遺物出土状況（南から）



第80号土坑（南東から）



第81号土坑石出土状況（南から）

第82号土坑石出土状況（東から）

図版16

第83号土坑遺物出土状況（西から）

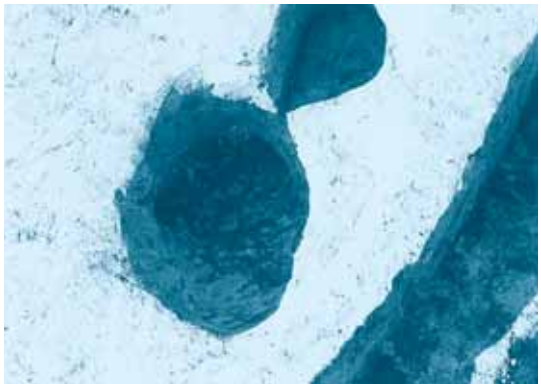
第84号土坑石出土状況（東から）

第86号土坑遺物出土状況（南から）

第87号土坑（北から）

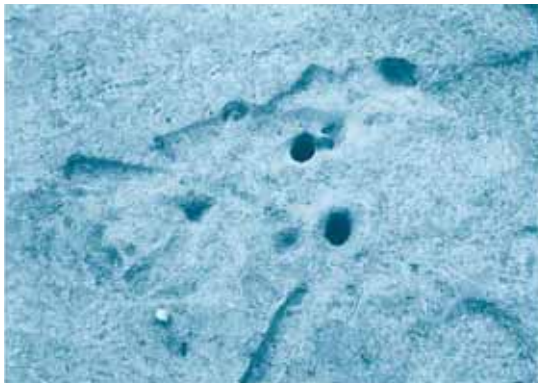
第90号土坑石出土状況（南から）

第91号土坑石出土状況（南から）

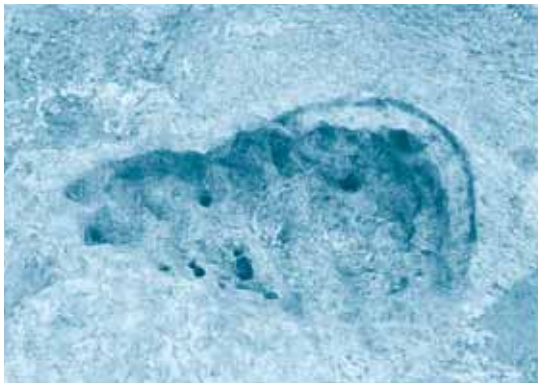


第91号土坑（南東から）

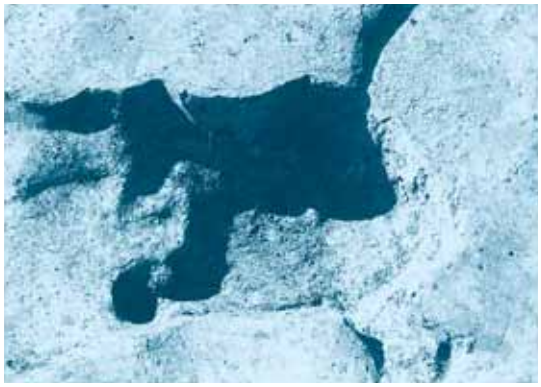
第98・103号土坑（東から）



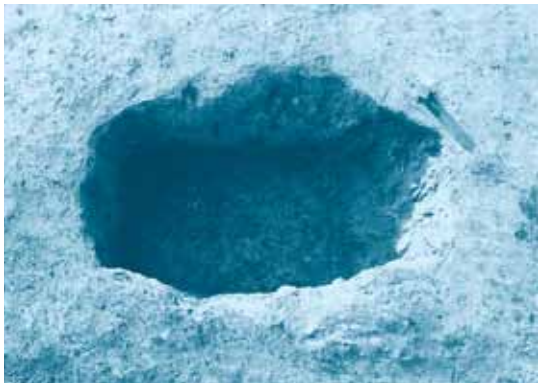
第99・100号土坑（北から）



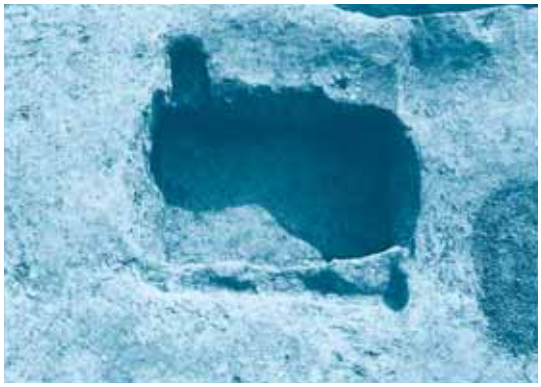
第108号土坑、第99号ピット（北から）



第103号土坑（東から）



第104号土坑（東から）



第106号土坑（北から）

第111号土坑（北から）

第114・118号土坑（西から）

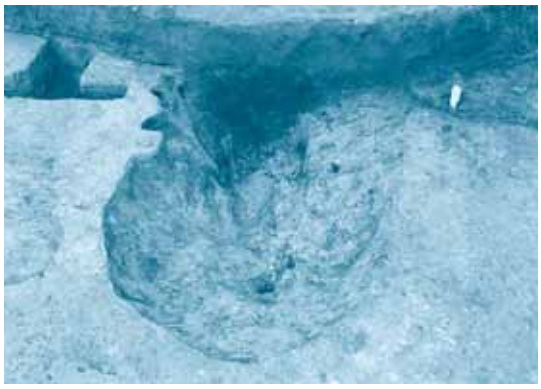
第124号土坑石出土状況（東から）

図版18

第117号土坑（西から）

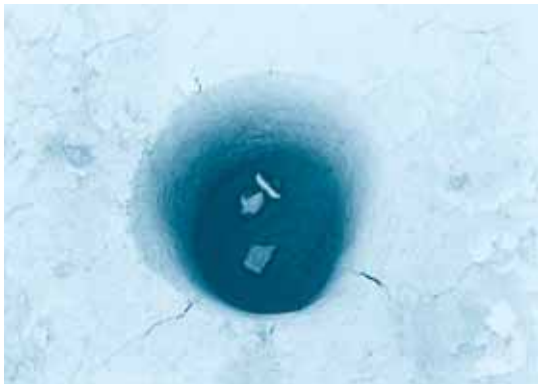
第119号土坑（北から）

第130号土坑（北西から）



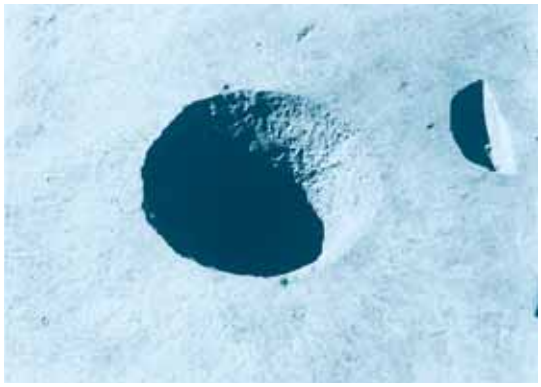
第135号土坑（北から）

第136号土坑（東から）

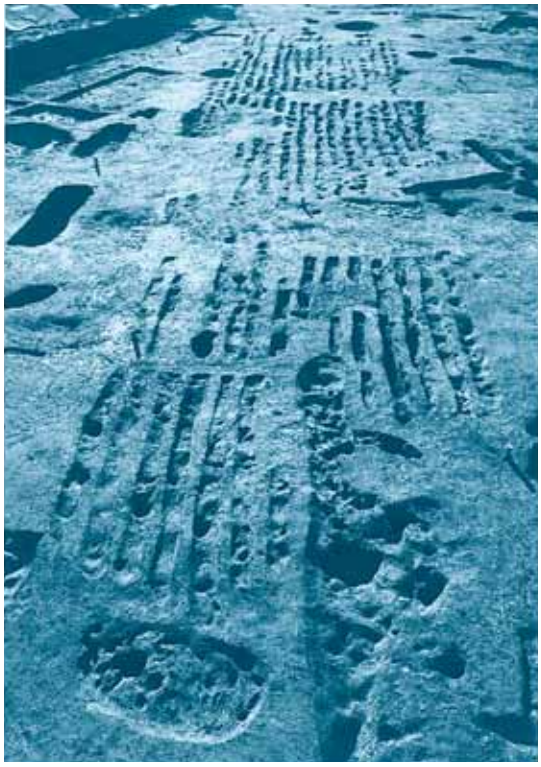


第14号ピット遺物出土状況（南から）

第１号井戸跡（南から）

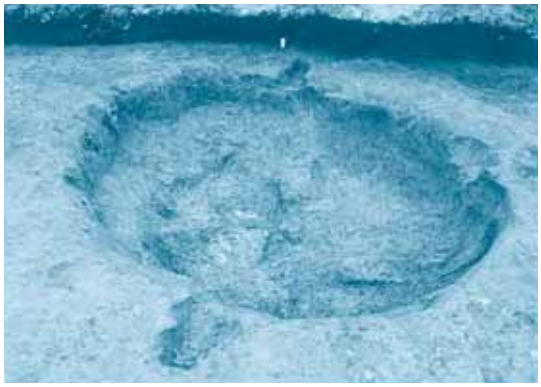


第２号井戸跡（南から）



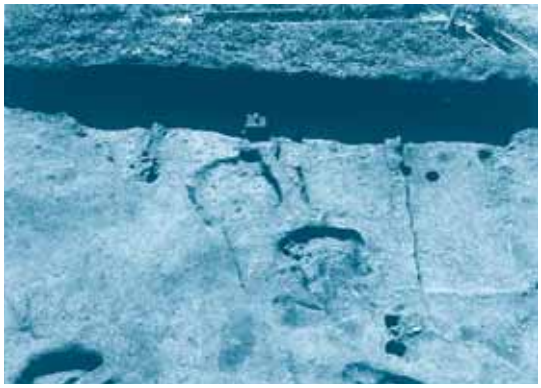
第１号畠跡（東から）

谷状地形（北から）



第１号性格不明遺構（南から）

第２号性格不明遺構（西から）



第３・４号性格不明遺構（北から）

図版20

第５号埋甕　第44図５―１

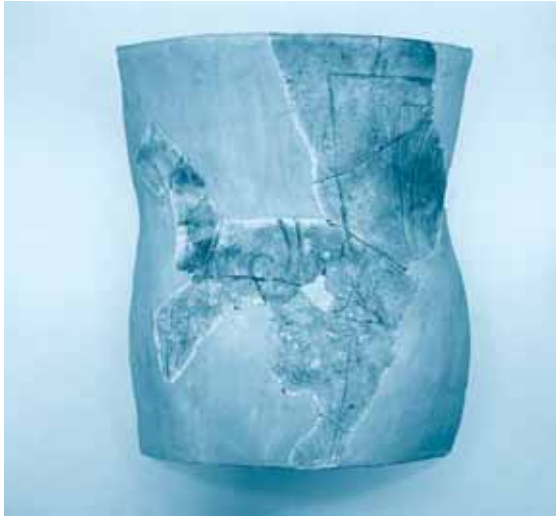
第３号埋甕　第43図３―１

第４号埋甕　第44図４―１

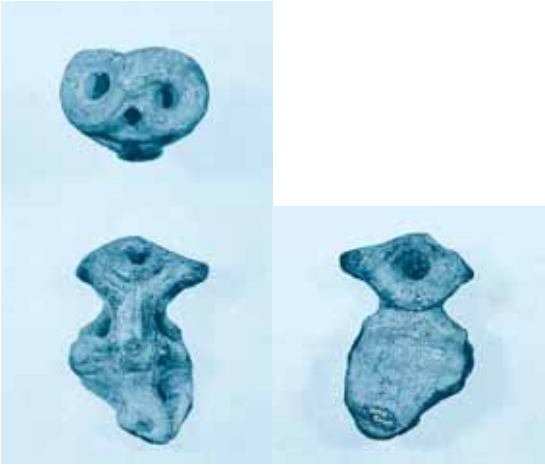
第１号住居跡　第７図２

第１号埋甕　第43図１―１

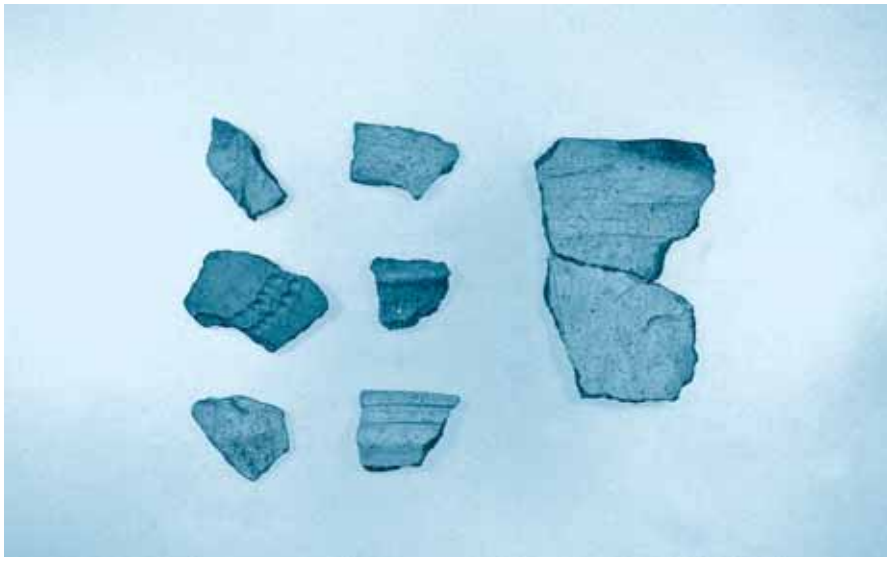
第２号埋甕　第43図２―１



第１号住居跡　第７図１



第47号土坑　第65図47―６



第７・８・15・18号
住居跡
第13図６
第15図12
第29図13
第35図９～12

第１・21・57・70・80
・83・88・99・103・
108・111・118・119・
135号土坑
第43図、第65図
第66図、第67図
第68図、第69図

図版22

第２・３・４・25・30
・42・47・58・82号土坑
第65図、第66図
第67図

谷状地形
遺構外遺物
第82図１～９
第83図１～18

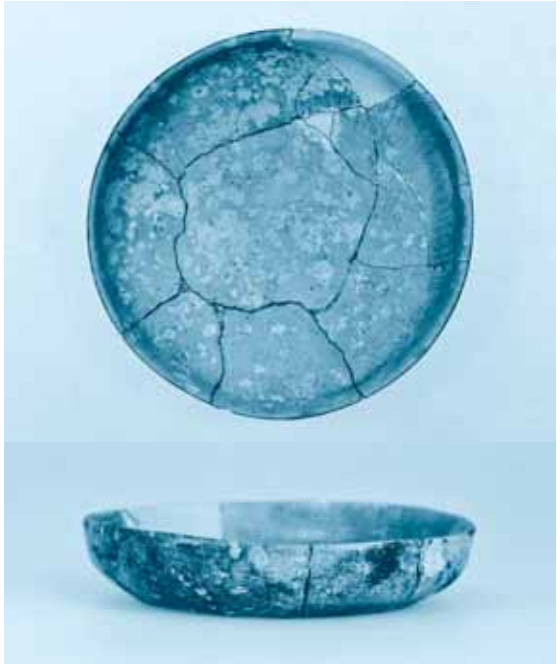
遺構外遺物
第83図19～47

第12号住居跡　第22図１

第12号住居跡　第22図２

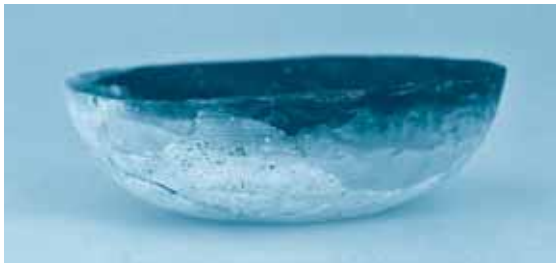
第17号住居跡　第33図１

第20号住居跡　第38図３



第22号住居跡　第41図１

遺構外遺物　第89図113



第18号住居跡　第35図４

第９号住居跡　第17図６

図版24

第９号住居跡　第17図11

第９号住居跡　第17図14

第９号住居跡　第17図15

第12号住居跡　第22図29

第12号住居跡　第22図30

第17号住居跡　第33図14

第17号住居跡　第33図15

第17号住居跡　第33図16

第17号住居跡　第33図17

第17号住居跡　第33図22

第18号住居跡　第35図７

第20号住居跡　第38図11

第20号住居跡　第38図７

図版26

第21号住居跡　第40図１

第21号住居跡　第40図２

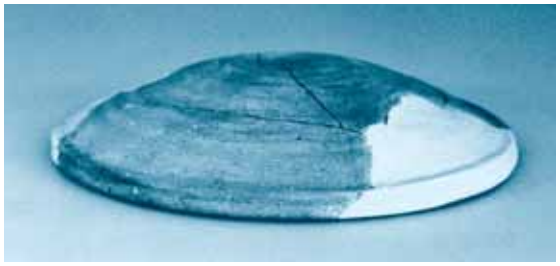
第21号住居跡　第40図３

第21号住居跡　第40図４

第12号住居跡　第23図44

第９号住居跡　第17図16

第20号住居跡　第38図10



第12号住居跡　第22図26

第15号住居跡　第29図５

第18号住居跡　第35図５

第18号住居跡　第35図６

第７号住居跡　第13図１

第９号住居跡　第17図２

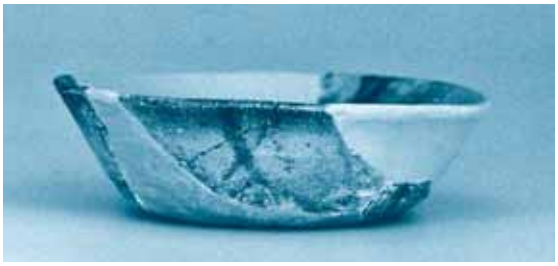
第９号住居跡　第17図４

第12号住居跡　第22図13

第12号住居跡　第22図14

図版28

第12号住居跡　第22図15



第13号住居跡　第25図８

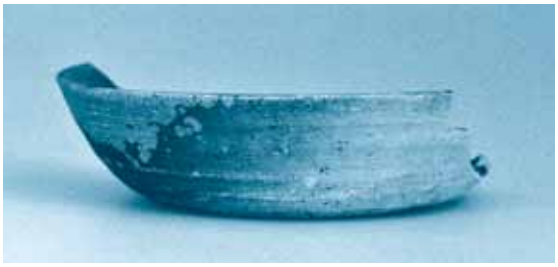
第13号住居跡　第25図５

第13号住居跡　第25図６

第13号住居跡　第25図９

第14号住居跡　第27図５

第16号住居跡　第31図６



第18号住居跡　第35図３

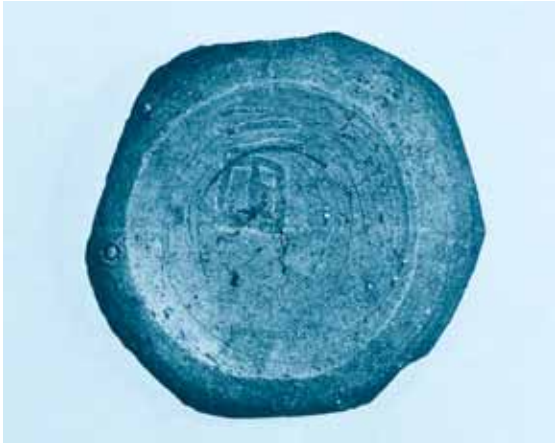
第20号住居跡　第38図１

第22号住居跡　第41図３

第22号住居跡　第41図４

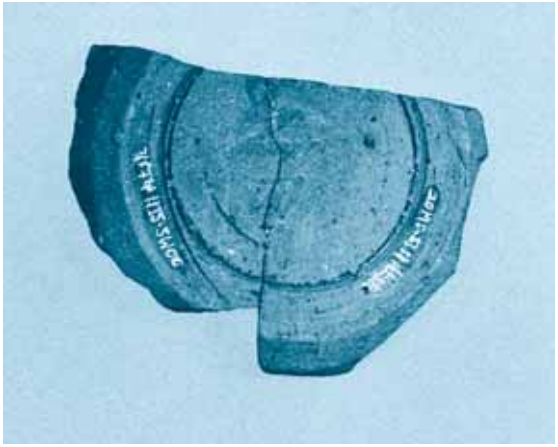
遺構外遺物　第89図114

第71号土坑　第67図71―１



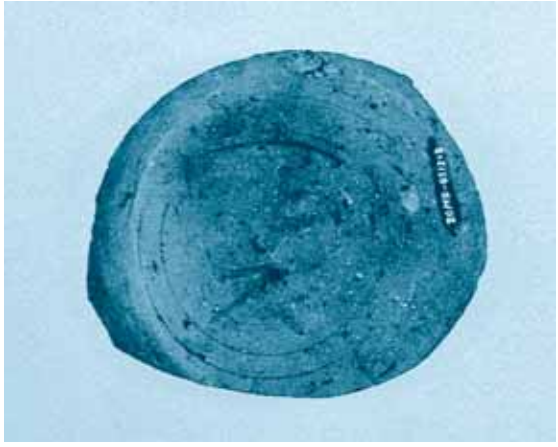
第15号住居跡　第29図４

第14号住居跡　第27図６



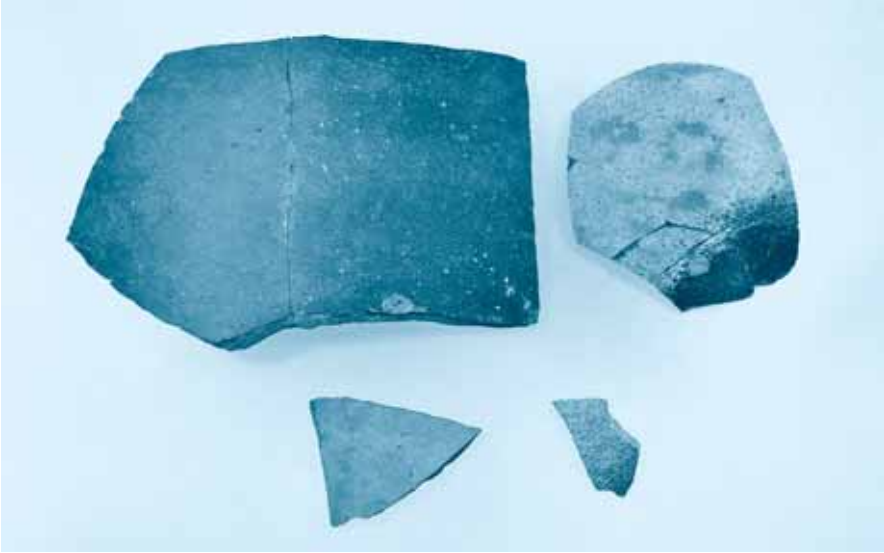
第17号住居跡　第33図５

図版30

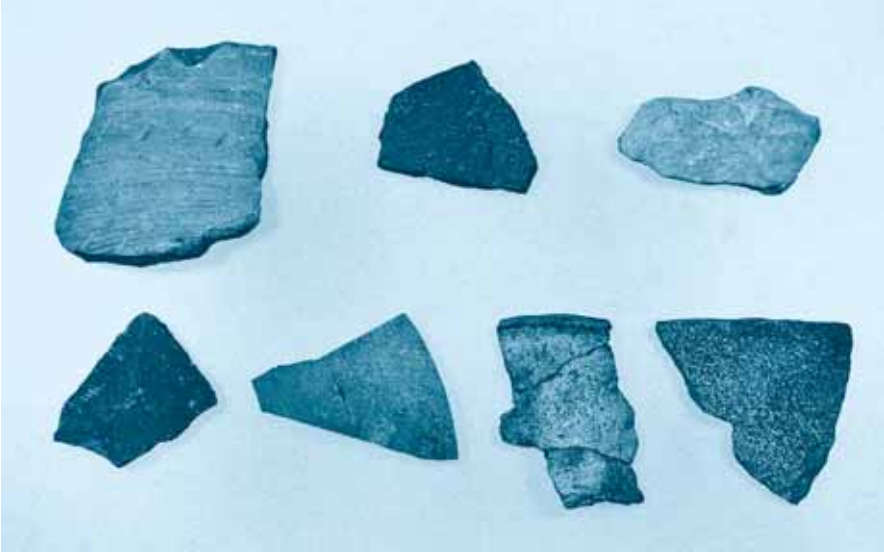


第18号住居跡　第35図２

第14号住居跡　第27図15



第９・12号住居跡
第17図17
第22図35・40・42

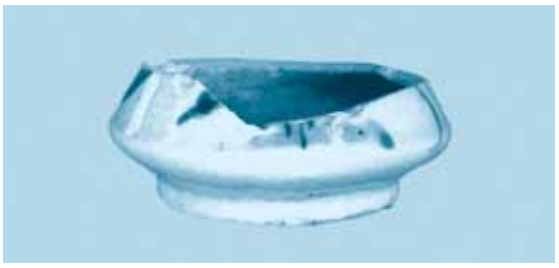


第17・46・81・82・83号
土坑、第１号井戸跡
第65図17―１
第65図46―１
第67図81―３・４
第67図82―４
第67図83―３
第75図19

第58号土坑　第66図58―４

第58号土坑　第66図58―５

第58号土坑　第66図58―６



第81号土坑　第67図81―２

第83号土坑　第67図83―４

第２号井戸跡　第77図７

第２号井戸跡　第77図10

第１号井戸跡　第75図１

第１号井戸跡　第75図３

図版32

第61－２号土坑　第66図61－２―２

第１号井戸跡　第75図20

第58・61・82・124号土坑
第２号井戸跡
第66図58―２・３・７
第66図61―１・２
第67図82―１・２
第69図124―４
第77図５・６・８・９
・11・12・13

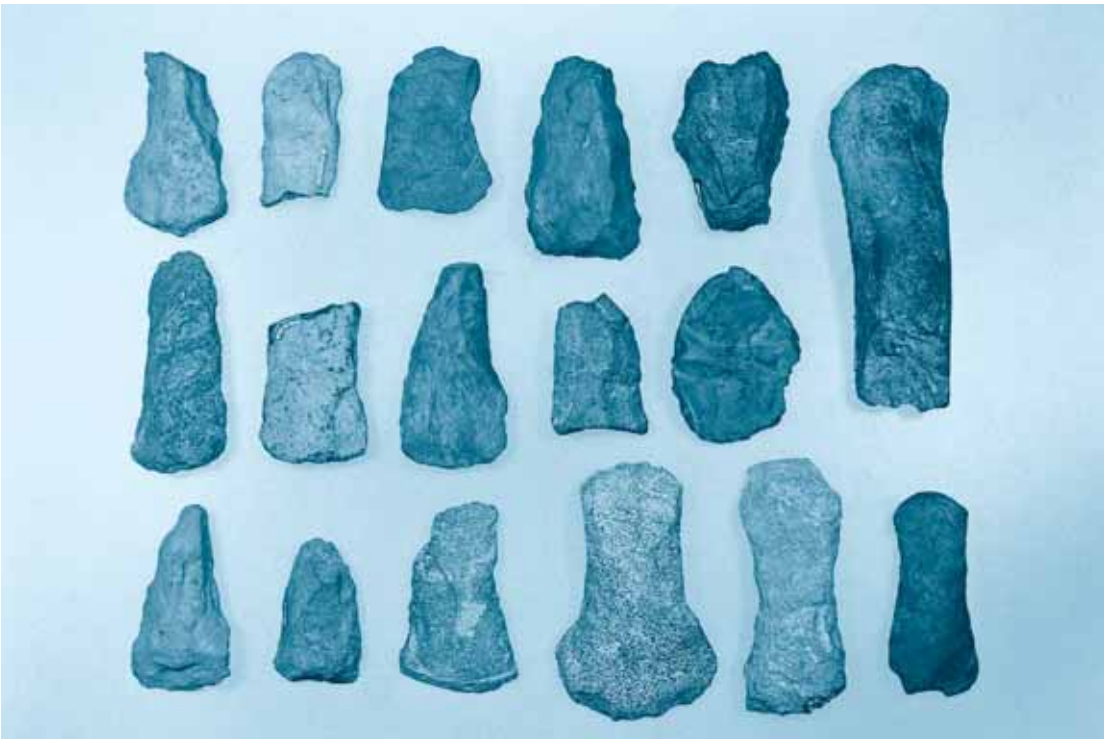
第１号井戸跡
第75図４～11・13～17

第９・11・16号住居跡、第86・111・119号土坑、第２号井戸跡、遺構外遺物
第17図18・19、第19図４、第31図22、第68図86―１・111―３・４
第69図111―５・118―２・119―３、第77図16、第88図92・102～111、第89図112

遺構外遺物
第85図65・66・68～71、第86図72～81、第87図82～85、第88図90～93

図版34

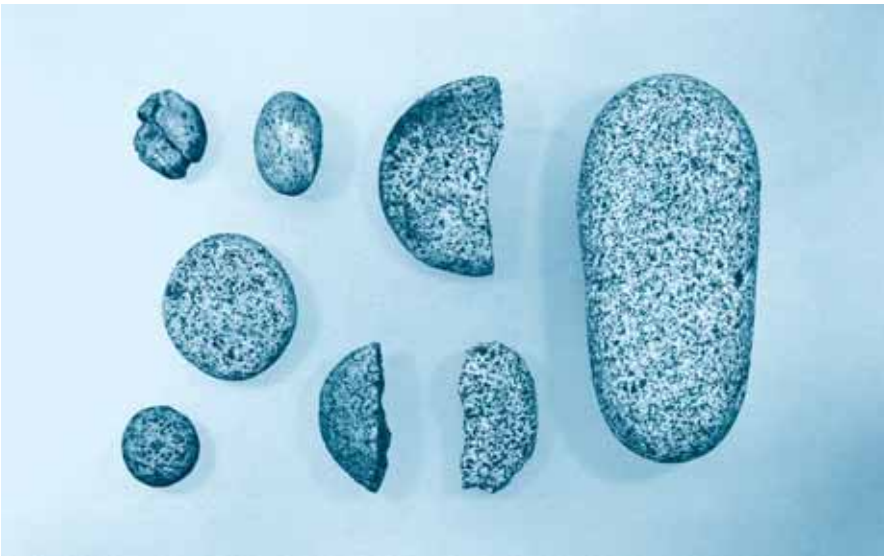
第18号住居跡、第58・111・118・119・135号土坑、遺構外遺物
第35図15、第66図58―９、第69図111―６・118―３・119―４・135―２
第84図58、第85図67、第87図86～89、第88図94～96



第17・18号住居跡、第30・70・84・135号土坑、第１号性格不明遺構、遺構外遺物
第33図27、第35図13、第65図30―３、第67図70―２、第68図84―１
第69図135―３、第79図１―２、第84図48～51・54～57、第85図63

第104号土坑
第１号井戸跡
遺構外遺物
第68図104―１
第75図23・24・26
第84図59・60
第85図61・64

第１号円形柱穴列跡
第15・121号土坑
第１号井戸跡
遺構外遺物
第45図１
第65図15―１
第69図121―１
第75図25
第85図62



第12号住居跡
第61-２・84・103号土坑
遺構外遺物
第23図50・51
第66図61-２―３
第68図84―２
103―２
第88図97・98・100

図版36

第18号住居跡、第124号土坑
第35図14、第69図124―５

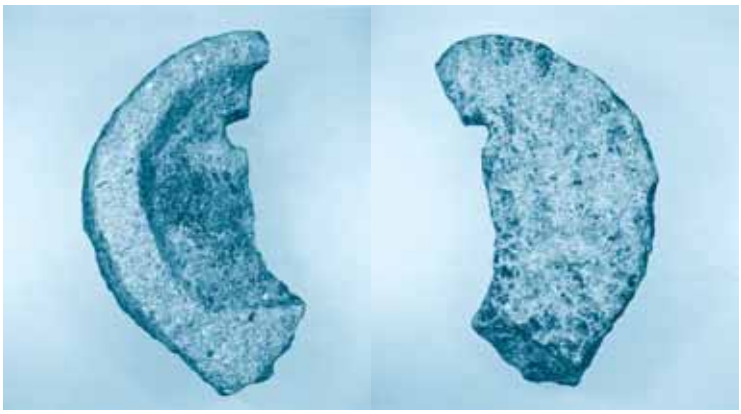
第12号住居跡、第108号土坑、谷状地形
第23図47、第68図108―２、第82図10

第84・117・130号土坑
遺構外遺物
第68図84―３
第69図117―１
第69図130―１
第88図99
第89図123・124

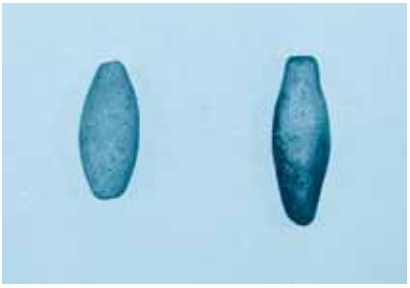
第12・18号住居跡
第91号土坑
第１号井戸跡
遺構外遺物
第23図52
第35図16
第68図91―２
第75図21・22
第89図122・125・126

第14号住居跡、遺構外遺物
第27図16、第88図101

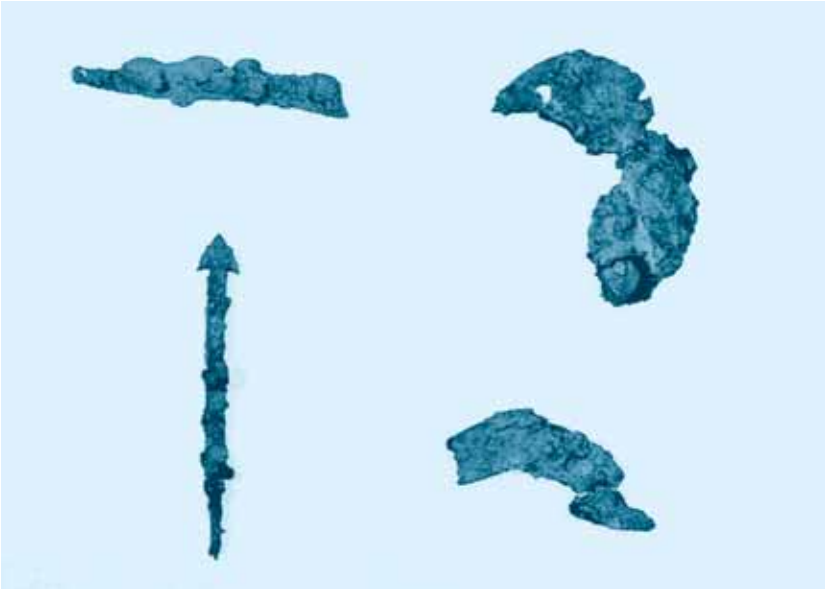
第12号住居跡　第23図48・49



第１号井戸跡　第76図27



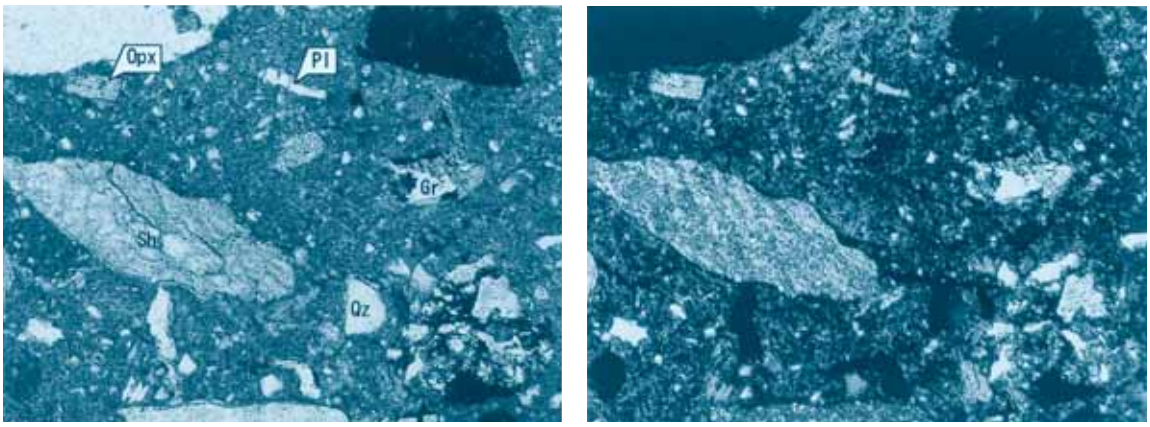
第７・17号住居跡
第13図５、第33図26



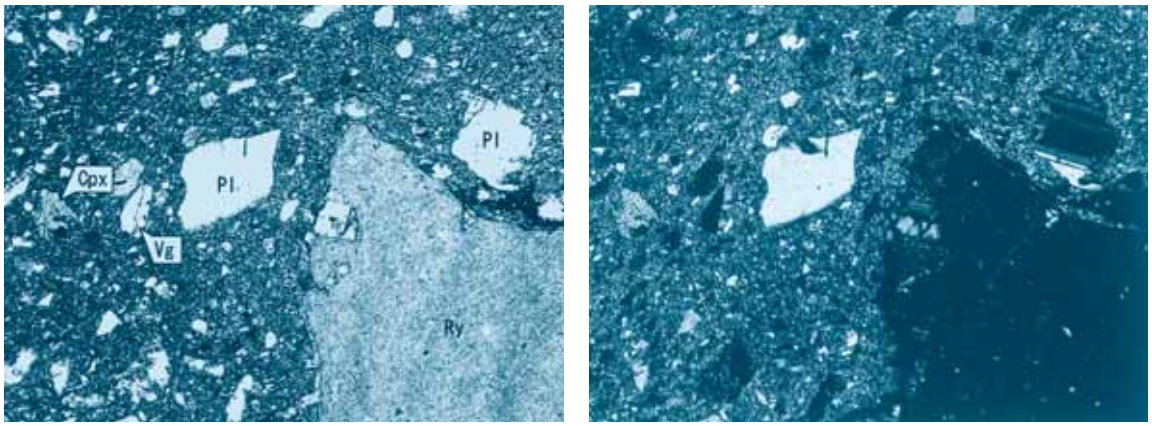
第11・12号住居跡、遺構外遺物　第19図３、第23図45・46、第89図119

図版38

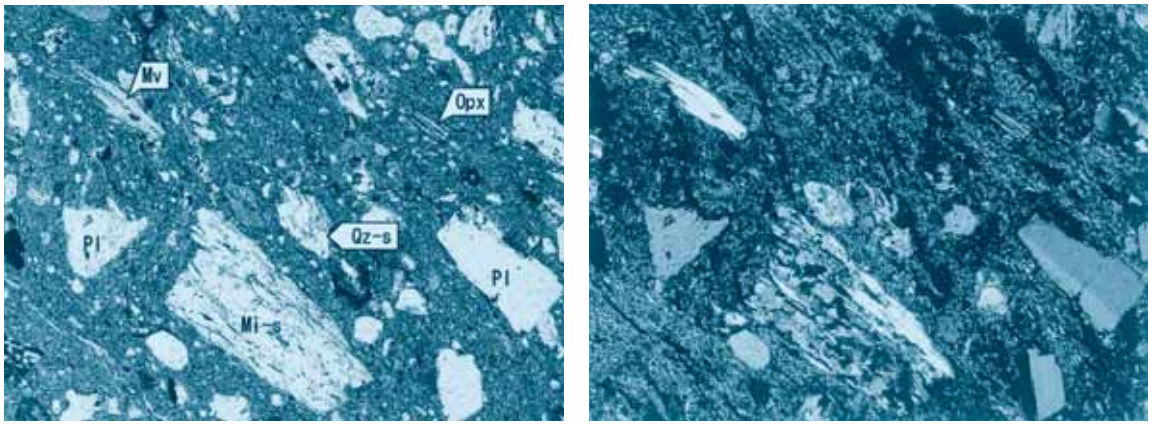
胎土薄片(1)



1.No.2(４号埋甕　縄文深鉢　胴部　堀之内(縄文後期))



2.No.5(SI12床直　土師器坏　体部片　８世紀後半)

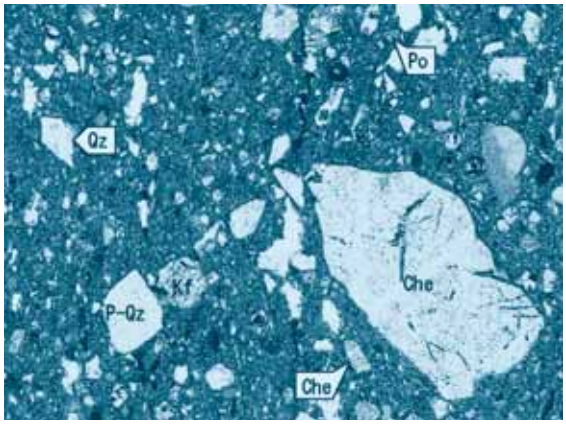


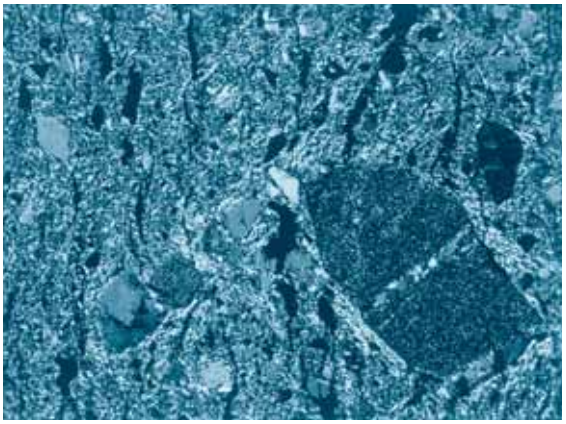
3.No.6(SI12貯蔵穴　土師器甕　胴部片　８世紀後半)

Qz:石英. Pl:斜長石. Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Mv:白雲母. Sh:頁岩. Ss:砂岩.
Ry:流紋岩. Gr:花崗岩. Qz-s:石英片岩. Mi-s:雲母片岩. Vg:火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

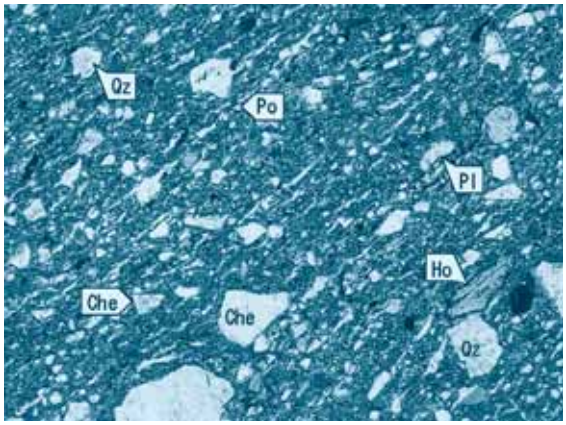
0.5mm

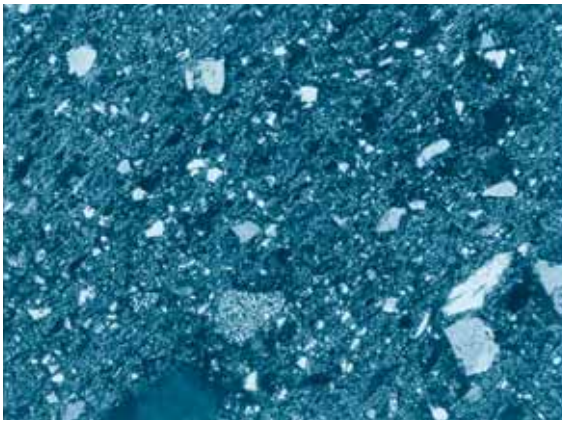
胎土薄片(2)





4.No.10(SI10　土師器甕　胴部片　10世紀前半)





5.焼成粘土(岸本２)(試Ｆトレンチ第８層)

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Che:チャート. P-Qz:多結晶石英.
Po:植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

報告書抄録

ふりがな	みやしたいせき　に
書名	宮下遺跡　II
副書名	—
シリーズ名	埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書　第１集
シリーズ番号	第１集
編著者名	吉野　健・長谷川一郎・原野真祐
編集機関	埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会
所在地	〒360-0107　埼玉県熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター　TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2010（平成22）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやしたいせき 宮下遺跡 （第２次）	くまがやしせんだいあざみやした 熊谷市千代字宮下 123番地１他	11202	65-013	36°7′30″	139°19′48″	20080908 ～20090130	7,980	工場建設に伴う調整池及び駐車場造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮下遺跡 （第２次）	集落跡	縄文 奈良・平安 中世・近世 縄文～近世	竪穴住居跡６　埋甕５ 円形柱穴列跡１ 竪穴住居跡16　掘立柱建物跡１ 溝跡14　井戸跡２　畠跡１ 土坑129　ピット98	縄文土器　石器 土師器　須恵器　石製品 鉄製品 陶器　磁器　石製品 縄文土器　石器　土師器 須恵器　陶器　磁器 石製品　銭貨	縄文時代から近世にかけての集落跡が検出された。希少な縄文時代の円形柱穴列跡が検出された。奈良時代の竪穴住居跡から墨書土器「蔵」「足刀」他が出土した。

埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書　第１集

宮 下 遺 跡 II

平成22年３月31日発行

発行／埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会

印刷／朝日印刷工業株式会社